**漢江より還る**

**蓮本　健次**

**目　　次**

　　第一章　・ユギオ戦争（清陽）　 二

　　第二章　・母親の逝去（論山）　十六

　　第三章　・地中の銃弾（全谷）　三二

　　第四章　・公園の読書（鐘路）　四五

　　第五章　・亨竜の恐怖（竜山）　五七

　　第六章　・天幕の悲惨（麻浦）　六九

　　第七章　・砂上の漢字（釜山）　八三

　　第八章　・自立の一歩（漢江）　九七

　　第九章　・拾った財布（僥倖）一一二

　　第十章　・反日の抗議（蛮行）一二五

　　第十一章・大統領官邸（燭光）一三九

　　第十二章・青天の霹靂（卒業）一五二

　　第十三章・日本人宣告（悲嘆）一六六

　　第十四章・父親の告白（真実）一七九

　　第十五章・別離と帰国（希望）一九三

　　　　　　　韓国事変年表　　　二○九

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**第一章・ユギオ戦争（陽）**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ⅰ

ユギオ戦争（六二五事変）

――六はハングルで「ユック」二は「イ」五は「オ」と発音され、六二五（韓国事変開戦の日、六月二五日）はユックイオ即ち「ユギオ」とリエン（連音）し、表音される。韓国ではユギオ事変として、国民の記憶に深く刻まれている。

　しじまを破る砲声、これが延長二百五十キに及ぶ、三十八度線の各拠点に設けられた北朝鮮側の三〇〇〇門の大砲から、一斉に響き渡った。

　一触即発の危機をはらんだ対峙が、破れた瞬間である。

　一九五〇年六月二十五日、夜明けと共に朝鮮半島に戦いの火蓋が切られた。

　そして開戦からほとんど間をおかず、大韓民国の首都ソウル争奪戦が交わされ、二十八日午後には北朝鮮の軍勢がソウルを占拠してしまった。

　開戦を、人の噂や新聞号外で知った市民は身の回りのものだけを背負い、郊外に逃れたが、逃げ損なった市民の多くがこの市街戦で命を落とした。

　ソウルの市街地は、砲撃でほとんど廃墟と化し、戦闘員や非戦闘員の区別もなく、累々と街中に死体が放置されていた。

　死体のほとんどは、戦火によって焼けただれ、黒こげになっている。

　虚空を掴むかのようにカギ型に曲げられた指、空に突き上げられた脚、骨が露出した頭部で噛みしめれた歯、誰のものかもわからない死蝋化した手足など、それぞれの無念さを痛烈に表すかの如く転がっている。

　ソウルの街の空気は、砂塵と排気ガスと建物の焼けこげの匂い、これに死臭が混ざった異様な臭気に満ちていた。

　南に向かう街道は、避難民の群れで満ちみちており、大渋を招いていた。　現在のように動車が多く走っているわけではなく、道路を占めているは身の回りのものを背負った歩行者である。

　疲れ果てて足を引きずる避難民は、大量の砂埃を巻き上げて歩く。

　少数の自動車も通行していたが思うように走れず、いらだたしげにクラクションを鳴らし、いたずらに砂埃を増幅していた。

　李虎範の一家も、いち早くソウル市街の自宅から、戦火を逃れて南に向かった。

　解放前に満州で関東軍（日本軍）の司令部付きだった虎範は、国防部に籍はあったが軍隊の組織には属さず、野に下りていた。

　その当時にしては珍しく乗用を持っており、自分でハンドルを握っていた。

　Ｔ型フォードの助手席には妻の弟、韓秀益が座り、後部座席には妻、韓順愛。その膝に息子孝一が眠っている。

　しかし、文明の利器も避難民の群れには敵わなかった。歩く人々の砂埃を浴びながらその後を追従するより方法はなかった。

　それでも市街地を抜け、郊外に出ると威力を発揮する。

　少しスムーズに走り出したとき、後部座席から声がかかった。

「あなた、どこまでいけるでしょうね。軍の検問があったらそこで復隊でしょう？」

「ああ、軍隊に復帰するのは私の軍人としての宿命だ、仕方がない、当然のことだ。

目的地は釜山だけど、大田から大邸を通ると必ず検問にかかる。少しでもお前たちを安全な南に近づけるためには海に近い、西側の道を迂回しよう」

　車は歩行者による渋滞を避け、黄海に近い道路を選んで走行した。

　北軍の侵攻は、圧倒的な勢いを見せてはいたが、そのルートから少し離れると、平穏な漁村や農民の生活が残っていた。

　元々、北朝鮮羅南にある大地主の家で育った虎範は、実家からの融通と、軍の要職にあったこともあいまって、かなりの資産を持っており、南への逃避行にも、多額の現金を持参して行動していた。

　戦争になると現金など、どんな価値を持つか分からない。場合によってはまったく無意味な紙切れに化すことだって考えられる。

　虎範は、この現金を有効使って戦火を逃れ普通の民家に頼み込んで一の宿や、豪華なものではないけど、量的に十分な食事を得ていたのである。

Ⅱ

　虎範がハンドルを握るＴ型フォードは、七月になった道路を快調なエンジン音を響かせて、一路南への路を突っ走った。

　清陽という街にさしかかったとき、道路をふさぐようにジープが停まっていて、その横に米軍の軍服を着た大男が、手を拡げて虎範の車に停車を命じた。

　ヘルメットに白で大きく、ＭＰと書かれている。色の濃いサングラスをかけているのでその視線の先うかがうことは出来ず、何となく不気味な印象だった。

「ホェア・アーユー・ゴーン？」

　米軍の憲兵が訊いた。

「アイ・ウォント・ゴー・トゥー・プサン」

　虎範が英語で答える。

「ホワッツ・ユア・オキュペーション」

「アイム・ソルジャー」

　虎範はポケットからＩＤカードを取り出して示した

　カドを見た憲兵の態度が一変した。

「オー・カーネル・イ・ホウポム」

　軍靴のかかとを打ち合わせ、直立して挙手の敬礼をする。

　ジープの横で五分ほど通訳を交えて話し合っていた虎範が、車のところに戻ってきた。

「順愛、残念だけどここで別行動だ。俺は軍に戻らなければならない。釜山まで一緒にと頼んだのだけど、司令部の意向は駄目ということだ。必ず迎えに来るから、このあたりの民家に世話になっていてくれ」

「どのくらい、ここで待てばいいの？　一〇日？　一ヶ月？」

「ここではわからない。軍隊に合流して、俺のポジションが決まらないと、何ともいえないんだ。どんな方法を採っても連絡するつもりだけど、一ヶ月位過ぎたら釜山、地区軍本部の国務部隊に連絡してみてくれ」

　虎範の表情にやや不安の影がよぎる。

「義兄さん、車はどうするのですか？　僕は運転できないし、姉だって……」

　韓秀益が不安を隠せずに言った。

「自動車は俺が乗っていく。軍隊で徴用するそうだ。この非常時だから、売るわけにもいかないし、買い手もないだろう」

　虎範は車のボンネットを平手で叩いた。

「いつになったら韓国に平和が戻るのでしょうね。この戦争はどうなるのかしら。まさか北に負けてしまうようなことは……あなた、戦場では気をつけて下さいね。」

　順愛が孝一を抱きしめて言う。

「馬鹿、間違ってもそんなことは言うんじゃない。赤の連中になんか負けるもんか。今聞いたのだけど、いろんな国の軍隊も続々、応援に来てくれているんだ。絶対に勝つ！　俺が赤の兵隊に、殺されるわけがないだろう」

　虎範が順愛と孝一を抱擁した。

「ソーリー・カーネ・イ、ナウザタイ」

　米軍憲兵が、遠慮がちに切り出した。

「じゃあ、元気でな。必ず連絡するか迎えに来るから。秀益、姉さんと孝一を頼む」

　この言葉を言い残すと、Ｔ型フォードは米軍のジープのあとに続いて走り去った。

　順愛と孝一は、走り去る虎範の車を見送ったが、何故か順愛から涙は流れなかった。

　空で轟音が響く。振り仰ぐ、北朝鮮のミグ戦闘機が遠くで機銃掃射を行いながら、編隊を組んで高く低く、南の方に勢いよく飛んでいくのが見えた。

　それを追いかけるように、星のマークの戦闘機が襲いかかる。両軍の戦闘機は、激しく入り交じり、空中戦を交わした。

　数機が、命中した銃弾によって、黒煙を吐き、墜落してゆくのがようやく見えたが、どちらの戦闘機かはわからない。

　七月に入ると、国連軍が応援の参戦をしてきて、韓国の空には、米空軍や多国籍軍の飛行機が飛び交い、激しい空中戦が交わされるようになったのである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ⅲ

　この清陽という町は、極めて平穏なところだった。

　はるか遠くで、爆撃や砲撃の炸裂音が響いているが、決して、危険を感じるようなものではなかった。町に戦火の痕跡もない。

「この町なら危なくなさそうね。しばらくはここ清陽で暮らせるところを探しましょう」

　順愛が弟の秀益に話しかける。彼は周囲に視線を配っていたが、大きくうなずいた。

　三人は街道から外れ、畑の中の道を歩いて行き、塀を巡らせた比較的大きな家の前に来た。門から中を見ると、庭で鶏が数羽、のどかに餌をついばんでいる。

　秀益が順愛を見た。順愛がうなずき門の中に足を踏み入れた。

「こんにちは」

　玄関に立って、声をかける。

　少し間があって、孝一と同じ年くらいの女の子の顔が覗いた。

「お嬢ちゃん。おうちの人は？」

　順愛の問いかけにも答えない。

「留守なの？　畑？」

　秀益が訊くと、後ずさりする。明らかに警戒している様子が受け取れた

「誰か来てるのかい？」

　奥から声がして、老婆が姿を見せた。

「お母さん。怪しいものではありません。わたし達、ソウルから逃げてきたのですが、主人が軍隊に連れていかれ、私と息子、弟の三人がここに残されたのです」

　老婆は、必死に話す順愛の姿を上から下まで眺め、おもむろに口を開いた。

「それで家にどうしろという？」

「お金をお払いしますから、主人が迎えに来るまで置いてもらえないしょうか」

「置いてくれだと？　家は貧乏な農家だ、家の者が食べるだけで精一杯。息子は軍隊に引っ張られてしまうし、嫁が朝から晩まで働いてようやくわたしたちを食べさせてくれているんだよ」

「私の家も農家でした。畑仕事を手伝うことが来ます。弟も力仕事が出来るし、何でもやりますから」

「ふーん、そうかい。その若い衆は沢山食べそうだね。その子は何歳だい？　もう一人前に食べるんじゃないの」

　老婆は孝一を顎で示して言った。

「この子はまだ三歳です。そんなに食べないし弟にも食事は我慢させますので、何とかお願いできないでしょうか」

　順愛が必死の面持ちで話しているとき、勝手口から中年の女性と十二、三歳の男の子が汗を拭いながら入ってきた。

「お母さん、この人たちは？」

　中年女性が訊く。

「ソウルからの避難民だって。お父さんが軍隊に連れて行かれて、迎えに来るまで家に置いてもらえないか、っていうんだ」

　老婆の話を聞いた中年女性が、順愛の方に向き直った。

「この家の嫁です。うちもこの子たちの父親が、強制的に軍隊に徴用されたの。お宅と同じ立場で助けてあげたいけど、家も貧しくて私たち四人がようやく食べられるくらいの作物しか収穫できないし……」

「お母さんにもお話ししましたが、私たちも畑仕事を手伝います、お礼のお金も用意できます。決して沢山ではないけど」

「現金？　いくらくれるの」

「置いていただければ、お礼の気持ちとして一万ウォンを差し上げます」

「一万ウォン……」

　農家の嫁は絶句した

　ソウル市内でうどん一杯が五ウォンの頃の一万ウォンである。現金収入がない農家にとって魅力的な金額であるはずだ。

「いかがですか」

　順愛はバッグから札束をひとつ、取り出して膝の前に置いた。この時小額紙幣しかなかったので、束はかなり厚みを見せていた。

　嫁は、生唾を呑みこんだ。

「私は韓順愛、この子は李孝一です。弟の韓秀益。どうぞよろしくお願いします」

　手をついて頭を下げ、順愛は畳み込んだ。

「漢珠恵です、ゆっくりなさって下さい」

　これで交渉は成立した。

　順愛には、差し出した一万ウォンがどれだけの価値を持つのか理解できなかった。

　こんな非常時には、現金よりも一合の米や一羽の鶏の方に価値があることもまた厳然たる事実だったのである。

　清陽の漢家での順愛は、涙ぐましいほどに働いた。昼間は畑に出て農耕に努め、三度の食事の支度をする。

　ソウルで豊かな暮らしを送っていた順愛は食物などにもこだわりがあって、まだ抜けきれないところがあった。

　料理や食材にも、これまでの習慣が捨てきれず、市場に出向いて自分のお金で穀物や鶏肉、米などを仕入れてきた。

　勿論、畑で採れる作物なども惣菜に使ったが、主食はやはり米が忘れられなかったのである。これまでに食べたことのないような料理、漢珠恵の一家にとって夢のような食事が毎日続いた。

Ⅳ

　すこし清陽の生活に慣れた順愛は、市場に買い出しに行ったとき、思いもよらない出来事に遭遇した。といっても、ある程度予測しなければならないことだったのであるが……

　籠に米や麦、豚肉などを入、順愛の後について歩いていた秀益の腕が、いきなり強い力で掴まれたのである。

　秀益が振り向くと、そこにはヘルメットに太い白線が入り、ハングルで「憲兵」と大きく書かれた兵隊が、仁王立ちになっていたのである。韓国軍の憲兵だ。

「貴様、いくつになる？」

　腕を掴んだまま、前置きも何もなしに年齢を問われた。

「二十三歳です」

「十八歳から三十までの成年男子は、兵役に服すことになっているのは、知っているな」

「いいえ、初めて聞きました」

　秀益は、まったく心外というように答えた。

「これまでどこにいた」

「ソウルです。開戦の時に逃げてきて、今日まで……」

「どこに隠れていた？」

「いろんな家で世話になっていました。ここでは清陽の漢さんの農家に……」

「貴様は、大韓民国のために戦うのが怖くて逃げ回っていたのか」

「とんでもありません。僕の義兄さんも軍人ですし弟だってきっと……」

　秀益は北に残してきた弟の秀柱を思い出したが、そこで口をつぐんだ。

　弟が北にいることを告げたら、不都合なことが起こる、と自衛本能が働いたのだ。

「ま、いい。そういうことだから、直ちに入隊して韓国兵士になるんだ。いいな」

　憲兵は、筋を伸ばして宣告した。

「わかりした。お国のために戦います。ですが、ここでの買い物を姉に持たせるわけにはいきません。漢さんの家まで私に持ち帰らせてください」

「駄目だ、ここからの徴用になる。この非常時だから姉さんだってこのくらいの荷物はかつげるはずだ。そうだろう、姉さん」

「荷を持つのは構いませんが、これまで世話になった漢珠恵さんやおばあちゃんに挨拶くらいさせてください。私も軍人の妻です、そのあと、必ず入隊させますから」

「お気持ちはわかりますが、それは出来ません。全員がその場から入隊してます。何といっても非常時、戦争なんですからね」

　順愛の『軍人の妻』という言葉がきいたのか、憲兵の口調は変わったが、論は変わらず、秀益はジープに乗せられて市場から連れ去られてしまった。

――戦争は人の心をも変えてしまうのね。

　順愛は弟を見送りながら、夫のときもそうだったが、肉親との別離なのに涙も流さない自分に戸惑い、思わずひとりごちた。

　当時の連絡網は、粗末なものだった。手紙は郵便局で受け付けているが、届くかどうかの保証はない。

　そうこうしているうちに、早いもので四月の月日が流れ十一月に入り、朝晩は肌寒さを感じるようになった。

　虎範と清陽で別れてから連絡もなく、もちろん、本人や軍隊からの迎えもなかった。

「お父さんから連絡がないわね。ここにいることを知らせてある？」

　ある夜、漢珠恵が話し出した。

「いいえ、知らせるにしても、主人がどこにいるかもわからないし方法がないので」

「ここは平和だから感じないけど、戦争は大変な状態のようよ。九月中旬には北の軍勢が完全に釜山に我が軍を追いつめたけど、アメリカ軍が仁川に上陸して、赤を挟み撃ちにしたらしい。韓国軍はソウルを奪い返して、一気に北に進み、平壌も占領したんだって。ところが中国の軍隊が北朝鮮軍に味方して戦いに加わったそうなの」

　いつもは寡黙な漢珠恵が、珍しく話した。

「じゃ、まだ戦争は続くようね」

「そう、今は南は平和だけど、いつまた戦地になるかわからない。もう戦争沢山。早く終わってほしいわ」

　珠恵の述懐は、順愛の心にもしみ入ってきた。夫を戦地に送っている者が持つ共通の気持なのだろう。

「珠恵お姉さん、そのお話はどこで聞いたのですか？」

「町はずれに韓国陸軍の中隊がきてるの。そこで聞いてきました」

　たしか虎範は陸軍の大佐だった。そこに行けば、情報があるかも知れないと思った順愛はすぐに駐屯地に向かった。

　中隊長が、軍用電話で照会してくれたところ、今は外出してるが、李虎範大佐は釜山の参謀本部詰めで、釜山陸軍司令部にいるとのことだった。

　陸軍中隊で事情を聞き、漢家に帰ってきた順愛は、珠恵の前に膝をそろえ、頭を下げて話を切り出した。

「主人は、釜山にいるようです。軍務が忙しくて連絡が取れないのでしょうが、こんなときに家族のことなどにかまけることが出来ないのは、よくわかります。そこでお願いですが、一ヶ月はかからないと思います、私が釜山に主人に会いに行く間、孝一をもう少しだけ預かっていただけないでしょうか。その代わりといったらなんですが、珠恵お姉さんのご主人の消息も調べてきますから」

「それは構いませんよ。孝ちゃんは聞き分けもよくておとなしい。よっぽどうちの子たちの方が……順愛さん、心配しないでご主人に会いに行ってきなさい。孝ちゃんはこれまで通りに預かります」

　珠恵は順愛の手を握って、力強く言った。

「孝一、母さんはお父さんに会いに行ってきます。お父さんに会えたら必ず迎えに来るからそれまで、お利口にしておばさんの言うことを聞いて待っているのよ」

「いやだ。僕も連れて行って」

　孝一は母の言葉に強く抗議の意志を表した。

「連れて行ってあげたいけど、交通がどうなっているかわからないし……」

　寝床の中でこんな会話が交わされ、孝一はいつの間にか眠ってしまった。

　朝になったとき、母親はいなくなっていた。

　当時、一般の家庭には電話はなく、郵便も戦争のため麻痺状態であった。

　原始的であるが、本人が来て顔を見、声を聞いて初めて情報の伝達となったのである。

Ⅴ

　順愛が釜山に行って冬が訪れ、ここ清陽も積雪こそ少ないけど、身を切るような寒さが李家や孝一を襲った。

　一ヶ月の予定だった順愛から、音沙汰がない。最初のうちは、人間関係も何とか円滑に運ばれていたが、同じ年頃の子どもがふたりになると、どうしても肉親の絆が表面に出てくる。十二歳の長男は、格上の力関係をうまく演出していたけど、四歳の玉淑と孝一とはことあるごとに衝突するようになっていた。

　やはり自分の子供を、というのが人情である。

　そして年が明け、韓国の旧正月も過ぎたころ、決定的な出来事が発生した。

　順愛が釜山に行ってからは、漢家の食卓は元の農家のスタイルに戻った。

　孝一もその辺は理解していて、何も苦情を言わずに食べていたが、ある日の夕食時に玉淑と激しい言い争いの末つい――母ちゃんの作った料理はおいしかった。僕、母ちゃんのおかずでご飯が食べたい。と言ってしまったのである。

　さすがにこのとき、珠恵の顔色が変わったが、悲しそうな顔をしただけでその日は何も言わなかった。

　翌日、珠恵が畑に出ているとき、お兄ちゃんが何も言わず肩車をしてくれた。

　お兄ちゃんは、ひと言も言葉を発せず、積もった雪の中を山に向かってどんどん歩いていく。

　これまでも、お兄ちゃんに山に連れていってもらったことはあるが、このときはかなり孝一に違和感が伝わってきた。

　その感覚は鉄条網のフェンスに、木で組んだ頑丈な門扉がある大きな建物の前まできたとき、激に増幅した。

　お兄ちゃんは、門を開けて玄関に近づく。孝一の不安感はピークに達し、肩の上で暴れ廻って、地面に転げ落ちた。

　そして雪の中を、きた方向に向かい全速力で走り出した。　すぐに、お兄ちゃんに追いつかれ、捕まった。そして年配の男性に抱えられ、建物の中に連れ込まれた。

　そこは古くからある、孤児院だった。

　だが、この戦争で親を亡くしたり、はぐれたりした子どもなども加わり、多種多様の孤児たちであふれていた。

　孝一はそこに預けられたのである。そのときはひたすら、身の不幸を嘆き、自分をここに押し込んだ漢珠恵おばさんを恨んだが、その内に父親を探しに行ったきり音信不通になった母、順愛を恨むようになった。

　しかし、その恨みはすぐに忘れ、母親を恋うる心が孝一の心の全面を占めた。

　木の葉の緑が濃くなり、めっきり暖かくなって春も深まった。

　孝一は、ことあるごとに孤児院の玄関を出た四、五段の階段に座り、正面に延びる道路を眺めて、母を待った。

　何故か、その道を通って母が迎えにきてくれると信じていたのだ。

　食事時になって職員が呼びにきても、その場を離れようとしなかった。職員が、強引に食堂に連れて行こうとした。

「母ちゃんがきたとき、僕がここにいないと困るよ。だから僕はここで待つんだ」

　孝一は足をバタつかせて叫んだ。

　収容されている孤児たちの唯一の楽しみは、食事のはずだった。　しかし孝一は、食事を告げる鐘が鳴ってもいたためしがなかった。

　玄関のところでは、すぐに連れ戻されるので、隠れる場所を必死に探した。　その場所は多岐に亘った。所詮、四歳の子どもの知恵である。職員はすぐに隠れている場所を突き止めた。

　条件はせばめられる。孝一にしてみれば正面の道が見通せることが必要なのだ。せいぜい、二階の屋根裏か、階段の下、吹き抜けの階段に取り付けられている、カーテンの蔭くらいに限定される。

　それからが大変である。捕まえようとする職員の手を振り払い、逃げ回るのだ。

　小さな体は狭い隙間でもすり抜けられる。おまけに孝一は人一倍すばしっこかった。

　しかし、食事を摂らないと空腹に絶えられなくなる。

　いよいよお腹が空いて残飯が入っているゴミ箱からの骨を拾い出ししゃぶっていると院長に掴まった。音を上げた院長は捕まえた孝一にいい聞かせる前に、体罰を加えた。

　院長の折檻は孝一の右足に集中した。走りまわれないように、深い傷を負わせた。

　そのときの院長の手には、ピアノ線が巻かれていた。孝一の右大腿部からふくらはぎに打撃を加える。殴られたときの衝撃でピアノ線は食い込んで、皮膚を破った。あとになってダメージが出てくるのだ。

　右脚が化膿し、腐敗臭が漂って痛みがいつまでも続くのだ。

　この仕置きによって打擲された直後、孝一は歩くことはおろか、立つことすら困難な状態に置かれた。その効果の大きさに、院長は驚いた。以後この一回だけでそれを使った体罰は行われなかったのである。

　しかし、孝一は、この痛みに耐えて、歩けるようになるとまたもや、母親の来訪を待つようになった。

　いくら手ひどく折檻されても、母を待つ行動はやまなかった。

　院長や教師達も、ある程度諦めたのか、孝一の行動に対してあまり構わなくなって、放置するようになった。

　この頃を境に、孝一は堂々と階段に座るようになり、爪を噛みながら道路を眺めるようになったのである。

Ⅵ

　ある日の夕方、正面の道路を眺めている孝一の目に、ヘッドライトをつけたジープとウェポンキャリアが、砂埃を巻き上げて走ってくる姿が映った。

　門扉の前で停まったジープから軍服の運転手が降、木の門を両手で押し開き、再び車を運転して二台が構内に入ってきた。

　玄関に横付けとなったジープの反対側のドアから、運転手ではない兵隊が降りた。目深にかぶった軍帽の庇で顔はよく見えない。

　兵士は帽子をかなぐり捨てた。軍帽の中から長い黒髪が溢れだした。

　兵士は孝一に向かって駆けてきた。

　女兵士は母だった。

「孝一！」

「母ちゃん」

　孝一は駆け出したくなったが、右足の怪我で立つことが精一杯だった。

　走ってきた母が拡げた腕の中に、抱きしめられたのである。

　はっきりと母の匂いを感じとり、柔らかい胸に包みこまれた。

「母ちゃん。何ですぐに迎えにきてくれなかったの？　僕、とても淋しかったよ」

　孝一の口調が責める内容になるのも、致し方なかった。

「孝一、ご免ね。珠恵おばさんのところにいるとばかり思っていたの。ここに入れられてるとは……お母さんが悪かった、ご免ね、ご免、許しておくれ。おばさんには会ってないんだけど南日お兄ちゃんから聞いて、飛んできたのよ」

「母ちゃん……」

　強い力で抱き締められ、頬ずりされた孝一の顔は、母の涙でぐしょ濡れになった。

　母に抱かれている事実が夢のように思えていた孝一だったが、これが現実だと理解できて、声を挙げて泣き出した。

　抱き合った母子は、しばらくの間、あたりはばからず泣き続けた。

　ひとしきり涙を流したあと、冷静さを取り戻したのは母、順愛だった。

「孝一、右足、どうかしたの？」

　孝一が動けないのを見て尋ねた。

「お母さんを探しに歩いていて、院長先生に掴まったんだ。それで、ここを傷つけられたんだよ。痛かった」

「どれ、見せてごらん……ひどい」

　傷の治療もせず、包帯だけ巻いた右足患部を見て母親は眉をしかめた。

「院長にひとこと言わなければ。どこにいるのかしら」

　母親は、首を巡らせている。

「部屋はこっちだよ」

　母親に抱かれて、孝一は院長室に案内した。

「院長は誰？　私はこの子の母親です」

　部屋に入るなりの第一声である。

「院長は私ですか……」

　院長は、母親が着ている将校の軍服に目を奪われていた。

「あなた方は不幸な子供たちを、優しくお世話するのが仕事なのではないのですか？　それをこんなに痛めつけて」

「………」

　傷のところを示されては、答えることが出来なかった。

「この子達は、自分の責任ではなく何かの事情でこの施設に置かれたのです。それを無視してこんなひどいことをするなんて」

「何と言い訳しても、理解いただけないでしょう。たしかに傷を付けたのは私です。お詫び申し上げます」

　院長は、机に手をついて頭を下げた。

「決して二度と、こんなことをしないで下さいよ。息子は今日引き取って帰ります。だけどこんなことがあっても、お友達となってくれた皆様にプレゼントは置いていくわ」

　母は運転手にウェポンキャリアから段ボールをひとつ持ってこさせ、院長室に入る。

段ボールには、とても一般人には口にすることが出来ない軍用のチョコレートやクッキー、缶詰などが詰められており、それを見た院長の目を丸くさせた。

　ジープに乗った順愛と孝一は、その足で漢珠恵の家に行った。

　そこに着くまでは、十分ほどを要する。その間、離ればなれになっていた母子は、不毛の時間を取り戻すかのように、抱き合ったままであった。

　二人には言葉は必要がない。孝一には夜ごと夢に見た母の胸に抱かれているだけで、これ以上の幸はないように思えた。

　四歳になったばかりの孝一には、この数カ月間、母順愛が経験したことを聞いても、理解できる道理がなかった。

　その意味で、二人は無なくとも、心はつながり合っている。　孝一は――母ちゃんが一番好きだ。僕が大きくなったら、絶対に母ちゃんを護るぞ。だって僕の一番大事な人だから……と誓った。

　今、こうして母の胸に抱かれている。その事実だけで至福のときであった。

　車は、漢に到着した。

　もうひとつの大きな段ボールが、韓順愛尉から漢珠恵一家への手土産である。

　珠恵はその土産を押し頂くと、座を横にずらして両手をついた。

「順愛さん、あんなに預かると大見得を切ってこの始末、言い訳の言葉もありません。夕食のとき、玉淑と孝ちゃんが言い争いをしました。それを私こぼしたのを南日が聞いていて、翌日、私が畑に出ている間に、息子が孤児院につれていったのです。すぐに連れ戻しに行けばよかったのですがついつい畑仕事にかまけてしまって、お許しください」

　と孤児院に入れたことを謝罪した。

順愛は広い心でこれを許し、こんどは自分がとった行動と、思いもかけず降りかかってきた運命への経緯を、静かに話し出した。

　夫を訪ねての釜山への旅は容易なものではなかった。行き交う自動車はすべて軍用車両であり、理由の如何を問わず、民間人が乗り込むことは出来なかった。

　釜山へは太田を経由して大邸に出る。この間約一〇〇キロ、移動の方法は牛車に乗せてもらう以外は、歩くより手段はなかった。

　大邸まで来ると、鉄道がある。ここで釜山行きに乗れば、あっという間に釜山に行けるのだが、ここでも列車は軍が使っていて、一般人の乗車は叶わなかった。

　女の足では日のあるうち歩き続けてもせいぜい二〇～二十五キロが限度である。

　大邸から釜山までは約一〇〇キロ、今なら自動車で二時間弱で到達できるが、順愛は夫に会いたい一心かここを三で歩き、釜山の参謀司令部にたどり着いた。

　ところが、虎範は、第六師団の連隊長になって、前線に派遣されていたのである。

　軍用の電話で、ようやく前線の虎範と話すことが出来た。

　現在、清陽の漢珠恵宅に孝一を預け、会いに来たこと、弟の秀益が、市場で現地徴用されたこと等を報告した。

そして連隊の位置が清陽に近ければ、孝一を迎えに行ってほしいと申し入れた。

　それに対しては現在の位置は軍の機密に属するので言えないが、少なくとも清陽まで簡単にいけるところではない。漢珠恵の家族は信頼できそうだから、もうしばらく預かってもらおう、それよりも順愛に軍の事務官として一働きしてもらいたい。との意向を示した。

　司令部にいた中佐が、半ば強引に順愛を少尉に任命、司令部付きの文官として仕事をせざるを得ない立場となり、すぐに軍の施設に入り、孝一を迎えに来られなくなった。

　四歳の孝一はこの話を断片的にしか理解できなかったが、大好きな母とまた一緒に暮らせると言うことで、これまでの苦労や不安感が、一気に消し飛んでしまったのだ。

Ⅶ

　孝一は母が乗ってきたジープに乗って、ウェポンキャリアと二台で釜山まで下る。

　道は通じているが、舗装などはされていない。何といってもジープである。車は砂ぼこりをたて、大きくバウンドしながら走る。

　孝一は、母にしがみついた形で熟睡していた。こんなに安らかに眠りについたのは、いつ以来のことだろう。

　いつも、なにかが夢に出てきて孝一を起こしてしまう。したがって、孤児院の生活では慢性の睡眠不足だった。

　清陽を出たのが二〇時。やはり十二時間は優に要する。ジープは夜を徹して釜山に向け疾走した。

　運転する兵隊は、順愛が漢家にいた約五時間、ぐっすり眠っていたので、徹夜で走っても影響はなかった。

　孝一は、これまで、孤児院での習い性となった不安感と、車のバウンドで目を覚ます。

　しかし、これまでと異なるのは、目が覚めても母がしっかりと抱いていてくれることだ。

　まず、開いた目に飛び込んでくるのは、母の慈愛に満ちた眼差しだった。

　一瞬、夢かとった孝一は、思わず母の顔に触ってみた。

「孝一、母さんはここにいるよ。もう絶対に離さないから、安心おし」

　母は、孝一の顔を両手ではさむと、頬ずりをした。

「母ちゃん、僕、母ちゃんが大好き。僕を置いてどこにも行っちゃいやだよ」

「行かない。孝一を絶対にとりにしない」

　母は、もう一度、優しく包みこむように孝一を抱き上げた。

　次に目が覚めたとき、周囲は明るくなっていた。ジープは快調に、と言いたいところだが、大揺れしながらっている。

「孝一、起きたの？　もうすぐ、釜山に着くわよ。さっき三波津を過ぎたときは暗かったのに、こんなに明るくなった。金上等兵、今どこを走ってるの？」

「はい、金海を過ぎました。あと三十分くらいと思います」

「金上等兵、官舎に行く前にキャンプの将校クラブによって。朝食を食べていくわ」

「了解しました。二十分で着きます」

　急に車の揺れが少なくなった。釜山の連合軍キャンプが近くなって、道路が舗装されているのだ。

　キャンプのゲートをくぐる。張り番のアメリカ兵が挙手の礼で迎える。

　キャンプの中の道路は完全にアスファルトで舗装され、並木が植えられて整然と宿舎が並んでいる。

　ボーリングアレー、映画シアター、ソフトボールのグラウンド、ＰＸなど、各種施設も揃っているのだ。

　兵隊用のアーミークラブを始めに、下士官用のＮ・Ｃ・Ｏクラブ、将校用のオフィサースクラブが設けられ、階級に応じた憩いの場所が提供されている。

　将校クラブの車寄せに着いた。

「金上等兵、ここで待っていてください。コーヒーとサンドウィッチをボーイに届けさせるけど、何か食べたいものがある？」

「いいえ少尉、何でも結構です」

「ＢＬＴ（ベーコン・レタス・トマト）サンドでいいわね。すぐに届けさせるわ」

　金上等兵を車に待たせると、母は将校クラブのダイニングルームに入って行った。

　そして韓国人のウェイターに何ごとか命じている。

「孝一は何でも食べられるよね。母さんにまかせておいて。お茶はアイスティーね」

　洋風の朝食がテーブルに並ぶ。

　オレンジジュースも新鮮だし、卵料理も、スクランブルエッグに焼いたベーコン。温かいモーニングロールもたっぷりのバターで食べるという贅沢さだった。

　清楊の漢家は勿論、孤児院でも決して供されることがない朝食である。

　勿論父親も一緒が前提なのだが、軍によって釜山の大新洞に、ふたりで住むには広すぎる官舎が用意されていた。

　将校である母親は、連軍（といっても、ほとんどアメリカ軍だが）の将校クラブに出入りが許されていた。ここのダイニングルームで米軍将校と同じ豪華なステーキディナーを食べることが出来、食後はボールルームでグラスを片手にバンド演奏を耳にし、ショーを楽しむことも出来たのである。

　勿論、母子家庭のような順愛や子供の孝一には夜に行われるディナーショーは無縁の世界だったが……。

　キャンプの中には、何でも揃っていた。ＰＸに行けば、食料はもとより、あらゆる日用品が並んでいる。韓国では絶対に売っていない化粧品や高級洋酒などが、信じられない低価格で販売されていた。

　一九五一年になると、戦は各方面から休戦に向けての働きかけがあったが、双方の主張が強く、平行線を辿った。しかし、ソ連の仲介による、朝鮮戦争休戦会談の本会議が開かれ表面上は一時停戦の形を持ったが、相変らず境界線を挟んでの陣取り合戦のような一進一退がくりかえされていた。

　一九五二年五月二十五日、釜山地区に戒厳令が発令される。

　しかし、内陸での戦いは、山岳地帯でのゲリラ戦か、逆に日本から入ってきた共産主義の抗争程度で、表面的には国内に平和が戻っていた。

Ⅷ

　一九五二年八月五日、李承晩大統領、二選ほぼ同時に父、虎範は、前線から第四連隊の連隊長に任命され論山に帰還、親子三人の暮らしが戻る。

　一九五三年春、さらに第一線の軍務から解放され、論山近郊の練武台にある新兵訓練所の最高責任者に任命された。

　同じ時期の春に、孝一は論山国民学校に晴れて入学する。

　戦前から、自家用車を持っていた父親は軍籍にありながら、プライベートに自家用車を購入、運転手も雇いそれで孝一を学校まで送り迎えをしてくれた。

　一九五三年七月二七日、板門店で中国、北朝鮮、国連（アメリカ）と大韓民の間で休戦協定の調印式が行われ、この朝鮮戦争に終止符が打たれた。

　三年間の戦いだったが、韓国の土地や建築物は、非道く破壊され、これの復興に労力と資金面での相当の努力を要求された。

　この年、孝一が六歳のとき、妹の『善』が練台で生まれた。

　一九五四年九月十八日、北朝鮮は中国軍四十万人の撤退を発表する。

　孝一は、論山国民学校の生徒として、恵まれた毎日を送っていた。

　家の応接間には、グランドピアノが置かれていて、孝一のために専門の音楽教師が出張してレッスンしてくれた。

　家には練武台に昔から住む旧家の娘が、行儀見習いという名目で住み込んで、家事一式をつかさどり食事の支度から掃除、洗濯まですべてをやっていた。

　母は、その娘に家事はもとより、一般教養にいたるまで親切に手ほどきをした

　その娘も、実の母親に接するように慕っていたのである。

　一九五五年の春には、父親の虎範が軍を円満に退いて、煉瓦製造業、豆腐製造業、森林伐採業の事業をはじめた。

　従業員は、除隊した順愛の弟韓秀益、運転手の金由男、経理面や実務は、順愛が一手に受け持った。実業の経験は父親にはなかったのである。

　何といっても、取引相手は全部が韓国軍隊である。これほど儲かり、リスクのない商売はなかった。

　新しい事業も順調に回転して行く。国民学校の三年生だった孝一から見ても、父親の虎範は格好がよかった。

　生きて行く自信というか、それが中肉中背で特に大きな身体ではなかった虎範を、とても大きく見せていた。

　一般的な周囲からも、軍の用務課からも一目置かれ、事に扱われた。

　このころは、母親も軍籍から離れて一般の主婦として、文化的な立場を求め、そのような場所にタッチするようになった。

　一九五六年四月二十五日に弟の『亨竜』が生まれた。

　亨竜は男の子である。

　父親は男の子の誕生を素直にというより、少し常軌を逸しているはしゃぎようで喜んだ。

　善のときとは違うのはわかるが――僕だって男の子だ。しかも僕は長男だぜ。と、孝一が思ったのも仕方がないところだった。

　五月五日、申翼熙大統領候補、遊説中狸里にて急死、国民の涙を呼んだ。

　五月十五日、李承晩大統領三選。大統領に張勉が当選した。

　優しく美しい母、順愛。凛々しい父、虎範。可愛い妹、善。少しやんちゃだけどやはり可愛い弟、亨竜。何の不具合もなく、孝一の前を毎日が過ぎて行く。

　この一家には不幸とか、苦労などという言葉は考えられないような状態だった。

　しかし、この幸せもたったひとつの不幸な出来事が、この一家の運命を大きく変えるものと、誰が想像しただろうか。

　少なくともこの家族には、このことを予測することはできなかっただろう。

　運命の日までのカウントダウンは、はじまったのである

**第二章・母親の逝去（論山）**

Ⅰ

――一九五八年十一月一日

　たしかに見えた。

　キーンと冷え切った夜空。冴えた光を放つ星の間に、ほの白い母の顔が……。

　なぜか、白黒写真だった。

「母ちゃん！」

　突如として孝一をおそった胸騒ぎ。

　孝一は薬袋を握り直し、駆けだした。

　寒風を切り裂いて走る孝一の目から涙が湧き出した。

　孝一は走り続けた。目的がないときなら、とても耐えられない寒さのはずだが、孝一には寒さを感じる余裕はなかった。

　片道三キロほどの道のり、わずか半日の間にもう三回目の往復だった。

　孝一の手には医師の妻女から手渡された薬包がしっかりと握りしめられていた。

　ころぶように家の玄関に飛び込む。

　五歳になった妹の善迎えにでていた。いつもは明るい妹の表情が暗い。

「善、母ちゃんは？」

「兄ちゃん！　母ちゃん、起きないよ」

　善は激しく震えている。

　孝一はすぐに事態を察知した。

　靴を脱ぐのももどかしく、奥の部屋に走り込んだ。

　初老の医師が母に馬乗りになって、胸を圧迫している。医師が胸を押すたびに母の白い貌が操り人形のように揺れた。

「先生、母ちゃんをいじめないで！」

　孝一は医師に飛びかかり、母の上から突き落とそうとした。

「馬鹿！　これをやらないと死んでしまうんだ。孝一、邪魔するんじゃない！」

　医師は十一歳の孝一を、凄い力ではねとばした。壁にたたきつけられた孝一の手から、薬の包みが床に落ちた。

　普段、温厚な医師が見せた緊迫感は、容易ならざる事態を孝一に認識させた。

　彼の少しばかり薄くなった頭から、湯気が立っている。

医師は三十分ほども人工呼吸を続けただろうか。大きなため息を吐いて、布団を母の身体に掛けた。

　母は、静に眠っているようだった。

「母ちゃん、起きて！　お腹がすいたよ」

　孝一は、医師の顔をうかがいながら、母の耳もとで話しかけた。

「孝一、先生は出来るかぎりのことはしたけど、母さんを助けられなくて済まない。しかし、これも運命だった」

「母ちゃんは死んだの？　そんなの嘘だ。僕がもらってきた薬を飲ませてよ。先生に言われたとおり持ってきたのだから」

「もう、どんな薬があっても、母さんは生き返らない。残念だけど」

　医師は、眼鏡を外してタオルで顔を拭った。

「兄ちゃん、母ちゃんどうしたの？」

　おずおずと母の顔に触れた善の冷たい小さな手が、孝一の手を探ってきた。

「兄ちゃんにもわからない。朝、学校に行くときは元気だったし、僕が忘れていった学級金だってちゃんとお昼に会ったときに渡してくれたんだから」

「でも、母ちゃん、冷たいよ。いつもほっぺは暖いもん……」

　五歳の善に、母の死という事実を理解しろというのは酷だった。

「どうしちゃったのか、わかんないよ。あんなに元気だった母ちゃんが……」

　孝一も善に見ならって、母の頬に触れてみた。物理的な冷感とは異なる、直接孝一の心に滲み込むような無機質で冷たい頬だった。

　部屋の隅で眠っていた二歳半の弟、亨竜が目を覚ました。

「母ちゃん！」

　ひと言だけ叫ぶと、布団のところに這い寄ってきた。そしていつものように、母の体の上によじ登った。顔を小さな掌ではさみ、揺さぶる。

　母の顔がぐらりと横を向いて、動かなくなった。

　ようやく母の死をおぼろげではあってもこの兄弟たちは、理解せざるを得なかった。

「それにしても、特務隊長は遅いな。運転手とは連絡がついているのに」

　医師が洗った手を拭いながら、誰にともなく言う。

　父は二年前に軍を退官し、事業を営んでいたが、古いつきあいの医師は、軍隊での呼称『特隊長』と、そのまま呼んでいた。

「父さん、帰ってきてくれたらいいのに。何をやっているんだろう」

　孝一が不安げに言う。

「今日は新しい家の完成した日だ。そのお祝いをやっている。さっき電話連絡が取れたから、もうじきに来る」

　医師は孝一の目を見ずに言った。

　どのくらいの刻が過ぎただろう。玄関のドアが激しく開閉され、乱れた足音が響き、父、虎範の細身の身体が部屋に飛び込んできた。

　父はすがるような目で医師を見た。医師は目を伏せてくびを左右に振った。

　それを見た父は座り込む孝一や善、亨竜には目もくれずに母に抱きついた。

「順愛！　眼を開いてくれ！　何か、何でもいいから話してくれよ」

　父は母を抱き起こし、頬ずりしながら激しく揺さぶっている。

「李特務隊長。もう奥さんは、どうやっても戻りません。最善は尽くしたのですが」

　医師が父の肩に手をかけ、静かに語った。父はその手を振り払って、医師の胸ぐらを掴まんばかりに言った。

「順愛の身体のことは、医者のお前に全部預けたんだ。全部お前の責任だ。それがどうしてこんな始末になるんだ。おれが朝、出かけるとき、順愛は元気だったんだぜ。

今日か明日生まれると言っていたけど、三人目の子どもだからと、おれは安心していた」

――三人目？　父さんは何を言ってるんだろう、生まれてこれば四人目じゃないか。

　孝一は一瞬、疑問を感じたけど、父親の激しい口調に気を取られ、すぐに脳裏から消え去ってしまった。

「連隊長、奥さんは私が最後に診察し一週間前まで、順調でした」

「お前のところに長い間、通っていたんだろう。こうなる前に何も出来なかったのか。この結果を察知できるような……」

「それは無理です。私もずーっと奥さんを診ていて、こんな急に状態が変わるとは思いせんでした」

「あんたがそう思って診察していた妻が、どうしてこんなことになったのか、ちゃんと説明してくれ」

　父は、少し冷静になって母を元の布団に横たえると、低い声で問いただした。

Ⅱ

「お昼過ぎに奥様ご本人から激しい出血があったと電話があり、取るものもとりあえず、駆けつけたのです。そのときは……」

　医師の説明は、国民学校五年生の孝一にもよく理解できた。

　彼が着いたときには、浴室で血の海の中に倒れていた母の意識は、まだあったという。

　しかし、胎児の心音は途絶えており、子どもを助けることは出来ない状態だった。

　この時点で死産だったのである。

　当時の医学、しかも設備のない環境、帝王切開などの方法は採れなかった。

　孝一を三回も医院まで薬を取りに行かせ、可能な限りの努力をしたが、結局無に帰してしまったのだ。

「………」

　は、黙って医師の話を聞いていたが、目を伏せるとハラハラと落涙した。

　涙は母の頬に落ちて、少し歪んで流れた。

　孝一も善も、涙が枯れ果てたかのごとく放心状態で座り尽くしていた。父も医師も同様だったが、ただひとり、珍しそうに四人の姿をかわるがわる眺める、亨竜のつぶらな視線だけが部屋の空気を微妙に揺らしていた。

――一九五八年十一月二日

　母の葬儀は、盛大に営まれた。

　近所の人や、軍関係者がひっきりなしに弔問に訪れた。

　酒が酌み交わされ、故人を悼む話題は途切ることはなかった。

　近所に住む主婦たちを募り、百済の伝説で名高い、近くの旧跡を訪ねる自動車による小旅行を企画したり、私費を投入して料理を作るホームパーティを開いたり、特務隊長の夫人として中心的な役割をこなしていた。

　他人事でも親身になって対応した母は、極めて篤い人望を集めていたのである。

　哀しみの宴は二晩三日に亘って続いた。

　参列する人々は口を揃えて母を礼賛し、早い逝去を惜しんだ。

　当時、土葬が韓流葬儀の主流であり、論山郊の墓地で埋葬が行われた。

　葬列の先頭に母の遺影を掲げた父が、悲痛な面持ちで歩き、喪服姿の叔父（母の弟、韓秀益）と五人の兵隊が捧げ持つ柩が続く。

　そのあとには母を慕う参列の人々が長蛇の列をなし、その末尾は柩の側方を歩く孝一たちからはうかがう術もないほどであった。

　論山の墓地にゆく途中に、軍に食肉を供用するための屠殺場がある。

　丁度、母の柩がそこを通過するとき、一群の牛が繋がれ、引かれていった。

　牛たちの澄んだ眼から、涙があふれているのが見て取れた。

――この牛たちも母さんの死を悼んでくれているんだ……。

　孝一は感動して、牛が流す涙から目を離すことが出来なかった。

　墓地に着き、仏教式のセレモニーが終わって、いよいよ納棺の儀となった。

　孝一は現実の問題としてようやく、母の死をとえることはできていた。

　いざ二メートルほど掘られた穴の中に、母が眠る柩が安置されたときに、葬列の先頭で涙にくれていた孝一が無意識でいきなり穴に飛び込んだ。

　そして、土がかけられる寸前の柩にしがみついた。

「こんなの嫌だ。母ちゃんが埋められてしまうなんて。母ちゃんを埋めるのなら僕も一緒に埋めてくれ」

　顔中を涙で濡らした孝一は、柩に頬をすりつけて全身で抵抗した。

　ひとりの男性が穴の中に降りてきた。叔父の韓秀益である。

「孝一、お前の気持ちはよくわかる。俺だって姉さんを亡くしんだ。たまらなく哀しい。でも、そんな無理を言うな。母さんが困ってしまうよ」

　叔父は柩を指さしながら言い、孝一を抱き起こした。軍人だった叔父の力は強く、抱え上げられた足が宙に浮いた。

「痛っ！」

　孝一が叔父の腕に噛みついた。手が緩んでもういちど孝一は柩の上に落ちた。

「嫌だ！　僕は母ちゃんと一緒にいる。このまま埋めてよ！」

　両手両足で柩に貼りついた。

　孝一の後襟が掴まれ、柩から強い力で引きはがされた。

　左頬で、叔父の平手打ちが炸裂した。穴の反対側まで吹っ飛んだ孝一は、驚いたように叔父の顔を見た。叔父の顔は、決して怒っていなかった。

　限りなく哀しみに満ちたその瞳から、滂と流れる涙を拭おうともせず、孝一のところに歩み寄り、強い力で抱きしめてくれた。

「あんなに優しかった母さんだもんな、お前の気持ちは痛いほどわかる。でも孝一はこれからお兄ちゃんとして善や亨竜の面倒を見なければならない。母さんの代わりだ」

　叔父は孝一の耳許で、声を震わせながら囁いて、空を振り仰いだ。

　孝一は叔父の腕の蔭から穴の上を見た。そこには不安げな善と亨竜の顔が覗いていた。

　孝一の首すじに暖かいものが降りかかっててきた。それは瞬時に冷たく変わった。

　叔父の涙だった。

　叔父は、孝一を抱きすくめていた。

　地上から腕が差しのべられた。叔父はその腕に孝一を委ねた。かけ声と共に孝一は地上に引き揚げられた。手を出してくれた兵隊も、涙に濡れた顔を見せていた。

　善と亨竜が駆け寄ってきて、抱きついた。

　そこに穴から出てきた叔父が歩み寄り、三人を抱きかかえた。

　参列の人々はその様子を見て、新たな涙にくれた。

　埋葬の儀も終わり、葬列は練武台の自宅に戻った。

　潮が引くかの如く、参列の人たちがそれぞれの家路につく。家には父と叔父、孝一、善、亨竜の五人がオンドルの床に座っていた。

　父は、虚空を見すえてひとことも言葉を発しない。叔父も、その様から目を逸らすように窓外を眺めていた。

　李家の居間は、重苦しい空気が支配していた。哀しみの感情が枯渇したかのように涙は見られず、全員が放心状態だった。

「父ちゃん、僕、本当に母ちゃんと一緒に埋めてもらいたかったんだよ」

　沈黙に耐えられなくなって、膝を進めた孝一が父親に話しかけた。

「………」

　父親は視線を孝一に戻したが、やはり無言を続けた。

「だって僕、母ちゃんが……」

　唐突に、父の手が孝一の肩を掴み、胸に抱き寄せられた。

「お前が穴に飛び込んだとき、とても羨ましかった。母さんと一緒に埋めてもらいたかったのはこの俺なんだよ。順愛がいないと俺は何も出来ない。これからどうやって生きていけばいいんだ」

　この言葉は虎範の本音だった。

　葬儀の間、背筋をきちんと伸ばし、軍人としての矜持を保ってまったく感情や涙を見せなかった父だが、ここで初めて大粒の涙を流したのである。それは嗚咽と共にとどまることを知らなかった。

　もともと北の出身の父は、南に親戚も、親しい知人や友人も少なく、孤独で母だけが頼りだったことを後日、叔父から聞かされて孝一にもよく理解できたのである。

　父、李虎範はまったく抜け殻のようになってしまい、無気力な毎日を送るようになったのである。

　一九五八年暮、李孝一・十一歳になったばかりの、厳しい冬のさ中だった。

　この年の十二月二十四日、新国家保安法が制定された。

Ⅲ

　年が明けてからも、父の放心状態は続いた。

　最愛の妻を亡くした衝撃が、かくも大きなものとなるとは……孝一の子供心にも不安に映ったのである。

　会社にも出ず、真露を飲みながら窓の外を眺め、ため息をついている父親はまるで別人のようだった。

　自分で食事の支度などしたことがない父親は、当然子供たちの食事を作ることも出来ず義弟、韓秀益の妻に頼んでいた。

　一月末、父親が軍籍にあるときから個人的に信頼し、ビジネス上でも重用していた運転手の金由男が、会社の資産すべてを現金化して着服、逃亡してしまったのである。

　三つの事業はすぐに機能しなくなり、債権者が群がり集まってきた。工場の建物や什器は債権者に押さえられたが、順愛が亡くなった日に完成した新しい住居にはとりあえず、住むことが許されたようである。

　運転手が逃亡してすぐ、父親も何の前触れもなく、姿をくらましてしまった。

　朝、目がさめると、孝一の隣で寝ていたはずの父の寝床がきちんと畳まれ、彼の決意を表明するように孝一の視界に入ってきた。

「善、父ちゃんを知らないか」

　孝一は妹を揺り起こして訊ねた。

「知らないよ。兄ちゃん、まだ眠い」

　妹はようやく答えると、寝返りを打って反対側を向いてしまった。

　孝一はある程度、事態を認識した。

　素早く枕元の着替えを身につけ、オーバーコートを着ると表に飛び出した。

　そこに、顔見知りの、父親の会社に勤めていた男の人が通りかかった。

「済みません、僕のお父さん、どこに行ったか知りませんか」

　孝一はいきなり尋ねた。

「お父さん？　社長がいないの？」

「うん、目がさめたらなくなってた」

「そうか。社長も運が悪い人だ。お母さんが亡くなった上に、金野郎があんなことをするなんて、金は本当に恩知らずだぜ」

「金のおじちゃんのことは、どうでもいいです。父ちゃんを探してください」

　孝一は、男の袖をつかんで引っぱった。

「そんなの無理だよ。お前の父さんは、自分から身を隠したんだから、すぐに見つかるようなところにいるわけがない。警察に行っても同じだ。帰ってくるのを待つしかない」

　男は孝一を振り払うと、足早に立ち去った。

　続いて孝一が行ったのは、論山カトリック教会だった。

　教会の裏手にある司祭の住居に廻って、ドアを叩いた。

「ヒョウイル、どうしたの？」

　ダリオ神父が孝一を招き入れて訊いた。

「神父さん、父ちゃんがいなくなった」

「いなくなった……いつのこと？」

「朝、目がさめたら父ちゃんは……」

「いなかったのか……お父さんはとてもつらかったんだろう。このところ大変だったと軍の信者さんから聞いたよ」

「………」

　孝一は目を伏せ、言葉がなかった。

「ヒョウイル、お母さんが死んで、君たちの食事なんかはどうしてるの？」

「おばちゃんが作ってくれたり、父ちゃんが買ってきてくれたりしていた」

「おばちゃんって、韓秀益の？」

「そう。でも、ほとんど父ちゃんが……」

「お父さんが帰ってくるかも知れないけど、もし今晩、帰ってこなかったら、教会においで。わたしが食事を用意してあげる。ところで、お金はあるの？」

「まだ探してないけど、わかりません。父ちゃんは僕にお金くれなかったから」

　これまで孝一には自由に使える小遣いのようなお金を手にしたことがなかった。すべて母親がやってくれたからである。

　父親のせっぱ詰まった状況からどこかに残していったという期待は持てなかった。

「どっちにしても、何かあったらすぐにここに来るんだ。いいね」

　ダリオ神父の目がとても優しくて、孝一は胸が熱くなり、頭を下げると外に出た。

Ⅳ

　家に帰ると、善と亨竜が起きていて、ふたりで布にくるまり、寒さに震えていた。

「兄ちゃん、お腹が空いたよ」

　善が言う。

「わかった。兄ちゃんがなんとかしてくるから、もう少し待ってな」

　ふたりはうなずいて、布団をかき合わせた。

　かといって、あてがあるわけではない。

　食物をもらえるところとして、考えられるのは叔父さの家しか思いつかなかった。

　歩いて十分ほどの叔父の家に行った。叔父は出かけていたが、叔母が家にいた。

　父親がどこかに行ってしまって、朝食べ物がないことを、叔母に話した。

　叔母はしばらく考えていたが、心を決めたかのように口を開いた。

「お父さんが帰ってこないと決まったわけではないでしょう。でも、多分このままいなくなるような気がする。あの人はひどい人。うちの人も会社にいるわけにはいかず、仕事を探しに行ったわ。それなのに自分だけいなくなるなんて、いい気なものね」

　孝一も、同じ予感で胸がふさがっていたが、それを口に出せなかっただけである。

「善と亨竜がお腹を空かせて待っているんです。僕はいいけど、ふたりのために……」

「わかったわ、残ったものをあげるから待っていて。でもお父さんがこのまま家出してしまったらどうするの？　うちも仕事がなくなって困るんだけど、お前たちの世話は出来る限り見てあげるからね。お前のお父さんにはどれだけ世話になったか」

　叔母は、それだけ言うと、奥に引っ込んで何か物音を立てていたが、手にご飯と惣菜を皿に盛り持ってきてくれた。

　叔母が持たせてくれた茶碗に三杯分くらいの米飯とキムチ、肉が入った惣菜を皿に盛って家に急ぐ。

　寒い中を歩きながら、孝一は考えた。

――叔母さん言うように、もし父さんがこのまま帰ってこなかったらどうしよう。神父さんはあのように言ってくれたけど、教会に世話になるわけにもいかないし、叔父さんも大変みたいだ。食べる物を買うにしてもお金がかかる。どうしたらいいのか……。

　これまで自分で金を得たことがない、まだ十一歳の孝一には荷の重い思案だった。

　家に帰って、もらってきた食事を善と亨竜とに与えて再び教会に行った。

「神父さん、何か僕に出来るような仕事はないでしょうか。何でもやりますから」

　気が急いでいたので、挨拶抜きで話し出した。イタリア系の神父も、孝一の状態を理解していたのかすぐ答えが返ってきた。

「孝一に出来る、というか孝一にしかできない仕事がある。でも、毎日朝が早いぞ」

「朝は平気です。で、どんな仕事ですか」

「ミサのときの助手役だよ。孝一はミサのときのラテン語、全部覚えていたよな」

「はい、アテウム・キレディピカ……という言葉ですよね、意はわかりませんが」

「そう、その通り。それを毎朝のミサのとき教会にきて、私のあとに唱えてくれればいい。それと聖餐式のパンの型を抜いて焼き、食べられるようにすることだよ」

「わかりました。やらせてください」

「お金をあげてもいいけど、食べる物の方がいいよね。善と亨竜と君の分、三人前だ。食終わってからでも十分、学校に間に合うだろう」

　神父は、目をやわらげて孝一に話しかけた。

「はい、ありがとうございます。全部、お任せします」

　これでとりあえず、朝の食べる物は確保できた。

　人の情けは大切でありがたいが、反面冷たいものであることを孝一は、本能的に察知していたのである。

　夜になっても次の日の朝もその翌日も、父親は戻ってこなかった。

Ⅴ

　孝一の世界は、狭い範囲に限られていた。

　ほとんどが国民学校での生活であり、日曜日に母親と一緒に父の会社がある練武台へ行くくらいのものだった。

　新兵の訓練所があった日曜日には面会に来る家族で面会場所はごった返していた。

　そこを通るとき、必ず孝一の手を握ってくれた母の温もりはもうない。

　その代わり、麻袋が孝一の手にしっかりと握られていた。

　訓練所の先の広い敷地に豆腐製造工場があり、新しい家に隣接して瓦工場があった。

　今日の目的は豆腐工場である。ここの責任者は父親の代から変わっていない。

「おじさん、僕のこと覚えている」

　事務所で孝一は、おそるおそる声をかけた。

「おう、前の社長の息子だな。孝一という名前だったっけ」

「そうです、孝一です。お願いがあるのですが聞いてもらえますか」

「何だい？」

「形が崩れたり作り損なったような豆腐があったら分けてもらえませんか」

「そんな失敗はもうしないか、無理だ。社長はどうしたの？」

　孝一は唇を噛みしめた。

「父ちゃん、どこかに行ってしまった。いつ帰ってくるかわからないんです。その間僕たちは、自分で食べる物を……」

「だったらこのオカラ、いくらでも持っていっていよ。どうせ豚の餌にしかならないんだから。甘辛く煮たら結構、美味いし、腹に溜まる。好きなだけお持ち」

　工場長は、壁に立てかけてあったスコップを、孝一に手渡した。

　オカラはまだ出来たてで、湯気が立ち上っていた。いかにも美味そうで思わずつまんで口に入れてみた。

　まったく未加工のそれは、まったく味がなくただ口の中で唾液を吸収するのみだった。

　麻袋に詰め込んだオカラを持ち、次に行ったのは豆腐工場から少し離れた、山に近いところにある森林伐採業の事務所だった。

　ここは、開店休業のような状態であり、従業員が遊んでいるようなありさまだった。

　ここでは顔見知りの従業員から――みんなで山に薪を拾いに行っているけど連れて行ってやろうか。少しは金になるぜ。と、教えられ、次のときに同行を約束してもらった。

　孝一は、翌日から予定通り教会行ってミサの手伝いをした。

　ミサに使われる食料は、神父が作った手作りで、今になって考えると平べったく伸ばした生地を丸い金型で抜き、焼いたクッキーはキリストの肉として、またワインは血として信に供される。

　形で抜いた残りをまとめて焼くと、これが甘みがあって結構いける。これまでは捨てていたのだが、神父に持ち帰る許しを得た。

父親が出奔してから、国民学校を休むことが多くなった。

　幼い妹と弟の世話をすることよりも、まずは食べ物を調達するのに、苦労させられた。

　薪拾いに連れていってもらう日が来た。当然の如く、学校は休みにする。

　山で小枝を拾い、一体いくらになるのか見当もつかないが、孝一にとって初めて現金を稼ぐ大きな出来事となるのだ。

　薪拾いのグープに合流するため、森林伐採の事務所に行った。

　基礎的な知識がないので、何も準備せず手ぶらで行った。

――最初だからしかたがないが、とりあえず木の枝を束ねるヒモが必要だよ。と、年配のおじさんが、荒縄を用意してくれた。

　総勢十人ほどのグループは、煙草を吸ったり雑談を交わしながら山道を登って行く。

　大人の足についていくために、孝一はときどき小走りになった。

　山に入ると一行はとたんに無言となり、黙々と折れ枝を拾い集める。

　それを見た孝一は、皆のまねをして木の枝を一カ所に集めた。山になった枝を荒縄で縛るが、慣れないせいかうまくいかない。

　ようやく一抱えの枝を束ねた。大人たちは要領よく、背負い子に五段ほどの薪の束を作り、軽々と頭の倍くらいまで担ぎ上げた。

　工場に帰ると、燃料店の牛車が待っており荷台に枯れ枝を満載して立ち去る。

　料金は目分量で支払われるが、長い間の習慣でトラブルは起きない。

　孝一にも皆の五分の一ほどであるが、きちんとお金が支払われた。

　この薪拾いは、週に一度ほど、参加した。

　体力もない子供の孝一である。皆が使っている背負い子のような物は買えないし、縄で束ねるのでは量に限界がある。

　ここで、効率よく薪を持ち帰るための手段を考える必要に迫られた。

　工夫して廃材を利用し、孝一の小な身体に合った道具を作ってからは大人の六割くらいの薪を持ち帰れるようになった。

　こんな体験が、何か事に当たるとき、いかに効率よく処理できるか、を考え、工夫する習慣となったのである。

　週一度の薪拾いで得たお金は、姉弟三人の糊口をしのぐ唯一の現金収入だけど、十分な食料を購入するには全然、足りなかった。

　そして、春の足音が近ずいてくると、燃料の需要はなくなりこの収入も途絶えた。

　お金を稼ぐ難しさ、辛い肉体労働の対価として手にする現金の貴重さを、善や亨竜にも知らしめる効果があった。

Ⅵ

　またそぞろ、朝はトーストを食べ、夕食はオカラとミサのときのパンの型抜きの残りを煮ておかゆのようにして食べる生活に戻った

　当然のように栄養が足りず、三人は痩せさらばえていった。

　善は、ひもじいのに耐えていたが、まだ三歳の亨竜は聞き分けがなかった。

　いつも――お腹が空いた。といって孝一にまとわりつき、泣き叫んでいた。

　孝一は何とかして、善や亨竜に栄養のあるものを食べさせてあげたかった。

　栄養のあるものというと、肉だ。

　ところが一般の家庭でも、牛肉は高級品で、なかなか口に入るものではなかった。

　父親が出奔してから、一度も食べていないし焼き肉の匂いすら嗅いだことがない。

　何とか牛肉を手に入れる方法を考えた。母親の葬儀のとき、涙を流してくれていた牛たちが、引いて行かれた先で殺され、食肉として軍隊に納められることは知っていた。

　子供たちの間で、そこで働く人たちに差別的な感覚を持っていたことを思い出す。

――人が嫌がる職業だ。だったら多分子供でも、働けるのではないだろうか。出入りさえ出来れば、少しでも肉が分けてもらえる。

　と考えた孝一はすぐに行動を起こした。

　屠殺場に行って、工場長に談判したのだ。

「おじさん。僕にここで働かせてもらえませんか。どんなことでもしますから」

「お前が？　国民学校生だろう」

「ですけど、ちゃんと働けます」

「正式にお前を雇うわけにはいかない。軍から叱られてしまうよ」

「正式でなくても、工場の掃除でも後片づけでも、いいのです。お金はいりません」

「給料はいらないのか。ここは何をしているところか知っているんだろうな。牛殺しているんだぞ」

「もちろん知ってます。お金の代わりに肉のくずでも、内臓でもいいですからください」

「学校はどうしてるの」

「父さんが仕事を探しに行って家にいないので、妹と弟の面倒を見なければならないからほとんどの日は休んでいます」

「そうか、それは大変だ。時間があるときにきてごらん。何か仕事を見つけてあげる」

「明日の朝きてもいいですか」

　一刻も早く、肉がほしかった。

「いいよ。ちょっと待ってな」

　場長は事務所を出て行き、五分ほどして戻ってきた。

「前もって用意してなったので、これしかなかった。これがロースの切り落とし、これはタン。ハツもノも少しだけ入っている」

　それをひとまとめにして、新聞紙に包んで持たせてくれたのである。

　その夜はそれらを煮込んで食べた。久しぶりの肉、涙が出そうにおいしかった。

　翌日、屠殺場に行った孝一を待っていたのは、想像もつかない役目だった。

　生きている牛を殺して、解体する作業の手伝いをしろ、というのである。

　気持ちが優しい孝一には、正視できないような光景が目の前に展開した。

　屠殺室に引き込まれる牛は、例外なく涙を流している。しかも大量に。

　牛を撲殺するためのハンマーを持った作業員に訊いてみた。

「牛っていつも涙を流しているの？」

「いや、町で車を引いている牛は、涙を流してないだろう。動物でも自分が殺される運命にあるのが、わかるみたいだ。選ばれてここに引いてこられるときに泣き出すんだよ」

　孝一は母の葬儀のときに出会った牛の群れが、母の死に涙してくれていると思っていたけど、吹き消される自分の命の灯に、涙していたのだった。

　屠殺方法は原始的である。大きなハンマーで牛の脳天を一撃するのである。

　ベテランの作業員の一撃は、一発で牛の命を奪い、苦痛を与えない。急所を一撃された牛は四肢を硬直させて横倒しになる。

　一発で死ねなかった牛は、前足の膝を折るが次の一撃で確実に四肢硬直させるのだ。

　ここまでの作業は孝一の手出しが必要でなかった。きつく目をつぶって断末魔の牛を見ないようにしていた。

　このあと硬直して突っ張った右前脚を抱えて開け、と命じられた。

　いわれた通りに渾身の力抱え開いていたら、作業員は山刀のような刃物で牛の喉を切り開き、噴き出す血をバケツに受けた。

「これは血抜きだ。これをやらないと肉がすぐに腐ってしまう。この血は凄い栄養になるんだ。少し飲んでみるか？」

　こういいながら、バケツから直接、飲んでいる。何とも生臭い臭いが漂った。

　孝一は、言葉が出なかった。ただ、首を横に振って後ずさりするのみだった。

　場長から解体のときに出るくず肉をもらって、家に帰ってきた。

　牛の涙と、喉から吹き出る血が脳裏を占めて、調理した肉がどうしても孝一の喉を通らなかったのである。

　この日だけで、屠殺場通いは終わった。

Ⅶ

　孝一だって国民学校五年生。育ち盛り食べ盛りだ。――ひもじいのは俺だって同じだ。という思いがいつもくすぶっていた。

　五年生として三学期に入った授業のときである。このくらいの学年になると社会のことも理解できるようになっていた。

　恵まれた暮らしをしていた孝一に降りかかった不幸は、全員が知るところだった。

　これまでの反動なのか、級友たちの反応は手のひらを返すように変わった。

　孝一が、無視されるようになったのである。連隊長の子ということで孝一に一目置いていたガキ大将が、鞄を床に投げ捨てた。

　昼休みには、弁当を持って行けない孝一にガキ大将とそのグループが、見せびらかすように食べて見せた。

　孝一は午後の授業を早退し、家に帰った。玄関を入るなり、亨竜が迎えにでてきて開口一番、言った。

「兄ちゃん、お腹空いたよ」

「お前は、それしか言えないのか。いい加減にしろよ、俺だって学校で……」

　学校での屈辱が忘れられない孝一は、鞄を玄関に置くと表に出た。

　亨竜も必死だった。外に出た孝一を追って、裸足のまま追いかけてきた。

「お腹が空いた……」

　少し遠慮がちにズボンを掴む。

「うるさい！」

　虫のいどころが悪かった孝一は、弟を塀の上に乗せた。さほど高い場所ではなかったが、亨竜は塀から落ちてよろけ、煉瓦の門柱に激突した。

　鈍い音がし、そのまま弟は仰向けに倒れた。左の顔面から血が噴き出した。

　痛みからか、驚きなのか口を大きく開けているが、呼吸を忘れたように声が出ない。

　孝一は亨竜の身体を抱き起こした。自分のシャツの袖で、血が噴き出している弟の左側頭部を押さえて大きな声で妹を呼んだ。

「善、タオルを持ってこい。早く！」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

　妹が玄関から顔を覗かせた。

「何でもいいから、早く。タオルだ！」

　このときになって、亨竜がようやく大きな声を挙げて泣き出した。

　善が、洗面所にかけてあったと思われるタオルを持って走ってきた。

「お兄ちゃん、竜、大丈夫？」

　善が心配そうに言う。

「いいから、もっとタオルを持ってこい」

　顔を押さえたタオルは、見るみる赤く染まっていった。

「竜、ご免。こんなことになってしまうと思わなかった」

　ぐったりして蒼い顔を見せている弟を、強く抱きしめた。

「兄ちゃん、痛いよう」

　亨竜が腕を突っついた。どうやら強く抱きしめすぎたらしい。孝一は少し安堵した。

　弟を抱いて、家に入る。彼の身体は信じられないほど軽く、孝一の胸が痛んだ。

　医者か誰か大人を……と思ったが、医者に払うお金はないし、いろいろ説明するのも面倒だと判断、何とか血を止めることに全力を尽くそう、と孝一は決心した。

　血染めのタオルは増えて行く。一般の家庭にタオルなどない時代だったが、米軍と同じ日用品が支給された軍上層部の特権が、こんなときに生きたのだ

　夕方まで傷口を押さえ続けたことが功を奏したのか、出血はとまり亨竜は眠ってしまった。安心したとたん、空腹がよみがえった。

　眠っている亨竜を妹にゆだね、孝一は教会に向かった。

　神父の家のドアを叩く。

「ヒョウル、どうしたの？　その血は」

　神父は、孝一の着衣についた血を見て、訊いてきた。

「弟が鼻血を出してしまって。竜の面倒を見てたら、晩ご飯が作れなくなってしまったんです。今日だけご飯を分けてください」

「鼻血か。それならよかった。夕飯だったら大丈夫だよ。丁度今日、山にキジ撃ちにいって三羽も仕留めたんだ。今、それを焼いているところ。うちはあと作ればいいから持っておいき。ご飯も炊けている」

　神父は快く、夕食を分けてくれた。

　まだ温かい米飯と、とてもいい匂いがするキジの肉。この数カ月間、口に入ったことがない美味である。

　これで亨竜も、傷を負った機嫌を直してくれるだろう。

　三人は、久しぶりの料理らしい夕食を満喫し、すっかり満ち足りた気分で就寝した。

　少し口元が緩んだような、亨竜の寝顔を見ると、傷口は赤黒く盛り上がってかさぶたになりつつあった。傷は残るだろうが、大事に至らなかったことを神に感謝した。

　夜中に亨竜が一度だけ泣いたが、朝までぐっすり眠ったようだった。

　朝、恒例となっているミサの手伝いに行き、夕べのキジ肉のお礼を神父に述べ、トーストをもって帰った。

「ヒョウイル、食事が必要なときは遠慮無くいつでも言ってきなさい。こんなことで君に礼が出来るのならおやすいご用だ。本当に助かっているんだよ」

　神父は食事の包みを手渡しながら言った。

Ⅷ

　父からはまったく連絡ない。

　叔父の韓秀益も、新しい仕事に就いたようで、一家は移転していった。

　引っ越しのときに訪ねてきて移転先などを話してくれたが、叔父がいなくなるということでパニックになり、何も覚えていない。

　幼い三人は、これでまったく、天涯孤独の身になったのである。

　父が出奔したときは厳しい寒さの盛りだったが、厳しい現実に立ち向かっているこの三人にも平等に、僅かながら日中は少しばかり暖かくなる気配を感じさせてくれる二月中旬になって、晴れやかな気分になる頃だった。

いつもよりすこし早く目がさめた。とても懐かしい匂いが、孝一の鼻腔を満たしたのである。

　それは父親の、煙草の匂いだった。

　半身を起こしてみると、隣に寝床が敷かれていて、そこにはまごうことなく父、虎範のやつれてはいるが精悍な貌があった。

　少伸びた無精髭。最後に見たときにはきちんと刈り上げられていた頭髪も伸びて、首筋までなっていた。

　軽く眉をしかめて、何かを耐えているような表情が孝一の胸を打った。

　一瞬、このまま起こさない方が父親のためではないか、とも考えたが、そんな気持ちよりも万感の思いが優勢して、孝一に行動を起こさせた。

「父さん！」

　孝一の呼びかけを、予期していたかのように父親の目が開き、頼もしい両腕が孝一の顔をはさみとった。

「孝一！」

　煙草の匂いと共に、ザラザラした無精髭が頬にこすりつけられた。

「父さん！　本当に父さんだよね」

　孝一は、父親の胸に飛び込んでいった。

「孝一、苦労かけたな。父さんが悪かった」

　父親も、そのままの態勢で孝一を、息が詰まるほど抱きしめた。

　しばらく、そのまま抱き合って涙にくれていたが、孝一が自発的に身体をはなした。

「父さん、僕、父さんに謝らなければなりません。亨竜の頭に傷を付けてしまいました」

　父親の前に、手をついて頭を下げた。

「うん、帰ってきてすぐに気がついた。竜でよかったよ。善だったら大変だった」

　父親の眼差しが優しく、孝一の胸に何とも言えない安らぎを与えてくれた。

「父さん、ちょっと教会に行ってくるので待っててね。どこも行っちゃだめだよ」

「教会？　礼拝に行くか」

「いや、ミサの手伝い。神父さんにはとてもお世話になっています。今日はすぐに帰ってきますから、絶対に待っててください」

「そうか……心配するな。もうどこにも行かない、待ってるよ」

　孝一は素早く着替えると、教会に走った。

　父親が帰ってきたことを伝え、今朝のミサは手早くすませて家に飛んで帰った。

　教会を出るとき、神父が――父さんが帰ってきたのなら、これまでのように頼めないかも知れない。孝一のあとがまの子供を探す必要があるな。心当たりはある、呼んでおくから午後にきてくれ。と、いわれた。

　家では父親に、善と亨竜がかわるがわるまとわりついてた。

　テーブルには山型の食パンが一本置かれていて、卵の目玉焼きが、湯気を立てている。

　早くも食パンにかぶりついている亨竜は、孝一を見上げて無邪気に笑った。

　久しぶり、本当に久しぶりの温かい朝食のテーブルだった。一本（三斤）の食パンがあらかたなくなってしまった。

　食事が終わって、テーブの上がきれいになったとき、父親がたばこを吸いながら話し出した。

「孝一、善、亨竜。これまで苦労かけて済まなかった。よく頑張ってくれたね。孝一、まだ幼い妹と弟の世話を見てくれて、本当にありがとう。その苦労も今日までだ」

　父親は、ここで一息ついた。三人の視線が集中する。吸っていた煙草を、灰皿でもみ消し、もう一本袋から取り出したが思い直したように戻した。

「そうかといって、もう一度、みんなでこの家で暮らすわけにはいかない。明日から違う家族がここに住むんだ」

「父さん、せっかく父さんが帰ってきたのに、どうして住んじゃいけないの？」

　孝一が、疑問ぶつけた。

「お前たちに説明しても、わからない。孝一は覚えているだろう、父さんの下にいて全谷の部隊長になった李達洙少佐のことを。ここを出て彼が住んでいる全谷にいくんだよ」

　李達洙少佐は、新兵訓練所時代父親の副官を務めており、孝一と同級生の玉城という女の子がいて、家族ぐるみの交際だった。

「えっ、玉城の家に行くの？　また、玉城と同じ学校に行けるんだ」

　孝一は、李達洙少佐の一家が全谷に転属するとき、玉城と別れるのが嫌で大泣きしたことなど、すっかり忘れていた。

「玉城と同じ学校に行けるかどうかわからない。彼のことだからきっと置いてもらえるだろう。どっちにしても、ここはすぐに立ち退かなければならないんだ」

　よく聞いていると、少しばかり辻褄が合わないところがある父親の言葉だったが、玉城に会えるということで、有頂天になっていた孝一は、つい聞き逃したのである。

「父さん、列車に乗るのですか？」

「うん、ソウルに寄ってから全谷に行く」

「列車の時間は？」

「決めてない。でも三時には発ちたいな」

「じゃ、神父さんに挨拶させてください。とてもお世話になったし、教会に行って次の子と引き継ぎをしなければ」

「いいよ。父さんも一緒にいこうか」

「いや、僕ひとりで行きます。父さんは善と亨竜と遊んでいてください」

　走って教会へ行き、神父に今、父親に同行して全谷にいくことを告げた。

「そうか、私としては残念だが、いたしかたないな。今度孝一の代わりをやってくれる金兄弟に話してある。今、呼ぶからきちんと教えてやってくれ」

　すぐに来た兄弟は、学校で見た顔だった。　聖餐式のパン、クッキーを焼くところまでは順調にいった。

　セレモニーの順序も、教える。新しい水とか葡萄酒を用意し、神父用のクッキーを供える。祭壇のローソクを点け、聖水を教会に入り口に用意し指をつけて洗えるようにする。これらは神父の指示があれば何とかなる目処が立った。

　問題はラテン語である。孝一も意味はわからなかったが、その語りだけは完全に丸暗記していた。神父の祝詞に続いて完璧にリフレインできたのであるが、この兄弟はラテン語に関してはまるで駄目だった。

「神父さん、今まで本当にお世話になりました。このご恩は絶対に忘れません」

　孝一はひと通りの引き継ぎを終えて、神父の前で頭を下げた。

「礼を言うのは私だよ。孝一は本来、ふたりでやる役目をひとりでやってのけたんだ。どんなに心強かったか」

　神父は歩み寄ると、孝一の肩を優しく抱きしめてくれた。

「神父さん……」

　孝一も、神父の腰に手を回し頬を寄せた。

「ヒョウイル、とても淋しいけど、父さんの言うことをよく聞いて幸せになるんだよ。もうここに戻ってきちゃ駄目だ」

　父親とは違う、煙草の匂いがした。

　家に戻って父親の前に立つ。

「父さん。ちゃんとお礼を言ってきたよ。では行きましょうか」

まだ新しい箪笥や家具などはそのまま残して、身の回りのものだけトランクや風呂敷につめて手に持った。

　何故か、父親は半年前、この家が完成したときに作った布団一式を担ぎ、孝一にも持つように命じた。　このときである。孝一は、五ヶ月前に父親が出奔して以降、かって呼んでいた『父ちゃん』から『父さん』と呼称が変わったことにここで初めて気がついたのだった。

**第三章・地中の銃弾（全谷）**

Ⅰ

　これまで、移動はほとんど自動車を利用していた孝一は、列車に乗るのは数少ない経験だった。湖南線で論山からソウルまで、六時間ほどの旅である。

　列車の中も和気あいあいと旅を楽しむ人々が多く、戦時中のような緊迫感はない。

　まして、客車の屋根に乗ったり、機関車のタンクにつかまって移動したことなど、想像もつかないのが今の姿だった。

　さすがに、孝一は少しばかり前途に不安を感じていたので、複雑な心境だったが、善と亨竜は単純に列車の旅にはしゃいでいた。

　父親も、列車の振動に身をゆだねながら走り去る風景を眺め、物思いにふけっている様子だった。

　列車は、ソウル駅に着いた。

　大勢の乗客に続いて、ソウル市街に出る。孝一は、ソウル市内で生まれたと聞いているが、物心がついたときは論山に住んでいてまったくといっていいほど、記憶にない。

　朝鮮戦争が休戦を迎えてから六年、韓国にも復興の槌音が逞しく鳴り響いていた。

　ソウルの街は、活気に溢れていた。なにしろ、人が多い。しかし、街並は復興しつつあるとはいえ、まだ戦火の影響は明らかに残っていた。　民家はほとんどが木造で、廃材などを使っているため、即製の感は拭えなかった。

　ここで特筆しなければならないのは、道路行政に対する国策である。

　道路が計画されて線が引かれると、有無を言わせず、そのラインに従って工事が行われる。もし住んでいる人がいたとしても、お構いなし、その意味では行政は楽だ。

　戦争で焼き払われた街は、道路の計画なども白紙から設計できた。

　ソウル市内の道路は、街並みにそぐわないほど広く、幹線道路は片側五車線で計画が立ち、着工されていた。ソウルの中心部を、東西に流れる清渓川は将来に備えて暗渠にする計画で、その工事が勢いよく行われていた。

　ソウル駅前から路面電車が縦横に走っており、市民の便利な足となっていた。

　経済支援のために、世界各国から贈られてくる路面電車は、種々雑多な形をしており市民の目を楽しませた。

　孝一たちの一行は荷物を抱え、路面電車で鐘路に来た。

　父親の虎範は皆を鐘路四街にある古い宿屋に案内した。

　父親が、ここをときどき利用していることは、従業員の態度からうかがえた。

　着いた日は、近くの中華料理店で夕食をとった。標準的な中華料理だったが、三人にはとてもおいしく、大満足だった。

　翌日朝から父親は、仕事を探してくるといって外出した。

　いくばくかの小遣いが渡されたが、買い食いの経験がない孝一は、屋台のような店でも買うのが怖かった。

　おそるおそる、店先で売っている蒸し饅頭を買って、三人で分けて食べたが、これまでに経験したことがない、美味だった。

　結局、夕食までこれしか食べずに三人で手をつないで、街を歩いていた。

　論山も賑やかな街と思っていたが、ここソウルの中心部と比較すること自体、無理だ。

　特に鐘路というところはソウルでも一、二を争う繁華街である。目がいくところすべてが珍しい発見ばかりだった。

　孝一の好奇心は、この周辺をくまなく探検することに向けられた。

　とりあえず最初は三時間位かけて西へ歩き、南大門からソウル駅まで来た。

　戻ってきて、東に歩いた。鐘路は東にゆくにつれ、鐘路一街、二街、三街と増えて行き六街を過ぎての突き当たりに東大門がある。

　孝一は、この街に何か惹かれるものを感じた。空腹を訴え、ぐずる亨竜をなだめなからこの路を二往復した。

　この経験があとあと、大変に意義深いものとなることなど、孝一には知る由もなかったのである。

Ⅱ

　ソウルの鐘路で二泊した四人は、京元線の列車に乗って全谷に向かった。

　夕食は街で買ってきたのり巻きで済ませた。

　二時間ほどの旅を終え、全谷駅に着いたときには夕闇が迫っていた。

　全谷は寒さが厳しい。孝一は当然、全谷の駅に李達洙と家族が迎えに来ているものと思っていたが、駅には誰も来ていなかった。

　二年ぶりに、玉城と会えるのを楽しみにしていたのに、それが裏切られたのである。

「父さん、李少佐の家族は来ないの？」

　孝一が訊いた。

「李副長は中佐になった。多分忙しいのだろう。家はわかっているから行ってみよう」

　父親は、肩の荷をゆすり上げて歩き出した。

　街の中を過ぎて、少し歩いたところの前方に、煉瓦の塀に囲まれた大きな邸が見えた。

「あれが李副長の家だ。お前たちはここで待っていてくれ。すぐに戻ってくるから」

　父親は門の外で三人を待たせると、門扉を開いて中に入っていった。

　すぐに戻ってくるといった割に、時間がかかっている。辛抱強い善はともかく、寒さに亨竜がぐずりだした頃、父親が身体の大きい李中佐と連れだって歩いてきた。

　中佐は大股に歩み寄ると、よく響く野太い声で全員に語りかけた。

「おう孝一、元気そうだな。善も大きくなったね。君は竜ちゃんか……みんなよくきた。さ、中に入ってくれ」

　一人ひとりの頭をなで、腕を拡げて皆を包みこむように、中に誘った。

　玄関を入っても、一番会いたいと思っている玉城は出てこない。

　それより、中佐の妻、美姫おばさんも出てこないのだ。死んだ母、順愛とは姉妹のように親しかったというのに……

　中佐は全員を奥の部屋に案内すると、床にアグラをかいて座った。

「連隊長、自分の家のつもりで、気兼ねなくお過ごしください。孝一も、善も竜もだよ」

　全員を見回して話しかける眼が優しい。

「李中佐。連絡もなしでいきなり来てしまったのに、快く迎えてくれて感謝している。本当に済まなかった」

「何をおっしゃいます。連隊長に可愛がってもらったおかげで、今の私があるのです。こんなことで少しでも恩返しが出来れば」

　父親は、前もって連絡しないでいきなり来てしまったらしい。突然なので、心の準備ができないため、おばさんも玉城も出てこないのだろうと孝一は考えた。

　善も亨竜も、二日間ソウルの街を沢山歩いたので疲れたのだろう、眠ってしまった。

　孝一も少し疲れて、あくびが出た。めざとくそれを見た中佐がいう。

「孝一も疲れただろう、早くおやすみ……」

　持ってきた布団を敷き、妹と弟、三人で抱き合うように夢の国へと入っていった。

　朝になった。この二ヶ月間、教会に行ってミサを手伝っていた習慣から、五時に目が覚めた孝一は、どこからか聞こえてくる声に耳をそばだてた。よく聞こえないけど、男の声の会話だった。

　孝一は、寝床から出て声のする灯りが漏れている部屋に近づいた。

「連隊長、お気持ちはわかりますが、お疲れの様子が見えます。少し休養されてからでもいいのでは……」

「そんな悠長なことはいってられない。私には三人の子供たちを一人前にする責任があるんだ。一日でも早く新事業を立ち上げて」

　父親、虎範の声が答えた。

「よくわかります。でも、彼らは二ヶ月間自分たちで生きてきたのでしょう。少しの間連隊長の温もりが必要ではないでしょうか」

「下のふたりはともかく、孝一はしっかりしている。これまで何不自由なく育ててきたので心配していたけど、あいつは大丈夫だ。俺は驚いたよ。それだけに何とかしてやりたいんだ。血なんてものは……」

「それは美姫から聞いてます。それだけに孝一が不憫で……連隊長の決意はわかりますけど、せめて二、三日くらいは。孝一の転校手続きだって、連隊長直々やられた方が安心できるでしょう」

「孝一の転校手続きは必要ない。すぐに迎えに来る。ひと月もかからないよ。ソウルでいい話があったんだ。やり直すきっかけになるような……これは絶対に逃がしたくない」

「今晩の夕餉だけでも。美姫が娘と一緒に歓迎会を計画してます。せめて……」

「済まない、一刻も早くその話を具体化させたいんだ。好意は素直に受け取る。でも、俺のわがままを聞いてくれ」

　父親の悲痛な声に我慢できなくなって、孝一は居間に入っていった。

　居間には父親と中佐、美姫おばさんも同席していた。

「孝一、起きていたのか……」

　父親は驚いた様子だった。

「父さん、もう仕事に行ってしまうの。せっかく迎えに来てくれたのに……」

「悪いな、お前たちと一緒にいると、父さんの決意が鈍ってしまう。だから寝ているうちにと思ったんだけど、孝一が起きてくるとは想像もしなかった」

　孝一は、父親の顔を見た。父の細い眼が強い光をたたえて、孝一の眼をまっすぐに見すえていた。

Ⅲ

　すでに五年生の三学期は始まっている。国民学校への通学は義務教育として、国民のだれもが辿る道であるが、一ヶ月も経たないうちに迎えに来るという、父親の言葉を信じた孝一は、李中佐夫妻の勧めも断って学校には行かなかった。

　まだ、戦争の後遺症が残っていて、自分のことで精一杯という時代だったのである。

　善と亨竜の面倒を見ることが、父親との約束であり、居候の身としてはあまり世話をかけたくない思いもあって、おばさんの手伝いが出来る善を家に残し、亨竜といつも野山を駆け回っていた。

　全谷というところは、韓国でも北に位置しており、平野部の論山とは異なって山岳地帯で、切り立った崖が目立つ。

　ソウルの漢江に流れ込む支流の漢灘江は渓谷の様相を呈していて、北に十数キロゆくと休戦ラインがあるいわば前線である。

　といっても凍結した道をやみくもに歩いても意味がない。このあたりの冬の遊びはソリ遊びだった。

　孝一が作り、亨竜が引いて遊んでいた舟型をした鉄製の玩具、拾った何かの部品が再利用され、ソリとして威力を発揮した。滑走面の刃の部分をヤスリで磨くと、素晴らしい滑りを見せたのである。

　ソリ遊びに適した天然のリンクは、漢灘江である。零下二〇度を超えるこのあたりは流れの速い川の水をものともせず、水面を完全に凍結させる。

　積もった雪が解けたり、風で吹き飛ばされると、そこには信じられないほど透明な氷が出現する。

　氷のガラス窓から、川の中を眺めると、魚が泳いでいるのが見えるのだ。

　孝一と亨竜は、久しぶりに大きな声を立てて笑い、氷の上でこけつまろびつ、駆け回って遊んだ。

　これで、極寒期の運動不足解消が出来た。

　夜は暖房の効いた室内で、五年生の教科書をめくり勉強する毎日である。

　このあたりでも激戦が交わされ、住民の多くが犠牲になった。

　その孤児たちを収容する孤児院がある。清陽で孝一が収容されたようなものと違って行動に制限はなく、自由に出歩いていた。

　学校に行く代わりに、亨竜を連れて出歩いていた孝一は、とりあえず二人分の昼食を手配しなければならなかった。

　かといって食べ物を買うお金はないし、どこかに落ちているわけではない。

　すぐに孝一は、孤児たちのリーダー的存在になって、空腹を抑えるために、畑の野菜や森の果物をあさるようになった。

　畑の大根は貴重な食料で、地面に露出している青い首の部分は、甘くて美味だった。

　畑の持ち主も、手をこまねいていたわけではない。パトロールを強化して大根泥棒を捕まえた。

　孝一や孤児たちは、青い部分だけを食べた大根を目の前に置かれて追求されてもしらを切ったが、大根が消化を助けるのかほぼ同時に全員、ゲップが出てバレてしまった。

　漢灘江に架かる橋のところに行ったときである。この橋は古い木造の橋で、人間や牛車は渡ることが出来るが、前線を守る戦車は渡ることができず橋の下の川を渡河していた。

　地響きをたてて爆進してきた戦車は委細構わず河でも土手でも渡ってしまう。

　孝一は、すっかりこの戦車のエネルギーに魅了されてしまった。

　橋を渡って休戦ライン側にゆくと、米軍戦車隊のキャンプがあった。

　そこに行けば、いつでも戦車を見ることが出来た。皆が学校に行く時間に家を出て、まっすぐこの戦車隊キャンプにくる兄弟は兵士の目にとまる。

　最初は、有刺鉄線ごしにチョコレートを差し出された。孝一が思わず尻込みすると、更に手招きが加わった。

　顔を見ると、青い眼は微笑んでいる。

　おそるおそる、チョコレートを受け取ってもう一度顔を見ると、大きく破顔した。そして人差し指を立てると、小さな紙袋を鉄条網の間から差し出す。腕まくりをした太い腕に金茶色の毛が密生しているのが見えた。

　急に怖くなって、紙袋を受け取ると走って逃げた。後方で大きな笑い声が聞こえた。

　川岸に座り、ハングルで乾パンと書かれた袋の口を開ける。そこには濃茶色したビスケットのようなものが入っていた。二カ所穴が空いたそれを食べてみると、甘さはないが歯ごたえがあって、噛んでいるうちに甘みが出てくる不思議な食べ物であった。

　翌日は昼ごろ、同じ場所に行った。昨日の兵隊が現れて、手招きをする。横に寄っていくと、顎で前方を指し、歩き出した。少し行って立ち止まり、孝一たちを待つ。追いつくとまた、歩き出す。何回かそれをくりかえしていると、四角い小屋があるところにきた。

　そこには、肌の色が黒い兵隊がヘルメットをかぶり、銃を背に立っている。　青い目の兵隊が、黒人の兵隊に話しかけた。

「ヘイ・ボーイ、カム・イン」

　黒人兵は目をまん丸にして、大きなジェスチュアーで中に招き入れてくれた。言葉は分からないが、意味は充分に通じる。

　孝一は青い目の兵隊を見た。彼は目をそよがせてうなずき、奥の方に歩き出した。

　うしろについていくと、戦車の間にある空き地に、簡単なテーブルが何カ所か置かれた場所に来た。野戦式の食堂らしい。端にはアルミの大きな鍋があり、盛大な湯気といい匂いを撒き散らしている。

　青い目の兵士が、テーブルの板をたたいて折り畳みの椅子を指さした。

　兄弟が、そこに座って待っていると、青い目の兵隊が金属製のお皿を三枚、器用に持って歩いてきた。皿をそれぞれの前に置く。

「マイ・ネーム・イズ・ジョージ」

　青い目が、胸を指さして言う。

　自己紹介だ。正確に理解できないが、意味は何となくわかった。

「ヒョウイル」

　孝一は自分の顔を指さして答えた。

　この日のメニューは、ビーフシチュー、チリビーンズ、そしてバターライスだった。今になればランチプレートだとわかるが、それぞれの料理が混ざらないように仕切られているアルミのこの皿は新鮮だった。

　ジョージは、何かを伝達するときには必ず身振りと言葉で話しかけてくれた。

　現在、英語は話すことも、ヒアリングも得意だけど、そのベースはこの戦車隊、とくにジョージによって培われたものである。

　兄弟は、一日おきくらいにランチをご馳走になり、戦車隊の兵隊と遊んだ。

Ⅳ

　ある日、ゲートに現れた孝一に、顔見知りの黒人兵が寄ってきて言った。

「ジョージ・ゴーバック・ステーツ」

　白い丸い目が真剣だった。孝一は、ジョージが帰国したことを本能的に理解した。

　きびすを返して戻ろうとすると、黒人兵の声がかかった。

「カム・イン・ユーキャンテイク・ランチ」

　孝一は頭を振って意志を表すと、深々と礼をした。黒人兵は手を拡げ、肩をすくめた。

　楽しかった戦車隊での日々は、終りをつげて厳しい現実が直面してきた。

　一ヶ月くらいで迎えに来る、といった父親は二ヶ月経っても音信がなく、迎えに来なかった。

　子供にでも出来て、お金を稼げる仕事となると、そんなに種類はない。

　これまでに経験しているのが、山に行って薪を拾ってくることだった。しかし、これとて春に向かっている現在では、需要は望めないだろう。

　孝一は、ジョージにもらった戦車のどこかの部品なのだろう、舟型をした鉄の箱に紐をつけ亨竜に引かせていた。亨竜の唯一の玩具である。機嫌のいいときはこれで遊んでいたが、少しぐずりだすと始末が悪かった。

　孝一を一番困らせたのは、牛の母子を見ていったセリフである。

　少し暖かくなった日差しの下、漢灘江の河岸に草を食べに来る牛の中に、母牛にまとわりつく仔牛の姿があった。

　ゆったりと草をは食む母牛の顔に仔牛は自分の顔をこすりつけ、うるさがる母親の鼻で突かれて尻餅をつく。すぐに起き上がってまた突かれてよろける。そのうちに張り切った乳房を探し当て、吸い付く。

　母牛は仔牛が乳を飲み出すと、落ち着くのかゆったりと草を食べだすのだ。

「兄ちゃん、牛だって母ちゃんがいるのにどうして僕にはいないの？」

　この言葉は孝一に一番こたえるものだった。

「竜、兄ちゃんにそれを言わないでくれ。俺だって母ちゃんが恋しいんだから」

「いやだ、母ちゃんを捜してきて！」

「そんな無理を言うと、兄ちゃん怒るぞ。母ちゃんは死んじゃったんだから」

「竜は知らない。どうして母ちゃんは……」

「うるさい！　いいかげんにしろ！」

　孝一は思わず、亨竜の頭を殴ってしまった。

　亨竜は火がついたように泣き出した。

「ご免、竜。兄ちゃんだって母ちゃんに会いたいんだ。でもどうしても……」

　亨竜をかき抱くと謝った。そして弟の泣き声につられるように声を挙げ、孝一も泣き出した。ふたりの大泣きの声はその場にそぐわない青空に吸い込まれていった。

　まず稼げる金額より、亨竜と自分の昼食の確保が先決問題だった。

　とりあえず、仕事になりそうなところが見つかると入っていき、頼んでみた。

　どこでも、国民学校生の孝一を雇ってくれるところはなかった。まして、まだ小さい亨竜がいつも一緒というのも不利な条件だった。

　山を歩いているとき、腰が曲がった老人が両手に壺を持って運んでいるのにであった。

「おじいさん、持ってあげるよ。どこまで運べばいいの？」

　孝一は、壺を受け取ろうとして聞いた。

「ありがとうよ。これはわしが持っていくから、窯に残っているのを手伝っておくれ。これを置いたらすぐ来るからよ」

「いいですよ。それよりおじいさん、僕を雇ってくれませんか。一生懸命働きますから」

　老人は驚いたように、壺を置き、首にまいた手ぬぐいで汗を拭くと、孝一の頭から足の爪先までを見た。

「働いてもらうのはいいけど、そんなに給金は払えないよ。うちは貧乏なんだから」

「給金は少しでいいです。それよりも、僕と弟の昼ご飯を食べさせてくれたら、それでいいんです。お金はその残りで……」

「そうかい。食べるものだってそんなに贅沢はしてないよ。昼食だけでいいんだね」

「はい、もし僕の仕事が役に立つたら、そのときは、少し給金をください」

「それはおまえさん次第だよ。うちはキムチを漬ける壺を焼いてるんだ。結構、注文はあるんだけど、ばあちゃんは北の連中に殺されて息子は軍隊で戦死したんだよ」

　おじいちゃんは、遠くを見るような涙ぐんだ目で、孝一を見た。

「おじいちゃん、明日から来るから壺の作り方を教えて。僕、ちゃんと覚えるから」

「頼りにしてるよ。その代わり、昼飯は腹いっぱい食えるよう作っておくからな」

　こうして孝一の焼き物作りの修行が始まったのである。

Ⅴ

　まず、窯の仕組みを見せてもらった。山の斜面に沿って十個ほどの窯がある。この中に成形した壺を納め、下から火を入れて二日ほど焼くと、素焼きの壺が完成する。

　作業の出発点は土捏ねである。素足で一日中こねる作業は、力と集中力が必要で、国民学校生の孝一にかなりの重労働だった。

　しかし、孝一が捏ねた土で、立派な壺や皿が焼き上がるのを見るのは無上の喜びだった。

　おじいさんが脚踏み式のロクロで、壺を成形していくのを見て、何となく自分も出来るように思えてきた。

「おじいちゃん、僕にロクロの使い方を教えて。僕にも出来るでしょう？」

「やってみるかい？　じゃ、こっちにきて」

　おじいさんは、ロクロの使い方から教えてくれた。見ていたら簡単そうに見えた作業だが、実際には大変難しい仕事だった。

　ほとんど形になったところで失敗し、元の粘土に戻ってしまう。

　こんな繰り返しの末、半月も経つとほとんど失敗しなくなった。

　ようやく仕事にも慣れて自分の思うような壺が焼け、釉薬を塗った美しい皿までもが焼けるようになったある日、窯の火を調節して次の製品の成形も済ませたが、昼になってもおじいさんが、登り窯に出てこない。

　このごろは焼き物をすっかり孝一にまかせて、素朴ではあるがおいしい昼食を作ってくれていたのだが、疑問に思った孝一は、亨竜の手を引くと、道路を隔てたおじいさんの家に駆けだした。

　入り口に近づくにつれ、妙な胸騒ぎがしてきた。同じような経験は母親の亡くなった日に感じたものだった。

　履き物を脱ぐのももどかしく、家の中に飛び込んだ。

「おじいちゃん、どこにいるの」

　家の中を走り回る。引き戸を開けたら布団が敷かれ、人の形に盛り上がっていた。

「おじいちゃん、どうしたの？　大丈夫？」

　掛け布団をはぐると、おじいさんの顔が現れた。孝一が見ても生気が感じられなかった。

　そうっと額に触れてみた。ほぼ一年前、母親の額の冷たさと同じ感覚が戻った。

「わあーっ！」

　孝一は泣き声を挙げながら、一番近くの家に走った。

　全く身寄りのないおじいさんの葬儀は寂しいものだった。壺を納めていた雑貨店の主人が、葬儀を取り仕切ってくれた。

　近所の人たちだけの見送りを受けて、全谷の共同墓地に埋葬され、式は終わった。

　雑貨店の主人が、このまま仕事を続けるように勧めてくれたが、国民学校生では、大人を相手に商売していくことは無理だった。

　火が入ることのない窯を前に思い出にふけっていると、目の前を薪の束を背負った一群の集団が歩いてきた。

「あっ！　今は冬か。薪拾いなら論山でもやったことがある」

　孝一は集列の前に飛び出し、リーダーらしき男に話しかけた。

「おじさん。僕にも薪拾いをやらせてください。昨年の冬、論山でやっていました」

「お前、国民学校生だろう。見た目は楽そうだけど大変だぜ。辛抱できるか？」

「大丈夫です。去年よりも力がついたし、いろんな仕事をしてきたから……ただ、どこに行って枯れ枝を拾うのか。どこに売るのかが分かりません。おじさんたちについて行くので教えてください。お願いします」

　リーダーに孝一の一途な気持ちが伝わったのか、同行を許してくれた。

　さっそく去年末に孝一が考えた自分用の背負い子を廃材で作った。大人たちは、たばねた薪の束を五段に積み上げ、自分の背丈の倍くらいを運んだ。　孝一も、大人との量とは差があるけど、自分の背丈の倍くらいを常時運んでいた。

　風が強いある日、最後尾を薪を背負って歩いていた孝一が、突風にあおられ転倒した。

　俯せになって倒れた孝一は、頭を打って気を失ってしまった。

　あとで聞いたところによると、同行した大人たちは、自分たちが背負っている荷のために最後尾の孝一が転倒して、起き上がってこないのに誰もが気づかなかったという。

　町についてから気がついた時は暗くなっており、探しにいくことは不可能であった。朝まで待って探しに行こうと思っていたという。

　孝一が意識を取り戻したのは、真夜中だったようだ。

　当然、腕時計などを持っておらず、気がついて仰向けになって空を眺めると、信じられないような美しい星がまたたいており、それ以外の灯りはまったくなかった。

　まだ、山に入って三度目であり、この辺の地理に通じているわけではない。

　こんなとき、やみくもに歩き回るのは危険なことだと、本能的に知っていた。

　気絶から覚めても、不安な思いには変わりがない。夜空を眺めて横になっていると、母の死から始まってこの一年間に起こった様々の出来事が脳裏をよぎっていった。

　ようやく朝が白んできた。冬が終わりかけていて、もうすぐ春。さほど寒くなかったことが、孝一に幸いした。

Ⅵ

　周囲の状況が、肉眼でも認識できるようになってきた。少し霞んではいるが、林の中の道もはっきり視界に入っている。

　孝一は、薪を背負い直して歩き出した。本能的に下りを選ぶ。朝日が左手にあるので南に向かっていることに間違いはない。ということは全谷の街に出るはずだ。

　ひと晩、不自然な格好で横になっていたので、身体が痛く、背負った薪が重く感じられたが、一刻も早く知っている場所に出る必要が感じられた。

　自然に歩みが早くなる。

　松の木の根元に、朝日を受けて黄金色に光る物を見つけた。近寄ってみると松ヤニの塊だった。

　松ヤニは焚き付けのとき、重宝するので高い値で売れることは知っていた。

　松の幹から滲みでたヤニが、固まって地面に落ちたらしい。周辺を見ると敷きつめられた枯松葉の間に少しだけ黄金色が覗いているのが、何か所か見えた。木の枝を刈る鎌でそこを掘った。

　鎌の刃に金属音が響いた。

――こんな人里離れた山の中に金属が？

　孝一は、鎌の刃を痛めないようにその周囲を手で掘り返した。

　姿を現したのは、黒い鉄の箱だった。

　長さ二〇センチ、奥行き五センチ、厚みが一センチ五ミリほどの長方形をしており、一方の上からは明らかに鉄砲の弾とわかるものが見えている。

　孝一は同じようなものを、ジョージに案内された戦車隊の兵隊が持っているのを見たことを思い出した。

　自動小銃のマガジンである。急いで周辺を掘った。同じものが続々と発掘される。

　全部未使用のものだ。このあたりは朝鮮戦争のとき、相当の激戦地だったと聞く。

　攻勢に移っている方のなら弾薬を置いていくわけがない。すべて地中に三センチほどであるが埋めてあるところを見ると、押しまくられて退却していく韓国軍のものである可能性は高い、と孝一は思った。

　三つだけ残して残りは埋め戻す。

　その三個をポケットに入れ、ふたたび街に向かって歩き出した。

　全谷の街に着き、薪を集荷し買い取ってくれる店に顔を出した。店の責任者が孝一の姿を見て全速力で走ってきた。

「おい、坊主。無事だったんだな。皆で心配していたんだぜ。よかった、よかった」

　小躍りせんばかりに、孝一を抱きかかえる。心から喜んでいることが伝わってきた。

「心配かけて済みません。風で吹き飛ばされて転んだのですよ。頭を打って気を失ったらしい。でも、大丈夫です」

　ポケットの銃のマガジンを、早いところ評価してもらいたかった。

「そうか、自分のことは自分が一番よくわかるからな。じゃ、今日の薪の金だ」

　数枚の紙幣が手渡された。

「おじさん、金属を買ってくれるところを知りませんか？」

「金属、鉄か。だったら全谷にはない。連川までいかないと……あそこだったら大きな古物商がある。町で聞けば分かるよ」

「連川ですか。どうやって行けばいいの」

「列車でひと駅。歩くと少し大変だ」

「どのくらいかかりますか」

「二時間まではかからないだろう」

　列車の本数が今と違って少なかった。上下線を合わせても一日四本くらいしか通過しない。

　危険が少ないので皆、良く線路を歩いたものである。ここを辿れば間違いなく次の駅まで行けるのだ。

　孝一は歩いて連川駅に向かった。

Ⅶ

　連川駅で、駅員に古物商の場所を教えてもらった。教わった道筋を歩いていくと、トタンの塀に囲まれた店が目前に現れた。

　板扉を開けて中に入る。

「こんにちは」

　声をかけると、事務所の机に座っていた男が、眼鏡越しに孝一を見た。

「何だ、何か用か」

　無愛想な声である。

「おじさん、買ってもらいたいものがあるのですが、見てくれますか」

「何を売りたい？」

「これなんですが……」

　孝一はズボンのポケットから、銃のマガジンを一個、取り出して渡した。

「なんだい、これは。銃弾じゃないか。どうしたんだ？」

　古物商はマガジンを手にとって、ひっくり返したり、すかしたりして眺めている。

「鉄砲の弾ですよ。自動小銃の……」

「お前、これどこで見つけたんだ。まさか軍から盗んできたんじゃないだろうな」

「とんでもない、山で見つけたんです。土の中に埋めてあったんだ」

「どこの山だ？」

「詳しくわからないんですよ」

　孝一は、残りのふたつが入っているポケットを押さえた。

「まだ、沢山あるのか？」

「多分ね。少しずつ掘り出すつもりです」

「おじさんをその山に連れて行ってくれないか。全部買ってあげるから」

「僕が命がけで見つけたものですよ。これ、買ってもらえないの？」

「買うよ、買うっていってるだろう」

「いくらで？」

「ひとつ千ウォンでどうだ」

　孝一は驚いた。このマガジンひとつで、十回分もの薪拾いに匹敵するお金になるのだ。

　その日は、三つのマガジンを売った三千ウォンをポケットに全谷に帰った。

　興奮している孝一は、二時間もかかる線路歩きも苦痛ではなかった。

　李中佐の家に着くと、このところ善と家で待っている亨竜が飛び出してきた。

「兄ちゃん、どこに行っていたの？　私たちとても心配してたのよ、竜だっておばさんだって一晩中……」

「ごめん、薪を拾いに行った山で転んで少し気を失っていたんだ。おばさんも心配していたのか」

　亨竜の頭をなで、待っているようにいうと中佐の妻女のところに行った。

「おばさん、心配かけてすみません。山で転んで頭を打って、気絶していました。暗い中をうろうろすると危ないと思って、夜が明けるのを待っていました」

「そうだったの。とても心配したわよ」

　妻女は胸をなでることで、安堵の気持ちを表した。

「おばさん、これ、僕がちゃんと働いたお金を貯めたものです。父さんがすぐに迎えに来るといったのに、なかなか来てくれなくて済みません。こんなお金ではとても足りないでしょうが、食費の足しにしてください」

　連川で弾薬を売って得た一部、千ウォンの紙幣を差し出した。

「孝ちゃん、気にしなくていいのよ。中佐も、ひとつも迷惑に思っていないの。お父さんにはうちのひともどれだけお世話になったか」

「僕には何もできません。一生懸命働いて少しでもお金を……」

「わかったわ。とりあえず預かっておく。でもちゃんと働いたお金なのよね」

「はい、薪拾いをしたり焼き物屋で壺を焼いたりして稼ぎました」

「お母さんが生きていたら、こんな苦労はしなくても済んだでしょうに……」

　妻女はエプロンで涙を拭いた。

Ⅷ

　それから週に一度くらいのペースで銃弾を掘り出し、連川まで歩いて売りに行った。

　ついでに薪も拾ってきて、中佐宅の燃料にしてもらった。

　ここで、孝一に商の原点となる基準のようなものが確立した。

　まず、古物商から銃弾が埋まっている場所を教えろ、といわれても頑として断った。要は、相手に手の内を見せないことである。

　次に、全部を買い取るといわれたのも断って、小出しに売却することで、一発勝負ではなく地道に長続きする商いを身につけた。

　商いの終局といえるものは、知り得たことを、あからさまにしないことである。

　手にした売り物の価値は、すべてを知ることは出来ない。しかし、その場にいると、相手の受取かたが、手に取るようにわかることがある。品物の価値は、こちらばかりの都合ではなく、相手側にもあるのだ。

　最後に、労を惜しまず、身体を使うことである。登り窯のおじいさんも、孝一のやる気を見て仕事を教えてくれた。

　短い期間しか触れ合う機会はなく、おじいさんは夭折してしまったが、ものを作る技術を習得する大切さは、孝一の中にしっかりと根付いたのである。

　もうひとつ、自分にない知識でも、それを知る人にとって、そのことが何という新しい知識でもない場合がある。

――わからないことは遠慮なく知識を持つ人に聞け。

　これも、この全谷にいた一年で得たノウハウだった。

　貯めていった売り上げは、どんどん増えていく。とても十二歳の子供が持っている金額ではないのだが、孝一にその凄い価値が、わからないのだ。

　この頃は、十日に一度のペースで、山に行き、銃弾を拾った。

　薪拾いはやらずに、銃弾だけを掘り起こした。新しい隠し場所を見つけたりもした。

　三月の末になると、とうとう周辺のどの場所を掘り起こしても、銃弾は全く出てこなくなってしまった。

　孝一が、この周辺に埋められた銃弾をすべて、拾い尽くしてしまったのである。

　父親からの迎えを待ったが、この時期になっても全く音沙汰がない。

　することがなくなった孝一は、享竜を連れて、街に出るようになった。

　最後に売った、銃弾の料金を持っていたので、ポケットの中は裕福だったが、決して無駄遣いはせず、最低限の食費で納めた。

　さすがに、農作物に手を出すことはしなかったが、顔見知りの黒人兵がいる米軍のキャンプには再び顔を出すようになった。

　彼と片言の英語で話をし、英会話の基礎を覚えた。今度は享竜も参加したが、逆に彼の方の会話が理解されることが多くなり、孝一を慌てさせた。

　孝一が聞いていても、享竜の話す言葉は自然であり、黒人兵もとても楽しそうに話しているのである。

　わからないときは、素直に「ホワット」と訊く。それに対して、兵隊は笑いながら身振り手振りで理解させるのだ。

　それを聞き、見ていると、英会話が易しく感じるようになった。

　現在も、孝一の英会話に問題はないが、それは、このときの何気ないやりとりが大きい役割を果たしているのである。

　孝一がどこに行っても欧米の外国人に、抵抗や圧力を感じないのは、ここでの経験が凄く役に立っているのだ。

　またもや、ふたりにランチが提供されるようになった。

　肉類が多く入ったランチは、ふたりの子供の食欲を充分に満たした。

　食事の食べ方なども、教えられた。自然のマナーが身に付いたのである。

**第四章・公園の読書（鐘路）**

Ⅰ

　韓国の旧正月が過ぎると、わずかではあるが、春のきざしが感じられる。

　凍っていた漢灘江の氷も、きしみ音を立てだした。

　全谷で李中佐に世話になって、長い月日が経過した。最初に一カ月くらいで迎えに来ると言う言葉を信じて学校にもいかず、ひたすら父を待った孝一の願いもむなしく、父親からの連絡はとうとう、なしのつぶてだった。

　四月になり李家の玉城は、六年生に進級した。そして妹の善もここ全谷国民学校に入学する。中佐も妻女も六年生への編入を勧めたが、孝一は、首都ソウルで学校に通うことを心に決めていたので断った。

　年度が明けて新学年が始まったが、五年生の後半を飛ばして進級していない孝一にとって、新たな試練が襲った。

　この出来事は、孝一にとっても大きい。勉学の遅れもだが、通学するという条件に問題が生じた。

　銃弾を売ったことにより、孝一は経済的に余裕を持っていた。

　外に行って、お金を稼ぐ必要がなくなった孝一は、玉城から借りた六年生の教科書を片っ端から独習していった。

　五年生の二学期まで、成績優秀な生徒として級長までつとめ、完璧に近く学んでいた孝一は、予想していたより学力が低下していないことに安心した。

　一九五九年の春から夏にかけての孝一は、久しぶりの安息を感じながら過ごした。

　亨竜も中佐の妻女に馴染み、可愛がられて孝一に寄り付かなくなったことも、孝一の勉強に弾みをつけた。

　どうしても、理解できないところがあったら玉城に訊こうと思っていたが、まったくその必要はなかったのである。

　食事が終わると、すぐに勉強に戻る。父親の言葉を信じ、迎えに来てくれるのを待って転入学しなかった孝一は、学業が嫌いでの休学ではなかったのだ。

　学ぶ意欲は十分にあるのに、それができないストレスは、小学校六年生の教科書にのめり込ませた。

　このころになると、一学期の、カリキュラムは完全に自分のものにしてしまった。

　しかし、義務教育を終えることが出来ない不安は、心をせめさいなんでいたのである。

　決して、怠惰な生活を送ったとは思わないが、中佐の家の食事を三度さんど食べるようになって、孝一も亨竜も肥ってきた。

　毎食、軍用食の半製品を、当番兵が運んできて、兵士の中から選ばれた料理人が腕をふるうのだから、味も栄養価もいうことはない。

　雪が解け、道路が形を表す寸前まで、山に薪や銃弾を取りに行き、連川の古物商まで銃弾を売りに行っていた孝一は、その一日で優に三〇キロ以上は歩いていた。

　運動不足は明らかだった。

　その解消のために、亨竜を連れて外出するように心がけた。年月が、無為に過ぎようとしている。

　父親が、ソウルで仕事をしているのは間違いないのだろうが、あの大都会のどこで何をしているのか、皆目わからない。

　全く連絡が途絶えてしまった。迎えに来ないところを見ると決して仕事がうまくいっているとは思えない。

　手紙でも配達されれば、おばさんが教えてくれるはずだ。

　決して、怠けているわけではないのだろうが、母親の逝去で落ちたつきは、かなり重かったようである。

　そして、金運転手の持ち逃げ、これが大きく影響を与えていた。

　探しに行きたいのは山々だけど、無定見にソウルに行くほど、孝一は無鉄砲ではなかった。せめて何か手がかりでもあれば……

Ⅱ

　父親に会いたい、という孝一の切なる願いは、意外なところで答えが返ってきた。

　迎えに来ない父親に対しての不満は増幅していき、孝一の心の中で渦を巻いた。それが言葉になって出てくる。亨竜に言っても意味がないが、国民学校に上がった妹、善にはよく話しかけていた。

　その日も寝る前、言葉に出した。

「父さん、まだ仕事がうまくいかないのかな。すぐに迎えに来ると言ってたのに、もう三ヶ月だよ。手紙だってないんだから……」

　眠る亨竜の頭をなでながら、ひとりごとのように言う。

「父ちゃんから今日、手紙が来たみたい。おばちゃんがそう言っていた」

「えーっ、本当か！　善、お前見たのか？」

　亨竜が目を覚ますほどに大きな声で、驚いた孝一が叫んだ。

「見たけどわたし、まだ字が読めないもん」

　善は、全谷の国民学校に入学したが、まだ文字を習っていなかったのだ。

「その手紙、おばさんがしまってるとこ、お前にわかるか？」

「台所の時計の下。手紙が入っている箱の中よ。このくらいの……」

　小さな手の、親指の先を合わせ、箱の大きさを示した。孝一は状差しとわかった。

　このときは、おばさんの目を盗んで内容を見ようと思っていたのだ。

　翌日、朝食のとき、状差しを見ると、見覚えのある、達筆な父親の筆跡が見えた。

　ここで孝一は考えた。いずれ、父親を訪ねてソウルに行くことになる。

　正攻法で父親からの手紙のことを、中佐の妻女に訊くことにした。

「おばさん、善から聞いたのですが、父さんから手紙が来たそうですね。父さん元気なんですか。そして迎えに来てくれるの？」

「手紙？　昨日来たわ。ここにある。でも、迎えにくるのはもう少しかかるみたいよ」

　妻女は、ためらうことなく、状差しから封書を引き抜いて、孝一に手渡した。

「そうですか。まだちゃんと仕事が決まってないんだ……」

「頑張っているみたいだけどね。高麗人参のエキスや、薬を売ってるんだって。まだ大変そう。中を読んでもいいわよ」

「元気なんですね。迎えに来てもらえないのなら、いいです」

　孝一は封筒の裏を返して住所を見た。

　ソウル市鐘路区、鐘路二街十八番地、長安ビル　三〇一号室　李　虎範

　すぐに記憶した。

――父さんは、やっぱり鐘路の街で仕事をしているんだ。ここに来る前、善と亨竜と三人で鐘路を探検したから、きっと探せる。

　漫然と思ったが、そのときは具体的な計画にはならなかった。

しかし、父親と会いたい気持ちが募り、我慢もせいぜい二日しか持たなかった。

　あの誇り高い父親が、他人の家に自分たち三人を預けて、平気なわけがない。

　迎えに来れない事情があるのだろうが、理想的な状況になるまで待っていたら、いつになるかわからないのだ。

――ソウルに行って、父さんに会おう。そうしないと、僕たち親子で暮らすことはできない。様子がわからないので善と亨竜はもう少しの間、おばさんに預かってもらおう。

　この考えがまとまった夜は、一睡もできなかった。眼をつぶると父の顔が浮かぶ。

　次の日、昼の間に置き手紙を書いた。

『父さんを訪ねてソウルに行きます。そして自分も父さんの仕事を手伝えるのなら、一緒に頑張って、今度は必ず三カ月以内に妹と弟を迎えに来ます。それまで、すみませんがふたりを預かってください。このお金は僕が壺を焼いたり、薪を拾いに行ったりして働いて貯めたお金です。もし迎えに来るのが遅くなったときには遠慮なくつかってください。もうひとつお願いです。善には僕が乗った汽車が全谷駅を発車してから話してください。これまで本当にありがとうございました。おじさん、おばさんにはとても口では言えないほど感謝しています。孝一』

　そして、この封筒に貯めたお金の全部を同封した。

　父親と会って、新しくスタートするのだから、ゼロから出発するべきと考えたのだ。

　昼食後、駅に行ってソウル行きの列車の時間を調べた。午前十時台と、午後の四時台の二本しか便はなかった。

――今なら四時の列車に乗れる。

　孝一は中佐宅に走って帰った。

　先ほど書いた手紙の末尾に、四時の列車で出発することを書き加え、居間の食卓の上に置いた。

Ⅲ

　全谷の駅に駅員はいるのだろうが、何しろ、上下で一日四本しか列車が来ない駅である。

　列車が到着する時間には、出札所や改札口に駅員はいる。しかしその他の時間は、ほとんど無人駅の様相を呈する。即ち、駅構内への出入りは自由なのだ。

　銃弾を売ったお金のほんの一部分でソウルまでの運賃は払えたのだが、敢えて一銭も持たず出立したのである。

　さすがに、正式な方法で堂々と乗り込むわけにはいかない。荷物を列車に積み込む牛車の荷台に飛び乗り、荷扱いの手伝いのような顔をして乗ることに成功した。

　検札は、トイレに入ってすり抜け、列車はソウルに接近する。

　最初から、ソウル駅では外に出るのが難しいと考え、手前の旺十里駅で下車することに決めていた。停車する寸前に、列車から飛び降り、そのまま線路を走った。

　心配するほどのこともなく、孝一の無銭大冒険旅行は成功裏に終わった。

　着いたときはまだ、空にほんのりと明るさが残っていた。

　ソウル生まれの孝一だが、二歳半のときにここを逃げ出している。

　従って、まったく地理に不案内だ。

　道を歩いている人に、鐘路二街の長安ビルと訊くが、誰も相手にしてくれない。

　孝一は、全谷で床屋には行かず、頭髪は伸び放題で首筋を覆っていたし、着のみきのままという言葉通り、一本しかない冬のズボンは垢で光っていた。下着のメリヤス類は、中佐の妻女が洗ってくれたが、基本的にアウターは論山から持ってきたズボンが、夏冬一本ずつ、夏のズボンは破れて使用に耐えなくなり、捨てざるを得なかったのである。

　これらは、父親がすぐ迎えにきてくれるという前提から出発しており、頭髪をきれいに散髪したり、新しいズボンを買ってもらったら、父親が来てくれなくなるような気がして頑なに断ったのだ。

　だから、戦争孤児に見えたのだろう。

　作戦を変え、全谷に行く前、二日間の探検で記憶に残った東大門に行く道を尋ねたところ、親切に教えてくれた。

　教わった通り、暗い道を歩く。二時間近く歩いたところで、東大門が見えた。

　ここまでくると、街灯や商店の灯りが安心させてくれる。一年前、善と亨竜と手をつないで歩いたことが、鮮烈に思い出された。

　鐘路通りは賑やかだった。西へ歩くにつれ道の両側に食べ物屋とか、日用雑貨を売っている露店が増えてくる。

　威勢のいいかけ声、店を照らすカーバイトの炎と独特の匂い、何もかもが活気に満ち溢れていた。

　孝一は時計など持っていない。しかし、全谷を出た時間から逆算すると、八時は過ぎているはずだ。

　気を紛らわせるために、記憶している父親の住所を唱えながら歩いた。

――ソウル市、鐘路二街十八番地。長安ビル三〇一号室。

　そしてようやく、鐘路二街に到着した。このあたりも露店や屋台が並んでいる。

　ここまで来たのはいいけど、夜のことである。番地も表示されていないし、長安ビルという看板が出てるわけでもない。

　露店を出している人に訊くが、誰も知らないようだ。汚い身なりの子供の話など、真剣に耳を貸してくれない。

　昼食を中佐宅で食べてから、何も口にしていないのを思い出した。興奮していたが、さすがの孝一も空腹を覚えていた。

　歩き回っているうちに、空腹感もあいまって、不安が募ってきた。

　屋台で煮込みを売っている男に訊いた。

「おじさん、誰もちゃんと教えてくれないんだけど、鐘路二街の長安ビルって知りませんか？　この辺らしいんだけど」

「知らないね」

「教えて下さい。おじさん、いつもここで仕事してるんでしょ」

「仕事はしてるけど、この辺に住んでるわけではない。毎日、仁寺洞から出稼ぎに来てるんだよ」

　ここで店を出しているからといって、この辺の事情に通じているわけではなかった。

　屋台の向こう側に、建物の入り口がある。そこのガラス扉が開いていた。

　ガラスにハングルで、何か書かれているのだが、鏡に映っているように左右が逆になっていて判読が出来ない。

　かろうじて、下のふた文字が『ビル』と読めた。

　孝一はガラス扉を閉めて正対し、書かれてある文字を眺めた。

　何とそこには『長安ビル』と描かれているではないか。あれほど探しても見つからなかった目的のビルが、目の前にある。

　孝一は、一段飛びに階段を三階まで駆け上がった。

Ⅳ

　三〇一号室は、すぐにわかった。ただし、この時間に父親がいるかどうか、さだかではないが、事務所には灯りがついていた。

　扉に耳を近づけてみる。室内で人の声がしていた。

「注文した数がそろわないのは困るよ。もう納める時間も決まってるんだからな」

　少し不機嫌な男の声がする。

「大丈夫です。明日の午後には必ず届けますから安心してください」

　忘れようもない父親の声だ。どうやら、こんな時間でも商売の話をしているらしい。

　客が来ていることは理解できたが、父親に会いたい気持ちが優先した。

　ためらいもなく、扉をノックする。

「はーい、誰？」

　中から父親の声が応えた。それには応答せずに、少し強くノックする。

「誰だろう……」

　きしみ音と共にドアが開いて、父親の精悍な顔が覗いた。

　細い目がまん丸に開かれ、一瞬、口を金魚のように開いたが、言葉が出てこなかった。

「父さん！」

　孝一は、父親の胸に飛び込んだ。懐かしいタバコの匂いに包まれる。

「孝一？　お前、どうして……」

　父親は孝一の肩を掴んで距離を作り、顔をしっかりと見つめた。

「父さん、ひどいよ。どんなに僕、迎えに来てくれるのを待っていたか……」

「すまなかった。それよりお前、全谷の家で居づらくなるような何かがあったのか？」

「何もないよ。おばさんも親切だし、おじさんだって……でも、僕たちは父さんと一緒に暮らしたいんだ」

「そうか。お前、その髪の毛はどうした。一度も床屋に行ってないんだろう」

「床屋で散髪したら、父さんとの思い出がなくなるような気がして」

　もう一度、父親の胸にしがみついた。

「李さん、息子が訪ねてきたのか。じゃ、私はこれで帰るけど、明日の午後、間違いなく品物を頼みますよ」

　来客は二人を見て手を挙げると、事務所から出ていった。

「お前のズボンだってひどいもんだ。ボロボロじゃないか。中佐のおばさん、買ってくれなかったのか」

　出ていった客に挨拶もそこそこにして、父親は孝一の全身を見て言った。

「買ってあげるといったけど、僕が断ったんだ。だってこれ、父さんに買ってもらったズボンなんだもん」

「そうか。明日、身の回りのものを買いに行こう、それにしてもひとりで良く来たな。もう立派な一人前だ」

　もう一度、しっかりと抱きしめてくれた父親が言う。

「うん、僕も少しは大人になったよ」

「善も竜も元気か？　善は今年から学校だろう。ところでお前も六年生じゃないのか」

「父さんがすぐに迎えに来てくれると思って、学校には行かなかった。でも、六年生の勉強は全部わかるよ」

「じゃ、通学してないのか」

「うん、行かなかったのに、進級は出来ないさ。僕、平気だよ。こうやって父さんに会えたんだから……旺十里の駅から歩いてきたので、少し疲れたしお腹が空いたよ」

「ごめん、中華料理を食べに行こう。すぐそこにうまい店があるから」

　二人は連れ立って中華料理店に行った。そこは料理店にというより、食堂のようなところだった。

　たしかに味は良かった。料理の名前はわからないけど汁の麺類と、白飯の上にあんかけが載っているご飯など、初めて食べた孝一を感激させてくれた。

「ごちそうさまでした、とてもおいしかったよ。父さん、これから家に帰るのでしょう。どのくらいかかるの？」

「さっきの事務所に寝ている。まだ家は用意できてないんだよ」

「あそこに寝る部屋があるの？」

「いや、机の上に布団を敷いて……」

　父親は、当たり前のように言う。

　孝一は事務所に戻ってため息をついた。二〇坪ほどの事務所には両袖の机があり、いくつかの事務机の他に、長いテーブルがあるがこれをふたつ並べると、人間が寝ることは可能だった。

　現実に、ふたりはここで眠った。

　居候で気兼ねはあったが、昨日までの中佐宅ではちゃんと布団に入って就寝できた。それに引き換え、この落差は大きい。

　父親は机の上で寝ることになれているのだろう、毛布をかぶるとすぐに寝息を立てた。

　いくらかは眠ったが、熟睡と言うにはほど遠く、何度も夜中に目がさめ、寝苦しい一夜を過ごしたのである。

Ⅴ

　不安定な姿勢で寝たためか、朝になって身体の節々が痛んだ。

　朝食は、昨夜の中華食堂に行って、温かい豆スープと油で揚げた細長いパンを食べた。

　父親は、パンを白濁したスープに浸してうまそうに食べる。

　孝一も真似してみたが、これがなかなかいけるのだ。

「父さん、このスープは何なの？」

「豆をしぼったあとの汁だよ。豆のミルクだ。とっても栄養があるんだよ。このてんぷらは揚げパン。これも栄養がある」

「とてもおいしいね。僕、論山でオカラを食べたけど、こんなに美味しくなかったよ。同じ豆をしぼったあとのものでも、ずいぶん違うんだね」

「それは調理のしかただ。これは専門の料理人が腕をふるっているんだからね。塩だって砂糖だって上手に使うから」

「そうか……いや、とてもおいしかった」

　孝一は、お腹をさすって息をついた。

　信和デパートで下着やシャツ、ズボンなどを買ってもらい、床屋で髪の毛を切ってさっぱりしたあと、長安ビルに向かった。

　事務所に戻る道すがら、父親が思い詰めたように言う。

「孝一。これからのことだけど、お前、もう一度全谷に戻ってくれないか」

「えっ、どうして。僕、せっかく来たのに」

「昨夜、わかったと思うけど、父さんの仕事は、まだうまくいっていないんだ。事務所で寝泊まりしているのが現実なんだよ。今、とてもお前の面倒を見れるような状態じゃないのは、わかっただろう」

　孝一は、ようやく会えた父親と離れたくなかった。

「父さん。僕も論山にいたときの孝一ではありません。論山でも全谷でも、仕事をしてお金を稼いだし、ソウルに来るのだって無賃乗車で来るくらい、逞しくなったのです。だから苦労なんか平気だ。一緒に働かせてください。そして一日も早く善と竜も呼んで、一緒に住めるようにしましょうよ」

　ふたりは、事務所に入った。

「孝一、お前の気持ちはわかる。今日は日曜だからいいけど、孝一が昼間、事務所にいるのはまずいんだ。共同経営者に対しても社員にも、客にもな。なんといってもお前は子供なんだよ。仕事の世界には無理がある」

「父さん、僕は薪拾いもやったし、登り窯で壺も焼きました。そして、山で鉄砲の弾を見つけて……」

「孝一、お前が頑張ったのもわかるし、お金を稼いだのも認める。しかし全部、身体を使った仕事だ。父さんたちは知恵を使って物を販売しているんだよ。可哀想だけど、子供にはできないし、邪魔になるんだ」

　言われてみると、その通りだった。

　でも、孝一はもう一度父親と別れて全谷に帰る気持ちには、どうしてもなれなかった。

「わかりました。もうわがままはいいません。でも、父さんと別れたくない。絶対に邪魔しないから、一緒にいさせて。ね、いいでしょう。父さんが仕事中は、事務所に近づかないし、会社の人に迷惑はかけないから」

　孝一の一途な気持ちは、父親の虎範の心を動かしたと同時に、一年間幼い兄弟を放り出した引け目もあったのだろう。

　朝の食事が済んだら、孝一は事務所を出て行き、夕方、社員が退社するまで事務所に戻ってこない、という条件で、父親と一緒に暮らすことを許された。

　朝食も、中華食堂で食べると費用がかさむので、自炊することになった。といっても電熱器がひとつしかない。これで湯を沸かしてお茶を点てたり、パンを焼くのと、目玉焼きを作るくらいのことしかできなかった。

　それを食べ終わると、昼食代として父親から三〇ウォンをもらい、事務所をあとにする。

　初日の月曜日は、何をして時間をつぶしたらいいのか、途方に暮れた。まず近くを歩き回って探索した。

　鐘路二街から北に歩くとすぐ、タブコル公園がある。さほど大きな面積ではないが、十層の石塔や銅像があり、樹木も多くベンチでは日だまりの中、老人たちがゆったりと休息をとっていた。

　ほんの数分歩いただけで、ここには鐘路通りの喧噪が無縁の静けさがあった。

　更に西に歩くと、ソウル市営の図書館があった。中に入ると、書架にびっしり、蔵書が陳列されていた。

　ここで本を借りて読めば、知識の吸収もできるし、時間潰しとして最適だ。今日のところはあくまでも探検が主体なので、本を借りずに出てくる。

　次に鐘路通りを西に歩いた。鐘路一街は中国人が支配しており、規模や店構えに差はあるけど軒並み、中華料理の店が並ぶ。

右手には、ひときわ高さを誇る八階建てのビルがある。和信デパートだ。

　中にはいると八階に映画館が常設されていた。三本だての映画が、低料金で上映されている。これも時間潰しに利用できる。

　昼になった。今日はかなり歩いたので、少し空腹を覚えた。

　昨日の朝食べた揚げパンが忘れられない。記憶をたどって食堂に行き、昨日と同じスープと、天ぷらパンを注文した。

　料金は、父親がくれたお金の半分で済んだ。

Ⅵ

　午後からは、観光ではないけど、ソウル中心部にある景福宮、徳寿宮など、名所旧跡を訪ねて歩いた。

　旧い建物を前にすると、韓国の文化や歴史が甦ってくるような気がする。

　事務所がある長安ビルは、タブコル公園から近いので、公園のベンチに座って激動のこの数日に考えをめぐらせた。

　父親が全谷に三人を預けて去り、音信もない事実は、決していい状態ではないと思い、そのように理解していた。

　しかし、今回、孝一がソウルに父親を訪ねようと思い立ったのは、父親からの手紙が発端になったことは否めない。

　あのとき、中佐の妻女は中を読んでもいいと言ったが、孝一は父親の所在地さえわかればいいと判断し、行動を起こした。

　父親の所在がわかったことは、孝一にとっていいのだけど、正直なところ孝一がソウルに来た行為は、歓迎されていないようだ。

　今になってみると、便りの内容を読んだらこんな無茶は、できなかったかもしれない。

　そんなことを考えてるうちに、このところの、机の上での不安定な体勢による睡眠不足のせいか、うたた寝をしてしまった。

　すぐに目が覚めたが、日差しは穏やかで風もない。孝一はベンチに横になって腕枕で眠ってしまった。

　目が覚めたときは、日がかげって、少し寒さを感じるようになっていた。

　太陽の位置から判断すると、夕方になっているようだ。

　孝一は、長安ビルに戻って事務所の前に立った。いつも、ここで中の様子をうかがってから事務所に入る。

　ドアに耳を寄せて中の声を聞いた。今日は女の声がする。それに答えているのは、父親の声だった。

　切れぎれに『孝一』いう言葉が聞こえ、女性の声に聞き覚えがあった。

――全谷のおばさんだ。

　一年間お世話になった、中佐の妻女の声は忘れることができない。

　孝一は、事務所から聞こえてくる会話に集中し、耳をそばだてた。

「私も驚いたよ。まさか孝一が突然、来るとは思わなかったからね。すっかり身体も大きくなって逞しくなった」

　父親の声である。

「そうなんです。あの子たち三人の面倒見るのは、うちにとって何でもないのに、孝さんたら一生懸命に働いて、食費を入れていたのです。それに、こっちに来るときに、働いて貯めたお金だ、といって善さんにかなりまとまったお金を置いて行きました」

「そうですか。あの孝一が……こっちでも私と一緒に働きたいといったけど、物を売る商売を子供にやらせるわけにはいかない」

「それで、孝さんはどうしてるのですか。学校に行っているとか。全谷ではとうとう学校にはいかなかったのですよ」

「それも聞いている。こっちでも学校に通わせたいのだけど、私の住所が決まっていないような状態なので……」

――そうか、学校に行くにきちんと住所が決まっていなければならないのか。

　孝一は、当分、学校には行けないことを覚悟せざるを得なかった。

「でしたら、孝ちゃんを私が連れて帰りましょうか。夫もそのように申してますし、特務隊長のお仕事が軌道に乗ったら……」

　ここまで聞いた孝一は、事務所の中に入っていった。

「孝ちゃん……」

　先に気付いたのは、中佐の妻女だった。

「おばさん。心配かけて済みません。でも僕は全谷には帰りませんよ。やっと父さんに会えたんだから……善だって亨竜だって、父さんと一緒に住みたいはずです」

「孝ちゃんの気持ちはわかるわ。でも、お父さんのお仕事の邪魔になったのでは、何もならないでしょう」

「ちょっと待って。李中佐や奥さんには、口で表せないほど感謝している。でも、孝一もいっている通り、我々の家族は、もうそろそろ、一緒に暮らすべきだと思っている。これは無賃乗車までして私に会いに来た、孝一に身をもって教えられたんだ」

　父親が、決然として言った。

「僕が、父さんの仕事を手伝えないのは、とても残念です。でも、父さんは家族全員で住むと言ってくれました。僕、とても嬉しいです。善だって竜だって、きっと同じだ」

　孝一も決意を表した。

「それは理想の姿ですわ。わかりました、連隊長、頑張ってください。善さん、竜さんを、こちらに呼べるようになったら言って下さい。連れてきますから」

　中佐の妻女が言う。

「こっちの体制が固まったら、私か孝一が迎えに行く。残念ながら、いつ、とはっきりはいえないけれど、少なくとも、住むところなんかも決めて一、二ヶ月中には何とか……」

　父親が、この一年の中で一番頼もしく思える言葉で、返事をした。

「私どもの家でお子さんを預かることに、何も問題はありません。でも、一日も早くお迎えに来られるのをお待ちします」

　李中佐の妻女は、鐘路の旅館に泊まり、翌日の列車で帰っていった。

Ⅶ

　孝一の生活に、大きな変化は生まれなかった。会社の営業中は、図書館から小公子、小公女、厳窟王、レ・ミゼラブル、赤と黒などの世界の名作や、エジソン、ダーウィン、キュリー夫人などの偉人伝を借りてきて、タブコル公園の木陰のベンチを占領、むさぼるように読破した。

　一週間に一度は、和信デパートの映画館で三本立ての映画を見た。

　父親から毎日もらう昼食代は、特別のときを除いて昼食を抜き、費わなかった。

　何かことがあったときに、役に立つと思ったのである。

　ある日曜日のことだった。会社が休みなので外出せず、事務所にいたとき、父親が複雑な表情で話し出した。

「今、父さんに、おまえたちの新しいお母さんになるかもしれない人がいるんだ。その人は中央電話局の交換手をやっている。いい人だよ。今晩、食事をするのだけど孝一、会ってくれるか」

　新しい母親？　意味がよくわからない。少なくとも孝一にとって、死んだ母以外に、母親はいなかった。

「新しいお母さんって、それ、どういう意味なの？」

　孝一は素直に聞きかえした。

「まだ、正式に決まっていないけど、父さんの二回目のお嫁さんと、お前たちのお母さんになってもらうかも……」

「そんなの嫌だ。僕に新しい母さんなんていらない。善も竜も同じだよ」

　少し強い調子で答えた。

「まだ決まったわけじゃないんだ。ただ、これから住むところを決めたり、孝一や善の学校の問題なんかを解決するためには、母さんが必要なんだよ」

「だったら僕、学校なんか行かなくてもいいよ。絶対に嫌だからね」

　孝一は、理屈ではなく、本能的に拒絶反応を起こしていた。

「夕食はどうする？　父さんはその人と食べなければならない。嫌だったら同じ席でなくてもいい。孝一も一緒に来るんだ」

　珍しく、昔の父親らしい力強い言葉だったので、つい首を縦に振ってしまった。

　夕食は鐘路一街の中華料理店だった。いつも行く食堂のようなところではなく、少し高級な、きれいな店だった。

　入り口を入ったところに、椅子とテーブルが置いてあり、待ち合わせや、席が空くのを待つ形式になっているようだ。

　少し座って待っていると、大柄な女性が入ってきた。なぜか孝一は、その人が父親の待っている人と直感的に理解したが、やはり正解だった。

　結局、孝一も交えて夕食となった。曽栄淑という名前の女性は明るい性格で、決して嫌悪感を抱かせなかった。

「孝一くん。近いうちに、私が勤めている交換台に遊びにいらっしゃいね。私たちが仮眠する部屋もあるし、座り心地の良いソファもあるの。お茶も飲めるし、お菓子だって誰かが持ってくる。そこでだったら、いくらでも本を読めるわよ」

　本が好きで、図書館から借りて読んでいるという孝一にこの誘いは魅力的だった。公園の木のベンチも悪くはないが、長い間座っていると、尻が痛くなるのだ。

　翌日、図書館から本を借りて、中央電話局の交換台にいってみた。曽栄淑が休憩室に案内してくれた。

　座り心地のいいソファー、扇風機も備わっていて涼しい風が送られてくる。孝一にとって見れば、まるで天国だった。

　頻繁にそこを利用するようになった。

　交換台では曽栄淑その人より、他の交換手たちに可愛いがられた。

　孝一も、最初の意気込みほど栄淑を嫌いではなくなっていた。彼女の昌信洞の住まいは岩山の上にあったがそこにも泊まった。しかし、ひと間しかないここで五人が暮らすにはいかにも手狭だった。

Ⅷ

　いつの間にか八月、夏の盛りになった。

　孝一が善と亨竜の様子を見に、全谷に行くことになった。

　父親が旅費を工面しようとしたが、このとき初めて昼食代としてもらっていたお金を貯めてあり、十分に旅費になることを告げた。

　決して経済的に豊かではない父親は、少しつらそうにしたけど、喜んでくれた。

　しかし、孝一はこのお金で切符は買わなかった。中佐の妻女や善、亨竜にソウルのお土産を購入したのである。

　善と享竜の名前を入れた、日本のトンボ鉛筆を買った。これは大変に高価なものだったが、貰ったふたりにとって、想像もつかないお土産であり、凄い特別な価値をもたらしたのである。

　そして、再び旺十里駅から、今度は有蓋貨物列車に乗って無銭旅行、全谷に着いた。

　まず、中佐の家に着くと、奥さんと玉城の土産を渡した。

　その日の夜、中佐と家族を交えて父親の現況を報告した。

「おじさん。父さんは今度結婚することになりました。ソウルで暮らすそうです。僕たちも一緒に」

　これは、ソウルを出る前に、何が何でも家族全員が一緒に暮らすということで、父親と再確認した決定事項だった。

「そうか、部隊長も独り身では辛いよな。良かった、よかった。それで式を挙げるのはいつなんだ？」

「それは聞いてません。でも一緒に住むのは近いうちのようです」

「孝一はもう会ってるんだろう。どんな人なんだ？」

「今は、電話の交換手をやっています。優しい人ですよ。僕は交換台で本を読ませてもらってます。交換手の人たちはいい人ばかりで、僕にお菓子をくれたり」

「君たちと住む家は、用意してあるの？」

「その辺はわかりませんけど、善と享竜を一ヶ月以内に連れに来るといってました」

　その内容を言葉に出して、父親の決意を発表し、意識的に後戻りできない状況に追い込んでしまったのである。

「家で、善ちゃんと享竜君ふたりを預かることは何の問題もないよ。孝一君だって戻ってきても構わない」

「いいえ、父さんが決めたことですから、必ず迎えに来ると思います」

「ま、部隊長の考えもあるのだろうけど、家の気持ちも変わらない。それは帰って伝えてくれ。いいな」

　中佐の、三人を見る目は、とても優しかった。お母さんも同じ目で見ていた。

　一晩、中佐宅に泊めてもらい、善、亨竜と部屋に入った。

「善は、おばさんの手伝いをやっていれば時間が潰れるだろうけど、竜は遊ぶ相手がいなくて大変だろうな。どうしていた？」

「うん、戦車のキャンプに毎日遊びに行っている。ガードのルイスとはバディの仲だ。ヒー・イズ・グッド・フレンド」

「ルイス？　バディ？」

「いつも、ガードのところにいる親友のことさ。彼とはとても仲がいい」

「そうか、親友ね。お話は出来るのか？」

「うん、大体はね。わからないときはホワッツ、って訊くんだ。そしたら、ていねいに教えてくれる」

「昼ご飯は？」

「キャンプでご馳走になるんだ。肉が多くてとてもおいしいよ」

「善は、おばさんのお手伝いか？」

「そう。おばさんは料理のことをとても良く教えてくれるわ」

　ふたりとも、ここでの生活を楽しんでいるみたいである。

　しかし、ここでの生活ももう終わりだ。

「お前たちは、毎日の生活を結構楽しんでいるようだけど、ようやく父さんとソウルで住むことになったんだ。当然そっちの方がいいだろう？」

「勿論よ。父さんと一緒に住めるのが、夢だったんだから」

　善が、すぐに答えた。

「僕だって、父さんと一緒がいいよ。だって家族だもん」

　享竜もためらいなく答えた。

　これで、兄弟の意志は全く一緒であることが確認できた。

　自然に抱き合ってぐっすりと眠った。

　次の日、もう一度貨車に忍び乗って、ソウルに帰った。

**第五章・亨竜の恐怖（竜山）**

Ⅰ

　全谷から帰った孝一は、父親に中佐宅での様子を伝え、少なくとも一カ月以内には妹弟を迎えに行かなければならないと主張した。

　そして父親と曽栄淑と一緒に家族五人で暮らせる家を探して歩いた。

　基本的な条件は、三部屋以上あって、鐘路に近いところということになり、かなり条件としては厳しかった。

　家賃を無視すれば見つかるのだが、父親と曽の収入からは難しいのも事実である。

　適当な物件が現れないまま、月日がどんどん経過し、暑い夏の盛りになっていた。

　事務所の窓を全開しても、涼しい風などは一向に入ってこない。

「孝一、善と竜を今年いっぱい、李中佐に預かってもらおうか」

　汗を拭きながら父親がいった。

「えっ、僕は秋には迎えに来るって、おじさんやおばさんに約束したんだよ」

「でもな、いい家が見つからないんだよ。いいと思っても家賃が高かったり、遠かったりして……ここと曽おばさんの電話局に近いことが絶対条件なんだ」

「僕、働いてお金を稼ぐことができないだろうか。こんな都会だから、何か……」

　孝一は全谷で金を稼いだことを思い出した。

「田舎では、みんなが働いているから、薪拾いや焼き物でも稼げたかもしれない。都会では、子供ができるような仕事はないんだ」

「僕、靴磨きでも何でもやるよ。ソウル駅前に、子供が何人も出ていた」

　曽栄淑おばさんの勤め先、中央電話局に行くとき、見た光景を思い出した。

「父さんはお前を学校に通わせていないことが、気がかりになっている。今なら、曽おばさんの家に住むことにして学校に通うこともできると思っているんだけどな」

「僕が学校に通うよりも、善と竜と一緒に住むことが先です。あのふたりのことを考えると、胸が痛くなるんだ」

「それは、父さんだって一緒だ。でも、あのふたりが来たら、今のように事務所で寝るわけにはいかない。曽おばさんと話したんだけど、善はおばさんのところに一緒に住まわせてもらえる。お前と竜は無理だ。父さんはここで寝泊まりしても、お前たちを預かってくれるところを探さなければならない」

　父親の言葉は苦渋にみちていた。

「それじゃ、一緒に住むことにならないじゃない。今と同じでしょう」

「だから、もう少しの間、お前も善も竜も全谷の中佐の家に世話になるんだ。孝一も学校に行って進級できるし、すべてうまくいく」

　さっきまで、善と亨竜だったのが、孝一までも全谷に戻れというのだ。

「嫌だ！　僕は絶対に全谷に行かない。やっと父さんに会えたんだから。善も竜もどれだけ父さんと一緒に住めるのを待っているのか、父さんにはわからないの？」

「それはよくわかっている。でも、孝一は大きいから、こんな辛い生活でも我慢できるけど、竜はまだまだ小さい。彼にはとても、耐えられないだろう」

「だから、僕が働いて少しでもお金を稼いでくる。明日、駅に行って靴磨きの人から、どうすればできるか聞いてくるよ」

「駄目だ。それは許さない。お前は学校に行かなければならないのだよ。父さんの仕事だって、いつまでもこのままじゃ済まさない。今考えていることが実現すれば……」

「それはわかるけど……家族四人で一緒に暮らすことが僕にとって一番大事なんです。善だって竜だって……」

「といってもな……」

　父親は、苦しそうに窓の外を眺めた。

「父さん、善と竜と一緒に住めるのだったら、僕、どんな我慢もするよ。善は曽栄淑おばさんのところに住むのなら、僕は弟と一緒に暮らすんだ。竜の面倒はまかせておいて」

　孝一は、論山で左の頭に傷を付けてしまった亨竜が気にかかっていた。

　ついこの間、全谷に行った夜、孝一にしがみついて、安らかに眠っていた亨竜の寝顔が愛おしくてたまらないのだ。

「わかった。父さんに心当たりがある。その人に頼んで、孝一と竜を預かってもらえることになったら、全谷に迎えに行こう」

　ようやく、父親の愁眉が開いた。

Ⅱ

「孝一と竜を預かってくれる家は、父さんの共同経営者、いや資金主といった方がいいかな。金持ちで竜山バスターミナルの裏手に大きな家を持っている」

　父親が言い、全谷に行くことになった。

「どんなおばさんだろう。玉城のお母さんのように、優しい人だといいな」

「父さんも会ったことはない。多分優しいおばさんだろう。国民学校一年生とひとつ下の男の子がいる。友達になれるぞ」

「下の子は竜と同じくらいだね。仲良くしてくれたら竜も淋しくない」

　この先、世話になる家のことよりも、これからソウルにおいて家族で暮らせる喜びの方が強く、孝一の心を浮き立たせていた。

　ふたりを乗せた列車は、全谷の駅に着いた。

　わずか二カ月前に、この駅からソウルに向かったのだが、新しい街に来たような気がするのは、なぜだろうか。

　多分、この二ヶ月間のソウル生活が、孝一の心境や感受性に、大きな変化を与えたのだ。それでも李家への道筋はしっかりと記憶に残っている。

　孝一が父親を案内するような形で、李家へ向かう道を正確に辿った。

　中佐の家で、中佐の妻女と善、亨竜が出迎えた。孝一にはまったく意外だったのだが、善も亨竜も、父親に会ってもさほど感激しなかったことである。人間形成の成長期にあたる二人にとって、半年の空白は家族に対する情をも奪ってしまったのであろうか。

　李中佐は虎範と孝一が来たことを知り、部隊からすぐに帰ってきた。

「李副長、子供たちが長い間お世話になって本当にありがとう。この恩は一生忘れない。必ず何らかの形で……」

　父親がかっての部下に対して、深々と頭を下げ、感謝の意を表した。

「何をおっしゃいます。わたし達はお世話したなんて少しも思っていません。気になさらないでください。孝一、皆で一緒に暮らせるようになって、よかったな」

　中佐の野太い声と、優しいまなざしが心から喜こんでくれているのを示していた。

「はい、よかったです。善も亨竜もこれで普通の家族になれました」

　現実は厳しいのだが、孝一は敢えてそれに触れずに答えた。

「それで連隊長、新しい住所は？」

　中佐が問いかける。

「昌信洞なんだけど、詳しい番地は忘れてしまった。ソウルに帰ったら、手紙を出す」

　父親は曽栄淑の住居がある地名を言った。現実には新しい住所は決まっていないのだ。

　その夜、中佐宅で心尽くしの夕餉をもてなされ、米軍から支給されたのであろう、アメリカンビールの栓が盛大に抜かれた。このところ、ほとんど酒を飲んでいない父親は、早い段階で酩酊し、酔いつぶれてしまった。

　父親を抱きかかえて寝所まで運んでくれた中佐の顔は、すべてを見通しているかのように哀しげに歪んでいた。

　翌日、身の回りのものを詰めたバッグと布団を持った一家は、全谷駅に向かった。

　中佐の手配で、駅までは軍の自動車が来て送ってくれた。

　そして、大きな段ボール箱に二つ、軍から支給された缶詰や保存食、半製品の加工肉等の食料を土産として持たせてくれた。

　善は、これからソウルで待ち受けている状況の予感があるのか言葉少なであった。

　ソウルに向かう列車の中で、父親がふたりに話しかけても、会話がはずまない。

　それでも善はなんとか受け答えするが、亨竜は父親が声をかけると、孝一に抱きついてくる始末だった。

　このところいつも感じていることだが、父親の虎範からは、生きてゆく自信のなさが伝わってくる。

　軍隊時代や、退官して事業を始め、私財を投入し、学校を建てて市に寄贈したときのような自信に満ち、堂々とした父親はどこへ行ってしまったのだろう。

　貧乏は、ある意味では罪悪である。人間としての尊厳はおろか、それまでの人生までをも奪い去ってしまうのだ。

　どこか噛みあわない、この一家を乗せた列車は、それでも着々とソウルに近づきつつあったのである。

Ⅲ

　ソウル駅に着くと、ホームまで曽栄淑が出迎えに来ていた。

「お帰りなさい。善、亨竜、初めまして。わたし曽栄淑です、よろしくね」

　笑みをたたえて近寄ってくると、善を胸に抱いた。そして亨竜に手を伸ばしたが、亨竜は、孝一の後ろに隠れてしまった。

「竜、これからお世話になるおばさんだ。ちゃんとご挨拶しなさい」

　父親が、亨竜の手を引いて前に立たせようとした。亨竜は、強くかぶりを振ると、孝一の太腿にしがみついてきた。

「今日初めて会ったのですもの、仕方がないわ、そのうち慣れてくれるでしょう」

　曽栄淑は、善と腕を組みながら言った。

　路面電車で、鐘路一街まで行き、中華料理店に入る。朝食のときの食堂風ではなく、初めて孝一が、曽栄淑に会った中華料理店だった。ここで一家の夕食となった。

「孝一、善、竜。みんなよく聞いてくれ」

　食事が終わると父親が、口を開いた。

「父さん、一生懸命頑張ったけど、皆で一緒に住めるようにはできなかった。善は、曽おばさんと一緒に住むことになる。孝一と竜は父さんの友達の家で預かってもらう。白社長の家だ。竜と同じくらいの男の子がふたりいて、友達になってくれるだろう。善はおばさんの家から国民学校に通う。孝一は、白社長のところで落ち着いたら、五年生に編入だ」

　父親の話が続いている間、亨竜は落ち着かない様子で、周囲を見ている。

　善は曽栄淑に抱かれて、すっかり安らいでいるようだ。

　孝一は、その様子を見て、このふたりはうまくやっていけるだろうと感じていた。

　それに反して、亨竜の態度が極度に落ち着かない。幼い亨竜にもこれからの生活に対する不安があるのか、と思うと不憫になった。

「竜、大丈夫だよ。兄さんがついているんだ、心配することはない。これから、いつも一緒なんだから……」

　いじらしくなって亨竜を抱きしめた。

「兄さん、違うよ。オシッコがしたい」

尿意で落ち着かなかったのなら、心配はない。孝一は亨竜をトイレに連れて行った。

　席に戻ると父親が立ち上がって言った。

「孝一、善はおばさんの家に帰る。父さんと三人は、鐘路の旅館だ。さ、行こうか」

　店を出るとき、勘定を曽栄淑が払っているのを見て、少し心配になった。

　善は順応性に富んでいるのか、栄淑と絡まり合うように歩いている。路線バスに乗って昌信洞の栄淑の家に帰っていった。

　それを見て、孝一は胸をなで下ろした。

　父親と孝一、竜の三人は、鐘路二街の旅館に泊まった。亨竜は疲れたのか、すぐに眠ってしまった。

「孝一、お前に話すことではないかも知れないけど、父さんの現在の状態を少し話しておきたい。眠いか？」

「ううん、大丈夫だよ」

　少し興奮したのか、眠気は感じなかった。

「お前には苦労をかけて済まないと思っている。見ていてわかる通り、父さんの仕事は決して順調とはいえない。どこを、どう直せばうまくいくのかはわかっているつもりだ。でも、母さんが死んでからの一年足らず、何をやってもうまくいかないのも事実だ」

　父親はボストンバッグを引き寄せ、中から焼酎の瓶を取り出すと、直接、口をつけて飲んだ。

「軍を退官して始めた事業。全部、軍が関係していた。豆腐はすべて軍隊で買い上げてくれたし、煉瓦工場だって全部、軍の営繕部から発注されたものを作っていた。森林伐採業だって同じことだよ。だから営業する必要もなかったし、接待だって……それぞれの事務所をつくるにしても、父さんが持っていた財産で全部、立ち上げることが出来たんだ」

　ここで父親は、焼酎の瓶半分くらいを飲み干した。

　孝一には、何も口をはさむことができなかった。黙って聞くより方法はない。

「経理は全部母さんがやってくれていた。父さんが片腕として信用していた運転手の金があんなことをするとは、思ってもいなかったんだよ。見事にお金になるものを全部、持ち逃げされたんだ」

「父さん、金という運転手を探し出すことはできないの？　警察に言って捕まえてもらうとか、あいつの親とかは……」

「あれだけのお金があれば、死ぬまで優雅に暮らせる。仕事なんかしなくてもいいし、現金さえあれば、何でもできる世の中だよ。どこかでのうのうと暮らしている、と思うと腹も立つけど、それもこれも、父さんがだらしなかったから、こんな目にあわされたとも言えるんだ」

「僕が知ってる金は、そんなことする人とは思えなかったけどね。だけど口惜しいじゃない。父さん金を探そうよ」

　孝一は、座り直して言った。

「父さんだって、あらゆる手を尽くして探したさ。でも、あいつの実家にも連絡がないし、昔からの友達にも聞いてみたんだけど、皆、知らないというんだ。だから、もう金を探すのは諦めた」

「………」

　孝一は、金運転手の一見、誠実そうな風貌を思い浮かべた。何か言わなければ、と思ったが言葉が出てこない。

「父さんは、生まれてからこんな貧乏をする経験は全くない。今は自分の実力のなさをいやと言うほど感じさせられているんだ。貧乏は、人間を駄目にしてしまう。世間の人が父さんのことを、全員で敵視しているようにまで思えるんだ。このところ、人と話をするのも怖いくらいだよ。言葉がうまく出てこなくて、父さんの気持ちが伝わらない」

　消極的になっている父親を見るのは、孝一にはとても辛かった。しかし、子供心にも父親の苦悩が手に取るように理解できたのだ。

「父さん、僕たちは父さんの仕事を邪魔しないように、わがままは言いません。善は曽おばさんとうまくやれると思うよ。だから父さんは、僕たちのことを気にしないで頑張ってください。早く一緒に住めるように……」

　父親がテーブルを廻ってきて、孝一の横に立ち、覆い被さるように抱きついてきた。

Ⅳ

　日曜日を選んで、孝一と亨竜は父親に連れられて、白家を訪れた。

　孝一と亨竜が寄宿する白家は竜山の、市内バスターミナルの裏手にあった。

　さほど新しくはないが、戦火を免れたようで、重厚なレンガ造りの豪邸である。

　家族構成は夫婦と長男、次男の四人に主の両親と六人が住んでいる。

　部屋数も六部屋と多く、孝一と亨竜のためにひと部屋が提供された。

　白熙正社長は、父親とほとんど同年代で妻女はかなり若かった。子供は二人、国民学校一年生の永九、年子で来年から国民学校の永吉。ふたりとも身体が大きい方だった。

　何不自由なく、闊達に育っているせいか明るく元気な男の子だった。

　白社長も、妻女もやさしそうで、いつもにこやかに微笑を絶やさない人だった。

　居間は広く、一段高くなったオンドルが通路をはさんで両側にある。そこで家族全員が寛ぐのだ。

　日曜日の昼下がりなので、年寄り夫婦を除いて全員が集まっていた。

「李さん。家ではたいしたことは出来ないかも知れないけど、孝さんも竜さんも、自分の家にいるつもりで暮らすんだよ」

　白社長が、全員を見回していった。

「この子たち、嫌いなものは何かしら。遠慮無く言ってもらった方が作る方としては、いいのだけれど」

　妻女が言う。

「このふたりに好き嫌いはないはずです。そんなわがままは言わせません。何でも食べさせてください。ふたりともそうだよな」

　父親が、妻女に向かって言った。

「えらいわね。うちの永九も永吉も好き嫌いが激しくて。少しは孝さんたちを見ならってほしいものだわ」

「母さん、僕は絶対に嫌いなものは食べないからね。な、永吉もいやだよな」

　長男の永九が口をとがらせて言う。

「わかりましたよ。どうせ作っても食べないのなら用意しないわ」

　孝一は、一見なんでもない家族の会話の中に、このところ感じていない一家団欒の匂いを、敏感に受け取っていた。

　父親は、二人を預けて、割合あっさりと帰っていった。

　父親が帰ったあと、孝一も亨竜も白社長家の会話に入ることができなかった。

　決して楽しげな会話でないのだが、やはり幸福な家庭にのみ交わされるものに感じた。

　会話に混ざることができない孝一は、身の置き場のないような気分に襲われていた。亨竜が飽きて騒ぎだすのを怖れたが、それは杞憂にすぎず、おとなしく座っていた。

　そのまま、夕食となったが、妻女の料理は特に美味なものではなく、こんな豪邸に住んでいる金持ちにしては、質素に思えた。

　食後も、白社長家の団欒は続き、孝一の手もち無沙汰も限界に近くなった。

　それまで、我慢していた亨竜が、とうとう泣き出してしまった。

「父さん、僕を連れにきて。僕、父さんと一緒に寝たいよ」

「竜、泣くんじゃない。そんなことを言うと、兄さん、困ってしまうよ」

　孝一は、泣きじゃくる亨竜を抱いてやった。

「おい、永吉。こいつ男のくせに泣いてやがるぜ。父さんと寝たいだってよ」

　国民学校生の永九がわざわざ亨竜の前にまで来て、指さしながら言った。

「竜はまだ小さいから仕方がない。初めての家に来たんだ。怖いのも当たり前だよ」

　孝一は、亨竜の肩を抱きながら反論した。

「やーい、泣き虫。男なら涙なんか見せるんじゃない。オレなんか絶対に泣かないぞ」

永九が、憎々しげに言う。

「永九、少し静かにしなさい。永吉もだ。竜くん、ごめんな。こいつら、なんにもわかっていないんだよ」

　白社長が、少し声を荒げて永九に注意を飛ばした。

「孝さん、あなた方の部屋に連れていってあげる。荷物を持ってわたしについてきて」

　妻女が先に立って廊下を歩き出した。孝一は両手に荷物を持ち、あとに続いた。

Ⅴ

　こうして、孝一と亨竜の居候生活は始まった。しかし、ここを孝一の住所に出来ないため、孝一は学校に通うことができなかった。

　数日は平穏に推移した。食事は家族のものと同じで、食卓も一緒だった。

　長男の永九は学校に行き、次男の永吉は最初のうちこそ何度か、孝一たちの部屋に来たが、遊べる玩具も持たない亨竜に興味を失ったのか、顔も出さなくなってしまった。

　孝一と亨竜は、食事のとき以外は自分の部屋にこもって、時間を費やした。

　ときにはふたり連れだって、バスターミナルに行き、バスの発着を飽きることなく眺めたり、バスが残す排気ガスの匂いに顔をしかめたり、少し先の灯台まで行って、ゆったりと流れる漢江を観察したりした。

　部屋にいるとき、孝一は全谷の李玉城からもらってきた小学六年生の教科書を、繰り返し学んだ。学科によっては教科書に書かれている文言の一字一句まで記憶するようになっていたのである。

　学校に通いたい欲求は、日増しに募っていった。独学で学んだカリキュラムを、実際の教室で試してみたかったのだ。

　このことを父親と相談するには、夜か休日しかない。孝一は、日曜日の午後、鐘路二街の事務所で父親と会うことにした。

　昼食を終えて、亨竜に一緒に行くかと訊いたところ、二時間以上も歩くのは嫌だというので置いていくことにした。

　十月も末になると、日陰に入れば涼しさを通り越して、肌寒さを感じる。

　急ぎ足で歩いても、汗ばんだりしない。行き来する路面電車を横目に、ソウル駅を経由して鐘路道を右折する。すぐに中華街だが何故か新鮮に孝一の目に映った。

　事務所では父親と曽栄淑、善が待っていた。善は栄淑に寄り添ってはいるが、馴染んでない様子が窺えた。

「孝一、白さんの家はどうだい？　おじさんもおばさんも優しくしてくれるだろう。子供たちとは仲良くなったか」

「おじさん、おばさんは親切だよ。永九と永吉の兄弟とはほとんど遊ばない。永九は学校に行ってしまうし、永吉はおばさんといつも一緒だから。僕たちは、自分たちの部屋ですーっといる。僕は六年生の教科書で勉強したり、竜に本を読んでやったり……」

「どうして、竜さんは一緒じゃないの？」

　栄淑が訊いてきた。

「うん、ここまで歩くのが嫌だって。だって電車に乗るお金がないから」

「あなた、孝一さんにお小遣いを上げていないの？　いくら白社長の家にお世話になっているといったって、お金がなければ……」

「白社長のところにいれば、いらないと思っていた。学校に通っているのではないし、三度のごはんは食べさせてもらえるからな」

　この辺が、父親の世間知らずというかおおらかさというか、浮世離れしたところだった。

　孝一には善と亨竜を迎えに行く前、父親からもらった昼食代を貯めたお金が僅かではあるが残っていたし、それよりも、弾丸を売って稼いだお金が三万ウォン、全谷のおばさんから返ってきているのだ。

　現実にこの金がどれだけの価値を持つのか正確な判断はつかなかったけど、少なくとも家族全員が住める家を借りるのに最低限必要な額を軽くクリアしてることは知っていた。

「父さん、その学校のことだけど、そろそろ戻らないと再来年春、卒業はできないんじゃないかな。僕、学校に行きたい」

　孝一は、今日の訪問の主目的に触れた。

「それなんだけどな。白社長の家から通うわけにはいかないんだ。あそこを孝一の住所にはできない。栄淑おばさんのところで住所を届けると、昌信洞の学校に通わなければならないんだよ。竜山からは二時間以上かかる」

「僕、二時間以上かかってもいい。学校さえ行ければ、皆より絶対に勉強ができる自信はあるんだ」

「一年近く、学校に行ってなくてもか。どこでそんなに勉強したんだ」

「今年の四月から。玉城がいらなくなった教科書を全部もらって勉強したんだ。何回も何回も繰り返して。だから全部わかるし、算数なんかは完璧だよ」

「孝一、本当に済まないけど、学校はもう少し我慢してくれ。皆で住めるところが用意できたら、正式に登校させてあげる」

　善に、この話し合いの内容が理解できたのだろう。栄淑の胸に顔を埋めて泣き出してしまった。

Ⅵ

　栄淑おばさんから――電車に乗って帰りなさい。と五百ウォンをもらって竜山に帰った。

　路面電車に、とも思ったが、自然に足が動き、徒歩でソウル駅への道を辿った。

　ソウル駅前の広場では、靴磨きが大勢、商売をしていた。首から道具の入った箱をつるし、手に丸椅子を持って声をからしている少年がいれば、駅舎の壁に沿って肘つきの椅子を設け、商売の基点としている男もいる。

　人々のところを廻って声をかけている少年に――僕も靴磨きをやりたいんだけど、どこに行けばやらせてもらえるの？。と訊いたが白い目で一瞥され、答えをもらえなかった。

　今日の会談を振り返りながら、歩いて竜山の白家に着き、あてがわれた部屋に行った。

　中から、はしゃいだ声と湿った肉を打つような音が聞こえてきた。それにかぶさるように子供の泣き声がする。

――竜だ！。

　孝一は部屋に飛び込んだ。そこには信じられない光景が展開していた。

　部屋の中央に、腹を天井に向け肘と脚でブリッジ状態になっているのは亨竜だった。

　上に永吉が馬乗りになり、亨竜の顔を平手で殴っている。その横で腹ばいになり、背中に手を入れて支えているのが永九だ。

　永九は、亨竜を助けているわけではなく、永吉が乗れるようにサポートしているのだ。

「何をしている！」

　孝一の大きな声で、永吉は飛び降り、永九は手を引いた。

　亨竜は仰向けになって大の字に倒れた。

　孝一の顔を見て、火がついたように泣き出す。孝一は、亨竜を抱き起こした。

　白家の兄弟ふたりは、上目遣いに孝一を見ると壁際まで後ずさった。

「あんた方、お兄さんなんだから竜をいじめないでよ。可哀想じゃないか」

　孝一が激した感情を無理に抑えつけて、静かにふたりに言った。

「お前たちは厄介ものなんだ。父さんと母さんが言ってた。いつまでいるんだろうね、って。厄介ものは罰を受けるのが当然だ」

　孝一は、思わず右手で握り拳を作った。しかしそこで考えた。

――こいつらを殴るのは、わけがない。そうすれば、こんな無茶ないじめを竜にしなくなるだろう。でも、父さんの立場はどうなるんだ？　ここは我慢のしどころだ。

　孝一は、握った拳を開いた。

「兄さん、こいつらは僕に馬になれ、っていったんだ。そして二人で僕に乗ったんだよ。僕が重くて腹這いになると、又、起こして乗るんだ。最後は亀になれ、って……」

　亨竜が泣きじゃくりながら告げる。

「そうか……」

　それ以上の言葉はなく、亨竜を抱き締めるのが精いっぱいの孝一だった。

「おい、厄介もの。お前たち、いつ出ていくんだよ。金も払わないくせに飯ばかり食いやがって」

　永九が、ふたりの前まで出てきて、後ろに手を組み憎々しげに言う。

「………」

　この言葉に、反論はできなかった。亨竜は永九の目をじっと見つめていた。

「何だよ、お前の目は。文句あるのか」

　永九が、いきなり亨竜の頬を平手で張った。

　悲鳴に近い声で泣きだした亨竜は、今度は泣き止まない。泣き声は大きくなっていきとどまるところを知らなかった。

「うおーっ！」

　遂に我慢の限界を超えた。孝一は叫び声を上げた。白家の兄弟が飛びすさる。

　しかし、孝一の平手は、永九と永吉ではなく、亨竜の頬に炸裂した。

「………」

　一瞬泣きやんで、驚いたように孝一の顔を見た亨竜は、再び激しく泣き出した。

「お前が泣いたら、ここの兄さんたちが困るんだ。竜、泣くんじゃない」

　心の中で殴ったことを詫びたが、亨竜に通じるわけがなかった。

　亨竜は声を出すのを抑えた。泣きじゃくってはいるが歯を食いしばっている。

「やーい、泣き虫。男だったら泣かないでかかってこい。いつでも相手になってやる」

　勝ち誇ったように永九が言う。その言葉尻に乗るように永吉が寄ってきて、頭を拳固で張った。また、亨竜が泣き出した。

　兄弟は精いっぱい膨らんで、肩をゆすり、部屋から出ていった。

　兄弟が立ち去ったのを確認して、孝一は亨竜を抱えて部屋を飛び出した。

　靴も履かさず自分だけ靴を履き、川が見える場所までゆく。

　享竜を抱きしめて言った。

「竜、ごめんな。痛かっただろう。兄さんはあのふたりをぶん殴りたかかった。でも、そうしたら父さんが困るんだ。本当にごめん」

　ここで、こらえきれなくなった孝一が号泣した。つられて亨竜も泣いた。

　ふたりは、時間の経過も分からず、抱き合っていつまでも泣いていた。

　この日を境に、白家の兄弟は亨竜を虐めるようになった。大きな孝一が、絶対に自分たちを殴らないとわかったからである。

　いくら孝一の腹が立っても、居候の身であれば、この兄弟を殴るわけにはいかない。

　情けない話だが、このいじめから逃れるためには、兄弟で表に出て歩き回るより方法はない。

　孝一と亨竜の姿は、頻繁にバスターミナルや、橋の上で見られるようになった。

Ⅶ

　常時、外にばかりいるわけにはいかない。部屋にいるとき、ふたりが入ってくると悲惨な状態になった。

　孝一がいつも、睨みを利かしていると少しはたじろぐのだが、手を下さないことを知っているので、平気で亨竜を痛めつけた。

　最初のうちは平手で頬を張るビンタだったのが、拳固で顔や腹を殴るようになり、このごろはどこで習ってきたのか、蹴りを繰り出すようになってきた。手加減を知らない永九の蹴りは、幼い亨竜にとって危険でもある。そこで孝一が、身をもって亨竜を護ると、その蹴りは孝一の身体に当たる。

　普通だったら、六年生の孝一だ。国民学校低学年の蹴りなどは避けることもできるし、そのまま受けても全然こたえないのだ。

　反撃されないけど、ダメージを与えられない孝一を相手にしても、つまらないのだろう。ターゲットはあくまでも亨竜に絞られた。

　亨竜に生傷が絶えなくなった。どんどんエスカレートしていって、拳固で殴ったり棒を使ったりして痛めつける。

　いじめを楽しんでいるようなこの二人を見て、孝一は我慢の限界は時間の問題と捉えた。

　夕食後、部屋でくつろいでいるところに薄笑いを浮かべた兄弟が入ってきた。

「おい、泣き虫の厄介もの。お前たちはいつ出ていくんだよ。母さんが困ってるんだ」

　亨竜の胸ぐらを掴んで、引きずり出す。

　そして永九が手に持った七〇センチほどの角材で、亨竜の腹に横殴りの一撃を加えた。そして角材を頭上に振りかぶる。ここから頭を避けて、肩に角材を振り下ろすのだ。

　角材が振り下ろされる寸前、孝一は亨竜を突き飛ばして角材の下に身を投げ出した。

　慌てた永九が振り下ろした角材は、孝一の額で乾いた音を立て、跳ねた。

　額から一筋、血が流れ出した。すぐに前の血を押しのけるように次から次ぎへと血が噴出し、顔面を真っ赤に染めた。

「兄さん、血、血が……」

　亨竜が口をパクパクさせて叫ぶ。

　永九は、ことの重大さに気付き、棒を手にしたまま放心状態だった。

「母さん！」

　永吉がはじかれたように、部屋から飛び出していった。

「永九、これまで我慢してきたけど、ここまでやられたらもう終わりだ。手前、これまでの恨みを全部返してやるぜ」

　孝一は、永九の胸ぐらを掴んで引き寄せ、思いっきり顔を張り飛ばした。永九は部屋の真ん中で大の字に倒れる。

　それでも平手打ちにしたのは、永九に怪我をさせないように、との孝一なりの計算だったのである。

　白家の妻女が部屋に入ってきた。血まみれの孝一の顔を見て、眉をしかめる。

「おばさん、誰かにこの傷を見られると、永九くんが、僕を角材で殴ったことがわかってしまうけどいいのですか？　僕なら大丈夫です。でも、聞いているかどうか。永九くんと永吉くんは亨竜を徹底的に虐めました。もう耐えられません。これから父さんのところに行きます。いろいろお世話になりました」

「孝一さん、ごめんね。おばさん、うちの子たちがそんなことしてるって知らなかったものだから……今、薬箱を持ってくるから待ってて。それと李虎範さんには内緒にして。出ていかないで、お願い」

「いいません。もう血も止まったようだから大丈夫です。でも、小さな永九くんを殴ってしまいました。ですから出ていきます」

　妻女は、くどくどと引き留めていたが、最終的には安堵の様子を隠さなかった。

　決して、時間的な余裕がなかったわけでも気分的にせかされていたのでもないが、意識的に何も持たず、鐘路の父親の事務所に向かった。

Ⅷ

　二時間近くかけて鐘路二街の長安ビルに着く。三階の事務所には灯りはついていない。

　父親は多分、事務所の机の上で寝ているだろうと考えた孝一は、事務所前の階段に座り、亨竜も横に座らせていきなり殴りつけた。

　驚いた亨竜は、目論見通りに大声で泣き叫んだ。しばらく待ったが、事務室には一向に電灯が点かない。

　孝一は、泣き叫ぶ亨竜をそのままにして事務所のドアを叩いた。

　五分ほど叩き続けたが、反応はない。父親はこの中にはいないのだ。

　一体、どこで寝ているのだろう。ひょっとしたら曽栄淑のところで善も一緒に……

　この考えは、確信へと変わっていった。

　裸足にコンクリートの冷たさはこたえる。

　孝一は、亨竜にここで待っているように命じると、自分の上着で亨竜の下半身をくるんで表に飛び出していった。

　鐘路道を、何か敷くものがないかと探して歩く。普段ならゴミの中に段ボールだの紙などが捨ててあるのだが、この日に限って適当なものが見つからない。

　ようやく数枚の新聞紙と、段ボール箱ひとつを見つけ、長安ビルの階段を駆け上った。亨竜は、壁に寄りかかって眠っている。

　段ボール箱を解体して敷き、新聞紙と上着にくるまって、兄弟は抱き合って寝た。

「孝一、竜。お前たちどうしてここに……」

　頭上からかけられた声で、孝一が目を覚ました。周囲は明るくなっている。

　父親の顔がそこにあった。

「父さん、済みません。白さんの家を出てきてしまいました。竜が不憫で……」

「孝一、お前、額をどうしたんだ」

　父親が、額にこびりついている血に気がついて訊いてきた。

「これですか。白さんの家の永九に角材で殴られたんです」

「永九って小学一年生だろう。やられっぱなしで逃げてきたのか」

「いや、永九をぶっ飛ばしたから出てきました。竜も腹を棒で殴られて」

「あの子たちがそんなことを……いい子に思えたけどな。まさか角材でなんて」

「性格は最悪です。それより父さん、今、どこに泊まっているんですか？」

「ああ、ちょっとな」

「曽栄淑おばさんのところでしょう。善も一緒だ。僕たちが昨夜必死になって逃げてきたのに」

「お前たちが来るとわかっていたら待っていたさ。出るときに、おばさんのところに電話すればよかったんだ。そしたら父さんにつないでくれる」

　父親は、少しばかり苦しそうに言った。

　このとき、亨竜が目を覚ました。

「竜、白社長家のお兄さんたちにいじめられたんだって？　可哀相に、苦労をかけてごめんな。悪かった」

　父親が、亨竜の頭に手を伸ばしたが、亨竜はその手を払いのけたのである。

「竜、何を怒っているんだよ。そうか、まだ眠いんだな。中に入って、事務所の机で寝ればいい」

　亨竜は父親の顔をにらむようにして、頭を振っている。言葉は一切出さなかった。

「ま、いい。孝一、お前たちが白社長の家を勝手に出てきたら、今晩からの寝る場所がないんだ。又、この事務所の机の上で寝ることになるか……」

　父親の、まるで白社長家から出てきたのはお前たちが悪いといわんばかりの言葉に、孝一はいたく傷ついた。

　少しずつ、父親が嫌いになっていく自分と享竜に気付き、おそろしくなったのも厳然たる事実だった。

**第六章・天幕の悲惨（麻浦）**

Ⅰ

　再び、事務所で夜を過ごす日々が始まった。

　孝一は慣れているが、亨竜は眠っている間も動き回るので大変だった。机の上では落ちると危険なので、床に布団を敷き、父親と孝一で挟みこむようにして寝た。

　しかしこのスタイルも、数日で終わってしまったのである。

　外で時間をつぶして、事務所が空になるのを確認、戻ってきた孝一に父親が言う。

「孝一、やはり会社の従業員から苦情が出て、お前たちを預かってくれるところを何とか探した。ようやく見つかったのが、北でうちの小作人だった朴長老一家が預かってくれることになった。白社長の家ほど金持ちではないけど、気がねなく暮らしていい。お前たちのおじいさんが面倒を見てあげたんだよ」

「又、竜がいじめられたりしない？」

「家族は多いが、みんな大人ばかりだから大丈夫。四人兄弟だけど、全員成人で仕事に出ている。おばさんが留守を守っている家だ」

「じゃ、竜が虐められることはないね」

　孝一は家族全員で働きに出ている、勤勉な一家を想像した。

「明日は日曜日だから、父さんがふたりを連れて行ってやれればいいんだけど、一時に大事な仕事の打ち合わせがあって時間が足りないんだ。朴長老一家は教会に行っているらしい。孝一は、全谷からひとりで父さんを探しに来たくらいだから、麻浦に竜を連れて行くくらいは何でもないだろう。父さん、全然心配はしていない。三番の路面電車に乗って終点が麻浦だ。漢江の麻浦灯台の近くだから、すぐわかるよ。ここに地図を書いておいたから、これを見て訪ねてくれ。父さんも朴長老の家に行ったことがないんだ。時間が取れ次第に、挨拶方々、訪ねていくと伝えてくれ」

　父親は、一枚の紙片と路面電車のひとり分の子供料金、何かあったときにと二百ウォンを手渡してくれた。

　地図によると、これまで置いてもらっていた白家から西にかなり離れており、漢江の麻浦灯台を目標に行けばいいようだ。

　孝一はあくまでも、家族全員で住むことを夢見て白家でのいじめに耐えてきたが、現在の状況では、孝一の理想とする形は無理なこともよく理解していた。

　父親は、明日は日曜日でも仕事ということで連れて行けないという。たしかに、今、会社が大事な時期に来ているときであることはわかっていた孝一は、その状況はある程度、予測の範囲として捉えていた。

　翌日曜の朝、孝一は亨竜の手を引き、路面電車に乗って麻浦に向かった。

　行き先に関する地図と、片道の電車料金と小遣いはくれたが、二人を預かってもらう金銭などは、まったく用意されていない。

三番の路面電車は終点の麻浦に着いた。地図からいくと灯台があってその横に目指す朴家があるはずだが、いくら探しても、それらしい家はなく、ただ大きなテントが張ってあるだけで、建物はないのだ。

　孝一はやむを得ず、川岸から近い民家に入っていった。

「すみません。朴漢柱さんのお家を訪ねてきたのですが、どこでしょうか」

「朴さんの家かい？　男の子が四人いるところだろう。堤の上から灯台が見える。その横のテントが朴さんの家だ。多分、今は教会にいっているので誰もいないと思うよ」

「あのテントですか……どうもありがとうございました。いってみます」

　孝一は考えていた朴家とのギャップに、大いに戸惑っていた。

――今はいいけど、真冬になったら寒いだろうな。オンドルはないだろうし……。

　近づいてみると、テントの大きさはかなり大きなものだった。

　回りを一周してみる。南側には葦で囲ったあばら屋がある。葦を透かして中が見えているが、家具の類いは何もなく、軍隊の払い下げらしい折り畳みのパイプベッドがひとつ置いてあるのが見えた。

　さらに迂回を続けると、入り口のような場所があった。といっても、テントの垂れ幕をめくって中にはいるようになっているだけだ。

　その幕をめくり、孝一は声をかけた。

Ⅱ

「ごめんください。李虎範の息子、孝一といいますが……」

　声をかけたが、返事がない。

　もう一度、少し大きな声で案内を求めた。

　テントの中は、外が上天気なためにかなり明るいが、窓などからの採光はなく、はっきりと内部の様子が見えなかった。

　入り口の幕から一歩中に入ると、そこには廃材などの板が敷いてあり、それにつまずいて孝一は転びそうになった。

　手を引かれている亨竜も、不安げな顔で孝一の蔭から中を見ている。

　目が慣れてきて、テント小屋の中がよく見えてきた。三十平方米ほどの広さがあり、床には雑多な種類の板が敷かれていて、隅に布団などが積み上げられている。

　机は簡単なものがあるが、タンスなどの家具は見当たらない。

　家の場所を教えてくれた人の言う通り、朴家の人は誰もいないようだ。多分財産のようなものは何もないのだろう。

　たしか、さっきの家の人は教会に行っていると言った。教会ということになればカトリック教のことであろう。

　家族全員が礼拝に行くという。孝一のイメージに論山教会の荘厳なミサの儀式が浮かんだ。神父の聖餐式を孝一が補助している。

　母親が亡くなり、父親が出奔した。善と亨竜の口を充たすためにダリオ神父の助手としてミサの手伝いで毎朝、教会に通ったことを思い出した。

　そして、全谷の李中佐の家で世話になった半年は、厳しい試練だった。

　しかし、少なくとも寒さに対してはストーブやオンドルできちんと対処してあり、室内では寒さを感じることはなかった。

　ところが、このテント小屋は寒さにはどうだろう。たしかにテントの中央に薪のストーブがあるが、それが唯一の暖をとる手段のようだ。

　さすがに陽のある日中は温暖だけど、夜になると、ソウルはもう寒さがつのって、暖房がなければ過ごせないのである。

　竜山の白家でも、室内で寒さに震えることはなかったはずだ。

　このテント小屋は、取りあえず直接の風は防げるかもしれないが、外部からの冷気や凍てつく地面からの寒さは、遠慮会釈なく入り込んでくるだろう。

　内部を見回す。どこにも電灯や灯りらしきものは見当たらない。

　どこからともなく、異様な臭気が孝一の嗅覚を襲った。

　どこを見ても、手洗いは設けられていない。しかしこの異臭は排泄の匂いではない。酸っぱく饐えたような匂いは不快だった。

　家人が留守では、訪問した目的が果たせない。かといって帰るわけにもいかないのだ。

　とりあえず、孝一と亨竜は、テント小屋を離れ、迂回して灯台の方に向かった。

　鐘路を朝早く出てきたので、まだ昼には時間があった。

「兄さん、あそこ、臭かったね。僕、あの布の家、嫌いだよ」

　亨竜が歩きながら言った。

「うん、何のにおいだろう。兄さんも好きじゃない。それより家の人たち、いつごろ帰ってくるんだろう」

　灯台に上る階段に腰をおろした。

　孝一が知っている教会の儀式は、平日は早朝にミサが終わるが、日曜日の礼拝は、午前と午後の二回に分かれていた。

　今、教会に行っているとすれば、お昼には帰ってくるはずだ、と孝一は読んだ。

　階段に座っている二人と、テント小屋は同じレベルにあり、入り口が見通せる。

　孝一は入り口から目を離さずに、亨竜の肩を抱いた。

　先程、ここに座ったときにすぐ感じたのだけど、川の近くの空気は澄んでいる。

　川面から吹きつける風が、とてつもなく爽やかに感じられた。

　孝一には先程までのことが悪夢を見ているように思えた。

　あのテントでは、とても普通の生活ができるとは思えなかったのである。

　亨竜も、その辺を微妙に感じているのか孝一の手を強く握り締めて無言だった。

「竜、白さんの家には永九と永吉がいていじめられたけど、ちゃんとしたお家だった。あの朴さんのテント小屋は、冬になったらどうなるだろう。寒いだろうな」

　孝一は亨竜の頭を抱いて話しかけた。

「でも、少しくらい寒くても、白さんの家よりいいよ。永九や、永吉にいじめられたり叩かれなければ痛くないもん」

　亨竜の黒目がちの瞳が、何かを訴えているのがありありとわかった。

　父親は、北の実家が大変に面倒を見てあげた朴家ということまで話してくれたけど、このようなテント小屋が住まいであるとは言わなかった。

「竜、父さんは朴さんの家がテントだということを知らなかったと思うんだ。多分、朴さんのおじさんが、僕たちを恩返しで預かってくれるといってくれたので、頼んだだけだよ。もしあの家のことを知っていたら、父さんは僕たちを預けなかっただろうな」

　少し難しかったのか、ただ孝一の顔を見上げているだけの亨竜だった。

Ⅲ

「兄ちゃん、お腹が空いた」

　亨竜が、遠慮がちに孝一の袖を引いた。

　空を見上げると、太陽は真上にあり、昼盛りになっている。さすがの孝一も空腹を覚えた。

　鐘路を出たのが早かったので、中華料理の揚げパンを道々、歩きながら食べただけだ。

　こんなときのために父親から二百ウォンを預かってきている。しかし、このお金を今日、早速遣うわけにはいかなかった。これからどんなことがあるかも知れない。

　それに、どこに行けば食べるものを売っているか知らなかった。

　孝一としては、ここは亨竜に我慢をしてもらわなければならない。

「竜、お兄さんもお腹空いたよ。でもここの家の人が帰ってくれば、お昼は食べさせてもらえる。何しろおじいさんが大変なお世話をした家らしいから。少し我慢してね」

「うん、僕、我慢するよ。きっともうすぐ帰ってくるよね」

「お祈りに行っているのなら、帰ってくる」

　孝一は亨竜の身体を抱き締めた。

　ところが、いくら待っても帰ってくる様子がない。少しずつ空腹に、川幅五キロと広い川の風がこたえてきた。ただひたすら待つより方法はない。

　何時間経過しただろう。ここから動くわけにいかない孝一と亨竜は階段に座り尽くしてひたすら朴一家の帰りを待った。

　漢江から吹いてくる風が、肌寒さを覚えさせる。孝一は灯台から見える朴家のテント小屋を眺めた。

　夕闇が迫りつつある中、テントにうっすらと明かりが見える。

「竜、兄さんは気がつかなかったけど、あのテントに誰か帰ってきたか？」

「うん、最初にお兄さんみたいな人が入っていって、ちょっと前、おじさんとおばさんが帰ってきたよ」

「そうか、家の人が帰ってきたんだ。じゃ、行ってみようか」

　孝一は、亨竜の手を引いてテント小屋に向かって歩き出した。

　入り口の垂れ幕は、先程経験済みである。めくって頭を中に入れた。

「ごめんください。李虎範の息子、孝一と亨竜ですが、朴さんのおじさんはいますか？」

　テントの中は、練炭ストーブに火が入っていてほの暖かく、中年の夫婦とまだ若い青年が三人、板の上に座り、机に向かっている。

　主らしいおじさんが、立って入り口に来た。

「孝一くんか、お父さんから聞いている。よくおいでなさった。わたしたちは北の羅南で、君たちのおじいさんにひとかたならぬお世話になったんだよ。その恩返しをするときがようやく来たんだ」

「そうよ、皆で死のうかと思っていたときにおじいさまが食べ物とお金を下さって、私たちは南に逃げることができたのよ」

　おじさんが、孝一に話しかけたあとを続けて、おばさんも言った。

「うちは今貧乏で、ぜいたくはできないけれど、長老教の朴泰善教祖様のおかげで幸福な毎日を送っている。何か世のためになることを、と思っていたところに李虎範さんと会ったのだよ。息子二人を預かって欲しいと」

「わたしも教祖様のお引き合わせだ、と思ったわ。こんなことで李さんの大旦那に恩返しができるのですもの。うちに気兼ねすることはないのよ。自分の家にいるつもりで暮らしてちょうだい」

　おじさんおばさんも、親切そうな顔つきをしている。お兄さんたちも快活でとてもいい雰囲気だった。

　ただ、家の人のムードはいいのだけど、食べ物の匂いなのか、甘酸っぱいような、何ともいえない異臭が鼻をついてくる。

　ストーブの上では、大きな鍋が盛大な湯気を立てているが、そこから食欲をそそるような匂いは漂ってこないのだ。

「孝一くん、亨竜さん。どこでもかまわないから布団に座っていいよ。家ではこれから先週の反省と、今週の計画を立ててそのあとで夕食になる。今日来ると、お父さんから聞いてなかったから礼拝に行ったけど、君たちはいつから待っているの？」

　おじさんが訊く。

「お昼前には着いてました。それから灯台の階段にずっと座っていたのです」

「じゃあ、ずいぶん待ってたんだね。お昼は食べたの？」

「いいえ、どこで買えばいいか、分からなかったから食べてません」

「それは大変だ。では反省と最後の祈りを早く済ませるからね」

　おじさんは孝一に向け話しかけると、西の空に向けて指を組み合わせ、なにごとか口の中でつぶやいた。

　指を組むところまでは、孝一か知っているカトリック教のミサに通じるが、そのあとのお祈りは、まったく異質のものだった。

「さて、先週はみんなが頑張ったおかげで六千五百ウォンも寄進できた。教祖様も大変お喜びなっていたのは皆も見ただろう。今週もみんなで一所懸命に頑張って、一日も早く礼拝の都度、一万ウォンくらいは寄進できるようにしようじゃないか。そうすれば念願の教団幹部昇進も見えてくる」

　孝一は驚いた。論山の教会でも礼拝の都度献金はあるが、普通は小銭である。

　それが六千五百ウォンという大金……この教会は一体どうなっているんだろう。

「こうやって元気に働き、お金も稼げるのも朴泰善教祖様のありがたいお心とお教えのおかげだ。皆で感謝のお祈りを捧げよう」

　おじさんが山の方を向いて叩頭する。

　全員が何ごとかつぶやいていたが、何とも晴ればれとした表情で机に向き直った。

　ここで改めて、家族の紹介があった。

　当主となる夫妻は朴漢柱と金希羅、長男は朴相泰、次男は相吉、三男は相憲、一番下が相亜。この相亜は少し知恵遅れで、仕事には出ていないそうである。

　異臭が強くなった。これは末の息子が葦の小屋から入ってきた途端、襲ってきたものである。なんとも形容しがたい臭気だった。

　そして食事である。朝からなにも食べていない二人は、凄い空腹だったので、供された粟混じりのご飯も、おかずはキムチだけで十分だった。夢中で食べ、なにやら、野菜が浮いているだけの味のないスープもご飯と一緒に呑みこんだ。

　食生活で贅沢をしていたわけではないが、朴家の食卓は想像を絶する貧しさだった。

　食べ終わったとき、隣で凄い勢いでご飯をかきこんでいる相亜から漂ってくる、表現しがたい凄い悪臭に孝一は吐き気を催した。

Ⅳ

　朴長老家の家族は、人間的に素晴らしい一家である。唯一、困ったのは家族全員で懸命に働き、それなりの収入はあるのだが、朴一家の信じる宗教がカトリック教系のいわゆるカルト的なものだったことである。ソウルの麻浦にある丘陵の中腹に本山が設けられた長老教、朴泰善師がカリスマ的な教祖で、熱烈な信者が競って喜捨を争うのだ。

　教祖が、信者の病を治すという触れ込みで患部を掌でさすると、信者はあたりはばからず大泣きをする。そのときだけは治ったような気になるようであった。

　その教団の慣例は、その家の収入の九割を教団に寄進するというもので、このような常識外の条件を異常と思わないところに、この教団の怖さがあった。

　朴家の青年たちは、土木工事や建築現場で肉体労働に従事、身を粉にして働き、父親は工事現場の清掃片づけなど、もっぱら身体を使う作業で日銭を稼ぎ出していた。

　普通ならば、大人が四人で働いており、かなりの生活ができるはずだが、何といっても全収入の九割を教団に自発的に持っていくのではどんなに働いても食べるにこと欠くような状態となるのは、自明の理であった。

　このテント小屋は、河川敷の中に不法に居座っているもので、風呂はもとより手洗場すらないのが現状である。

　小用は石油缶に取ったり、何とか物陰で済ませていたが、大の方は困った。

　外で働いているおじさんと三人の兄弟は働いている工事現場で、必ず用を済ませてきたけど、いつもテント小屋で過ごしているおばさんと知恵遅れの末弟、孝一と亨竜は、十数分も歩かなければならない伝導館の教会にいって用を足す始末だった。

　主食は、塩気のない汁に野菜の切れっぱしが浮かんでいて、得体の知れない団子のすいとんが主体だったが、経済的に苦しいときのトウモロコシのスープは最悪だった。

　調味料が使われてないので、味もそっけもない。熱いうちはいいのだが、冷めたら糊に化してしまう。

　とりあえず、腹に納めて空腹を満たすことはできるが、孝一と亨竜には体質的に合わないのか、食べた量のまま、糊のような排泄を余儀なくされる。もちろん、このときは十数分も歩く余裕はなく、漢江河岸の物陰で処理するより方法はなかった。

　なぜ、こんな劣悪な環境で、まだ幼い兄弟が我慢を重ねていたのか。

　ひとつは、貧しくとも目的を見据えて毎日を生きている朴家の家族に共感を覚えたことと、父親の仕事に影響を与えるのを避けたい気持ちが強く、意地でも父親を頼っていくまい、と決意したのが主な理由であった。

　しかし、育ち盛りの兄弟に絶対的な栄養価が不足しているのも事実である。孝一は今年の夏、父親からもらう小遣いを貯めた経験から、昼食抜きでも何とかなった。

　しかし五歳の亨竜に、空腹は地獄の苦しみを招いたのである。

　いつも用を足すのに教会ばかりというわけにもいかない。少し近い市場に行き、三日に一度は手洗いを借りた。

　孝一が手洗いから出てくると、亨竜の姿が見えなかった。いつも孝一の手を握っていないと泣き出す亨竜なので、ひとりでどこかに行ってしまうことはない。

「竜！　どこにいる？」

　孝一は、あまり動き回らずに手洗いの周辺を探した。建物の陰に亨竜はいた。手に持ったリンゴにかぶりついたところだった。

「竜、お前、そのリンゴは……」

　聞くまでもなく、市場の店から失敬してきたことは明らかである。

「兄さん、その先に落ちていたんだ。嘘じゃない、本当だよ」

　亨竜はリンゴを背中に隠して、後ずさりをした。孝一は、思わず挙げた拳を、静かにおろし、弟を抱きしめた。

「いいから、早く食べちまえ。もう二度と盗んだりするな。今度やったら、ぶん殴るぞ」

　言いながら、孝一は胸がつまるような思いに駆られていた。

Ⅴ

　麻浦のテント小屋に来て一ヶ月が経過した。十二月に入ると、寒さも厳しくなる。

　ここにきてから、孝一と亨竜は、朴家の末の息子と葦の小屋で寝ることになった。テントには練炭ストーブがあって、少しは暖かいのだが、葦の小屋には暖房がない唯一、暖をとる手段は湯たんぽだった。それと、灯りも兼ねているロウソクである三人はパイプの折りたたみベッドに孝一と亨竜が頭を並べ、反対側を枕に相亜が寝る。

　寝る前、ベッドに湯たんぽを入れ、ロウソクを毛布の中に持ち込み、相亜と孝一の頭で空間を作って、ふたりで花合わせ（花札の絵を合わせる神経衰弱のようなゲーム）をやる。

　燃える炎というものは、大変に暖かいのだが、恐いのは酸欠になることだ。

　花札ゲームは、あくまでも暖かくなって眠れるまでの助走のようなもので、汗が出てくるまでの時間潰しである。汗が出てくるのは多分、酸欠の一歩手前なのだろう。

　十二月の半ば、その日は風が強かった。葦小屋の屋根は雨をしのぐためにしっかりと密に葺いてあるが、壁に当たる部分は、中から星が見えたり、外から中が覗けることでわかる通り、風は容赦なく吹き込んでくる。

　いつもの方法で、湯たんぽが温かいうちに眠りについた孝一だが、寒さで目が覚めた。

　つま先のところにある湯たんぽが、冷たくなっている。いつもは夜中に目が覚めたとき、ほんのり温もりが残っているのだが、珍しいこともあるもので、それだけ今夜の寒さが厳しいのだろう。

　孝一と亨竜は、お互いの体温を保つために上半身、抱き合って眠っている。

　ところが、頭を反対側にして寝ている相亜の大きな足が、ときにはふたりの上に乗ってくることがある。

　ベッドの幅が約百二十センチ、子供ふたりとはいえ、三人が寝るのには無理があった。相亜の足で目が覚めているうちはよかった。

　この日の寒さは、いつものパターンを、大幅に変えてしまったのである。

　葦のすだれの隙間から朝日が差し込み、その光が孝一の目を射て目が覚めた。

　ほとんど同時に、亨竜も目を覚ました。

「兄さん、足が冷たいよ」

　亨竜が腕を巻き付けてくる。

　孝一も下半身、とくに膝から下が凍りつくように冷たいのに気付いていた。

　反対を向いて寝ているはずの相亜はベッドから出て、テントに行っているらしい。

　歯の根が合わないというのは、こんな状態を表現するのだろう。孝一は奥歯を震わせてベッドから降りた。

　膝が曲がらない。寒さで関節が凍結したのかと思ったが、そうではなかった。太腿から下のズボンが凍り、硬直しているのである。

「竜、お前、寝小便したな？」

　起き出してきた亨竜を問いただした。

「僕、オネショなんかしていないよ」

　亨竜のズボンの尻を触ってみた。たしかにズボンの上部は、濡れていない。孝一と同じように、膝から下が凍りついているのだ。

「相亜兄さんだ。だから、ここにいないんだな。竜、早くテントに行ってストーブで暖まろう。そしたら、このズボンも乾く」

　亨竜を抱きかかえるようにして、湯たんぽを手にテントに入っていった。

　テント中央のストーブに、くっつくように相亜が毛布をかぶり、うずくまっていた。

　どうやら下半身は裸のままのようだ。

　ストーブには練炭が、赤々と炎を上げてはじけており、ストーブ自体の鉄板が真っ赤に焼けて、周囲は別世界のように暖かい。

　おばさんが、孝一の手から湯たんぽを受け取って振った。

「あらあら、お湯も凍るような真冬になったのね。昨夜は冷えると思ったわ。相亜が粗相するのも仕方がないか」

　おばさんが、相亜の毛布をかけ直してあげながら言った。

　孝一も亨竜も、ストーブに密着するようにして暖をとった。凍った部分がなま暖かくなり、湯気が立ち出すと同時に、すごい刺激臭がテントの中に充満した。

「臭っせえ。孝一、ズボンを脱いで外にほうり出せよ。竜もだ」

　一番上の相泰兄さんが言う。そう言われても、着替えなど持ってきていない二人に履き替えるズボンや下着はないのである。

　かといって、このまま悪臭に耐えることはできない。長いこと風呂に入っていないので臭いには不感症になってはいるが、このものすごい臭いはたまらなかった。

「川でズボンを洗って、それが乾くまでの間、誰か履くものを貸してくれませんか」

「孝一には大きいだろう。ズボン下なら、裾をまくれば何とかなる。お前のズボンが乾いたらすぐに返してくれよ」

　相泰兄さんが快く、メリヤスの腿引きを貸してくれた。

　孝一は、亨竜のズボンも脱がせて、漢江の川岸に行き、手が切れるほど冷たい川の水で二本のズボンをすすいだ。もちろん、洗剤などある道理がない。

　臭いが感じられなくなるまで、何回も何回も水洗いをして、テント小屋の支柱に干した。二本のズボンは即時、棒のように凍って硬直した。

Ⅵ

　相亜の夜尿症は、この日を境に毎晩のように続いた。天気の良い日はズボンをすすいでも、夕方までに生乾きまでにはなるが、天気が悪かったり雪が降ったときは始末が悪い。

　そのときはやむを得ず、洗ったズボンを皆が仕事に出た留守に、ストーブで乾かす。

　凄い悪臭が残るが、慣れというものは恐ろしい。テント内に満ちている異臭も、さほど気にならなくなった。全員がほとんど風呂に入っていないのだから、体臭や排泄の臭気などがミックスされた凄い臭いなのだが……

　こんなことや、食事の栄養価を別にするとこの一家が二人に割く犠牲は、自然に頭が下がるほどのものである。

　この家族が、父親の実家に持つ感謝の念は筆舌に絶するものがあった。それに加え、長老教、朴泰善教祖のお告げを、信じきっているのだから、推して知るべしである。

　突然、舞い込んできた他人の子供ふたりを家族同然に扱う。中々できることではない。

　しかし、金銭と家族の健康、栄養に関する感覚は、常人とはっきり違う尺度であった。

　朴家で世話になりだして、二カ月が過ぎた。

　年の暮れから年始にかけて、朴家の経済状態が改善されず、例のトウモロコシのスープが食卓に上がる頻度が増えた。

　相変わらず、これとの相性は悪く、食べたら直通に近い状態で排泄するという繰り返しである。亨竜もまったく同じだ。

　基本的な栄養が足りず、孝一もやせ細ってきた。この頃は気力も萎えてきて、教会や市場にいって用を足すことも億劫になった。

　家族が働きに出ているときは、そこにある布団にくるまって亨竜と抱き合い、惰眠をむさぼるのが常であった。

　飲まない、食べないのだから、生理的な現象も最低限で済むが、少し動くとすぐに呼吸が苦しくなり、疲労感に襲われるのだ。

「孝一くん、今日、鐘路で君のお父さんに会ったよ。二人は元気だ、と伝えておいた」

　朴家のおじさんが、帰ってくるなり言った。

「会ったのですか。元気でしたか？　何か言ってませんでした？」

「とても元気そうだった。そうそう、今、話が進んでいる仕事が廻りだしたら、迎えに来る、ってさ。うちはいつまででもいいのだけど、春までには何とか、と言っていたよ」

「春まで来てくれないのですか。がっかりだな……僕、学校にも行きたいし」

　孝一は、このまま春まで数カ月を耐える自信がなかった。

「お父さん、張り切っていたから、仕事はうまくいくんじゃないかな」

　おじさんは、孝一の気持ちも顧みず、のんびりといった。

「父さんは僕たちが、おじさんちに凄い迷惑をかけているの、知ってるのですか？」

「迷惑かけられているなんて、ひとつも思っていないよ。これも神の思し召しだから」

　すべてを神に委ねている朴家は、精神的に豊かな毎日なのだろう。

「父さん、ここに来たことがあるの？　おじさんの家に……」

「いや、一度もない。ここを見たらきっと君たちを預けなかっただろうね。そしたらうちが李さんに恩返しできなくなる」

　やはり、このテント小屋をみていないのだ。多分貧乏はしているのを知っていただろうが、こんな状態は夢にも考えていなかったと推測できる。家の人は全員、善意なのである。信じるところに素直に尽くし、その結果が及ぼすところにまで意識が廻っていないのだ。それが決して悪意でないだけに、始末が悪いともいえる。

　このままでいくと、春まで朴家に世話になるようである。まだまだ寒い日が続くが、あと数カ月、現在の状態で暮らすのは不可能に近く思えた。孝一か亨竜、どちらかが病気になってしまうだろう。

　翌日、珍しく好天気で暖かかった。相亜は昨夜も盛大に夜尿を漏らし、ふたりのズボンを凍てつかせた。

　トウモロコシのスープで朝食とし、亨竜を連れて麻浦灯台の下で、三日ほど洗っていないズボンを水洗いしようとテントをでた。

「兄ちゃん、目が痛いよ。何も見えない」

　さんさんとふり注ぐ陽光の下に出た途端の亨竜が、悲鳴を上げた。

　目を両手で覆って立ちすくむと、しゃがみこんでしまう。

　孝一は亨竜を抱きかかえ、上着を頭からかぶせてゆっくりと灯台の方に向かった。

　そして、いつも腰掛けて漢江の流れを眺める階段にまで来た。

「竜、まだ目を開けられないの。痛いか？」

「うん、痛いけどさっきより大丈夫。お兄ちゃん、ごめんね。、本当に目が痛かったんだよ。お日様がとても眩しくて……」

「そうか、少しはいいんだね。よかった。ほかは痛いところがない？」

「痛いところはないけど、お腹がすいた。僕お肉やご飯を食べたい」

「それは兄さんだって、一緒だ。白いご飯を焼き肉とキムチで……」

　こんな想像をしても、唾液すら出てこないのが哀しかった。

　腕の中で亨竜がもぞもぞと動き、手をシャツの下に入れて掻いている。それを見ていた孝一も、やはりシャツの下で脇腹を掻いた。

　考えてみると、このところの数日、身体中のかゆみで絶えず、全身を掻いていたような気がする。

　昨日の昼、シャツを脱いで調べたところ縫い目のところに白い虫が隊列を作ってしがみつき、蠢いているのが確認された。

　おばさんに見せたら、虱だという。これまで虱にたかられた経験はなかったので、一瞬不気味な恐怖に襲われた。

　現在の状態を考えてみる。

　食べる物に不自由し、弟は栄養失調で、日光の下で眼を開くこともできない。兄弟ともに虱にとりつかれ、気が狂いそうになるほど体中がかゆく、二人でかきむしっている。

　なんとも悲惨な毎日だ。まったく明日に希望を見つけることができない。

　こんな自分たちは、この世に存在する意味がないのではないだろうか。

　いっそ、ふたりで漢江に飛び込んで死んでしまった方が、すべて楽になれる。

　漢江の水面は凍結しているが、岸辺の部分は、まだ水の流れが岸を洗っている。

　さぞ、川の水は冷たいだろう。

　孝一も亨竜も泳げなかった。でも溺れ死ぬより、水の冷たさで心臓麻痺を起こし、一気に死ねるのではないだろうか。

　ここまで考えた孝一は、頭を振って現実に戻った。

　亨竜は上着の中に頭をつっこみ、安らかな寝息を立てている。

　孝一は、もう一度弟の肩を抱き寄せ、一瞬でも心中しようと考えた自分を責めた。

Ⅶ

　この日を境に、亨竜は日中、表に出ることができなくなった。

　太陽が輝いていない曇天でも、目が開けられないといい、痛みを訴えるのだ。

　これは、明らかに栄養失調から来てるものと孝一は考えた。しかし、亨竜を医者に連れて行く費用が、どこからも出ない。

　いくら信心深く、親切で善人の朴家の人でも、医者の代わりはできない。

　おじさんは、この次の礼拝日に亨竜を教団に連れて行き、教祖さまの霊力をもらおうと頑張ったが、孝一は強硬に抵抗した。

　もう限界だった。亨竜は葦葺きの小屋で毛布をかぶり、ベッドから出てこない。

　トウモロコシのスープにも、口をつけないのだ。孝一の問いかけに答える声も、ほとんど聞きとれないようになった。

　このままでは、亨竜が死んでしまうと思った孝一は、最後の手段として父親に助けを求めるべく、行動を起こした。

　本来は路面電車を利用する距離だけど、お金がないために歩くより方法はなかった。

　何時間かかっても、父親の事務所まで歩く覚悟で、何も言わず亨竜を寝かせたまま、テント小屋をあとにした。

　歩き出したのはいいが、すぐに疲れを感じて立ち止まる。栄養のある食べ物をほとんど摂っていないのだから、無理もない。

　とりあえず、ソウル駅までいけばあとは何とかなると思って、歩き続けた。

　どのくらい時間が経っただろう。一時間近く歩いたような気がする。

　ソウル駅を過ぎたところで、とうとう路端に倒れ込んでしまった。

　この三カ月は、麻浦のテント小屋から教会聖堂に手洗いを借りに行くとき、約十分強歩くだけで、ほとんど運動のようなものをやったことがない。

　しかも、エネルギーをできるだけ消耗しないようにゆっくりと歩く。急ぎ足なら五分もかからないところを、倍もかけて歩くのだ。

　しかし、今日は父親に会う目的があって急ぎ足で歩いたのだから、退化した脚の筋肉に負担がかかったのである。

　意識が朦朧となる。目を上げると、孝一は新しい母親と認めていないが、曽栄淑が勤める中央電話局の建物が前方に見えた。

――あそこまで行けば、父さんと連絡がとれる。何とか電話局まで……。

　孝一は、最後の気力を振り絞って立ち上がった。しかし足が出ない。こんなに一歩を踏み出すため、努力が必要と思わなかった。

　肉体的な疲労も限界にきていたが、ひょっとして曽栄淑が泊まり明けで休みではないかという精神的な不安が、孝一の神経を戦かせていたのだ。

　でも、父親に会わなければ亨竜は……という一念が勝って、脚が動き出した。

　よろめきながらではあるが、孝一の身体は中央電話局の正面玄関に近づいていった。

　入り口に上る五段の階段までが、体力の限界だった。そこで孝一は、階段中央に倒れ込んでしまった。

「孝一、どうしたの？」

　死んだ母の声で、呼びかけられた。化粧品の匂いが、少しずつ意識を覚醒させた。

　ようやく焦点が合った視界に、白い貌が形を成してきたが、母の顔ではなかった。

「気がついた？　随分、痩せたわね」

　声の主は夏、孝一が彼女たちの休憩室で本を読んだり、勉強していたとき可愛がってくれた梨花おばさんだった。

「あ、梨花おばさん……栄淑さん、今日は出勤していますか？」

「出てるわよ。それより孝一、病気なの？」

　梨花おばさんは、孝一に身を寄せてきて額に掌をかざした。

「僕、風呂に入ってないし、虱がたかっている。おばさん、触らない方がいいですよ」

　孝一は力なく、梨花おばさんの手を払った。

「栄淑を呼んでくるから孝一、静かに寝てるのよ。わかった」

　うなずいて見せ、目をつむって待った。

　数人の乱れた足音が響き、得もいわれぬいい匂いがあたりを満たした。

「孝さん、どうしたの、こんなに痩せてしまって……竜くんはどこにいるの？」

　栄淑おばさんが、孝一の首に手を回し、抱き上げて訊いた。

「竜は麻浦の朴さんの家で寝ています。凄く具合が悪いんだ。おばさん、僕、汚いから触らない方がいいです……」

「そんな……可哀相に。お父さんに知らせたから、もうすぐ来ると思うけど、こんな状態とは知らなかった。ここは寒いわ、休憩室に行って待ちましょう」

　汚れている孝一にかまわず、抱え上げるようにして建物の中に誘った。

　見慣れた休憩室は、暖かい空気で孝一を迎えてくれた。オンドルの熱で部屋全体が春のように暖かく、心まで平和になる。

Ⅷ

「孝一。お前、大丈夫か！」

　父親が休憩室に飛び込んできて言った。近寄ってくると、顔をしかめて目をそらす。

――栄淑おばさんも、他のおばさんたちもこんな反応はしなかったのに、父さんは……。

　孝一は少し、哀しくなった。

「虎範さん、孝さんの食べるものを梨花さんに買ってきてもらいます。そしてお風呂に入れなければならないわ。そして着るものも……私が服を買ってくるので、あなたはお風呂に連れて行ってください」

　てきぱきと指示する栄淑に、異論もはさまず、父親はただ、ぼう然とするのみだった。

「待ってください。麻浦で竜が死にそうなんです。目を開けられなくて……」

「それは大変。虎範さん、すぐに麻浦にいって竜くんを連れてきて。孝さんはここで少し休ませるから。お風呂はそれからよ」

　栄淑に言われて父親は、はじけ飛ぶようにして出ていった。

　孝一は休憩室で毛布を掛けてもらい、オンドルの温かさで、うとうととしていたが、弁当が届いて目を覚ました。

　梨花おばさんが街で買ってきてくれた弁当は、かなりのボリュームだったが、小食に慣れてしまった胃袋は、受け入れなかった。

　孝一が無心に弁当を食べている間も、栄淑は側に付き添い、肩を抱いて涙を流した。

　それを見ている、電話交換手のおばさんやお姉さんも涙に暮れていた。

　栄淑の涙と抱擁は、たしかに孝一も安らげたが、どんなことがあっても自分の母はひとり、死んだ韓順愛しかあり得ず、彼女を母として認めていなかったのである。

　父親は、タクシーを奮発したらしく、思ったより早く、ぐったりとした亨竜を連れて電話局の交換台、休憩所に現れた。

　亨竜は父親が迎えに来たことを知ると、こんな最悪な体調なのに、テントから出て漢江の土手を滑り降り、草むらに隠れて父親を拒否したらしい。

　このときの気持ちを引きずってか、言葉も発せず、父親の目も見ようとしない。

　孝一と亨竜は父親に連れられ、公衆浴場で、三カ月ぶりに湯を浴びた。垢すりをしてもらったが、子供の孝一や亨竜なのに信じられない量の垢がこそげ落ちた。

　風呂に入っていた小一時間、孝一の口から父親に対して、次から次へと言葉がほとばしり出る。辛い内容もあったが、朴家への不平不満は一切出てこない。亨竜は、相変わらず口をつぐんだままだった。

「父さんはさっき、『朴さん、どうして二人を預かってもらう話し合いのとき、こんな生活してるって言ってくれなかったの？』と強く追求したんだ」

　父親が、問わず語りに話しだした。

「そうしたら『だって、現実を話したら預けてくれなかったでしょう？　それでは大旦那様に恩返しができなくなってしまいます』と朴さんが言うんだよ。たしかに、あの暮らしぶりを見たら預けなかったさ」

　父親はテントを思い出したのか、顔をしかめ、首を振った。

「あんたの家では、家族全員が働いているんだろう。それなりの稼ぎもあるはずだ。こんな暮らしは考えられない。といったら『私たち家族全員は、信仰のために生きているのです。朴泰善教祖様は私たちに幸せをお贈り下さるのです』というんだ。つい、こんな生活が幸福？　不衛生なテントでの生活や栄養失調になるまでの粗食が？　というと『息子さんたちを預かったのも神の思し召し、神様からの試練なんですよ』と平然としている」

「父さん。貧乏なのは朴のおじさんやお兄さんたちのせいではない。本当に僕たちを親切にしてくれたんだもん」

　孝一が実態をフォローしたつもりだった。

　やはり父親は、このテント小屋を見たことも、暮らし向きを聞いたわけでもなかったのだ。実態を見たら、どんなに苦しくてもふたりを預けることはしなかっただろう。

　そんなことで、父親にはこの三カ月間、息子たちが幸福な毎日を送ったわけではないことを十分に理解したのである。

　栄淑おばさんが、孝一と亨竜の着衣一式を浴場の受付に届けてくれていた。

　そして、すっかり見違えるようになったふたりは、中央電話局の休憩室に戻ってきた。

　栄淑おばさんは勤務を交替してもらい、善を呼ぶために家に戻った。

　善も交え、三ヶ月ぶりに家族全員で食べる韓国料理は、焼き肉もキムチも、この世のものと思えないほどの美味だった。

　と同時に孝一、亨竜のふたりには刺激が強く、沢山食べられないのも事実だった。

**第七章・砂上の漢字（釜山）**

Ⅰ

　悪夢のような麻浦灯台脇のテント小屋から、ソウルの中心部に帰ってきた孝一と亨竜は、すべてが夢のような夜を迎えた。

　その夜は旅館で父子三人で寝たが、団欒も一夜限り、毎日旅館暮らしは不可能である。

　すぐに寝床に困ることになった。

　栄淑おばさんの住まいは、いわゆる間借りの形態であり、二〇平方メートルくらいのひと間に簡単な流し台がついているもので、決して、広いスペースといえなかった。

　ここに子供が三人とはいえ、常時四人が寝るのには無理があった。

　部屋いっぱいに布団を敷き、四人で最初の夜を迎えようとしているとき、父親が息せき切って訪ねてきた。

「孝一、明日の朝、列車で釜山に行く。今度は大丈夫だよ。いじめられることもないし、食事だってきちんと摂ることができる。さっき、父さんの中学時代の同級生がきたんだ」

　父親の話によると、友人関係に連絡して孝一と亨竜を預かってくれるところを探していたが、今日、その連絡があったのだ。

「崔烈珠君は、今、韓一銀行のソウル南大門支店長なんだよ。でも、彼が預かってくれるのではない。彼の兄さん、崔義烈さんが釜山で運送会社をやっている。とても仕事は忙しくて、成功しているそうだ」

　父親は、部屋の中央に座るなり、一気にこれだけをまくし立てた。

「その運送会社がある釜山に行くの？」

「そうだ。明日の朝出発すれば、夕方にはつくよ。烈珠の話では、兄さんの義烈さんは五台のトラックを持っているけど、フル回転していて大変らしい。子供も大学二年と、高校二年のお姉さん。中学一年生と国民学校六年の男の子だ。だから、竜もいじめられないし、食事だってきちんと食べられる」

「お姉さんがいるんだ……」

　孝一は、自分より年上の兄弟を持ったことがない。その点は楽しみである。

「それよりも、崔義烈さんの奥さん、李聖美は父さんの妹分なのだよ。本当の意味で今度こそ親戚なんだ」

「父さんの妹？」

「本当の妹ではない。聖美おばさんのお母さんと、君たちのおじいさんは一緒の家に住んで、家族同然の生活を送っていた。だから父さんは聖美のお母さんには、実の息子のように可愛がられたんだ」

「ふーん、そうなんだ」

「そのおばあさんが、釜山で一緒に住んでるんだって。とてもいい人だから、君たちも孫のように扱ってくれるよ」

　父親は、釜山の李義烈の一家には絶対の信頼感を抱いているようだ。

「その社長さん、どうしてふたりを預かってくれるの？　親戚だから？」

　栄淑おばさんが質問した。

「それを話すと長くなるけど、麻浦の朴さんも、おじいさんに世話になったから孝一たちを預かってくれた。それとちょっと違うんだけど、やはり義烈さんも、おじいさんにはひとかたならぬ世話になっている。お前たちのおじいさんだが、とても偉い人だった。解放のずっと前から、毎年数人の出来のいい子を選んで、国民学校卒業と同時にソウルの中学校に私費で留学させたんだ。今日、来てくれた崔烈珠も、父さんと同じ学年で、一緒にソウルの中学校で学んだ」

「私費で？　大変なお金がかかりませんか」

　栄淑おばさんが、座り直して言う。

「それは大変だよ。学費はもとより、住居から、食事の世話まで見るのだから。でも、おじいさんにとって、大したことはない。何しろ、羅南の街ほとんどが、おじいさんの土地なんだから」

「おじいさんは大金持ちなんですね。お父さんもその銀行の支店長と同じ家に住んで、学校に行ったの？」

　孝一は、初めて聞く北の生活に、新鮮な驚きを感じていた。

「いいや、わたしにはソウルの家があってそこに住んでいた。留学生とは別だよ。わたしだって、羅南に戻ればこんな貧乏はしなくても済む。でもここまで頑張ってきたんだから、何とかするつもりだ」

　父親は、決然と言った。

「運送屋の社長さんも、おじいさまのソウル留学生だったのですか？」

「そう、おじいさんがその制度を作った第一期生だよ。弟の珠烈は――兄貴は、ソウルで学ばなかったら、今の自分はない。大旦那に恩返しができるのなら、喜んで二人でも三人でも預かる。といっているそうだ」

　今度の話は、かなり具体的に状況が把握できた。たしかに孝一が考えても、条件は整っていると思える。

「切符は手配できてるの？」

　栄淑おばさんが、善の肩を抱きながら。孝一と亨竜を眺めていった。

「発つ前に駅で買うことにする。仕事のやりくりは済ませた。朝ソウルを発てれば、釜山からは夜行で帰ってこられて、次の日の仕事にはちゃんと出られる。麻浦では失敗したから、今度はきちんと頼んでくるつもりだ。義烈兄さんや聖美、おばあさんにも長いこと会っていないから、楽しみだ」

　父親は、明日の朝七時に鐘路の事務所に来るよう孝一に指示すると、少し名残惜しそうに帰っていった。

　その夜、孝一はほとんど眠ることができなかった。

　麻浦の藁小屋で相亜の寝小便、凍りつくズボン、糊のようなトウモロコシのスープ……いずれもが夢の中の出来事、いや二度と見たくない悪夢だった。

　一連の出来事が、すべて善意の塊というのだから、不満の持って行き所がない。

Ⅱ

　翌朝は、路面電車で鐘路までいき、父親と落ち合ってソウル駅に着いた。

　駅前の広場では、米軍の兵士が通りかかる人を呼び止め、何ごとか質問している。

　三人が呼び止められた。

「あなた方はどこに行くのか？」

　韓国人の憲兵が、問いかける。

「子供たちを、釜山まで送って行く」

　父親の返事に、憲兵は衛生兵に命じた。

「ご主人はいいけど、子供二人は消毒だ。ＤＤＴで殺虫するからそのつもりで」

　返事も待たずに、衛生兵の手が、二人の襟首を捕まえた。

　そして巨大な水鉄砲のようなポンプで、首の隙間からひと押し、白い殺虫剤が盛大に噴霧された。逆流した粉末が襟繰りから吹き出し、顔面や髪の毛を白く染めた。

　昨夜、着衣はきれいになったけど、虱が完全に退治されたわけではないようだ。

　憲兵たちは、何故か殺虫消毒の必要がある人間を識別する嗅覚が、備わってるらしい。

　釜山行きの列車は、急行などはなく一日四本、現在とは違って十時間ほどを要した。

　列車が走り出して一時間もしないうちに亨竜は眠ってしまった。

　そのあとは父親と二人きり。

　物心ついてから、父親とゆっくり、話を交わしたのは、初めての体験だった。

　父親が幼いころ、どんなに恵まれた環境にいたか、そしてソウルでの中、高校生活を経て、日本の大学で学んだこと。

　日本の関東軍に採用され、司令官付きの武官として、満州のハルピンで終戦を迎えたこと、などを孝一に向けて話した。

「韓国では一九四五年八月十五日を、解放の日といっているけど、父さんには日本の敗戦の日としか、捉えられないんだよ。それから父さんのすぐ上の上官だった蓮本大佐の家族と、八路軍やロシヤ軍から必死になって逃れた。大佐は責任上、ハルピンに残ったけど奥さんと子供三人を安全に逃がすのは、至難の業だったんだよ」

　論山にいたときは、まだ国民学校の低学年だったので、そんなこみ入った話を父親と交わす状況ではなかったし、父親自体も軍務から実業の世界に乗り出したところで、ほとんど家にいなかったせいもある。

「満州のハルピンってどんなとこ？」

「いまの中国、東北部になる。ソウルよりもずっと北だから、寒いのも半端ではない」

「夏でも寒いの？」

「さすがに夏は寒くないよ。でも冬は零下三十度を楽に超える。我慢できないくらいに寒いんだ」

「ソウルでも寒いと思うのに、どのくらいの寒さか、僕には想像がつかないね」

「そんなことは想像できなくてもいい。ハルピンから逃れ、国境を越えるのはひと苦労だった。夏だったからまだよかったけど、冬だったらまず不可能だった。上官の家族は四人で二歳のお兄さん、七歳と五歳のお姉さんがいるんだ。奥さんの体が弱くて、無理がきかない。それを、順愛と父さんが支えて、ようやく国境を越えることができた」

　父親は、走り去る窓外の風景に目をやりながら、淡々と語った。

「お兄さんも、今の竜より小さかったんだね。父さんとその家族はどうして逃げたの」

「それは、日本軍が負けて中国の八路軍やロシア軍に捕まったら殺されると思ったから」

「それで、無事に朝鮮に来られたんだ」

「そうだ、何とかな。最初は父さんの田舎の羅南に落ち着いた。でも、父さんは共産主義にどうしても馴染めなかった。半年もたたないうちに、南に行くことにしたんだ。

おじいさんに沢山お金をもらって、ソウルに出てきたのは寒い盛りだったよ」

「日本人の家族は？」

「言葉もできない人たちを、放ってはおけないし、父さんには上官にそれだけの恩義もあったからね、ソウルで一緒に暮らした」

「今、どうしてるの？　その人たちは」

「蓮本大佐は一九四六年の暮れにソウルに戻ってきて、一九四八年に日本に引き揚げた」

「そのときは僕、生まれていたんだね。全然おぼえていないな」

「当たり前だ。お前はまだ、一歳にもなっていなかったんだ。終戦から二年半、一緒に暮らしたんだから、別れは辛かったよ。奥さんなんか大泣きしてしまって……」

「でも、日本に帰れて良かったのでしょう」

「何といっても故郷が一番だ」

「日本ってどんなところだろうな。行ってみたいような気がする」

「父さんが大学に通っていたときと、随分変わったと思うよ」

　父親はなぜか口ごもると、孝一の問いに対する答えにならない言葉で会話を閉じた。

Ⅲ

　列車は一路、釜山に向けひた走る。

　昼どきになって、亨竜を起こし、父親が購ってきたのり巻き弁当を食べた。

　お腹に食べ物が入ると、瞼が重くなる。亨竜はすぐに寝てしまった。

　眠る前にひとつだけ確認しておきたいことがあった。

「父さん、今度は迎えに来てくれる日を約束してください。僕は国民学校に戻るのはソウルでと決めてます。絶対に二学期から学校に行かないと、卒業は出来ません。それでも一年、みんなから遅れてしまうんだから」

「わかった、ソウルで生活する準備もあるだろうから、その時間も見て必ず、夏休み中に迎えに行くよ。約束する」

「お願いします。釜山に着いたら、向こうの家のおじさんにも、そのように伝えてね」

「うん、必ずそうする」

　父親はしっかりと約束すると、目をつぶって眠ってしまった。

　列車が刻む、レールの継ぎ目の単調なリズムに身体を委ねていた孝一も、いつの間にか眠ってしまった。

　夢を見た。母親の死の当日、夜空に見た母の白い貌が幕開けだった。

　そして次にクローズアップされたのは、屠殺場に引かれていく牛の目から流れる涙だった。そして脳天を一撃されて、四肢を硬直させ地響きを立てて倒れる牛の巨体。

　論山教会でも信者の葬儀が幾度も行われたし、全谷の昇り窯で孝一に焼き物を教えてくれたおじいさんの死、この一年半で、死というものに数限りなく直面した。

　それらの夢を続けて見た。

　麻浦で、亨竜が陽の下に出て「目が痛くて開けられない」といったとき、直感的に『このままでは竜が死んでしまう』と判断したことが、ありありと夢で浮かんだ。

「孝一、どうした。怖い夢でも見たのか。うなされていたぞ。もう少しで釜山だ。降りる支度をしなければ……」

　父親にゆり起こされた。

　支度といっても、亨竜とふたり分の下着、着替えの類で、布団はなく、風呂敷包みが一個である。

　釜山の駅には崔義烈おじさんと、大学生の栄蘭お姉さんが迎えに来てくれていた。

　おじさんは、背が高くガッシリとした体つきの人で、いかにも精気に溢れていたし、栄蘭お姉さんは楚々として美しく、笑顔がとても素敵だった。

「虎範君、よく来てくれた。この子が孝一で小さい方が亨竜か。お前たち、おじさんの家を自分の家と思って遠慮しないで暮らしてくれよ。おじさんの子供たちも大歓迎だ」

　おじさんは、身体に似合った太い声で言うと、ふたりの髪の毛をくしゃくしゃになで回し、ソウルで消毒されたＤＤＴが盛大に、あたりに舞った。

　釜山駅頭には、おじさんのフォードセダンが停めてあった。

　おじさんがハンドルを握り、颯爽と発進する。父親が論山で乗っていたフォード車よりも新しいようだ。父親が助手席に乗り、車のことを質問している。孝一には理解できないアメリカ語が交わされていた。

　孝一は亨竜と後部座席に、栄蘭お姉さんと乗った。お姉さんからはいい匂いがしてきて孝一の胸はときめいた。

　走り出してすぐに橋を渡る。

「この橋は影島橋というの。朝八時と夕方の四時の二回、真ん中から橋が両側に跳ね上がって、そのときに大きな船が通るのよ」

　お姉さんが橋の説明をしてくれた。

　それにしても温かい。ソウルは真冬なのだが、ここは冬服では汗ばむほどだ。

　橋を渡ると左に曲がり、少し行くと広い庭のある大きな屋敷についた。

　門から中に入ると、庭には大小取り混ぜたトラックが整然と駐車していた。

　ここが釜山運送会社の本拠地である。義烈おじさんは、トラックの前を通り過ぎると、正面玄関にフォードを横付けした。

「おーい、母さん、おばあさん。虎範さん一家を連れてきたぞ」

　おじさんが大きな声をかけると、家の中から女性ふたりが駆け出してきた。その後ろから三人の子供が続いてくる。

「虎範、久しぶりじゃのう。待っていたぞ」

　年寄りの女性が、父親の手を取って言った。少しばかり涙声である。

「希羅おばさん。お久しぶりです」

　父親もきちんと頭を下げて、礼をした。

「虎範お兄さん。お久しぶりね」

　化粧気はないが、整った顔立ちの女性が前に進み出てして、声をかけた。

「聖美！　久しぶりだな。元気そうで何よりだ。このたびは無理を言ってすまない」

「いいえ、主人が決めたことですから、わたしに依存があるわけはないわ。孝一さん、享竜さん、家の子になったつもりで、気楽に過ごしてね。変な遠慮なんかしたら、ただじゃ置かないわよ」

　父親の蔭で様子をうかがっているふたりに、言葉は荒いが、優しい笑顔を向けてくれた。

「母さん、長旅で疲れているんだから、早く上がってもらって、夕食の支度にかかりなさい。さ、上がった、あがった」

　おばあさんが、手招きと同時に孝一と亨竜の肩を抱いて、家の中に誘った。

　その夜は、崔家を挙げての歓迎の宴が設けられた。朝鮮の家庭料理が次から次へと出され、上等のカルビ焼き肉、釜山ならではの海鮮チゲ。大人はビールで乾杯のあと、

真露の栓が盛大に抜かれた。おばあちゃんと最社長夫婦。栄蘭お姉さんと、香蘭お姉ちゃん。中学生の鐘元君、今度受験の純元君と孝一、享竜は久しぶりの焼き肉で、満たされた。

　父親は、勧められるビールを最初は飲んだが、夜行列車でソウルに帰るといい、ビール一杯で、グラスを伏せた。

　そして、ふたりを遅くとも八月中旬までに迎えに来ることを告げた。

　泊まっていくのが当たり前という、崔一家の強いすすめを断って、父親は最終の列車で帰っていった。

　いつにない、この一事を見ても、父親の決意は、強固なものに思えたのである。

　父親が帰っていったあと、風呂に案内された。孝一と亨竜がパンツ一丁になっているとき、突然。おばさんが入ってきた。

　ふたりの身体が、ＤＤＴの白い粉にまみれているのを見て叔母さんが言う。

「ふたりとも虱にたかられたね。下着はこっちによこしな。熱湯消毒するから。ほら、パンツもだよ、さ、脱いだぬいだ」

　何とも荒っぽい言葉であるが、決して不快ではなかった。そこに、何ともいえない温かさが感じられたからである。

　パンツをむしり取られたふたりは、流し場で朝かけられた全身のＤＤＴを流すと、慌てて浴槽に浸かった。

Ⅳ

　こうして、孝一と亨竜の四度目の居候生活が始まった。これまでの三回とは異なり、とても精神的に落ち着けたのである。

　崔義烈おじさんも、聖美おばさんも国民学校をどうするか訊いてきたが、復学はソウルでと決めていたので、断った。

　今登校しても、一学年の留年は変わらないことがわかったからである。

　二学期中に復学すれば、教科の習熟度にもよるが、卒業が可能らしい。

　孝一としてみれば、六年生のカリキュラムは完璧にマスターしている。いつでも復学すれば卒業するだけの学力には自信があるのだが、国で決めた規則には逆らえない。

　制度上の同級生である、次男純元がやっている勉強には興味がない。それよりも、戸籍上での同い年の長男鐘元が、中学校で学んでいる内容が気になった。

　長男は、決して勉学が好きなタイプではないようで、毎日外で遊んでいるが。机に向かっているのを見たことがなかった。

　かといって、教科書の類いは鞄の中で、机の上に出ていることはない。勝手に取り出すのは、孝一にとって無理な作業だった。

　夕食後、自分の部屋に戻る長男のあとについていって、言葉をかけた。

「鐘元さん、お願いがあるのだけど……」

　年齢は同じだけど、学年は一年上で、居候の身としては、言葉遣いが丁寧になった。

「何ですか？」

　まだ、世話になって数日しかたっていないので、鐘元の言葉にも遠慮があった。

「今、中学校で習っている授業のことなんです。僕に教えてもらえませんか」

「おれ、勉強があまり好きじゃないの、知ってるだろう。そんなおれに教えろなんて、無理言わないでよ」

　少し慣れてきたのか言葉が平易になった。

「でしたら、今使っている教科書を見せてくれるだけでもいいんですよ。どんなことを学んでるのか……」

「孝一君は勉強が好きなの？　おれなんかには信じられないけどな。毎日学校に行かなくてもいい君が羨ましいと思ってるんだ」

　鐘元は首を振りながら言う。

「勉強が好きだというわけではないけど、行けないと不安になるものです」

「国民学校の六年生をやっていないんだろう。中学校の教科書がわかるわけがない」

「多分、わからないでしょう。でも、算数や国語、社会科なんか国民学校と、どんなに違うか知りたいのです」

「わかった。算数とは言わないけど、数学の教科書がこれだよ。見てごらん」

　鐘元は、鞄を開け、教科書を取り出して差し出した。

　孝一は、数学の教科書を手にとって開いた。

　最初の方は、六年生の内容とほとんど変わらず、理解に戸惑う点はまったくなかった。

「これなら何とかわかるな。順を追って学習して行けば、うしろの方の幾何も大丈夫だ」

　孝一はページを繰りながら、ひとりごちた。

「孝一君、六年生をやってないのに、わかるのかい？　どうしてなんだ」

「全谷で、同級生から教科書をもらったのです。それでずーっと自習していたから」

「ふーん、先生に教わらなくてもか」

　鐘元は少しばかり不満げであった。

「だって、四年の次は五年生でしょう。そして六年の教科書はその続きだから、ちゃんと勉強してれば、中学校の授業だってわかるはずですよ 」

「信じられないな。だったらこの問題を解いてみせろよ」

　鐘元は、適当に開いたところにある例題を、孝一に示した。

　孝一は一瞬だけ迷ったが、解く糸口が見つかったら、頭の中ではすらすらと解けた。

「紙を下さい。計算してみるから」

　紙と鉛筆を受けとり、計算式を書いた。

「へぇー、孝一君は勉強ができるんだ。学校なんか行かなくても、平気じゃないか」

「いや、自習で勉強ができても、卒業はできないのです。国民学校を出ていないと、中学校には入学できない。僕はこの三学期に戻っても卒業はできないから、今年の二学期にソウルに戻って復学するつもりです。結局、一年留年することになるけど仕方がない」

「どうして、全谷でもソウルでも国民学校に行かなかったの？　義務教育じゃないか」

「僕は、どうしてもソウルで学校に行きたいんだ。だから、全谷でも釜山でも駄目なんです。一年は大きいけどね」

　孝一はつい、現在の立場を忘れて、本音を吐いてしまった。

「だったら、ソウルにいつ帰るんだ。向こうで住むとこがあるのかよ」

　とたんに鐘元は不機嫌になった。釜山で学校に通うことを否定されたのだから、当たり前だろう、部屋を出て行こうとした。

「鐘元さん、国語と社会の教科書を貸してくれませんか」

「教科書に書いてあることは、全部わかってるんだろう。だったら見ても意味ないじゃないか。貸すのはお断りだね」

　鐘元は、数学の教科書を孝一の手からもぎ取ると鞄の中に納めて、尾錠まで締めてしまったのである。

Ⅴ

　鐘元から教科書を借りることに失敗した孝一は、同年代の鐘元が、明らかに居候の存在に不満を抱いていることを感じ、食事どき以外は、外に出るように心がけていた。

　まず、庭にある車庫が格好の遊び場所になったのである。

　孝一がまず手がけたのは、リンゴ箱を利用したベビーカー造りだった。

　ベビーカーの車輪は、車庫の隅に投げ出されていた何のものかわからないが、小さなタイヤを四輪、利用した。車軸受けのところにはボールベアリングがあり、スムーズに転がる優れものである。

　タイヤの径は三十センチくらいで、結構太い接地面を持っていた。

　リンゴ箱は木製で、五〇センチほどの深さがあり、五歳の亨竜がすっぽりと収まるようなサイズであった。

　孝一が車輪の取り付けに悪戦苦闘しているのを見かねて、トラックの整備をやっている修理工のおじさんが手を貸してくれた。

　タイヤにベアリングがついているので、車軸のシャフトは本体に固定されていてもいいのである。

　さすがにプロの技だ。あっという間にベビーカーは完成した。しかも押しやすいように手すりまでつけてくれ、青い塗料でペイントまでしてくれたのである。

　義烈おじさんのトラックは、軍から払い下げられたアメリカのＧＭＣトラックや、ロシア製の大型貨物車があり、スプレーガンで青く塗り上げられていた。

　その色と同じベビーカー、その姿は孝一をいたく興奮させた。

　ベビーカーに亨竜を乗せて表に出た。最初は影島の中だったが、すぐに飽きてしまい影島大橋を渡って釜山の役場やチャカルチ魚市場のまで足を伸ばした。

　魚市場には、とれたての新鮮な魚介類が豊富にそろっていた。活気があるここは、孝一も亨竜も好きな場所だった。

　働いている人たちの言葉は威勢がよく、慣れないうちは叱られているような気分になったものだが、皆、気のいい人たちだった。

　リンゴ箱の車に乗った兄弟は、そこに勤めている人々に可愛がられて、休憩のときに菓子などを食べさせてもらった。

　次にふたりが好んで行ったところは、国際市場である。

　ここは、アメリカ軍から流出した品物の闇市のようなところで、ユギオ事変で十六カ国の国連軍が韓国に来て参戦したので、アメリカ商品だけではなく、国際的なマーケットを構成していた。

　商品ばかりではない。路上の屋台では簡易に、韓国の味が賞味できたのである。要はお金さえあれば何でも買えたのだ。

　お金を持っていない二人には無縁のものだが、何となく胸が弾んだのである。

　国際市場は、南北に三百メートルほどの規模を持っている。その北のはずれまできたとき、孝一に突然、ある記憶がよみがえった。

　北の端から、宝水山に向かって坂を上ると、白く塗られた一軒の家があった。

　山の中腹にあるこの家は、孝一が清陽の孤児院から母親に助け出されて、一年ほど住んだ軍の公舎である。

　あれからいろんなことがあって、ほぼ十年が経過しているのだが、この十年間には、大きな変化が見られた。

　十年前、ここで母親とふたり、父の帰還を待っていたことが思い出される。

　そのときの孝一は五歳半、まったく気の弱い子供だった。

　その頃は、ユギオ事変で身体の一部を失った傷痍軍人が、釜山の街のいたるところにいて、戸別に金や物品の無心をしていた。

　無心というと聞こえがいいが、戦争で荒んだ彼らはほとんど恐喝のような行動で、母と孝一は、家の中で息をひそめ、震えていた。

　その家を眺めていると、ある出来事が記憶のスクリーンに映し出された。

　釜山のこの公舎に入居して間もないときである。穏やかな昼下がり、母親が午前中の勤務を終えて帰ってきていた。

「ただいま、帰ってきたよ」

　玄関の扉が強くノックされ、男の声が聞こえた。たしかに「ただいま」と言った。

「父さんだ、父さんが帰ってきた！」

　孝一は何のためらいもなく、走っていって玄関のロックを解き、扉を開いた。

　そこには、父親と似てもにつかない隻腕の大男が、仁王立ちになっていた。

「おい、坊主。母さんはいるか」

　大男は孝一の胸ぐらを右腕一本で捕まえると、すかさず小脇に抱えこんだ。

　長い間、風呂に入っていないのだろう。何ともいえない臭気が孝一の嗅覚を襲った。

　もの凄い匂いだったが、どこか懐かしさをも感じる髭面の大男だった。

「誰もいないよ。僕ひとりで留守番だ」

　必死でその場を繕おうとするが、奥に視線が行くのは、仕方がない。

「母さん、出てこいよ。この坊主がどうなってもいいのか」

　家の中に向かって大声を張り上げる。

「母さん、出てきちゃ駄目だ」

　頑張っても子供だ。情勢の判断がよく出来ない。結局母親がいるのを教えてしまった。

　母親が音もなく現れた。勿論素手である。

「子供を離しなさい。そんなことをしなくても出来ることはしてあげます。食べるものも用意しましょう。このご時世だからそんなにはないけどお金も少しならあげます。だから子供をこちらに寄越しなさい」

「金はいくらくれる？」

「家だって主人が戦争に行っているの。だからお金はあんまりないわ。全部上げると、明日からご飯が食べられなくなってしまう。あるだけを半分ずつでどう？」

　母親は、財布を出して二千ウォンを出し一枚を大男に渡した。

「わかった。ありがとうよ」

「食べるものはキムチかけご飯くらいしかできないけど、いい？」

　母親は、大男と堂々と対峙している。逆に男が気圧されているようだ。

「オモニ、食べるものはいらないよ。金、ありがとうな」

　大男は、孝一を床にそっとおろすと、札をポケットに入れて早々に立ち去った。

　男が出ていくと、母親は床に座り込んでしまい、音を立てて果物ナイフが転がった。

「ああ、怖かった。もし孝一に何かあったらこれで刺し違えようと思ってたの」

　この一事を見ても、母親の孝一に対する愛情の深さが忍ばれたのである。その母親ももう亡くなって一年半、いまだ孝一の心に強い影響を与えているのだ。

　平和になった現在、街のどこにも傷痍軍人の異様な姿や、横行を見ることはない。

　そのころの記憶が薄いので、街並みを比較しようがないが、全体の空気は圧倒的に明るく、本来の釜山に戻ったといえよう。

　亨竜が喜ぶので、青いベビーカーを押すとき、孝一は全速力で走った。

　崔家で、栄養のある食事を食べるようになって孝一の体力は完全に回復していた。

　ほとんど一日中走り回っても、疲労することを知らないタフネスが身に付いた。

Ⅵ

　釜山運送会社は大変に忙しく動いていた。社長の義烈おじさんも、毎日のように自らハンドルを握って走っていた。

　一番上の栄蘭お姉さんは大学二年生、おばさんに似て楚々とした美人である。

　釜山市内の大学に通い、自宅から通学しているので夕方は家におり、夜食は一緒にテーブルを囲むことが多かった。

次女の香蘭お姉さんは、おじさんに似たのか大きな身体をしていて、見かけはごついけど、優しい心の持ち主である。

　孝一の知識欲に対応してくれるのは、高校二年生の彼女だけだった。質問にうるさがらず、正確に答えてくれた。

　長男の鐘元は、肥満児だ。中学一年生なのだが、孝一と同い年だった。それに対抗意識を感じるのか、崔一家の中で一番、素っ気なかった。

　末っ子の純元は二ヶ月を切った中学受験に備えて、最後の追い込みに入っていた。その姿を見ながら、普段の勉強がいかに大事かということを孝一は感じていた。

　純元は、受験の参考書でわからないところがあると、素直に訊いてきた。彼が年下ということもあって、孝一は喜んで手助けをしてあげた。

　純元は、孝一を同じ学年とは捉えておらず先生のように孝一を頼りにした。

　三月の発表には、孝一も一緒についていったが、見事に合格していた。

　その夜は、純元の中学校合格祝いの食事会が開催された。

「僕が合格できたのは、孝一兄さんのおかげです。本当によく教えてくれました」

　その席上で、純元は全員に話した。

「そんなことはないですよ。全部、純元君の力です。あれだけ頑張ったのだから」

　孝一は少し面はゆくなって答えた。

「純元、お前学校にも行ってない奴に教わったのかよ。それでよく合格できたもんだ」

　鐘元が、孝一を見ないで言った。

「鐘元、お前少しは純元に勉強教えてあげたの？　何もしないでよく言うわね」

　香蘭お姉さんが言う。お姉さんの言葉に迫力があるので、鐘元は黙ってしまった。

「どっちにしても、合格したことに違いはない。純元が言うのだから、孝一君が見てくれたんだろう。ありがとう」

　義烈おじさんが真露の酔いで赤らんだ顔をほころばせて、孝一に言った。

「いいえ、たいしたことはできないけど、僕でできることはやらせてもらいました。少しでもお世話になった恩返しができれば」

　孝一は下を向いて、これだけを言った。

「孝一。お前、国民学校の六年から行ってないんでしょう。どうして勉強ができるの？」

　聖美おばさんが訊く。

「全谷にいるときの同級生から、教科書をもらって自分で勉強しました。何回も繰り返して復習したので、覚えているだけです」

「そうなの。うちの鐘元も、見ならってくれるといいのにね。虎範兄さんも勉強が出来たのよ。お父さんの血を引いたのね」

「虎範君のことは、弟の烈珠からきいている。軍人にならなければ、実業の世界でも一流になれるっていっていた」

　義烈おじさんが、再び口を開いた。

「僕の国民学校時代に、勉強を見てもらったことはありません。父さんは忙しかったからそこまで出来なかったのでしょう」

「孝一君、そこまで勉強が好きなら、新学年からこっちの国民学校へ行ったらどうだい」

「父さんと約束しているのです。夏休みには迎えに来てくれるって。そうしたら、二学期からソウルの国民学校に行きます」

　義烈おじさんの問いかけに決然と答えた孝一だった。これは、父親に届け、との願いもこもっているのである。

　夏休みが近くなったら、善がいる昌信洞の曽栄淑おばさんの家に手紙を出すつもりだ。

　合格祝いの宴は、楽しい雰囲気で流れていった。一番嬉しいのは当事者の純元なのは当然だが、家族全員が喜び合っている暖かい雰囲気を目のあたりにして、孝一は亨竜の手を握り、少しばかり感傷に浸った。

Ⅶ

　崔家のおばあさんは、敬虔なカソリック信者だった。毎朝、丘の上にあるカソリックの教会に行って早朝ミサに参加する。

　この礼拝に、孝一は必ずおばあさんの手を引いて、同行した。

　片道三〇分ほどの山道を登っていくのは大変と思うのだが、これも信仰の力か、一度も疲れたという言葉を聞いたことがなかった。

　論山では毎朝の行事だったので抵抗はない。早朝礼拝に亨竜は連れて行かなかった。勿論眠っているのだが……

　安希羅おばあさんは、自分の息子のように思っている李虎範の子供ということで、孝一と亨竜を、崔家の孫と分け隔てなく、可愛がってくれた。

　礼拝に同行する都度、小遣いをくれようとするが、孝一はかたくなに断った。

　居候をさせてもらった上に小遣いまで、というのが、孝一の考えだった。

　教会に行く道すがら、麻浦の朴一家を思い出す。おじさんとおばさんの話によると、信者の世話役のような立場になるには今ひとつのランクアップが必要であり、その為に競って献金に努めているという。

　それにしても、収入の九割の献金とは法外な比率だった。

　カソリックの教会も、信者の自主的な献金で運営されているが、あくまでもできる範囲であり、生活に破綻を及ぼすものではない。

　神父が唱える聖書のラテン語を、孝一が唱和すると、おばあさんは驚いていた。

　孝一にしてみれば、論山で毎朝やっていたリフレインなのだが。

　新学年が始まり、崔家の子供たちはそれぞれ一学年を進級した。特に孝一と同じ年齢の鐘元が中学二年生になったのは、少しばかりショックだった。

　純元は、真新しい中学の制服を着て元気に通学する。中学一年の教科書は、純元から借りることが可能になった。

　木々の緑が色濃くなる四月の半ばを過ぎたとき、朝のミサを終えて帰途についた孝一におばあさんが紙に包んだものを手渡した。

「何ですか、これ……」

「竜ちゃんの誕生日がもうすぐだ。多分、おじさんもおばさんも忘れているだろうからこのお金で誕生日を祝ってあげな。餅でもおもちゃでも買って……」

　おばあさんが、亨竜の誕生日を覚えていてくれたことに、孝一は感動した。

「竜の誕生日のお菓子を買っていいんですね。じゃこれは喜んでいただきます。おばあさん、どうもありがとう」

　孝一は、遠慮なくもらうことにした。

　四月二十五日、亨竜の誕生日が来た。

　この日の青色のベビーカーは、いつにも増して軽やかに走った。影島大橋を渡っていつものコース、チャガルチ市場の横に到達した。

「孝一、竜。寄っていかないの？」

　市場に勤めるおばさんが声をかけたが、それに手を振って答えた。

「今日は、竜の四歳の誕生日なんです。これからお祝いのお菓子を、国際市場に買いに行こうと思って」

「だったら、この市場のはずれにある餅屋でムジゲトクを買えばいい。おめでたい虹色の餅だ。私たちで買ってあげる。待ってな」

　おばさんは、中に声をかけるとゴムの前掛けを外して歩き出した。

　市場のはずれにある餅菓子店には、大きなお皿に団子のようなものや、あんがかかっている餅などが並べられていた。

「兄さん、ムジゲトクは？」

「もうすぐだ。ほら、蒸し上がってきたぜ」

　奥の調理室から、木箱に入った円形の菓子が売り場に出されてきた。

「これこれ。とてもおいしいんだよ。何と言っても五色の虹のような餅なんだ。きれいでしょ、めでたい誕生日にはピッタリだ」

　おばさんは、得意顔でムジゲトクを包ませた。そして亨竜に向け、言った。

「竜さん、四歳の誕生日、おめでとう。このお餅はおばさんたちやおじさんたち、市場の人からのお祝いだよ」

「おばさん、お菓子のお金、おばあさんからもらってるんです。僕がはらいますよ」

　孝一が、おばあさんのくれた紙包みを出して開こうとした。

「何言ってるんだい、皆の気持ちだよ。子供は遠慮なんかするんじゃない。さ、早く受け取りな。おばあさんからもらったお金は、竜のおもちゃを買ったらいい。竜、好きなものを買ってもらいな」

　おばさんは、孝一に包みを押し付けると小走りに市場に戻っていった。

　国際市場に行って、亨竜のほしいものを聞いたが、まったく買い与えられた経験のない亨竜は、欲しいものを表現できなかった。

　崔家に帰ったふたりは、裏口からおばあさんの部屋に行き、虹色の餅を見せた。

「ムジゲトクかい。いい誕生日になるね。竜さん、おめでとう」

　おばあさんは、亨竜の頭をくしゃくしゃに撫でると、いい笑顔で祝ってくれた。

　餅は部屋にしまって置いて、夕食後、布団をかぶって食べた。市場の人の、温かい気持ちが伝わってくるような甘さに、胸がつまる思いだった。

　孝一は、おばあさんからもらった千ウォンの小遣いを、そのまま持っていることに後ろめたさを感じたが、全谷から持ってきた国民学校六年生の教科書に、はさんでしまっているうちに、忘れてしまった。

Ⅷ

　四月十九日、全国的に学生のデモが発生した。学生が殺され、李承晩が退陣した。

　少しずつ、夏は近づいてきた。夏休みになる少し前のことである。

　崔家の庭の片隅に、紐で縛った本が数冊捨てられていた。一番上にある本の題名は、千字文演習と読めた。

　他の本に興味がなかったが、この本に何か魅力を感じ、一冊だけ抜き出した。

　裏を返すと、高校生の香蘭お姉さんの名前が書いてある。

　あきらかに捨てられたものであり、断るまでのことはないと判断して、部屋に持ってきた。中を開くと、一気に惹きつけられた。

　ページの上半分に絵が印刷されていて、下にはその絵の漢字が書いてある。

　関連している漢字が千文字、興味を持たせるために、熟語として記憶させる仕組みのようだ。漢字の練習は、書き順などいろんな制約があって、書いたり消したりが必要だ。

　孝一は、釜山の街をベビーカーで走り回っているときに、この条件にピッタリの、絶好の場所を見つけてあった。

　漢字の勉強はそこですることにして、次の行動を起こした。

　もうひとつ興味を持ったのは、英語である。

　英語の教科書は純元から借りられたが、純元は、孝一に教えるだけの知識は、残念ながら持ち合わせなかった。

　鐘元は、相変わらず孝一に反感を持ったままなので、教わるわけにはいかないし、彼に教える才覚があるとは思えなかった。

　となると、やはり教師は高校生の香蘭お姉さんになる。少し心配なのは、お姉さんは高校三年で大学受験を控えていることだ。

　英語を正式に習ったことはないが、全谷の戦車部隊のジョージ軍曹との交流が、大きく影響を与えているのだ。

　読むことにはなじみがなく、最初から学ばなければならないが、香蘭お姉さんが声に出して読んでくれる文章や、英会話に関してはかなりのレベルで理解できたのである。

　特に英会話に関しては、お姉さんも舌を巻くような上達ぶりだった。

　そのうちに、お姉さん自体が孝一との英会話を楽しむようにまでなったのである。

　英語のレッスンは、夕食後、香蘭お姉さんがあいている時間帯に行われた。　昼間の時間は、孝一の自由である。いよいよ漢字の勉強が始まった。

　教場は影島大橋の下、砂浜である。ここに降りていって、亨竜にページの上側にある絵を描かせる。その絵を基に棒を使って漢字を砂上に書くのだ。紙に書くのではないので鉛筆も消しゴムもいらない。

　寄せる波に消える文字と絵、すぐに新しいキャンバスが出現した。

　教本は亨竜に持たせて、孝一には一切見ることができないようにしていた。もし、間違って孝一が漢字を書いたら、即座に亨竜が指摘する。　必然的に、漢字の作り方や書き順など、亨竜の知識として身に付いていった。　まだ学校にも上がっていない亨竜は、漢字だけではあるが一種のスペシャリストと言ってもいいだろう。

　この教本は、千字文というくらいで、千文字が収められている。これを二カ月くらいでマスターしようというのだから、かなりハードワークだ。孝一の漢字勉強は、しっかり続いた。

　最初は嫌がっていた亨竜だが、理解できるようになるにつれ、興味が増して楽しむようになってきた。

　七月、八月の暑い盛りでも、橋げたが直射日光を遮り日陰を作ってくれる。海面を渡る風が涼しさを呼ぶ。

　二人は時間を忘れるほど、漢字の書き取りに集中していた。帰りに貝を拾い、ベビーカーに積んで汁の実にした。

　七月末、孝一は昌信洞の曽栄淑おばさん気付で父親に手紙を書き、約束通り、夏休みに迎えに来てほしいことをメッセージした。

　その返事は、電話で入った。

　遅くとも八月中旬には迎えに来ること、多分、そのころには昌信洞の下の方に、少し広い家を借りて住めるようにする、との意思表示があった。

　当時、市外通話はかなり高額であり、長い時間話すことは、あり得なかった。

　八月十七日、夏の盛りの暑い日に父親が迎えに来た。

　父親、孝一と亨竜は、崔家の人々に厚い感謝の念を表しながら京釜線の乗客になった。

**第八章・自立の一歩（漢江）**

Ⅰ

　半年ぶり、しかも夏のソウル。

　孝一の目には、街の姿も、歩く人もすべて新鮮に映った。

　夜の八時着。ソウル駅に曽栄淑おばさんは迎えに来ていなかった。善もである。

　父親は昌信洞の新しい家に案内した。

　路面電車に乗って、東大門で下車、東に向かって委細構わず歩いていく孝一と亨竜は、小走りにならなければついていけないほど、父親の歩みは早かった。そして、生け垣に囲まれた庭がある、大きな家のところに来た。

「孝一、竜。ここがこれから住む家だ。部屋が五つもあって、ゆっくり住めるよ」

　父親が門で足を止め、中を指さしながらいった。韓国独特のコの字型をした家である。

「凄い家じゃない。父さんが買ったの？」

「いや、残念ながら借りているんだ。買うだけのお金はまだ……」

「借りるにしても、これだけの家はお金がかかるね。父さん、大丈夫？」

「うん、何とかな……」

　どうも歯切れが悪い。

　亨竜は、門からどんどん中に入っていく。そして、建物の玄関に入るときびすを返すように飛び出してきた。

「竜、どうした？」

　孝一が訊く。

「中に知らないお兄さんがいるよ。僕、にらまれちゃった」

　亨竜が胸を押さえながら言った。

「それは、曽おばさんの子供で、享俊という名前だ。たしか善よりひとつ年上かな」

「えっ、おばさんに子供がいたの？　今までどこに住んでいたのですか」

「おばさんの田舎、楊平でおばあさんと二人で住んでいた。そのおばあさんが病気になったので、こっちに引き取ったんだよ。おばあさんはひと月前に死んだけどな」

「じゃ、その子は田舎に帰らずに、ずっとここにいるんだ」

「そう、田舎の家は売ってしまったから、帰るところがない。皆で仲良く暮らそうな」

「僕、あのお兄さん怖いよ。すごい目で僕をにらむんだもん」

　亨竜が、表情を曇らせた。

「そんなことはないと思う、優しいお兄さんだよ。竜も可愛がってもらえばいい。さ、中に入って風呂を浴びよう」

　父親は二人の肩を抱いて、玄関を入った。

「孝さん、竜さん、お帰り。さ、上がってゆっくりしなさいよ。疲れたでしょ」

　曽おばさんが家の中から現れ、大きなジェスチャーと共に、声をかけてきた。半年会わないうちに、おばさんは少し大きくなったように見えた。

　おばさんのスカートを掴んで、男の子がまとわりついている。この子が享俊だろう。

「享俊くんかい。僕、李孝一。よろしく」

「………」

　孝一の挨拶に答えず、上目遣いに、孝一と亨竜を、交互に眺めている。　瞳の下側に白目の部分があるので、目つきが悪いように見えるのだ。

　それにしても、愛想のない子である。曽おばさんの側を、片時も離れない。　これは、夕食のときも変わらなかった。多分、寝るときまでも同じだろう。 結局、その日は寝るまでひとことも、言葉を交わさなかったのである。

「兄さん、あのお兄さん、お話しができないのかな。どんな声してるのか聞きたいよ」

　孝一と亨竜に与えられた部屋で、例の雀がプリントされた布団の上に横になったとき、亨竜がいった。

「曽おばさんとは、小さな声で話しているから、ちゃんと話せるはずだよ。恥ずかしがっているんじゃないかな」

「善姉さんと、お話しするの？」

「知らない。今日初めて会ったばかりだから。明日、善に訊いてみよう」

　父親は奥の自分の部屋に入り、曽おばさんは、息子と同じ部屋で寝るようである。

　となると、善はどこで……

　その思いが通じたかのように、入り口に善の白い貌が覗いた。

「孝一兄さん。一緒に寝ていい？」

　遠慮がちに訊いてきた。

「勿論だよ。今、竜とお前のことを話していたところだ。善はどこで寝てるの？」

「これまでは台所の横の部屋で、ひとりで寝ていたの。淋しかったわ」

　善は、孝一と亨竜の間に持ってきた自分の布団を敷き、腹這いになった。

「善姉さん、おばさんの子供は、お話が出来ないの？」

　亨竜が、善を見ながら口を切った。

「話せるわよ。わたしなんかいつもいじめられているもん。まるでお手伝いさんか召使いのように扱われて」

「お手伝いさんのようにいじめられた？　家事なんかをやらされているのか」

　孝一が思わず、問いかけた。

「そうよ、炊事も掃除も。あいつはすごく意地が悪いわ。わたしが失敗するように仕掛けて、何か起こるとすぐに怒るの。今日は特別だったわ。お兄さんが恐かったのかな」

「善は苦労していたんだね。明日、父さんに話そう、善はお手伝いではない、って」

「いいよ。そんなことしたら、わたし、享俊に又、いじめられるから」

「わかった。少し様子を見てみよう。さ、今夜は寝るとするか」

　十時間の列車の旅は、孝一と亨竜に、快い眠りを与えてくれた。

Ⅱ

　次の朝、曽おばさんは、善に朝食の支度を命じ、善も当たり前のように働いた。

　父親と曽おばさんは朝食後、連れだって出勤していった。　大人が働きに出たあとは、子供たち四人がこの家に残った。　享俊は食事が終わると、自分の部屋に閉じこもってしまう。

　享俊も善も、国民学校の学童であるが、今は夏休み、通学の必要はない。

　いまだ復学の手続きをとっていない孝一は、再び自習の生活に戻った。　与えられた部屋には小さな座卓がある。それが孝一の勉強机だ。　釜山の香蘭お姉さんから貰ってきた英語のテキストを拡げ、ページを開く。　お姉さんのテキストは、高校一年の副読本であり、高いレベルのものであった。

　しかし、約二カ月の特訓の成果がここに現れてくる。読本を開くと印刷されたアルファベットの文字が、何の抵抗もなく飛びこんでくるほど、英語にのめり込んでいだ。

　英語は、声を出して読むことが習得のポイントと香蘭お姉さんから教わった孝一は、リーダーを目で追いながら発声する。

　釜山にいるときからそうだったが、亨竜は兄の行動や考えに興味を示し、その真似をしたがった。砂上の漢字レッスンにしてもしかり、孝一が指示する前、自発的に彼が手伝ってくれたのである。

　英語の意味もわからずに、孝一が発声する言葉をオウム返しに発音する。かなり正確なイントネーションも身に付いているようだ。

　善はこれまでもそうだったのだろうが、手際よく家事をこなした。広い家の掃除も手早く済ませ、四人分の昼食を用意すると、すぐに六人分の夕食の準備に入る。

　国民学校二年生の善は、そこらの主婦が顔負けするような家事の才能を見せ、昌信洞の家を彼女なりに運用していた。

　しかし、善に対する扱いには、かなりの不満が残ったことも間違いない。　孝一は、この昌信洞の家になぜか馴染めなかった。はっきりした理由はないのだが、ここには孝一たちの兄弟に拒否的な雰囲気が満ちているような気がしたのである。

　その理由は、曽おばさんと享俊の態度にあった。父親虎範が不在なのをいいことに、我が物顔に家の中を取り仕切る。

　あたかも善を使用人の如く扱い、孝一と亨竜は家族の一員として認めなかった。

　孝一にしてみれば、この家は自分の父親と曽おばさんのものであって、家族の自分たちがこのような扱いをされる覚えはなかった。

　早急に父親にこのことを話し、対応を変えて貰おうと思ったが、父親は仕事が忙しいという理由で帰宅はいつも遅く、孝一たち兄弟と会話することは少なかったのである。

　この家に住んで、一週間ほど経った夕食後のことだった。

　相変わらず父親は帰ってきていない。善が主体でしつらえられた夕餉が終わり、洗い物をしている善に、享俊が来て声をかけた。

「善、お前の作ったプルコギ、とても塩辛かった。喉が乾いたから、僕の部屋に水を持ってきてくれ。すぐにだよ」

　その言葉に、孝一が反応した。

「享俊、水なら自分でいくらでも飲めばいいじゃないか。そこの甕から……」

「僕は、善に持ってきて貰いたい。そのくらい当然だ」

　少し口をゆがめ、顎を挙げて言い捨てる。

「何だよ、その言い方は。善だって享俊だってここの家族、兄妹じゃないか」

「善は妹じゃない。うちの召使いよ。だから水を持ってくるのも当然なのさ」

　想像もつかない言葉だった。

「召使いだ、って誰が決めたんだ」

「お兄さん、いいの。わたしが持っていけば済むことだから。いつもやってるのよ」

「何だって、いつもやってる？　享俊、それはどういう意味だ。説明しろよ」

「あんた方はみんな、居候だ。家に住まわせて貰ってるの、あんたのお父さんから聞いていないのか。僕のお母さんが、全部お金を出しているのを」

「………」

　孝一は、答えられなかった。確かに家賃の問題について父親に訊いたことがある。

　そのときの、歯切れが悪い答えを思い出した。やはり何らかの引け目があったのだ。

Ⅲ

　孝一は、善と亨竜を寝かせて、その夜は父親の帰宅を待った。

　父親は深夜、少しアルコールが入った状態で帰ってきた。起きて待っていた孝一を見て驚いた様子を隠さなかった。

「孝一、まだ起きていたのか。子供は早く寝ないと、大きくなれないぞ」

「父さん、聞きたいことがあります。ちゃんと答えてください」

「聞きたいこと？　何だ」

　孝一のいつにない真剣な態度に、父親も居住まいを正した。

「この家は、曽おばさんが全部お金を出して借りている、というのは本当ですか」

「何でそんなことを……」

　父親は、驚いたように聞きかえしてきた。

「今日、享俊が善に水を持ってこいと命令したのです。それで僕は……」

　孝一は、先程のできごとを話した。

「そんなことがあったのか」

「享俊が、善は召使いで僕たちは、父さんも含めて居候だというんです」

「………」

　父親は、下を向いて黙りこんでしまった。

　孝一は、父親の様子を観察した。うつむいて肩を落としている姿は、かっての自信に満ち、大きく見えた李虎範大佐の面影をまったくとどめていない。

　孝一にも、自信のなさが伝わってくる。

「父さん、享俊のいってること、本当なんですか。全部おばさんが負担しているということ。話してください」

　つい、強い調子になってしまった。

　父親は、顔を上げて話し出した。

「残念ながら、そのことは事実だ。曽おばさんの母親、享俊のおばあさんが病気で入院したときに、田舎の家を売ったんだよ。おばあさんは、治る見込みはなく、その段階で栄淑は処分した。田舎のことだから、そんなに高くは売れなかったけどな」

「………」

　孝一は、父親の目を見て先を促した。

「それでこの家を借りたんだよ。父さんの仕事がうまくいっていれば、それに足して家を買えたのだろうけど、現在の状態ではそれも無理だ。事務所を明洞に移転して従業員を増やしたので、余裕は全然ない」

「僕、今まで預かってもらったどこより、ここの居候が一番いやだよ。だって本当は僕たちのお家だよね。それなのに善を召使いだなんていう、享俊やおばさんは許せない」

「おばさんがそういっていたのか」

「僕が聞いたのは、享俊からだよ。でも、おばさんが享俊に教えなければ、あいつはそんなこと考えつくわけがないよね」

「栄淑は気が強いけど、そこまで意地の悪いことを教えないと思う。それと、享俊だって、本気で召使いとは思っていないだろうよ」

　父親は、栄淑親子をかばうように言った。

「いや、はっきりと言ったよ。善は召使いであんた方は居候だ、って。父さんはこの家の長なんでしょう。少し強く言って、善を助けてあげてよ、じゃないと善が可哀相で」

「言ってやりたいのは山々だけど、父さんには言えない。栄淑には世話になっているからな。経済的にも、電話局で働いてもらっていることも、父さんにとっては負い目だ」

　韓国では、一家の主は男であって、彼が稼いで一家の生計を担う。妻女は通常、専業主婦であるのが普通の家庭なのだ。

　全谷の李中佐宅しかり、竜山の白社長家、釜山の崔社長家、麻浦の朴長老家ですら妻女は家で主婦として家庭を守っていた。

　李中佐のところは世話をする当番兵や、専属の料理人がいたし、経済的に豊かな白家や崔家にはお手伝いさんがいた。

　まだ、正式に結婚していないということもあるだろうが、父親と曽おばさんの力関係は互角、というところだが、家の支配権という意味では曽おばさんが優位に立っている。

　こんなことが、父、虎範の自信なげな態度に表れていることは、孝一にも理解できた。

「父さん、ということは善がこれまでのように、こき使われるということですか？　僕たちも遠慮しながら置いてもらうような……」

「お前たちは子供だから、そこまで気を使うことはないさ。享俊も子供じゃないか。孝一がそれにムキになるのは逆におかしいよ」

「父さんは、直接言われてないから、わからないでしょう。学校に行くようになったらどうなるかわからないけど、多分、変わらないと思うな。僕は享俊を許さない」

「かといって、父さんが強く言うわけにいかないし、困ったもんだ」

　なんとも迫力のない父、虎範である。

　父親の反応を聞いた孝一は、ここで善と亨竜を寝かしつけながら考えた結論を、父親に告げることにした。

「父さん、僕たち、ここに住むのはいやだから、三人で自立します。住むところをこれから探さなければならないのだけど、できるだけ早く出ていきます」

「そんなお前、自立するといったって、簡単なものじゃないよ。食べていくだけでも大変だ。生活費はどうする？」

「それは父さんの責任じゃないんですか。子供の生活を見るのが親の……それとも、ここの食費なんかも、全部おばさんが……」

「いや、父さんもちゃんと出してる」

「だったら、その分を僕たちに下さい。それでなんとか食べていきますから」

　父親は、明確な答えをくれなかった。何か迷っていて、決めかねているような態度がはっきりと見られた。

　このことは、翌日の朝食後、父親と曽栄淑とのやりとりで、さらに裏付けられた。

　かつての父、虎範だったら善の扱いや、享俊の居候発言などに対して、歯に衣を着せない表現で追及しただろうが、それには全く触れずに、孝一たち三人がここを出ていって別居するということだけを、遠回しに表現するにとどまった。

　だから、孝一の意向とは違う方向に話がいってしまったが、曽栄淑は、それは理解したようで、引き留める言動はなく、すんなりと受け入れられたのである。

Ⅳ

　この一年半で、いろんな経験を積み普通の十二歳から見ると、はるかにしっかりしている孝一ではあるが、所詮、子供であることに違いはなく、借家探しとか契約など、法律行為は無理な相談で、不可能だった。

　同時に二学期からの復学問題、これも保護者がすべて手続きを行わなければならない。

　まず、住居地を定めなければ、国民学校を決定することができないのだ。　住むところに関しては、父親が情報を持ってきてくれた。

　各方面に声をかけたが返事がなく、いよいよ借家を斡旋してくれる業者を廻ろうかと思っていたところ、会社に臨時職員として働いている大学生が、自分が住んでるところに空いた部屋があると言ってくれたのである。　場所は金湖洞で、今にも崩れそうな家が丘の中腹に位置していた。　おばあさんが家主で、家賃はほとんどただ同然でよかったのだが、建物は古かった。

　紹介者が店子の大学生だったので、家賃だけで貸してくれた。

　雨が降ると藁屋根の何か所からも雨漏りする。ありとあらゆる器を総動員して、雨水を受ける始末だった。その雨水も汚れていて、醤油のような色をしていた。しかし、建物を改善する気はまったくないようである。

　さすがに契約や学校への入学など、これらの手続きは父親がやってくれた。

　相変わらず、引っ越しは簡単だ。身の回りのものは風呂敷包みで各人ひとつ、それに布団というわけである。

　二〇平方メートルほどの部屋が、割り当てられた。手洗いはなく、台所は共同で、練炭のコンロが置いてあった。ここを使って食事を作る人は三人、コンロに火種が残っているときは残り火を使わせてくれたのである。

　善は、とても国民学校二年生とは思えない手際の良さで、食事の支度や家事をした。

　ここで孝一は心を決めた。これで、完全に父親と離れてくらすことになる。国民学校二年の善、まだ学校へ入学する年齢に至っていない享竜とが孝一の家族だ。

　孝一は、自分でも出来る仕事で生活費を稼ぐつもりだったが、国民学校の生徒に出来る仕事はそうは簡単に見つからなかった。

　そこで残念だけど、生活費として父親から現金をもらって最初の生活がスタートした。

　移り住んできてすぐに、二学期が始まった。

　孝一と善は同じ金湖国民学校に通うようになったが、亨竜をひとりで家に置いて行くわけにはいかない。

「竜、お前を学校に連れて行かなければならないんだけど、騒いだり先生に迷惑をかけると、兄さんと一緒にいられないんだよ。わかるよな、そうなったらお前を連れてゆけなくなるんだ 」

　孝一は、亨竜とじっくり話し合った。　亨竜は、黒目がちの澄んだ瞳で孝一の貌を見つめ、真剣に聴いていた。

「兄さん、わかった。僕、おとなしくしてるよ。怒られるようなことはしない」

　亨竜は、信じられないような、しっかりした口調で答える。　わずか一年も経たない間に、亨竜にも大きな変化が見られた。　あの泣き虫で、わからず屋だった彼を見違えるような、聞き分けのいい子にしたのは何なのだろう。様々な苦労の体験も大きかったかもしれない。

　それよりも何よりも、釜山の影島大橋の下で、砂を使って行った漢字の書き取り訓練が彼に自信をつけさせた。

　昌信洞でやっていた英語テキストの発声リーディングなど、亨竜が興味を持って自発的に取り組んだものである。

　本来、勉学に対する素養はあったのだろうが、それに気づくような環境でなかった。　それが一気に、花開いたのだろう。最初に登校したとき、亨竜を連れて行ったが、校庭で遊ばせておいた。　彼は、窓際に座った孝一から見えるところで、しゃがみ込んで地面に何か書いている。

　休み時間に、何をやっていたのか聞いたところ――絵を描いて漢字を書いていたんだよ。と答えたのである。

　次の時間は、鉄棒にぶら下がったり、ジャングルジムに登ったりしていたが、孝一が確認できる範囲から、はみ出なかった。

「李孝一、彼は君の弟か？」

　休み時間のたびに、孝一が校庭に出ていって、亨竜の面倒を見ているのを見た担任教師が校庭に出てきて訊いた。

「はい。僕たちは、二年生の妹と三人で住んでます。弟は学校はまだだけど、家に置いてくることが出来ないのです」

「君、名前は何というの？」

　担任教師は、亨竜に訊いた。

「はい、李亨竜、四歳です」

　はっきりと答えた。

「君、お兄さんと同じ教室に入っても、おとなしくできるかい？」

「はい、出来ます。先生に怒られるようなことはしません」

「ほう、しっかりした子だ。みんなに迷惑をかけたり、騒がなければ教室の隅の机で座っていてもいいよ」

「ありがとうございます。教室の中ならとても安心です」

　孝一はほっとした。

「君たちは、子供三人で住んでいるのか。お父さんは、ちゃんといるのだったよな。どうして一緒に住まないんだ？」

「お父さんの仕事が、とても大変な時期なのです。僕たちが邪魔してはいけないから」

「そう言う状態だったのか、今日の放課後か家庭訪問で巡回する予定に君のところを入れておく。帰ったら待っていてくれ」

　教師は、孝一と亨竜の頭をくしゃくしゃになで回して言った。　夕方訪ねてきた担任教師は、善と享竜を交えて話を聴き、子供三人が健気に生きている姿を体験して感激した。

　教師は何度も享竜と善を抱きしめ、涙にくれた。結局、その日の家庭訪問で貰ったご祝儀（韓国では、感謝の気持ちをご祝儀で表すことは、常識になっている）を手持ちのものと併せて多額の現金を置いていったのである。

Ⅴ

　孝一が国民学校に編入学しても、あまり環境に変化はなかった。

　父親は忙しいのか、まったく接触はなく孝一が明洞の事務所に会いに行ったとき、僅かな金額ではあるが、生活費をくれた。　そのお金は、右腰の内側にある隠しポケットのようなところから、八つ折りにした紙幣が取り出されるのが悲しかった。

　学業に関して、一年間のブランクがどんな影響をもたらすか心配だったが、案ずることはなかった。

　一年間の独習で、六年生のカリキュラムを繰り返し勉強したことによって、本当の意味での実力となったのである。

　この経験は、孝一に復習の大事さを教えてくれ、難問を解いたときや、新しい知識には、必ず復習を三回すること、という言葉が孝一の座右の銘になった。

　国語の漢字演習のときは圧巻だった。　漢字の読み取りや書き取りに関しては、担任が舌を巻くほどの実力を見せたのである。　漢字のテストの採点を、孝一が任されて担任は、やることがなくなってしまった。

　クラスメートたちは、二学期から突如編入してきた孝一が、かなりの実力を備えていることを素直に認めた。

　別にみんなより一歳年上と、宣言したわけではないが、この一年間の辛苦は人間的に孝一を成長させ、一目置かせるような雰囲気を自然に醸し出していた。

このときの級友に孫寅河（ソン・インハ）という生徒がいた。彼の家は大きな建築業を営んでいて、大韓民国の復興と共に順調な成長を見せ、裕福な生活を送っていた。　彼は、論山時代の孝一と同じように、自動車で送り迎えされていた。

寅河は、大変に孝一を好きで、何かと接触したがった。

　毎日、自分のものと同じ弁当を二つ用意して持ってきてくれた。ひとつは孝一の分、ひとつは自分の分である。昼食は全員が家から弁当を持ってくるのだが、給食もあって、これは何とトウモロコシのスープが配られる。　麻浦でこのスープに辟易とさせられていたが、給食のは調理が上手なのか、甘味があって、結構おいしかったのである。

　あっという間に国民学校の六年生、二学期が終り、又、寒い冬が来た。

　金湖洞の部屋には、オンドルの設備はあるが、燃料もなく、同時に子供たちが火を扱うには危険が多すぎた。　やむを得ず、台所で煮炊きをした後、残った練炭を貰い、暖をとった。　そして、暖まっているうちに、布団にくるまり、抱き合ってお互いの体温を感じながら眠りについたのである。

　春になり、中学受験のシーズンとなった。　当時の韓国は国民学校の六年間は、義務教育だが、中学校からは任意選択であった。

　寅河君は毎日欠かさずに、昼食弁当の差し入れを続けてくれた。

そのお礼というわけではないのだが、彼の中学受験を助けるために、金湖洞の部屋に呼んで、受験勉強を手伝った。　その都度、食料を持ってきてくれるし、寒いときは練炭（穴が十九個あいたコンロ用のもの）を大量に届けてくれた。　三月、中学校受験のシーズンが来た。

　孝一はランク的には落ちるが、実務的な京成商業中学を受験した。

　ここを選んだ理由は家から通うのが楽であって、特待生制度が設けられていることである。特待生のテストに合格すると、授業料が免除されるのだ。

　絶対の自信を持って受験した孝一だ。担任教師も太鼓判を押し、同級生たちの衆目も楽勝で一致していた。

　自信満々に、合格発表を見に行った孝一だが、自分の受験番号が合格者の中にない。

――そんな馬鹿な。間違いなく全問百点だったはずなのに……

　もう一度、受験票を取り出して照らし合わせるが、やはり掲示されていない。

――どうして、僕が落ちるのだろうか。貧乏だからなのか。そんなことは受験要項に書いていなかった。奨学特待生は、貧しいけど向学の精神を持つ生徒のものじゃないのか。

　と、孝一は考えて、学校関係者に聞いてみようと、発表のボードの前から歩き出した。

「孝一、お前、合格発表を見に行かないのかよ。そうか、見るまでもないか」

　同じ中学を受験した同級生が、孝一を見つけて、声をかけてきた。

「えっ、見に来てるじゃないか。何回見ても僕の受験番号が見あたらないんだ。どうやら落ちたらしい」

　孝一は、番号が羅列されているボードを指さしながら、言った。

「そこにあるわけがないよ。特待生は別のところに発表されている。受験番号じゃなくて名前でな。お前の名前はちゃんとあったぜ」

「それ、どこにあるの？」

「校舎に入る入り口の横だよ」

　彼は顎で示し、ご丁寧に指までも添えた。

　孝一は、全力で走りだした。

　校舎の壁に貼り出された紙には、李孝一という名前が誇らしげに存在を示していた。

　孫寅河君は、孝一の特訓が効を奏して、かなりレベルの高い東北中学に合格した。

　誰が見ても、寅河君には少し無理なグレードの中学校だったので、彼や両親の喜びようは、半端でなかった。

　彼は、中学に入学したあとも、金湖洞に現れた。孝一に英語を教わるためである。

くるたびに食べ物を持ってきてくれて、孝一たちの口を満たしてくれた。

　中学入学を機に、新聞配達を始めた。新聞社は韓国日報社。金湖洞の山の上にある補給所で新聞を受取り、百三十軒ほどの家庭に配達する。

　約二時間ほどかけて、全戸を駆け足で回った。孝一の健脚は、このころからの積み重ねの成果である。

　そして父親からの援助が受けられなくなって、ここで自立の第一歩を踏み出した。

　夏休みに地域の民生委員の働きで、貧民家庭の認可が下りた。この決定で二十日に一度、メリケン粉、粟、押し麦などの穀物が二十キログラム、無償で配給される。

　家から遠いところに住所があることが、配給を受ける上で問題となる。善と享竜を立たせ、品物を受け取らせた。

　この食糧は、孝一たち三人にとって、大変に助かったのも事実だ。　しかし、これの代償は戒厳令下の街に夜警として出る義務が生じた。　中学一年生の孝一は、大人に混ざって深夜の警備に廻ったのである。

　十二時から交番の前に集まり巡回する。歩いている歩行者を掴まえて交番にまかせる。この巡回は一ヶ月やれば三ヶ月休みとなる。こんな状態だから、孝一の中学入学のお祝いなどは、どこからも来なかった。

　唯一それらしいのは、学校の冬の制服がプレゼントされたことである。　これは、明洞の事務所で父親から手渡されたが、そのときの説明が――曽おばさんからのお祝いだよ。ということだった。

　しかし、孝一には父親からのものとすぐにわかったのである。

――どうして父さんは曽おばさんに、こんなに気を遣うのだろうか。

　それもこれも、事業がうまく回っていかないことが、父親のプライドも自信をも奪い去っていくのだ。

　こんな父親を見るのが辛く、いつも悲しい思いにさせられていた。

Ⅵ

　学校で定められた制服がある以上、私服での通学は校則違反になる。

　六月になってほとんどの生徒が夏の制服に着替えても、孝一は冬服で汗を流しながら通学していた。行き帰りは腕に抱えても、校内にいるとき着用するのは辛かった。

　中学の一学期は、一年間の蓄積がものをいって、全科目に満点をとった。

　その成績を見て感激したそろばんの先生が見るに見かね、私費を投じて夏服を買ってくれた。孝一は同情されるのが嫌で、固辞したが、思い切り先生に叱られたのである。

「先生が勝手にやったことだ。但し、成績が落ちたら服を脱がすぞ」

　先生は笑いながらだがはっきりと言った。

　新聞配達で得る収入はしれたもので、とても三人が十分食べて行かれるような金額ではなかった。　貧しい孝一を見かねて、家が商店をやっている同級生が、映画の招待券を二枚くれた。

「これを、映画館の前で見に来た人に売ればいい。少しでも安ければ買ってくれるよ。おれの小遣い稼ぎだったけど、お前にやる。映画のポスターを貼っているところで交渉したらくれると思う。たいていは無駄にしているのが普通だからな」

　彼がくれた映画をやっている映画館にいった。さほど評判になった演しものじゃないのだが、雨交じりの天気のわりには結構入場者はいる。

　勇を鼓して、二人連れの女性に声をかけた。

「あのー、友達と約束してこの映画を見ようと思っていたのですが、彼、来られなくなってしまったんです。もし、よかったらこの券使ってくれませんか」

「これ、招待券じゃない。くれるの？」

「………」

　こんな反応は、予想していなかった。絶句した孝一を見てにっこりと笑った。

「冗談よ。招待券を売っている人、結構いるんだよね。私たち、映画はよく見るから。ところでいくらで売るの？」

　相手の方が上手だった。

「僕、初めてなんです。普通はいくらぐらいなんですか？」

「人気のある映画なら八割でもいいけど、この映画なら七掛けがいいところ。あんた、映画の内容を勉強して値を決めなきゃ駄目よ」

　すっかり相手のペースに、はめられてしまった。孝一にとって新しい知識である。

「じゃ、七割で買ってください」

「いいわよ。じゃこれ……」

　二枚分で三百ウォン、七掛けに少し色をつけてくれたのである。

　それから孝一は、通学の途中、映画のポスターを貼ってある商店に入って行き、ビラ下の招待券を貰えないか、と交渉した。

　中には映画が好きで、券を貰ったら必ず見に行くからと断られた店もあったが、大半は無駄にしているようで、無償で譲ってくれたのである。

　これも、二週間に一度しか手に入らない。

　何か仕事を見つけて、収入を得なければならない。孝一は、これまで自分が経験した仕事を思い返してみた。

　まず、論山では教会のミサを手伝った。これはお金を稼ぐというより、ダリオ神父から朝食を得るためである。

　次は屠殺場での手伝い、お金よりも一片の牛肉のためで、しかも一日で辞めてしまった。

　唯一、現金を手にしたのが薪拾いである。

これは全谷でもやったが、ソウルという都会で、薪拾いが出来るとは思えなかった。

　一番お金を稼いだのは、銃弾拾いだった。これもソウルではあり得ないことで、夢の又夢というところである。　昼間を振り当てることができると、探しようがあるのだが、中学生の孝一は学業を優先させなければならないのだ。

　少しずつ、勉学に対する集中力が削がれてきて、思いもよらない状況で、徐々に成績が落ちていったのである。

Ⅶ

　特待生の条件は、テストで全科目、九十二点以上を取らなければならない。

　二学期までは何とか、クリアしていたのだが、一年生の年度末で、数学と理科の二科目を落としてしまった。

　テストの成績が悪くても、退学にはならない。しかし特待生から外されると、その段階で授業料を納入しなければならない。

　二年の新学期が始まった。当たり前のことだけど、かなり高額の授業料を支払うことは不可能だった。

　夏休みまでの一学期中に、月謝を納めることが出来なかった。毎日、授業料未納の生徒は教室の後ろに立たされた。顔から火が出るような恥ずかしさである。

　機械的に退学処分となる。

　孝一にとって、勉学ができないということは、どれだけ毎日のリズムを破壊してしまうのかを痛感させられていた。

　とうとう、授業料滞納により、退学の命令が発せられた。これで、孝一が父親から離れて決心した自分ひとりで妹と弟の世話を見ながら生きてゆくという精神的な張りが現実として不可能になった。

　学校へ行けないということは、昼間の時間が使える。学年では中学一年生の孝一であるが、十五歳、中学三年の年齢になっているのだから、体力的にも、世智でもそれなりの成熟度に到達していた。

　仕事を探して歩いた。しかし、それまでは中学生だった孝一である。

　どこに行けば仕事が見つかるか、基本的なルールが彼にはわからなかった。収入は新聞配達の報酬しかない。すぐに収入は底をつき、家には食べるものがなくなってしまった。

　米さえあれば、塩をかけて食べることだって出来る。しかし、その米が今朝家を出るとき一粒も残っていなかったのである。

　韓国でも、夏の風物詩としてアイスケーキ売りの呼び声が挙げられる。

　アイスケーキというのは、真ん中に割り箸が入ったスティック状の冷菓で、日本ではアイスキャンデーと呼ばれるものである。

　孝一は、アイスケーキを作っている店に入っていった。

「すみません。アイスケーキを売らせてくれませんか？」

「ああ、いいよ。でも、六百ウォンの保証金がいるのだけど持ってるかい」

　店の主人と思われる人が言う。

「保証金がいるのですか？」

「そうだよ。一本、十ウォンで百本入っている保冷ケースも貸すし、四割が売り子の取り分だから、うちの六割分を入れて貰うんだよ。何も特別なことじゃない」

「僕、お金がないんです。この鞄を担保にしますから売らせてください」

　孝一はいつも持ち歩いている、教科書やノートが入った肩掛け鞄を差し出した。

「これじゃ価値はない。駄目だね」

「そんなこと、いわないでください。家には兄弟がお腹を空かして待ってるし、教科書は僕にとって命の次に大切なものなんです」

　孝一は、必死になって主張した。

「ま、そうだろうけどな……いいか、今日だけだぞ。明日からはお金だ」

　店のおじさんは、鞄を預かるのと引き替えに、百本入りのアイスケーキの箱が、胸の前にかけられたのである。

　表に出たが、どこに行って、どうやって売ればいいかわからない。

　のぼりを立てて、アイスケーキを売っている、と宣伝しているわけではないので、売り声を発しなければ、誰も注目してくれない。

「えー、アイスケーキ」

　孝一は、小さな声で口に出してみた。

　周囲に何人か人がいたが、誰も孝一を見てくれない。孝一の頭に血がのぼり、顔が真っ赤になってしまった。

　孝一の足は、自然に漢江沿いの鉄道土手に向かっていた。春、入学式のころに花を見るため、大勢の人が集まっていた記憶を思い出した。

　しかし、いまは夏の暑い盛り、しかも昼下がりで、遊歩道には人の姿がなかった。人がいなければ、恥ずかしさもない。

「えー、アイスケーキ、アイスケーキはいかがですか。冷たいアイスケーキ」

　孝一は、大きな声で叫んだ。

　前方の木立から、大きなカラスが激しく羽の音を立てて飛び立った。　四時間ほど、鉄道の土手にいた。人とすれ違っても声をかけないのだからとても売れる筈がない。　結局一本も売り上げのないまま、店に帰ってきた。

　孝一としては、売れなかった分の商品を返品すれば済むものと思っていたのだが、それは大きな間違いだった。

　店のおじさんが箱のふたを開けると、そこには信じられない光景が出現した。

　表現しようもない色合いの水の中に、大量の割り箸が漂っている。

　それが、溶け出したアイスケーキだと理解できるまで、かなりの時間を要した。

「何本売れた？」

「一本も売れませんでした」

「それは弱ったな。この一箱を君が六百ウォンで買い、売り上げ全部が君のものになるのがうちのシステムなんだよ。君は六百ウォンの保証金を払っていないから、まるまる借金になってしまった。明日働いて、返して貰わなければならない」

　結局、お金を稼ごうとして六百ウォンも借金を作ってしまったのである。

Ⅷ

　父親の会社に行くが、行方がわからず金を作ることが出来なかった。

　孝一は論山のカトリック教会で、神父の助手をつとめられるくらいに、篤い信仰心を持っていた。金湖洞の教会にも礼拝は勿論、教理の勉強会などにも出席していたのだ。

　食べるものを買うお金を稼ごうとして、アイスケーキ屋に行き、逆に借金を作ってしまった孝一は、気がつくと金湖洞の教会の聖堂にいたのである。

　いつもは、前の方に座って参列する孝一だが、この日は少し遅れてきたこともあって後から二番目の席に座っていた。

　ミサの式次第が粛々と進行し、献金のザルが廻ってくる。

　孝一には、献金するコインも持ち合わせていない。ザルの中には五百ウォン札が数枚入っている。

　これは孝一にとって、誠に魅力的で誘惑的な光景だった。ただ、その五〇〇ウオンが持つ魔力は強力だった。

――これだけあれば、僕たちの当面の食費がまかなえる。

　孝一の心臓の動きが、息苦しいほど急に慌ただしくなった。足が震えた。

　ふと、周囲の人たちの様子を見る。皆、目をつぶって神父の唱える聖書の言葉を、リフレインしている。誰も孝一を見ている人はいない。ここで悪魔が囁いた。

――孝一、神様に心から謝ってお金を借りなさい。お金が稼げるようになったらすぐに返しますから、神よ我を許し給えと……

　五百ウォンのお札は、孝一のシャツのポケットに納まってしまった。

　孝一にはアイスケーキ屋に六〇〇ウオンの借金があるが、これを返そうとは考えが及ばなかった。このお金で、お腹を空かせている善や享竜にご飯を食べさせることしか思いがつきなかったのである。

　このお金を持って孝一は走った。行き先は金湖洞の乾物屋である。

　ここで米を二升、買った。一升が二百ウォンだから、四百ウォン。残りで塩とマーガリンを買った。

　これで米飯を炊いて、マーガリンと塩をかければ、一週間ほどはしのげるのだ。

　しかし、どんなに貧しくとも、ひもじくても人のものを盗むことなど考えもをしなかった孝一の、唯一の汚点がここに記されてしまったのである。

　このときは今日作った借金のことなど忘れて、必要な食物を購入した。しかし、この米も兄弟のお腹に納まってしまうのは、わけもなく早いだろう。すぐにまた、お金が必要となる。

　しかし、教会に行って献金のザルからお金を抜くことは、死んでも二度とするまいと心に誓った。あんな神を冒涜する後味の悪い罪を犯すことは…

　翌日もアイスケーキ屋で働く義務ができてしまった。朝からこいというおじさんの言葉に、新聞配達を終えた足で、アイスケーキ屋にゆく。

　唯一の救いは、善が国民学校に通っていることだ。享竜もひとりで遊ぶことになれた。少なくとも、夕方までは彼らのことを気にかけないで済む。

　店ではおじさんが、待ち構えていた。

「これが今日の分だ。全部売れても君の借金は二百ウォン残る。売れ残って溶けそうになったら、値下げしても構わないから、ふた箱でも三箱でも売ることだ。そうしないと借金は増えるばかりだぞ」

　勿論、孝一だって売るつもりだ。働いて借金が増えていくなんて考えられない。

　幸い、今日も暑い一日になりそうだ。人の集まるところに行こう、と孝一は決心した。店を出て歩き出したが、やはり、足は自然に漢江の方に向かう。

　前方から、制服を着た女子中学生の二人連れが来た。生き生きとした、かわいい表情ではしゃぎながら、こちらに向かってくる。

　孝一は、胸に下げていたアイスケーキの箱を背中に回し、そこに立ちすくんでいた。

　彼女たちは、どんどん近づいてくる。孝一は、その姿から目が離せなかった。

　彼女たちの目に、みすぼらしいアイスケーキ売りの自分の姿が、どう映るのだろう。

　そんな孝一の思惑は、見事に否定された。ふたりは自分たちの話に夢中で孝一などに一瞥もくれず、通り過ぎていったのである。

――なんのことはない。あの子たちにとっておれは道端の石ころみたいなものだ。興味の対象にすらなっていない。恥ずかしいなんて考えていたおれがおかしい。この暑さだ、アイスケーキが欲しい人が待っている。そこに行けば必ず売れるんだ。

　孝一の足は考えることもなく、魚市場に向かったのである。

　市場に入ったとたん、箱に書かれた《アイスケーキ》という文字を見たひとりのお兄さんが声をかけてきた。

「おい、アイスケーキをくれ」

「はい、十ウォンです」

　箱を開けて、一本取り出し。手渡した。

　それがきっかけとなって、奪い合いのようにアイスケーキが売れてゆく。

　すぐに箱が空になった。孝一は走って店に戻り次の箱を肩に市場に戻った。

「えー、アイスケーキ。冷たいアイスケーキはいかが」

　スムーズにセールストークができる。また、あっという間に箱が空になった。

　昼食を食べる間もなく、魚市場で十箱を売りまくった。次に青物市場にゆく。ここでも売れに売れた。この日一日で十六箱完売。

　コミッションは、昨日の借金を差し引いても五千八百ウォン、現在の孝一にしてみれば、想像もつかない大金だった。

　その上に一箱につき、一本のアイスケーキが褒賞としてもらえる。

　十六本のアイスケーキを新聞で包み、金湖洞まで走った。しかし部屋に着いたときはかなり溶けており、三割方、やせ細っていたのである。

　アイスケーキは近所中に配られた。

　この経験は、孝一の初めての積極的な物品販売という、記念すべき出来事となったのである。

**第九章・拾った財布（僥倖）**

Ⅰ

　中学校を授業料未納で退学処分になった孝一は、決して充足した毎日を送っているわけではなかった。

　とりあえず、夏の間はアイスケーキを売ってうって、売りまくった。

　魚市場と青物市場は、孝一の縄張りという暗黙の了解が出来上がった。

　天気がよくて、暑くさえあればある程度の売り上げが見込めるのである。要領さえわかれば比較的、単純な商売だった。

　アイスケーキの製造所では、孝一が売りさばいて来る数量を計算して、生産していた。

　しかし、この類いの季節商品は、秋が近づくにつれ、売れる数量は暫減し、やがてはまったく売れなくなるのだ。

　とりあえず、客のニーズのあるうちは、売った。

　さすがに二日目の五千八百ウォンというマージンはなかったが、季節ものであるために、利潤は上がったのである。

　アイスケーキ屋の主人は、秋冬も、餅を売り歩いてくれないか、それがだめなら来年も夏になったら来て、アイスケーキを売ってくれ。といってきた。

――僕は一生、アイスケーキ売りで済ますつもりはない。この苦境を過ぎれば、本当にやらなければならないことがあるんだ。と考えたが、その場は曖昧に答えておいた。

　しかし、漠然と考えただけで、現在、中学校にすら行くことができない自分を振りかえると、意気込みほど前途に希望があると思えないのも、現実であった。

　夏の間、よく働いたので珍しく蓄えが出来ていた。幸い、家賃が只みたいな金額なので何ヶ月かは食べていけるだろうが、これとて費いきってしまったら、すぐに困窮するのは目に見えている。

　父親は相変わらず、様子を見に来ない。事務所に会いに行ってもまずいたことがないのだ。だから父親に縋ることは出来ないと考えた孝一は、新しい仕事を探した。

　朝の新聞配達は続ける。少しでも報酬の多いところを調べ、選んだところ、韓国日報から朝鮮日報新聞社に変わって配達の件数も約百五十軒に増えた。

　朝鮮日報新聞社に変わったことにより、環境的な条件が改善された。社屋の地下に新聞の補給所がある。そこの仮眠室を亨竜と孝一が使ってもよい、とのことだった。

　新聞社の配給所地下室には、三〇人ほどの男が寝泊まりして、二〇人ほどが夜間の通行禁止が解けた頃に集まってくる。朝になったら折り込み広告を新聞にはさむ作業がある。

　もうひとつ運のよいことは、善が補給所の所長宅に住込みのお手伝いで採用された。

　とりあえず、住むところと、妹の口は確保できたが、また、善と別居するようになった。　孝一の配達テリトリーは、光化門から北の約百五十軒である。増えても代金回収の作業に苦労が生じた。

　金湖洞の坂道を配達するのに比べると、平坦なこの地区は楽だった。

　最初の配達に亨竜が着いてきた。朝刊の配達は早朝四時半ごろからスタートし、七時には終わってしまう。

　しかし、国民学校前の亨竜に、孝一のランニングについてこられるわけがない。予定していた時間のほとんど倍を要した。

　亨竜も、朝四時に起きるのは苦痛だったはずである。

「竜、明日からお兄さんの配達に、ついて来なくてもいいよ。配達が終わったら起こしてやるから、それまで寝てるんだ。いいな」

「うん、あんな時間に起きるのは無理だよ」

「お兄さんが戻ってから起きても、大丈夫だ。そうしょうな」

「わかった。そうするよ」

　亨竜は素直に言うことを聞いた。

　翌日、配達を終えて亨竜を起こし、明洞に向かった。

　明洞の父の事務所に行っても会えない。すぐ側にある小さな公園に、屋台のすいとん屋が店を出していた。このすいとんは五ウォンで、海苔が入ると途端に十ウォンになるという価格設定だった。

　このすいとんで朝食とすることが多かった。

　これが毎日のスタートであり、ルーティンの行動なのである。　配達の受け持ちが二十軒増えても、さほどの増収にならない。

　結局、中学校に行ってない孝一が、通常の勤務時間である九時から五時までの間、無為に過ごすわけにはいかないのも孝一の厳しい現実である。

Ⅱ

　街に出て仕事を探すが、なかなか見つからない。孝一は現在十五歳、普通なら中学三年生である。

　続けている新聞配達の作業で健康と根性には自信があるが、年齢的に中途半端と思われるのが就業を難しくしていた。

　仕事を捜す過程で、父親の明洞の事務所の前を通る。しかし、もう孝一は一瞥を与えるだけで、そこに入ろうとしなかった。

　父親に相談すれば、なんとか道が開けたかもしれないが、孝一が抱く不信感も生半可なものではなかったのである。

「孝一さん、お客様。お部屋でお待ちよ」

　疲れ果てて新聞補給所の事務所に戻ってくると、補給所の事務をやっている中学三年生の黄成愛が声をかけてきた。

「お客？　誰だろう」

　孝一が、ここに住んでいることを知ってる人はいないはずである。

「学校のときの友達ですって。すごく感じのいい子よ。ようやくあなたを見つけた、といって嬉しそうにしているわ」

　孝一に思い当たる節はなかったが、とりあえず、会ってみないことには始まらない。

　地下室への階段を降り、扉を引く。

「李孝一さん！」

　何と、そこに待っていたのは孫寅河だった。

「寅河君。どうしてここにいるの？」

　孝一の、素直な疑問だった。

「探したよ。父さんに頼んで探偵を使って……だって金湖洞から二ヶ月も前にいなくなって、どこに行ったかわからないし、京成中学をやめてしまっているし……」

　寅河君は、少し涙ぐんでいるようだ。

「学校は特待生が外れて、在籍することができなくなってしまった」

「特待生じゃないと、学校を辞めなければならないの？　そんな馬鹿な」

「授業料が払えなくて、退学さ」

「そんな……言ってくれたら、何とかしたのに。でも会えなかったんだから無理か。僕、そんなこと知らなかったから、英語を教わったお礼も払ってないし。お父さんやお母さんも――孝一さんはどうしてるのだろうか。っていつも心配しているのだよ。急で悪いんだけど、これから家に来てくれる？」

　寅河君の気持ちはよく理解できた。孝一も彼の家にいけば、いろんな意味で助けてもらえることはよく分かっていた。

「いや、君の家にはいかない。僕は竜と一緒に生きていかなければならないんだ。ここで人の情けに縋ると、何もならなくなる」

「亨竜君も一緒なんだ。で彼は？」

「外で遊んでいる。もう帰ってくるだろう。竜も彼なりに頑張っている」

　孝一は、自分の気持ちをふるいたたせるように現状を述べ、宣言した。

「わかった。孝一さんは偉いし、強いね。僕も見ならわなければ……でも、ひとつだけお願いがあるんだ。僕が二年になってすぐに英語の勉強を教えて貰えなくなった。一学期は何とかなったけど、二学期になって成績が落ちてきたのを感じるのだよ。僕、ほかの学科はともかく、英語だけはちゃんと学びたい。将来、アメリカに行って勉強したい。週に一度でも二度でもいいですから、英語を教えてもらえないだろうか」

「僕は学校に行ってないんだよ。だから英語がどこまで進んでいるかもわからないし、君に教えるだけの力はもうない。新聞配達のあとの仕事も決まっていないし」

　孝一は、話すつもりはなかったけど、現在の状態をつい明かしてしまった。

「そうか……孝一さん、僕に勉強を教えるのも、仕事と考えて貰えないか。お父さんだって、そのように希望しているのだから。ちゃんとお礼は払うので」

「寅河君、昼間の仕事が決まって、気持ちが落ち着いたら、考えてみよう。僕も勉強したいのは山々なんだ。教えるとかじゃなくて、君と一緒に学びたい」

　孝一には、寅河君の気持ちがとても嬉しかった。しかし、彼に甘えてはいけないと心の中で思っているのも、偽りのないところだ。

「今日は帰る。でも、お父さんとも相談して、きっとお願いにくるよ。そのときには考えてちょうだいね」

　寅河君は丁寧に頭を下げると、立ち去った。

　入れ替わりのように、お茶とお菓子を持って事務員の黄成愛が入ってきた。

「あら、お客様お帰りになったの。お茶を淹れてきたのに……」

「たった今帰ったところだ。会わなかったかい？　彼、国民学校のときの友達だよ」

「国民学校？」

　彼女はお盆を置くと、座り込んだ。

「そう、中学校は別な学校だ。彼、どのくらい待っていたの？」

「一時間以上、待ってたわ。このお菓子、彼のお土産よ。いただいてもいいかしら」

　成愛は、そこに腰を据えてしまった。

Ⅲ

　孫寅河君の行動は早かった。

　翌日、孝一が外出から帰ってくると、彼は待っていた。

「孝一さん、昨日の夜、お父さんと話したらお父さんは、勉強を教えてもらったから、中学にも合格できたし、年齢だって僕より一歳も年上で……」

　寅河君は、孝一が一歳年上だということを知っている。孝一は、自分が一年留年しているのを発表しておらず、学校の教師が、皆に明かすことはあり得ない。

　たしかに、十代半ばのこの一年間は、個人差こそあれ、成長期であるのは間違いない。　毎朝、新聞配達で体を鍛えている孝一は同学年の人間より、一回り体が大きかった。

「中学合格は、君の実力だ。年齢が一歳年上なのも事実、それも僕の方の事情だよ」

「それは置いといて、お父さんは――お前が勉強するのを一切邪魔しないよ。孝一さんが来てくれる日に合わせて教わればいいじゃないか。孝一さんの昼間の仕事だけど、今日、父さんの友達で、水道工事屋をやっている人が来て、部品の管理をしていた女性が結婚のために退職し、次の人を探している。誰かいないか、といってきた。その仕事だったらそんなに大変じゃないだろうし、どうかな。といってたよ」

「………」

　孝一は、寅河君の顔を見ながら、何も言葉を発することが出来ないでいた。

「お父さん、今日はまっすぐ帰ってくる。お母さんも孝一さんのために夕食を用意して待ってる。亨竜君も一緒にどうぞ、って」

　ここまで段取りがつけられていれば、断るのはかえっておかしい。

　孫家は長忠洞の北側、丘の上にある高級住宅地にあった。

　太平路の朝鮮日報社から、バスで三十分ほどの道のりである。孝一は亨竜の手を引いて寅河君のあとに続いた。

　さすが、一流の建築会社社長の自宅だ。木造ではあるが、重厚な雰囲気が孝一を威圧した。門から玄関までの飛び石や、庭に植えられた樹木などもよく手入れされていて、人工的な美しさであるが、目を和ませてくれた。

「お父さん、李孝一さんをお連れしました」

　寅河君の声に、奥から上品なおばさんが出迎える。多分、寅河君の母親だろう。

「李孝一さん、ようこそきてくださいました。私、寅河の母です。さ、どうぞお上がりになってください」

「お母さん。国民学校時代に毎日お弁当をありがとうございました」

「いいえ、寅河からいつも聞いてます。孝一先生に教わらなかったら、今の僕はないと」

「そんなことはありません。寅河君の実力ですよ。受験するのは本人ですから。孝一と呼び捨てでお願いします」

「それでは孝一さん、こちらにどうぞ。主人も帰っております。お会いするのをとても楽しみにしていますわ」

　孫社長と家族に会うのは初めてだ。何故か寅河君が金湖洞のあばら家が気に入って、彼がもっぱら訪ねてきたからである。

　何かのときに寅河君から聞いた。貧乏な暮らしも、コンプレックスになるが、豊かな生活をしていることも負い目になる、といっていた。これは寅河君の優しさなのだろう。

　まず、応接間に案内されてお茶がだされた。

　寅河君の父親は、ゆったりとソファーに座り、いい香りのパイプ煙草をくゆらしていた。

「李孝一君か。初めて会うね。私、寅河の父親で孫承哲だ。寅河が世話になったね。ありがとう。家内からいわれているから必要以上にお礼は言わないけど、本当にありがとう。あ、言ってしまったか……」

　孫社長は、見かけよりもユーモアのセンスがある人のようだ。話す言葉を冗談にまぎらわせているが、感謝の気持ちは十分に伝わってきた。

　父親として、決してできのよくない息子に対する愛情の深さが感じられる孫社長を見ていると、孝一を放り出して、振り向きもしない父、虎範との落差を痛感させられた。

　この思いは一瞬だった。父、虎範が日の出の勢いを持って周囲や軍に君臨していた姿が脳裏に浮かんだ。

――父さんだって、このままで済むわけがない。きっと昔のように、格好いい父さんとして僕たちを呼んでくれる。

　現実には、希望的観測であることはわかっている。しかし、この幸福そのものの家庭を見ていると、つい夢を見たくなってしまうのも、やむを得ないところである。

Ⅳ

　食事になる前、事務的な打ち合わせは応接間で始まった。

　まず、問題の水道工事屋は、金水道設備工業といい、主人は、孫社長の中学校時代の友人であって、さほど大きな会社ではないが、孫建設工業の下請けもやっていて、業績はいい優良企業だそうである。

　欠員になっている部品管理の仕事は、工事に必要な材料部品を不足がないよう、発注し揃える内容である。現場に出るわけではないので、きちんと五時には終わる仕事のようだ。　給料も、特別優遇はされないが前任者並みの収入は確保してくれるらしい。といっても女性なので、多くは期待できなかった。

　孝一は孫社長にひとつ条件を出した。それは、その会社を紹介してもらうまではお願いするけど、そのあとの交渉は孝一がすべてを行い、孫社長の影響力が及ばないようにしてもらうことである。

　孫社長も、孝一の考えに賛同してくれた。男なら、自分の仕事に責任をもって生きるべき、というのが社長の持論だそうである。

　次に、寅河君の家庭教師だが、火曜日と金曜日の週二回、六時から三時間、孫家を孝一が訪問して行うことになった。

　孫家の意向もあって、それなりの報酬が支払われることでお互い、同意した。　孫社長は、孝一を一人前の男として扱ってくれ、生き方を理解してくれた。

　夕食のときも、食後の団欒のときも、孝一に自分の意見を押し付けることはなかった。

　ただ現在、孝一が中学校に行ってない理由を知ったとき、少し考えて――授業料を払ったら、復学できないの？。と訊いてきた。

　正式に退学となり、もう籍がないので無理と述べると、この話題は打ち切られた。

　翌日、金水道設備工業の本社に、金社長を名指しで訪問した。

　本社は明洞にあるが、資財倉庫は東崇洞だという。資材課長の案内で倉庫に行った。

　会社のトラックで行ったので、あまり道順などを気にしていなかったのだが、倉庫について驚いた。窓からの風景に見覚えがある。

　何と、この倉庫と道をへだてたところについ一ヶ月前まで通っていた、京成商業中学の裏門が見えたのである。

　事務室に入ると学校から見えないが、倉庫の入り口に立つと、全身がさらけ出される。　もうやめた学校なので、気にすることはないと思うが、やはり抵抗感があった。

　仕事の内容に関して、苦労することはなかった。在庫の量をきちんと把握さえしていれば、工事で使った伝票とストックとを照合すれば自ずから、答えが出てくるはずだ。

　ただ、一口に水道工事のパイプといってもその種類の多さには驚かされた。パイプの径にしても本管に使う大口径のものから、家庭内に設置する。四分の三インチ径のものまであるし、パイプの材質にしても鉄管、鋳造管、鉛管、スレートのものまで多岐に亘った。

　ジョイントにしても同様である。しかし、これらは前任者がきちんと管理のシステムを作り上げており、それを踏襲するだけで問題は起きなかった。

　仕事の内容も把握でき、明日から倉庫に出勤することになった。

　見込まれる水道工事会社からの給料、ずっと続けている新聞配達の賃金、寅河君の家庭教師の報酬と、孝一の経済状態は、豊かではないにしろ安定することが見込まれた。

　夏休みも終わり、二学期が始まった。

　倉庫の窓から眺めていると、顔見知りが学校を出入りする。退学になったのはまぎれもない事実だ。ここで働いている自体、決して恥ずかしいことではないのだが、孝一は常人と比較して自意識過剰なところがあった。

　学校の登下校時は、決して資財倉庫の陰に隠れて入り口には立たなかったのである。

　多分、同級生たちは、水道工事屋のことなどまったく関心がなかっただろうが。

Ⅴ

　毎日が順調に経過していく。

　新聞の配達は、もう長いこと続いているので、孝一の中では習慣のようになっており、特別なことは何もなかった。

　水道工事の部品管理も、最初は少し戸惑うところもあったが、三日も経てばやはり何ごともなく推移するようになった。

　孝一にとって、一番重要なのは、火曜日か金曜日の家庭教師だった。

　英語や国語、社会、歴史など文系は問題なく寅河君に教えることが出来たが、彼の南北中学は、孝一の京成中学よりレベルが高かったので、理数系はかなりの難物だった。

　さすがの孝一も、数学や理科などに予習が必要だったのである。　今の三年生から二年の時の教科書一式を分けてもらうよう、寅河君に依頼した。

　教科書はすぐに入手できた。

　寅河君は、孝一の事情をすべて知っているので気が楽である。

　どちらかといえば、火曜日と金曜日の夜は勉強を教えるというより、孝一にとっての学習日の様相を呈した。

　孫家で、この二日間は夕食を用意してくれた。学習が終わるころを見計らって、孫社長の秘書が亨竜を連れてきてくれ、帰りも新聞社まで送ってくれたのである。

　地下室に戻ると、中学二年生の教科書を開く。このところの予習の成果で、次のレッスン日に戸惑うことはなくなった。

　この予習は、孝一が持つ勉学への欲求を呼び起こした。学ぶ場のないつらさが、孝一の胸をえぐった。

　韓国の義務教育は、国民学校の六年までで中学は、義務教育ではないのでそれぞれの中学校は受験によって選ばれている。

　勿論、編入の試験もあるようだけど、それは各々の中学校で聞いてくれ、といわれた。

　学力的に、二年生からの復学には自信がある。しかし、このまま新学年になってしまえば、二年間、皆に遅れることになる。

　いくら、二年のカリキュラムを完璧にマスターしていても、二年生半ばで退学になっているので、学籍上、二年への編入は不可能と判断していた。

　享竜は、孝一と寅河君の勉強をおとなしく聞くことに慣れて学校前の亨竜を大きく成長させていた。

　善は、朴家で重用されているようだ。孝一が所属する補給所（新聞中継所）のボスが朴氏であり、彼はことあるごとに、善の働きをほめているからだ。

　当時の裕福な家庭では、安い労働力が巷に溢れているので、家事を手伝う娘を雇うことが多かった。

　中には子守を専門にする娘、料理が得意でその家の炊事を司るお手伝い、清掃や洗濯を仕事にする娘など、何人も置いている金持ちの大家もあった。

　善が世話になっている朴家は、新聞補給所のボスといっても、さほど裕福とはいえず、すべての家事を任されていた。

　善は特に請われたわけではないが、全谷の李大佐宅でも自発的に家事を手伝っていた。

　極め付きは、孝一たちが竜山、麻浦、釜山と居候生活を送っている間、新しい母となる曽栄淑に鍛えられた家事である。

　朴氏の奥さんは明るい人で、善も働きやすい環境だった。　給金などの取り決めはない。善はまだ国民学校の三年生であり、昼間は学校に行く。従って朝食をしつらえて学校へ。帰ってきて洗濯と掃除、夕食の支度。この作業は、朴家の妻女との共同作業だった。

　朴家に子供がいないこともあって、朴家の妻女は善を自分の娘のように可愛がった。

　孝一と善にとって、三度の食事が食べられ、学校に行かせてもらえて、寝場所が提供されれば、何も不足はなかったのである。

　孝一は、朝の新聞配達を終えると、亨竜を連れて公園に行き、すいとんを食べて水道工事屋の倉庫に出勤するのが日課になった。

　部品管理の仕事は確かに楽な作業だ。これなら女性にも十分つとまっただろう。この仕事で特別な高給は望めない。当時女性の賃金は、女でなければできない仕事以外は、極端に低く、抑えられたのである。

　従って、水道工事屋からもらう給料は、とても普通の生活ができる金額ではなかった。

　寅河君の家庭教師の報酬も、彼に勉強を教えるという状態ではなく、どちらかというと週二回、彼と一緒に勉強する形になった。

　教師報酬は辞退し、その日の夕食だけ、遠慮なくご馳走になることにした。

　この週二回が、後々、大きな成果となって戻ってくるのである。

Ⅵ

　昼間の仕事と家庭教師を始めたが、孝一が得る収入で一番主力となるのは、やはり、新聞配達だった。

　寅河君からの話があって、経済的に安定するかと思ったが、思惑通りにいかないのが現実なのである。

　現実の収入が見込めるのは、特殊なものを除くと、額に汗するのが一番だ。

　新聞配達はもう二年近く経験している。雨の日も風の日も、雪の日でさえ休むことが出来ないのが、この仕事だ。いくら体調が悪くとも配達は休めない。

　韓国の新聞配達のシステムは、契約している家庭に毎日配達するのはもちろん、新規客の開発も仕事のうちだ。この仕事は、一種の個人事業主の形態をとっている。

　即ち、自分が担当する家庭に対するケアまで配達員の責任であり、他紙に替えられてしまうとすぐに影響が及んでくる。

　そして究極は、毎月の集金である。集金してきた新聞料金の六十％を補給所に払い、あとの四十％が各々の実入りとなるが、担当地区のすべてで集金できるとは限らない。

　この回収率を上げることも、配達員の技術であり、ノウハウなのだ。

　アイスケーキ売りのシステムと同じである。　配達をスタートするとき、百五十部の新聞を帆布製の肩掛けに格納して出発する。　現在のように一部のページ数が三十数頁に及ばないのが不幸中の幸いだった。

　物ごとはうまくいくもので、抱えている新聞の部数が多いときは、まだ元気なので、足取りも軽い。そして配達の末期は疲れているが、肩掛けは軽くなっているのだ。

　その出来事は、全体の八十パーセントくらいが済んで、肩にかかる重みが軽くなった頃に起きた。

　光化門からスタートし、鐘路の西側を走って配達する。　早朝なので人通りはないけど、日中は学生たちで賑わっている太平路を横切り、通仁洞から体府洞に向かっているとき、ポストに新聞を投げ入れた孝一の目に、植え込みの蔭に転がっている、黒い塊が飛び込んできた。

近寄って足で蹴ってみる。その塊はスローモーションのように、裏返しになった。

――財布だ！。

　孝一の動悸が激しくなった。先程爪先で蹴った感覚は、かなりの重量感を伝えてきた。

　周囲を見回した。こんな早い時間に表を歩いている人はいなかった。

　もう一度、運動靴で突っついてみる。やはり、相当な厚みが感じられた。

　孝一は、素早くしゃがむと、手に取ってみた。長方形の黒革の財布は、手にずしりと重さをもたらした。内容を見たら、かなりの現金が納められていた。

　財布をズボンの尻ポケットに入れ、残った配達を済ませた。

　駆け足のまま、新聞社の補給所に戻り、地下の自分の部屋に籠もる。　ポケットから財布を抜き出して、目の前の床に置いた。

　財布はかなり使い込んだもので、角などがすり切れており白くなっている。それにしても厚みが凄い。

　恐るおそる、財布のふたを開いてみる。すぐに目に入ってきたのは紙幣の束だった。

　抜き出して数えてみる。途中でわからなくなったが、十万ウォンはありそうだ。

――このお金があれば、すり減って穴があいている運動靴が買い替えられるな。　運動靴なら何十足も買える金額だけど、孝一が考えたのはそんなことだった。

　銀行小切手が一冊入っていた。額面十万ウォンが十枚。これで百万ウォンだ。このまま銀行で換金も出来るし、街でも使うことが出来るので現金と同じものだ。

　反対側の仕切から、写真付きの身分証明書が出てきた。中東中学が発行した韓熙正という名の教師である。名刺も入っていた。

――この人、教頭先生だ。

　名刺の肩書きは中東中学校・教頭となっていた。

　もう一つの仕切りには、三枚の便せんにびっしりとハングルが書き込まれた、手紙のようなものが入っていた。

　表題を読むと『学校運営に関する要望書』と、達筆なハングルで書いてあった。

　最初のページをざっと読むと、どうやら若い教師からの学校改革案のようである。　間の頁を飛ばして、最後のページには十名の連名が自署されている。

　全文を読んだわけではないが、そこから物々しい雰囲気が伝わってきた。

　十万ウォン以上の現金と、百万ウォンの小切手、その上、何やら、重要そうな書類であるが、孝一を激しく誘惑するのは現金だ。

　これらが収まった財布を前にして、孝一は思い悩んでいた。

Ⅶ

　孝一は、昼間の金水道設備工業の仕事を終えたその足で、まっすぐに韓熙正先生の自宅、体府洞に向かった。

　昨夜、悩みになやんだ末、夢に出てきたイエス様のお告げ――私のところのはいい。これ以上、罪を重ねてはいけないよ。という言葉に素直に従ったのである。

　韓先生は帰宅していた。

　孝一が財布を差し出すと、目を剥くようにして驚き、次にはことのほか喜んでくれた。

「お金が入っていたから、諦めていた。まさか拾って届けてくれるなんて……昨夜は酒を飲んでいたから、家の鍵を出すときにでも落としたんだ。いや、本当にありがとう。さ、上がってお茶を飲んでいってくれ」

　孝一の肩を抱かんばかりに、家の中に招き入れてくれた。

　応接間に入ると、無造作に財布の中の現金を掴みだし、全額の十万ウォン以上を謝礼として差し出したのである。

　ということは、現金が戻ってきたのを喜んでいるのではなく、小切手と改革案の文書が大切だったのだ。

　孝一は当然、この謝礼を断った。

「先生、拾った物は警察に届けるのが市民の良識です。先生のお財布に身分証明書が入っていたので、少しでも早いほうがいいと思って、届けただけですから」

「そうか、謝礼は少し考えよう。正直な君に拾ってもらって幸運だった。ところで、君は何時頃、どこで拾ってくれたの？」

「今朝のお家の五時半頃ですか、門の植え込みの前です」

「裸で落ちていたのか。そんな時間に、どうしてここを歩いていたの？　家はどこ」

「僕、新聞配達をやっています。このあたりの地域が担当なんです」

「ということは、学生かい？」

「夏までは……一学期でやめました」

「高校生？」

「いいえ、中学の二年でした」

「中二か。大きいね」

「僕、一年留年しているから……」

「留年って、病気でもしたの？」

「いいえ、実は……」

　孝一は、韓先生の暖かい眼差しについ、留年の事情を詳しく話してしまった。

　身じろぎもせず、真剣に孝一の話を聞いていた韓先生は、感に堪えたように言った。

「そう、苦労したんだね。ところで、京成商業中学にはどうやって入ったの？」

「はい、奨学金をもらって通ってました。二年になって成績が規定の点数を下回るようになって……」

「特待生待遇がなくなったのか」

「はい、授業料免除がなくなり、一学期を滞納したので、退学処分です」

「どうして成績が下がったの？」

「妹と弟を食べさせていくために、働き出したからです」

「それは違うんじゃないかな。私は三十五年間教師をやっている。勉強のできる子が成績を落とすのを数限りなく見て来た」

「疲れて予習、復習が出来なくなったからです。夜、大人に混ざって巡回警備に出なければならないし」

「それが理由のすべてではないはずだ。君、京成商業中学の授業が、つまらなくなったのではないのかい。レベル的に……」

　韓先生は、意外なことを話しだした。

「そんなことないと思います。やはり僕の学力が落ちてきて……」

「今の学校じゃないけど、前の中学のとき、君のような特待生がいた。彼は学校、教師に対して、不満を抱いた。どうして、こんなわかり切ったことを教えるのか。ってね」

「………」

　少し思い当たるところがあった孝一は、無言で韓先生の顔を見ていた。

「もうひとりは、学校に来なくなった。彼も大変に優秀な特待生だったのだよ」

「自分から学校に来なくなったのですか？」

「そう。彼の場合は学友のレベルの低さが我慢できなかったそうだ。君にも同じような思いがあったのではないか」

「僕にそんな気持ちはありませんでした」

　京成商業中学の授業や生徒のレベルの低さが、孝一のやる気を削いだことは否めなかったが、敢えてそれは伏せた。

「ま、それはいい。ところで君には、もう一度学校に戻って学ぶ気持ちはあるのか？」

「勿論あります。でも、経済的に高い授業料は払えませんし、妹と弟を食べさせるために昼間、働かなければなりません。それよりも僕にとって大きな問題は、来年もう一度二年生に編入すると、皆から二年遅れてしまうのです。今でも一年留年しているのですから最低限、今二年に編入できるのならぜひ戻りたいと思っているのですが」

　孝一の本音だった。

「そうか、だったら夜間のクラスでもいいのだな。私の中学は知っていると思うが、韓国でも有数の名門校なんだ。人気があって、昼間だけでは希望者を収容できないから、昼と夜間に分けて、授業をしている。どっちにも差はないんだけどな。私は、君の話を聞いて思ったのだけど、君をかなり優秀な生徒とみた。勿論、君の実力次第だけど、編入は可能だ。私の裁量で二年に編入だってできる。君に二年の実力があればの話だが」

「えっ、本当ですか。僕は今、友達と一緒に二年生の教科書を勉強していますが、二年の分はほぼ終了しました。でも、お宅の教科書を見たこともありません」

「夜間部の編入試験まで半月しかない。財布を届けてくれたお礼として、私には、君にチャンスを与えることはできるけど、あとは君の運と実力がすべてだ。私と知り合えたことは、君の強運だったといえる。あとは実力だ、これは妥協が許されないぞ」

　韓先生は、こういうと笑顔を見せた。

　結局、財布を拾った謝礼として、現金の約一割、一万ウォンが、韓先生から払われた。

Ⅷ

　編入試験まで、十五日しか時間がない。

　孝一にとって、人生最大の試練が与えられたのだ。この期間の集中と頑張りが、これからの人生を大きく変える。

　考えてみるまでもなく、こんな好条件の話は通常、あり得なかった。

　もし、思惑通り編入に成功すると孝一の遅れを一年、取り戻すことになる。

　財布を拾い、正直に届けたことが招いたまさに、強運としか言いようがない。　孝一は、夢でいさめてくれた主、イエスキリストに心からの感謝を捧げた。

　こうして、孝一が人生で迎える最大の好機であり、危機でもある大きな出来事に立ち向かうことになったのだ。

　孝一の神経は、研ぎ澄まされた。

　編入試験の科目は英語と国語、数学の三科目である。

　韓先生は、この三科目の二年生の教科書を持ってきて、孝一に渡してくれた。

　手助けはこれだけ。勿論、これ以上の助力は望むべくもない。あとは孝一の頑張りと神のご加護である。

　朝の新聞配達は、当然のこと休むわけにはいかないし、金水道設備工業も今後のことがあるので休んだりはできなかった。

　今回の編入試験について、孫寅河君にはありのままを話した。その結果、家庭教師の勉強は二週間休みだが、週二回の夕食はいつもの通り孫家で用意してくれた。これは、寝食を忘れて受験勉強に努めている孝一の、栄養補給に、大きく貢献してくれた。

　教科書を見た結果、英語は中二のサブテキストをマスターしているので問題はなく、国語も漢字に関する部分などは自信があった。

　問題は数学である。これは難物だった。

　まったく習っていない、連立方程式などは理解するのに苦労した。　数学だけは、参考書を買ってきて読んだがいまひとつ身につかない。

　新聞配達仲間の高校生で、秀才の誉れ高い金昇快先輩に教えを請うた。　彼は高校の二年生で、司法試験受験のために四六時中、学習漬けの毎日を送っていた。

　自分の勉強に忙しいので、孝一が、数学を教えてほしいという希望など、歯牙にもかけられないかと心配したが、意外に快く引き受けてくれたのである。

　彼の教えは、少し難しくはあったが、物事の本質をきっちりと捉えていて、孝一にはとても理解しやすいものだった。

　のちのち、彼とは大変親しくなっていろいろなことを話すようになったが、秀才は同類を知るというか、昇快先輩も孝一の一途な願いを叶えるべく、そのときは真剣だったと笑っていた。昇快先輩とは、彼が新聞補給所を去るまで付き合いは続いたのである。

　勉強を教えてもらうことも、大変に役に立つかが、司法試験の模擬テストなどで受験に対するノウハウを持っていて、試験までのペース造りなども指導してくれたのである。

　編入試験の三日前に、昇快先輩独自の問題が作られて、模擬試験が行われた。　その結果、見事に、仮想編入試験の合格点がもらえたのである。

　十月に入った最初の月曜日が編入試験の当日だった。昇快先輩の指示は、前々日の土曜日、通常通りの生活をすること。食事なども当たり前のものを摂ること。

　前日の日曜日は、新聞配達が終わったら部屋で横になっていること。このときに眠くなったら、眠ってもいいが、この二日間は教科書やノートを開かないこと、と指示された。

　要は、二日間、完全に頭脳を休ませるのである。この教えを守って身体を休めた。　その結果、試験の当日の孝一は、完全なコンディションで望むことができたのである。　朝の新聞配達は、変わったことをせずに駆け足で廻り、いつもの時間に終えた。

　試験の当日は、金水道設備工業に事情を話して休みをもらった。

　洗濯した清潔な開襟シャツを着て、朝鮮日報社から北東に五百米ほど離れた、寿松洞の中東中学の校舎に向かった。

　試験場の受験生は何と孝一ひとりだった。午前中に三科目の試験は終わった。孝一の印象では、さほど手こずるような問題はなく全科目ともに自信があった。

　昇快先輩が造った模試の方が、はるかに難しかったのである。

　新聞の補給所に戻ると、金昇快先輩が待っていた。

　孝一は全問、試験問題を記憶していた。三科目、順を追って解答していったところ、昇快先輩から――完全制覇！　ほとんど満点だよ。とのお墨付きをもらった。

この言葉が、どれだけ孝一の自信になっただろうか。

　三日後の木曜日夜、韓先生の家に結果を聞くため訪問することになっていた。孝一は胸を高鳴らせて、体成洞の韓先生宅を訪れた。

　玄関を入るなり、韓先生に抱きすくめられてしまった。

「孝一君、よく頑張ったね、合格だよ。先生は嬉しい」

　韓先生の目に、光るものが見られた。

　孝一は、天下の名門中学校、中東中学の夜間部二年に入学が許されたのである。

**第十章・反日の抗議（蛮行）**

Ⅰ

　まったくの僥倖で、名門の中東中学校に編入学できた孝一は、学校としてのレベルの差を感じながら通学していた。

　というのは、勿論、編入したのだから無理もないが、一応奨学生の申請を出した結果、孝一の成績は、規定の全科目九十二点に遠く及ばなかったのである。

　すぐに、二学期分のかなり高額な授業料を払わなければならなかった。

　これは、夏の間にアイスケーキを売った蓄えと教頭先生からの謝礼が効を奏して支払うことができた。しかし支払ったあとの生活費にすぐ、困窮することになる。

　元々、食事に贅沢はしていなかったが、可能な限り切り詰めるようにした。

　哀れなのは亨竜だった。食べ盛りである。

　それが、朝はすいとん一杯、昼は明洞の蒸しパン、これは一見、中華の大きな肉饅頭のように見えるが、具は入っておらず、生地だけを蒸したものである。この蒸しパンは、亨竜の顔くらいの大きさで、ほんのりと甘味があるトウモロコシのスープと一緒に食べると、何とか夕食まで保つ。

　夕食は、孝一に支給される食券をふたりで分け、食べて済ませることが多かった。

朝、孝一は金水道設備工業に、亨竜は朝鮮日報社に帰るので、乙支路で別れる。

　中東中学に編入が決まった時点から、金設備工業の金社長に頼みこんで、特別にサマータイム並みの八時～四時までの勤務シフトにしてもらった。

　これで孝一は、中学校の授業を問題なく受けることが出来たのである。

　新聞の補給所にある地下室には、常時三十人ほどの配達員が起居していた。

　本来は、早朝配達に出る配達員が、前日夜に来て宿泊する施設であり、ここに住むのは本来の用途ではない。弟と一緒に住んでいることが多少問題になりつつあった。

「李君、君のお父さんのところで弟を預かってもらえないのか。亨竜君がいつも一緒に寝ていることはまずいんじゃないかな」

　補給所の朴所長が、学校に行く前の孝一を呼び止め、少し話しにくそうに切り出した。 「所長、最初から許していただいたのではなかったでしょうか。弟も一緒にここに住んでいいと……」

「そのときは、亨竜君もまだ小さかったからな。でも、君の学校のことも考えると、弟の世話を見ながらじゃ、少し無理があるんじゃないか」

「どこが無理ですか。竜も一人で遊んでいるし、誰にも迷惑はかけてません。部屋で騒ぐわけでもないし、皆に可愛がられています。どこがいけないんですか？　誰が問題にしているのですか？」

「誰というわけではないが、私は君たちのことを考えて、皆から苦情が出る前に、と思ったんだよ」

「父さんのところには絶対に置けません。それが出来ないから、僕たちは自立したんですよ。それなのに今更……」

「それも、うちに来たときに聞いたよ。健気な君たちに同情したから、特別に地下室に住むことを許したのだ」

「だったら、絶対に迷惑はかけません。これまで通りおいてください。仕事だって一生懸命やりますから」

「わかった。でも、私も考えなしでこんなことを言ったんじゃないのをわかってくれ。実は亨竜君がきれいな英語を話しているのを聞いて、驚いたんだ。私の知り合いの子が、文山の孤児院に入っていたんだけど、アメリカ人の里親が見つかって、本土に移住したんだよ。亨竜君だって、そんな夢が叶うかも知れないじゃないか」

　孝一にも、そんな夢物語が現実にあることは知っている。

　亨竜が英語に関して、どのくらいの理解度を持っているかわからないけど、可愛い顔をしている亨竜ならば、アメリカに連れていってもらえる可能性は高いといえた。

　しかし、孤児院という場所に関しては清陽での孝一の実体験から、どう考えてもいい印象を持てる道理がない。

「所長さん、孤児院は勘弁してください。僕も国民学校に上る前、孤児院にいました。

昔と違うとは思うけど、竜には僕がいるのだから、孤児ではないのです」

　孝一は、所長にあえて反抗した。

「そうか、わかった。誰かが何かいってきたら私につないでくれ。私からきちんと話してあげるから」

　朴所長は、首筋をもみながら立ち去った。

Ⅱ

　新聞配達員には一日、一枚の食券が支給される。これを使って、配達を終えてから近所の食堂で朝食をとるのだ。

　ところが、この一枚の食券で、亨竜とふたり分の夕食にするのだから、食べ盛りのふたりに量的に足りないのは当然の結果である。

　争いもせず、黙々とひとり分の食事を分けあって食べているふたりを見かねて、食堂のおばさんがそっと釜の底のオコゲや、残り物の惣菜などを内緒でくれた。

　中東中学校のレベルは高いが、二年にもなると、落ちこぼれの問題児も出てくる。

　こんな生徒は例外なく、裕福な家庭の子弟であり、いい環境に育っていた。

　それだけに彼らは、落第が一番困るのだ。

　編入試験のために、集中的に勉強して成績のいい孝一がすっかり頼りにされ、期末テストのときの模範解答発信基地としてカンニングに利用されたのである。

　幸い、教師に気づかれなかったけれど、かなりのリスクを冒すことになった。

　孝一のおかげで、三年進級を果たせた問題児の仲間は全員、頭が上がらなくなった。

　一九六三年四月、孝一は無事、中東中学校三年に進級した。

　授業料は、金水道設備工業、新聞配達などで稼いだお金と食費を節約して支払った。

　新学年になって隣席に来たのが鄭養湖君である。彼は、麻浦の漢江沿いに古くからある大きなうなぎ屋の御曹司なのだ。

　普段の生活に支障はないが、幼いころ、軽い小児麻痺にかかって、右側の手と言語が少し不自由な身体である。

　二年の時は別のクラスだったが、顔見知りではあった。孝一は、少し右手を抱えている彼を見て、親近感を覚えていた。

　孤児院で傷つけられた右足が少し歩行に影響している点、共通していたからである。

　養湖君も、孝一のギルドで三年に進級できたグループの一員であるが、感謝の度合いは他のグループ員よりはるかに強かった。

　彼は、潤沢に小遣いを持っていて、皆と一緒に行動するときなど、彼に支払いのお鉢が回ってくることが多かったが、嬉々として皆の分を支払っていた。

　少し体が不自由なのと、言語があまり明瞭でないのがコンプレックスであり、仲間に入れてもらうための保身の術だった。

　養湖君は、孝一の隣に席が決まって、大変に喜んだ。

　勉強を教えてもらえることもあるが、何よりものメリットは、問題児たちで構成するグループの面々が、孝一の助けのおかげで進級できたという引け目があって、全員、孝一に一目置いているからである。

　従って、養湖君に対するいじめも、孝一が側にいると影を潜めるからだ。

　このような出来事に関する、感謝の意を表明するのに、彼が出来ることは何でもやってくれた。

　孝一にとって大変に嬉しかったのは、週に二日は彼の家に招待してくれ、彼の部屋で店から蒲焼きを持ってこさせ、亨竜共ども、普通の食生活ではとても食べられない料理をお腹一杯、食べさせてくれたことである。

　最初、養湖君からの誘いに、抵抗を感じた孝一だったが、彼が心からの感謝の気持ちを表していることがわかり、素直にその好意を受けることにした。

　この夜食会は、中東中学の授業が終わると朝鮮日報社新聞社まで亨竜を迎えに行き、バスで麻浦の店に行って豪華な夕食の饗応にあずかるのだ。

　この食事は、貧しい食事が続いている、孝一と亨竜の栄養補給に、大きく寄与してくれていた。

Ⅲ

　孝一にとって、中学三年としての学校生活一年間は、経済的に楽ではなかったけど、これまでになく平穏に推移した。

　高校生に進学する春休み、一九六四年の三月、韓国にとっても孝一にとっても、大きな出来事が発生した。

　韓日国交正常化会談が開かれたが、この交渉内容が、韓国々民にとって国辱的なものとして国民の反感を呼び、全国的に抗議デモが展開された。

　その中心になっていたのが、ソウル市街での学生たちのデモである。

　主体は大学生であるが、中には先鋭的な考えを持つ高校生も、散見できた。

　孝一が通っている、中東高校の上級生も参加していたが、孝一たちのグループは、ノンポリで政治問題には無関心、対岸の火事を見るように傍観の立場をまもっていた。

　市街の中心部では、手拭いで顔を隠したデモ隊が、シュプレヒコールで声高らかに自己主張をしていた。

　デモは、孝一が金水道設備工業に出勤する頃はまだ、始まっていないが、帰り道には警察機動隊とデモ隊との小競り合いで、歩行に少し不自由な状況に遭遇した。

　新聞社に近づくにつれ、中央庁前のロータリーから光化門を経て、ソウル市庁に通じる世宗路は、とくに激しい衝突が見られた。

　しかし、そんな世界は現実の孝一にはまったく無関係だった。

　孝一は、高校生に進学した報告と毎月の生活費の援助を求めるべく夕方、打ち合わせに父親の明洞の事務所を訪ねた。

　その道すがらも、手拭いで顔を隠したデモ隊が隊列を組み、プラカードを持って練り歩いていた。その周囲を、警察機動隊ががっちりと固めている。

　父親は事務所にいたが、今は仕事が忙しいから、夜、昌信洞の家で会おうという。

　勿論、この事務所でプライベートな話をするわけにはいかない。孝一は、夜七時に家を訪れることで明洞をあとにした。

　時期的に言うと、学生には学年末の休暇になる。寒さもゆるんで、木々の新緑も萌え出す、いわば希望に満ちたシーズンなのだ。

　しかし、孝一の気分は、そんな空気に溶けこむには、ほど遠い状態だった。

　父親の事務所には十分くらいしかいなかったが、人の出入りも少なく、電話もさほど頻繁にかかってこない。決して盛業とはいえない状態がうかがえたのである。

　こんな商売の状態の父親から、援助してもらうことは諦めたが、久しく近況の報告をしておらず、夜七時に、訪問することにした。

　訪れると父親はすでに帰宅していて、くつろいだ格好で待っていた。テーブルに真露のボトルと、簡単なつまみが載っている。

「孝一、夕食は食べたか？」

　父親の第一声である。亨竜を放り出してくるわけにいかないので、食堂で粗末であるが夕食は食べてきた。

「食べてきました。僕はともかく竜にひもじい思いはさせられないから……」

「竜は元気か？　一緒に連れてこればよかったのに。久しぶりに顔を見たかった」

　父親の目が落ち着かない。こうやって話をしていても、真露を飲んでも、心ここにあらざる、という風情がありありと見えた。

「父さん、仕事の方、どうですか？」

　聞くまでのこともなかったが、話を始める誘い水として口を切った。

「正直なところ、順調には程遠い。昨日も商品を納めた先が夜逃げしてしまった。また引っかけられたんだよ」

「それで事務所は大騒ぎだったのですね。大きな金額ですか？」

「今の父さんにとっては大きい。何とかしないと会社がつぶれてしまうんだ」

「曽おばさんは、知ってるのですか？　今日は顔を見ないけど……」

「具体的には話していない。でも、様子から分かっているだろう。栄淑には迷惑をかけたくないんだよ」

「わかりました。僕も高校生になります、働きながら勉強するのには無理があって、成績も落ちてきました。実は、父さんの仕事がうまくいっていたら、少しお金を出してもらえないかな、と思ってきたけど無理なようですね。もう諦めました」

「孝一、済まない。このところ仕事がうまくいかなくて、売り上げもほとんどない。

支払いのために金策に歩いている毎日だけど、世の中、うまくいかないものだよ。さすがの父さんも疲れてきた」

　父親は、目頭とこめかみを揉みながら、力なく話を返してきた。

　一時間ほど話していたが、最後は、孝一が父親を励ますような始末だった。

　父親の真露を飲むペースが速い。少しずつ顔色が青ざめ、目が据わってきた。酔いが回ってきたのだ。すべてに順調なときには、まったくなかったことだがストレスが溜まっている現状では、かなり危険な兆候である。

　孝一は昌信洞の家を辞することにして、曽おばさんがいつも享俊と籠もってしまう部屋の前で、声をかけた。

「おばさん、孝一です。父さんと今、話してきました。僕たちはこれからも、迷惑をかけずに自立していきます。父さんをよろしくお願いします。今、居間でひとりで飲んでますけど、あまり飲み過ぎないように、見てやってください」

　これだけを言うと返事も聞かずに昌信洞の家をあとにした。

　表に出ると、満月だった。月の明かりがこうこうと、周囲を照らしていた。　昌信洞から、朝鮮日報社まで、歩くと一時間以上はかかる。　ポケットを探ると、バス代程度の小銭が出てきた。それを握りしめ、バスを待った。

Ⅳ

　バスは鐘路を走るが、何故かいつもの夜のように、スムースな走りが出来ない。

　これは、中心部で行われている韓日外交会談反対デモのせいだと、すぐにわかった。

　孝一には、街をジグザグに練り歩いているデモ隊が唱えるシュプレヒコールも理解できるし、国民総生産が一〇〇ドルという貧しい大韓民国にとって、この外交々渉の条件がある程度、経済的な面を打ち出さざるを得ない事情も孝一なりに理解していたが、今、現実の問題として直面している、帰る途を閉ざされている事実の方が心を鋭くえぐった。

　喜々として、デモに参加し叫んでいる学生たちを見るにつけ、孝一は考えた。

――こいつら、どこまで自分たちの信念に従って行動しているのだろうか。多分、手拭いで顔を隠したら何でもできると思っているのだ。親から学校に入れてもらって、こんなことやっている。彼らは、現在の韓国が置かれている貧困や、日本との、過去にさかのぼった屈辱の歴史を本当に理解しているのだろうか。僕のように働いて学校にようやく行けている人間のことなんか、わからないだろうな。

　孝一には彼らが、親のスネをかじって、学校に行かせてもらっている、いい身分の連中としか思えなかったのである。　路線バスは、昌信洞を九時過ぎに出たのだが、孝一が降りる目的地の光化門に近づいたときは十一時を過ぎていた。

　この周辺は、デモ隊と機動隊の激突があったらしく、ヘルメットや鉄パイプ、靴などが散乱していた。

　催涙弾も大量に発射されたようで、白煙が立ちこめ、前方への視界を妨げている。

　バスの中にまで煙が侵入してきて、目を押さえる人、咳きこむ人など、バスの中も急激に賑やかになった。　激闘の残滓のように、道路上には横たわっている人、座り込んで頭を抱え込んでいる人などが累々と路面を覆い尽くしていて、バスは光化門のバス停から五十メートルほどの地点で、立ち往生してしまった。　孝一が向かっている新聞社には、ここで降りた方が近い。孝一は車掌に声をかけた。

「すみません、ここで降ろしてください」

　車掌が扉を開けてくれた。この好意が、孝一にとって大変な不幸の始まりになった。　地面に足をつけたとたん、激しく咳こむ。

　目をあけていられないほどの白煙が、あたりに充満し、涙がわき出すように流れた。

　このあたりは、二、三日の間、デモ隊と機動隊が激しい戦いを行っていた。　学帽で鼻と口を押さえて道路を横切っていると、突然足を掴まれた。　たたらを踏んで立ち止まると、声がかかる。

「痛いよ。病院に連れていってくれ」

　みると、顔面血だらけになった若い男が孝一の右足に、縋り付いている。

　その鬼気迫る様子を見て急に怖くなり、掴んでいる足を振りほどくと、朝鮮日報社に向けて走り出した。

　道路に横たわる男、壁に寄りかかって意識を失っている男。路は血糊で滑りやすくなっている。まだ、機動隊員が鉄製の盾を持ってヘルメットにガスマスクの重装備で、あちこちに立っていた。

　その中を、手にＬ字型の懐中電灯を持った孝一は、足元を照らしながら走った。

　国際映画劇場の前を通り、一本西側の路地に駆け込んだときに、突然足をさらわれた。

　うつ伏せの状態で倒れた孝一の頭部に、激しい衝撃が走った。続いてもう一発、さらにもう一回、都合三回、機動隊員が手にする警棒による打撃だった。

　頭部への打撃で薄れかかる意識は、激しい各所への殴打や蹴りによって、無理に覚醒させられた。長々と横たわった孝一に容赦のない隊員の蹴りが入る。その都度、孝一の身体は跳ね上がった。

　恐怖で見開かれた孝一の目に、黒ずくめにガスマスクの、異様な風体の機動隊員が映った。彼らは群がって蹴りを入れてくる。

　正確な人数はわからないが、倒れている孝一ひとりに対しては多すぎる十数人の機動隊員が、入れ替わり立ち替わり、編み上げ靴の爪先で蹴ったり、ひざまずいてパンチを入れたりしてくる。

　孝一にとって幸いだったのは、最初、頭部に加えられた警棒による打撃によって、ある程度まで痛覚が麻痺していたことである。

　従って、繰り返し加えられる殴打や蹴りの痛みはあまり感じなくなっていたが、水月に入るキックや、背中、脇腹への打撃で呼吸が詰まってしまうのが辛かった。

「馬鹿野郎！　襟のバッジが全部物語っているんだ。通行人の振りして逃げよう、ったって、そうはいかない。甘いんだよ！」

　地面に倒れたままの孝一の耳に、蹴り続ける男の声がきこえた。

――そうか、僕は、デモ隊の一員と間違えられているんだ。この誤解をとかないと殺されてしまう。何とか……。

　必死の思いで立とうとした。しかし体のどこにも力が入らない。ようやく上体を起こして手をついた。立とうとするが、足元の地面がまるで雲のようで、支えてくれない。

　うごめき、もがいている孝一を見つけ、機動隊員が駆け寄り、突き飛ばした。

「こいつ、しぶとい奴だ。まだ逃げようとしやがって……」

　気力も失せ、仰向けに倒れた孝一に、再び激しい蹴りの嵐が加えられ、顎に決まった編み上げ靴の一発で、孝一の意識は、完全に消失したのである。

Ⅴ

「おい学生、目を覚ませよ。これ、お前の懐中電灯だろう？」

　軽く頬を平手で張られ、孝一は目を開いた。

　真っ暗な闇の中に、灯りが目を射た。

　少しずつ、焦点が合ってきた視野に、黒ずくめの姿が見えてきた。　とたんに、恐怖が襲ってくる。懐中電灯をかざしているのは、先程まで孝一を痛めつけていた、機動隊員だったからである。

　孝一は、力なく首を横に振ると、目をつむった。下手をすると、また暴行を加えられると思ったからである。

「大丈夫だよ。君はデモに参加していなかったことを俺が見ていた。君はバスから降りてきたんだよな。俺たちの仲間は皆、気が立っていて正常な判断が出来なかった。俺はとめたんだけど、皆に通じなかったようだ」

　この機動隊員は、落ち着いた声で話すと孝一の首に手を回して抱き起こそうとした。

「痛っ！　駄目です。動かさないで！」

　体中が、引き裂かれるように痛む。

「どこが痛む、動けるか？」

　機動隊員は、孝一をそっと路面に寝かすと訊いてきた。

「どこかわからない。身体中全部が痛いんです。まるでバラバラになったみたい……どうやっても動けません」

　返事をするのも、息をつくのも痛いのだから、動けるわけがなかった。

「映画館の方に行けば、学生の本隊がいるようだ。何とかそちらまで言って助けてもらったらいい。じゃ、あばよ」

　機動隊員は、孝一のそばから立ち去った。

　体を動かすと、呼吸ができないほど全身に痛みが走る。これは仰向けでも、右向きになっても左を下にしても同じだった。

「おい、大丈夫か。病院に行ってくれる車が見つかったぞ。お前の痛い場所はお前にしかわからないんだ。何とか頑張って、自力で歩いてくれ」

　学生らしい男がのぞき込みながら言った。

　たしかに、上半身のどこを支えられても全身に、耐えられるないほどの痛みが走る。

　この段階で、若い男の素顔が見てとれた。　二十歳前後、男性的な風貌をしており、優しい目が印象的だった。

「ここを抱えたら、痛いかい？」

　ようやく立ち上がった孝一の腰にそっと手を回し、訊いてきた。

　手が当っているところに痛みはあるが、呼吸がつまるようなものではなかった。

「大丈夫です」

「じゃ、俺の肩につかまって、ゆっくりと歩こう。車が待っているのは、こっちだ」

　腰を抱えられて、牛の歩みのように、のろのろと車に近づいた。車はピックアップ型のトラックだ。

　若い男は、細心の注意を払って、孝一を荷台に乗せ、自分も乗ってきてあぐらの足に孝一の頭をそっと乗せた。

「セブランス病院だ、知ってるよな。静かに走るんだぞ」

　運転席の窓から顔を出したドライバーに指示している。車はゆっくりと走りだした。

「お兄さん、どうして僕をこんなに……」「さっき機動隊の話を聴いたんだ。君はデモ隊でなかった。バスから降りてとばっちりでこんな目に遭っている。俺の気持ちが許さないんだ。俺たちは考えてこんなことをやっているが一般の人に迷惑はかけたくない」

　苦渋の面持ちで語るデモ隊員だが、理由はともかく、こうして救助してくれたことは不幸中の幸いであった。　二キロほど走って、セブランス病院に着いた。デモ隊員に支えられて入口をくぐった。

　病院の中は大変な状態になっていた。血だらけの顔をタオルで押さえ、苦悶の声を挙げている学生が、待合室だけでなく廊下の長椅子をも占領していた。

「悪いけど、ここまでだ。俺も隊に戻らなければならない。ちゃんと治療してもらって早く良くなるんだぞ。じゃあな」

「お兄さん、学校とお名前を……」

「名前なんか訊くなよ。本当に人間としての行為なんだから……」

　デモ隊員の学生は白い歯を見せて笑い、足早に立ち去った。

　孝一は、廊下の床に座り込んで、治療の順番を待った。

「看護婦さん、いつごろ治療して貰えるのだろうか。凄く痛いんだけどな」

　通りかかった看護婦を呼び止めて訊いた。

「あなた、どこを怪我してるの？　今は出血している人が優先なの。血を流すと失血死することがあるから」

「僕、身体中を蹴られて、呼吸をするのも痛いんです。骨が折れているかもしれない」

「痛いのはわかるけど、今いったように出血している人から診てるのよ。痛み止めの薬を持ってきてあげるから、それを飲んで明日診察に来てください」

「血を流していないと怪我人じゃないの。殴られて死にそうになっていてもかい」

「あなたはここまで歩いてきたのでしょ。だったらすぐ命にかかわることはないわ。レントゲン室も明日まで一杯、本当に申し訳ないけど、明日にして」

　看護婦は、痛み止めのことなど忘れたようにその場を去った。

　周囲の様子を見る。孝一が来たときと、怪我人の数はほとんど変わっていない。

　壁に掛かっている時計は、午前二時をとうに廻っている。この状態から、朝までに治療を受けられるとは思えなかった。

　治療をあきらめて、新聞社に戻ろうと思っていたとき、先程の看護婦がこっちに歩いてくる。

　手に水が入ったコップを持っていた。

「これ、痛み止め。一回分しかないけど飲んで。少しは痛みが和らぐから……」

　まっすぐ孝一の前に来て二錠の薬とコップを差し出す。

　薬を口に含み、水で流し込む。少し生ぬるい水だったが、とてもおいしく感じた。

　看護婦は立ち去った。孝一は少しの間、そのままの姿勢で座っていた。

　心なしか、身体が楽になったような気がする。掛け声とともに立ち上がり、出入り口に向け歩を運んだ。

　さすがに、もう催涙弾の影響は残っていなかったし、倒れていたデモ隊も排除され、機動隊も立ち去ったのか人影はなかった。

「おい、治療を受けたみたいだな。さっきより少しは楽に見える。君、これからどこまで帰るんだ？」

　懐中電灯で足元を照らしながら、新聞社への道をよろめき歩きだしたとき、建物の蔭から声がかかった。

　潰れかかった見えない目を必死に開いて、声の方を見る。先ほどここまで運んでくれた学生のようだった。周りに何人か人がいる。

「そこの朝鮮日報社です。何とか……」

　ふたりが肩を貸してくれ、ようやく歩ける体勢が出来た。

　ゆっくりと歩くが、二キロほどの道程がこれほど遠いと想像もしなかった。

　途中、道路に開いた穴に片足を落としたが、全身を貫く激しい痛みに、思わず悲鳴を上げてしまった。

　どのくらいの時間を要しただろう。ようやく朝鮮日報社の社屋が前方に見えた。

　印刷所では、輪転機がものすごいスピードで新聞を生み出しているのだろうが、各地の補給所に配送するトラックはまだ駐車したままでドライバーは来ていない。

　勿論、新聞配達員も夢の中だ。

　学生たちは孝一を裏門の扉に押し上げ、ようやく上半身だけを門扉の上に出したところまではやってくれた。

　胃袋のところでふたつ折りになり、門の上に引っかかった状態で、孝一は気を失ったのである。

Ⅵ

「孝一！　どうした？　大丈夫か」

　遠くで声が聞こえる。まるで水の中での会話のようだ。

　だらりと下がった両腕の脇に、手が差し入れられ、引っぱられた。

「痛い！　触らないで！」

　自分でも驚くほどの大きな声が出た。慌てて手を引いたのは、編入試験のときに世話になった、金昇快先輩だった。

「驚いたぜ孝一。お前、どうしたんだ。服が泥だらけじゃないか。そしてその顎、誰にやられたんだ？」

　そーっと延びて来た指が、静かに孝一の顎をさすった。それだけで、鋭い痛みが走る。「痛い。ここから下ろしてください。警察にメチャクチャに蹴られたんです。身体全部、脇腹も顎も……」

「なんだって、警察？　お前、デモに参加してたのかよ」

「そんなわけないでしょ。早く助けて」

「そうだろうな。ちょっと待ってろ、人を呼んでくる。すぐに戻るから」

　金先輩は、新聞社の中に駆け込んでいき、すぐに三人の男を伴って戻ってきた。

「孝一、大丈夫？ 歩けるのか」

　総務の林在根が、問いかけてきた。

「全然動けない。痛いよ、呼吸が出来ないんだ。助けて……」

　孝一は、力なく訴えた。

　一人が走っていき、戸板を持ってきた。立派に担架の変わりになる。　全員が十分に気を使ってくれ、その戸板の上に静かに横たえられた。孝一は地下室に運ばれ、寝床のところまできた。目を覚ました亨竜が、孝一の無惨な姿を見て大声で泣き出した。自分の布団で横になる。本来ならば安らげる場所のはずだが、茨の床の感があった。

　目をつむるが、強い痛みで眠られるわけがない。そこに、林総務がやってきた。

「孝一、今日の配達はわたしが変わることになるけど、地図とかリストはあるかい？」

「ありません。僕がついていかないと無理です。林さん、自転車で廻りますか？」

「歩こうと思っているけど」

「自転車で回ってください。リヤカーを引っぱって……それに僕が乗っていきます。亨竜にも押させますから」

「大丈夫か？　その身体じゃ無理じゃないかな。痛むんだろう？」

「きちんと朝、配るのは新聞配達員の義務です。本来ならば這ってでも……」

「そうか、わかった。不慣れなわたしが配達するのだから、時間がかかる。早めに出なければ間に合わなくなるね。じゃ、悪いけど出かけるか」

　林総務は、新聞の束を持って出る支度を始めた。

　金先輩が中心となってリヤカーに布団を敷いている。皆に抱え上げられて、引き棒の反対側を背に、上半身を起こして座った。

　このリヤカーを、自転車のサドルのところに連結し、皆でゆっくりと押してみた。

　補給所の、平坦な床面を押されているときは、さほど痛みは感じないが、少しでも段差があったり、凹凸のところを乗り越えるときは、呼吸が詰まるほどの痛みが襲った。

　でも、そんなことは言っていられない。

　補助員にリヤカーを押させ、まだ暗い街に出ていった。孝一が襲われた映画館の前を通るとき、新たな恐怖が甦ってきた。

　目をきつくつぶっても、耳に編み上げ靴の足音が響いてくる。

　そして、その靴は四方八方から孝一の身体に食い込む蹴りの錯覚となって襲って来た。

　孝一がそんな思いをしているのに、係長と亨竜は、何もなかったように移動している。光化門の交差点を過ぎ、世宗路から一本西側の裏道を指示した。そのまま、社稷路を横切ると、孝一の配達テリトリーになる。

　勿論、この時間はすべての人がまだ眠っている時間帯だ。

　配達する家に行くと、リヤカーに着いてきた亨竜が活躍する。新聞をドアに挟み込んでいる間、林総務は帳面に、家と名前を記録しているのだ。

　駆け足で配達した孝一に対し、リヤカーを引いて廻っているのだから、倍近い時間を要するのはやむをえなかった。

　配達が無事に終了したことを確認した孝一は、気が緩んだのか、リヤカーに横たわったまま意識が消失してしまった。

Ⅶ

　地下室に戻った孝一は、高熱を発した状態でそのまま、寝込んでしまった。

　悪寒を訴える孝一を、オンドルの熱が一番伝わる位置に寝床を移してくれたが、今度は汗が止まらなくなる。

　全身、特に上半身の痛みが激しく、体勢を変えるだけで、悲鳴を上げる始末だった。

　朴所長、林総務、金先輩などが、病院に行って治療することを勧めるが、孝一は頑なにそれを拒んだ。理由は、仮に入院することになったり、手術になったりすると、その費用負担が不可能だからである。

　朴所長が、自宅から漢方の痛み止めを取り寄せてくれ、それを服んだ孝一は、直ちに眠ってしまった。

　それから丸一日半、死んだように熟睡した孝一が目を覚ましたのは、怪我から約二日経過した夕方だった。

　猛烈な喉の渇きを覚え、周囲を見回すと白い貌が目に入ってきた。

「李さん、気がついたのね。よかった……」

　寝床の横に座っていたのは、中学生で補給所の事務員、黄成愛だった。

「水をくれないか、凄く喉が渇いた」

「待ってて、すぐお茶を持ってくるから」

　成愛は部屋を出て行くと、湯飲み茶碗を持って戻ってきた。茶碗からは、湯気が上がっている。温かいお茶よりも、熱がある孝一にとっては、水の方がありがたかった。

「成愛さん。悪いけど、お茶よりも水が欲しい。水にしてくれないか」

「まだ熱が下がらないの。あら、こんなに熱いわ。待ってて……」

　成愛は、額の手拭いの熱さに驚いて、部屋を飛び出していった。

　水を張った洗面器と、水差しを持って戻ってきた。孝一の横に座り込む。　水差しからグラスに水を注ぎ、小首をかしげて問うてきた。

「李さん。身体を起こせる？」

　孝一は肘を突いて努力してみたが、痛みが激しくとても無理だった。

「駄目だ、出来ない」

「私、起こしてあげていい？　痛かったら言ってね、そぅっとやってみるから……」

　成愛の腕が、おずおずと孝一の首の下に回されてきた。

　力は入れているのだろうが、女の子の細腕である。簡単に上体は起きない。

「もう少し力を入れてもいいよ」

　孝一も成愛に協力しようとするが、力が入らないことに変わりはない。

「大丈夫？　痛かったら困るわ」

　成愛の顔が赤くなった。力を入れたのだろう、孝一の上体がゆっくりではあるが、立ち加減となった。

　意外に近い位置に成愛の貌がある。彼女からは石鹸の匂いがしてきた。

　四十五度ほど上体が起きたところで、背中を成愛の膝が、優しく支えた。

　コップが口に添えられる。水が喉に流れ込んできた。シンプルな水だけど、これまでに口にした最高の味がした。

　感謝の言葉を述べようと目を上げた。成愛の黒い瞳が、目の前にあった。

――この娘、可愛い顔をしている。

　このとき孝一は、初めて成愛を異性として意識させられたのである。

　感じた途端、急に息苦しくなって、心臓の音が彼女に聞こえるのでは、と思った。

「もう一杯、飲む？」

　空になったコップを差しだし、聞いてきた。

「いや、あとでもらう。ありがとう」

　素直に、感謝の言葉が口をついて出た。

「昨日から何も食べていないのでしょう。チゲとトックがあるけど、温める？」

「チゲが？　どうしたの」

「私が家で作って持ってきたの。さっき、竜さんには食べさせたけど、李さんの分はちゃんととってあります」

「そうだったんだ。何からなにまでありがとう。ところで今日は残業かい？」

「仕事はとっくに終わったわ。李さんが目を覚ますのを待っていたの」

　成愛は顔を赤らめると、孝一の上体を注意深く倒し。布団に寝かせた。

「ちょっと待ってて。チゲを温めてきます」

　石鹸の匂いを残して部屋を出て行った。

　孝一は、その後ろ姿を見ながら、何か切ない気分に襲われていた。

Ⅷ

　孝一の病状は一向によくならない。というのも、病院にいって治療を受けることが出来ないからである。

　寝床から起き上がって、自分の足で歩くことが叶わないのが、これほど辛いものとは思わなかった。

　三度の食事は、黄成愛が作って毎朝、持ってきてくれたので怪我をする前より恵まれた食生活といえる。

　一番困ったのは排泄だった。歩くことが出来ない、即ち、手洗いに行けないのである。

　幸いここは、男社会なので溲瓶やオマル処理するのに抵抗はなかったが、成愛がこの始末までやる、と申し出たのには参った。

　孝一の新聞配達区域は、数日間は林総務と補助員がやっていたが、一週間ほどで新人が採用され、担当するようになった。必然的に孝一は解雇となる。

　動けない孝一を放り出すわけにはいかないので、置いてくれてはいるが、怪我が治って歩けるようになったら、でていかなければならないのだ。

　金水道設備工業にも所長に事情を話してもらったが、すぐに補充され、馘首になった。

　孝一の責任は何もないのに、こんな思いをさせられる。まったく不合理な話だ。

　しかし、この鬱憤の持って行きどころがないのである。

　成愛の看護は、日を追うごとに濃密となっていった。最初は、周囲の目を気にして遠慮がちな行動だったが、その内に堂々と世話を焼くようになる。

　怪我から三日後、金先輩が初めて、お湯で身体を拭いてくれたが、このときは上体のどこに触られても、痛くて孝一が悲鳴を上げるので、当分、清拭は中止されていた。

　しかし十日もたつと、孝一自身にも自分の汗臭さが感じられるようになって、亨竜に身体を拭かせているとき、成愛が来て亨竜の手から手拭いを取ると、全身を拭いてくれた。

　細やかな心遣いは、孝一にとって快いものがあった。

　新学期が始まっても、登校の目途が立たなかった。成愛に頼んで鄭養湖君に、孝一の現状を知らせてもらった。

　その日のうちに、養湖君が新聞社に飛んできた。まだ顎に青タンが残っている孝一を見て、目をしばたかせた。

「孝一君、どうしてもっと早く知らせてくれなかったのよ。学校の新学期が始まっても来ないし、どうしたのかと思ったけど、こんな怪我をしているとは……どこの病院にかかっているの？」

「最初、セブランス病院に行ったけど、治療して貰えなかった。それからどこの病院にも行っていない」

「どうして？　病院に行かないと治らないじゃないか。僕んちの近所の病院に行こう。車を呼んでくるから」

　養湖君は部屋を出て行こうとした。

「いや、もう少し寝ていれば治る。自分のことは、自分が一番分かるんだ」

　と言ったものの、お金がないから医者に行けないとは言えなかった。

　彼のロジックは、成愛にいつも言われている言葉である。その都度、成愛にも同じ答えを返してきた。

「そうかい、お医者さんにかかった方がいいと思うけどな。だったら、うちからうなぎの蒲焼きを届けさせるよ。栄養がつくぜ」

「食事は、私が、李さんの状態を見てお母さんの家庭料理を用意しているから結構よ。ね、李さん、いいわよね」

　成愛が急いで、横から口をはさんだ。

「うん、養湖君、君の気持だけで十分だ。それよりも学校で特別なことがあったら、教えてくれ。それと先生には、ぼくはデモに参加していたのではなくて、バスから降りたところをやられたんだ、と伝えてよ」

　デモに参加していたとみられると、退学処分もあり得る。それだけは避けたかった。

　寝床でじっと動かないでいると、かなり痛みは感じなくなった。誰もいないとき、自力で立つ試みをしてみた。　上体を起こすのは無理なく出来るが、オンドルで一段高くなっているところから、足を下げて立とうとした。　ところが、立つことができない。オンドルの床に両手をついて、膝を伸ばすのが精一杯だった。

　身体の脱力感は、言葉に表すことができないほどであった。まったく自由がきかない。

　そのまま、両手をオンドルの床に着き、腕の力だけで蟹のように横這いして、壁のところまでいった。壁に手をついてようやく立ち上がる。そして壁を伝わって一歩いっぽ、移動した。五メートル歩くのに十分もかかったのではないだろうか。

　向かい側のオンドル床に手をつき、同じように横歩きで入り口に向かう。ここは二〇メートルくらいをカウントできないほどの時間をかけて移動した。

　トイレまで、壁を伝わって歩くのは苦行だった。足がもう少ししっかりしていれば別だが、両足で立っていることすら出来ないのだから、推して知るべしである。

　トイレをすませて出てきたときには、疲労困憊、ここから部屋まで壁を伝わって歩く気力を奮い起こすのにひと苦労だった。

「孝一さん！　動けるようになったの？」

　三歩ほど伝い歩きしたところで、成愛の声がかけられた。

　声に方に顔を向けると、成愛の小柄な身体がこちらに駆けてくる。　孝一の横に立つと、自然な動きで左の脇に自分の肩を入れてきた。　成愛の肩でも大変に助かった。

　トイレに来るまでに費やした労力の半分くらいのエネルギーで、寝床に寝かせてもらう。　しかし、これだけのことで、一キロも全力疾走したくらい疲れた。

　情勢に変化はなく、数日が経過した。

　孝一は、手洗いは自分で行けるようになったが、まだいろんなことに成愛や亨竜の手を借りなければ何もできない状態が続いた。

　早いもので新学期が始まって半月、四月の中旬になっていた。指折り数えると、孝一に降りかかった災難から二〇日が経過していたのである。

**第十一章・大統領官邸（燭光）**

Ⅰ

　孝一の症状は、一向に改善しない。

　何カ所か骨折しているのだろうが、何といっても、医者の治療を受けていないのだから治る道理がなかった。

　新聞配達員の職を失った孝一は、補給所の部屋で居心地の悪い毎日を送っていた。

　しかし、トイレに立つ以外、行動がままならないのも現実である。　黄成愛の食事供給は継続していたが、つききりの面倒を見ることは、中断した。

　夕食を済ませて、ひと眠りしたところで亨竜が帰ってこないことに気がついた。

　このところ、亨竜は補給所で新聞の余ったものをもらい受け、どこかにいって売ってくるのを覚えたようで、小銭を持っていることがときどきあった。

　孝一が追及すると「僕はちゃんと新聞を売ってこのお金を稼いだんだよ」とはっきり主張したのである。

　そんな国民学校低学年の亨竜が、お金を持っていて買い食いをしている。

　それを見て不審に思った大人が通報、警察に保護されているのではないだろうか。はたまた、そのお金を奪うために誘拐……。

　いろいろ考えているうちに、不安が募ってきて、いても立ってもいられなくなった。

　そこで、部屋に入ってきた古手の配達員をつかまえて聞いてみた。

「金さん、亨竜が帰ってこないのですが、何か知りませんか」

「亨竜かい？　朴所長が知っているんじゃないかな。明日の朝、聞いてみたらいいよ」

「ということは、亨竜はどこかに連れていかれたの？　僕に知らさないで」

　まさに驚きの出来事だった。思わず孝一は寝床から抜け出して、金配達員のところまで這いずっていった。

　その剣幕に驚いた金配達員は、あとずさって思わず逃げ腰になる。

「俺は聞いただけで、詳しいことは知らないんだ。夕方男の人が二人来て連れていったようだよ。朴所長がずっと立ち会っていて、決して怪しい連中ではなかったらしいぜ」

　金配達員は、それでも孝一の疑問に、知る限りのことを答えてくれた。

「朴所長に連絡が取れませんか？　亨竜のことを聞いてみたい。どうして僕に知らせてくれなかったのだろう」

「それは、孝一が眠っていたからだよ。朴所長の家には電話があるはずだ。俺は番号を知らないけどな」

「金さん、済みませんが事務室の電話のところまで連れて行って貰えませんか。多分そこに書いてあると思うんだけど……」

「ああ、いいけど、所長だってお前たちのことを思って、やったんだ。決して文句を言ったり責めてはいけないよ」

「そんなことはしません。何もわからないから聞くだけですよ。お願いします」

　必死の思いが通じたのか、金配達員はよつん這いになっている孝一を抱き起こして、肩を貸してくれた。

　事務室にひとつだけ設置されている黒い電話機の横に、関係部署の番号が表になっている。その末尾に所長の電話番号があった。

　金配達員がダイヤルしてくれた。

「所長、夜分に済みません。孝一が亨竜のことで聞きたいというものですから」

　いきなり受話器が手渡された。

「所長、竜はどこに連れて行かれたの？　ひどいじゃないですか、僕に何も言わずに」

「君は眠っていたから。体調のことを考えて起こさない方がいいと判断し、意識的に君には伝えなかったんだよ。勿論、君が起きていても結果は同じだったけどな」

　朴所長の冷静な声が受話器から響いた。

「竜は孤児院に連れていかれたのですね。どこの孤児院ですか、教えてください」

「教えてもいいけど、もう決定したことだからどうにもならない。君はまだ動けないじゃないか。聞いても無駄だよ」

　畳み込むような孝一の問いかけに、所長は声音を変えずに答えた。

「前にも言ったけど、竜は孤児ではありません。僕がいるのだから……」

「その君が、寝たきりだ。何かあったときに誰が亨竜の面倒を見る？　誰もいない、ということは、この選択しかなかったんだよ」

「それはわかりますが、所長、ここにきてもらえませんか。お話を聞きたいんです」

「今そこに行っても、事態は変わらないしどうすることもできない。明日の午前中に話し合おう。亨竜のこと以外にも話がある」

　ここでいきなり電話が切られてしまった。

　　　　　Ⅱ

「ということで、私としては最善の手段を講じたつもりだ。亨竜も、その方が幸福だと思うよ。文山の施設では、きちんと三度々々の食事が出されるし、国民学校だってちゃんと通えるのだから」

　朝、出勤してきた所長は、昨日のいきさつをかいつまんで話し、孝一の貌を直視した。

「それで、竜は喜んでいったのですか？　その文山の孤児院に」

「たしかに、最初は嫌がったさ。でも、英語を話せる亨竜君だったら、アメリカに里子として連れて行ってもらえるかも、と聞いて納得したようだ」

「竜を孤児院に入れる話は、大分前からあったのですね。いつごろからですか」

「昔の話は断ったけど、今回、君が怪我をしてからだよ。今の状態では亨竜君の面倒を見られない。君がここに担ぎ込まれたとき、すぐに決断した。これしかなかった」

「僕は、国民学校に上がる前に清陽で孤児院に入れられました。そのときにお仕置きされたのがこの傷です」

　孝一は、かなり苦労して右足のズボンをまくり上げ、ふくらはぎの傷を見せた。

「孤児院だって、何もしない子をいじめたりはしないだろう。何か特別なことをやったんじゃないのか。例えば凄く反抗するとか」

「職員の言うことを聞かない子に制裁が加えられることがよくあります。院の中のことは、所長にはわかりませんよ。子供同士のイジメがあったり……」

「今はそんなことはないと聞いている。亨竜のことはもう済んだことだ。もうひとつの問題に移ろう。君は、朝鮮日報の新聞配達員でなくなっているのはわかっているよな。その意味において、新聞社とは無関係の人間をここに住まわせておくことは問題となる。かといって、まだ歩けない君を追い出すことは人道上の見地からも出来ない」

　所長は少し辛そうにいった。これまでの付き合いで、所長が冷酷になりきれないことを知っているだけに、孝一の胸は痛んだ。

「朴所長、歩けるようになったら、出ていきます。本当に申し訳ありません、何とか歩けるようになるまで、置いてください」

「勿論、そのつもりだ。君はずいぶん活躍してくれたし、配達員も紹介してもらった。だけど、今回のデモで、うちは君以外にもう一人、配達員を失ったんだよ」

「………」

　朴所長の、意外な発言に孝一は所長の貌を上目遣いに眺めて、次の言葉を待った。

「君と同じように、機動隊に殴られて大怪我した男が、昨夜亡くなった。君が紹介してくれた安鐘一だ」

「えーっ！　安鐘権の兄さんが……」

「残念だった。危篤状態で入院していたんだが、とうとう駄目だったよ」

　朴所長の目から、涙が一筋、頬を伝った。

「鐘一兄さんは、韓日国交正常化反対の抗議デモに参加していたのですか」

「違う、彼も苦学生だ。早朝の配達のため出てくる途中、騒動に巻き込まれたらしい。機動隊は手加減せずに、痛めつけた。頭の骨が三カ所も折れて、脳に内出血が……」

「ひどい……僕も鐘一兄さんもデモになんか参加していないんですよ。それを大勢でよってたかって、あの堅い警棒で思いっきり殴るんだから。僕は一発目で倒れたから、あとは蹴られただけで助かったんですね」

「デモ隊か、一般人かの区別はできなかったんだろうが、まったくひどい話だよ。巻き添えになった人は悲劇だ。まして、安のように命まで落とすなんて、何ということだ」

　朴所長の話題は、孝一がここに住まうことの可否についてだったが、いつの間にか、無差別な機動隊の蛮行に移行していった。

「機動隊の連中だって、やむを得ない面がある。隊列を組んでいればわかるけど、それを捨ててしまうとどちらか判別が出来ない。若い学生風だったら皆、デモ隊に見えてしまうのも仕方がないよ」

　いつのまにか部屋に入ってきた、林総務が会話に割り込んできた。

「問答無用で、いきなりはないでしょう」

　孝一が反論した。

「かといって、若い学生全員が、機動隊に襲われたわけではない。今は特別な時代なんだよ。自分の身は自分で守らないとな」

　反論に対して、林総務がいう。

「そうだ。デモ隊に間違えられるなんて、運が悪い反面、油断もあったんじゃないかな」

　朴所長は総括し、この話を閉めた。

Ⅲ

　亨竜が施設に収容され、壁に手をついて伝わり歩きがわずかではあるが、何とかできるようになって、孝一はここを出ることを決心した。今の状態で、所長の好意に甘えて借りを作るのがいやだったからである。

　そうなると、頼っていくのは昌信洞の家しかないのだ。昌信洞の家でも歓迎されるわけはないが、他に方法はなかった。

　移動するにしても、例のごとく荷物は少ない。学校用品と身の回りのものは、布団を入れても大きな風呂敷包みひとつですむ。

　しかし、孝一にはこれを持って、自分の身体を移動することは出来なかった。

　やむを得ず、荷物は部屋の片隅に置かせてもらうことにして、身体ひとつで新聞補給所をあとにする。

　とりあえず、昌信洞の家まで行かなければならない。歩行がおぼつかない現状では、路線バスを利用するより方法はなかった。

　バス停まで、健康なときなら五、六分しかかからない距離だが、孝一にとっては、地の果てまでのように感じられた。

　建物の壁があるところはまだいい。手で壁を触って体重を預けて、伝わり歩きが出来るからだ。

　問題は道路を横断するときである。道幅が十メートルもない交差点だが、ここには手すりや壁がないので、バランスが極めて取りにくく、どうしても自分の足で道を踏みしめて歩かなければならない。

　自動車の通行は稀ではあったが、全くないわけではなく、車が来ている場合はかなり危険を覚悟しなければ交差点を横断することはできなかった。

　最初の横断は、まだ体力が残っていたので何とか渡ることができたが、歩道にたどり着いたとき、しばらく動けなかったのである。

　いくつ目かの交差点で、車のクラクションに驚かされ、尻餅をついてしまった。

　開き直って、尻をついたまま、腕と足で地面に身体を引きずる形で移動した。

　とても見られた格好ではなかっただろうが見栄を張っている場合ではない。

　世間の人は冷たいもので、興味津々で這いずっている孝一を見るが、誰ひとりとして手を貸してくれるのはおろか、声すらかけてくる人はいなかった。

　ようやくバスが通っている鐘路まで来たときには、四月末になって暖かくなっているとはいえ、全身に大汗をかいていたのである。

　それからバスに乗るまでも、ひと苦労であった。路線バスは頻繁に来るのだけど、バス停の地べたに座り込んでいる孝一を、乗せてくれないのだ。

　車掌が気がつかない場面もあったのだろうが、自分で乗り込むことができない孝一を乗客とは認めないようで、気がついても無視して走り去ってしまう。

　たしかに、車掌と目があったことも幾度かあった。しかし、面倒に巻き込まれたくないのか、目をそらせてドアを閉めるのだ。

　バスを待つ乗客も同じである。孝一は情をかけられるのが嫌で、敢えて助けを求めなかったのだが、このままではどうにも動きがとれないので、とうとう我慢ができずにバスを待つ男の乗客に声を掛けた。

「すみません、バスが来たら車掌に僕を乗せてくれるよう言って貰えませんか」

「君はバスに乗ろうとしていたの？　俺は誰かを迎えに来て、ここに座り込んでいるだけなのか、と思っていたよ。わかった、今度来るバスに俺も手伝って乗せてあげるよ。君、どこか怪我をしているのかい？」

「はい、脚を骨折してるようで、歩けないんです。ようやくここまで這ってきました」

　やっと、バスに乗れる目処が立った。

　乗客も手を貸してくれ、バスにようやく乗り込んだ。手助けをしてくれた男性が、男子高校生に席を立ってくれるよう話し、孝一を座らせてくれたので、ようやく息がつけるようになったのである。

Ⅳ

　昌信洞のバス停で降りるまでは、手助けをもらえたが、このあと父親たちが住む住居まで、やはり尻をつけたまま、手と足で地面をずれて、移動することになる。

　妙な動きで蠕動している孝一は、道行く人たちの奇異な視線を、一手に浴びた。

　父親と曽栄淑、享俊の家族が住んでいる家の窓に、灯りが点っていた。

　這いずって玄関の扉まで来た。上体を扉に預けて弱々しくノックする。灯りがついた。

「どなたですか。あなた？」

　中から曽栄淑の声がした。疲労の極みで、声を出すのも辛かった。

　もう一度、ドアをノックする。

「誰なの？」

「孝一です。父さんはいますか？」

　ようやくの思いで、語りかけた。中からすぐに反応があった。

「孝一って、孝さん？　今、開けるわ」

　扉が引かれた。ドアにもたれかかっていた孝一は、自然に家の内側に倒れ込んだ。

「孝さん、どうしたの。こんなにひどい状態になって……誰かにやられたの？」

「何人もの男に、よってたかって蹴られたんです。父さんは？」

　孝一は倒れ込んだ状態から、両手を使って上半身を持ち上げた。

「まだよ。もうすぐ帰ってくると思うわ」

「じゃ、少し待たせてください。まだ、怪我したところの具合が悪いので、父さんの部屋で横になって待ちますから」

　ここで栄淑おばさんに、弱みを見せたくなかった。壁に手をついて、横歩きで父親の部屋まで行く。

　部屋に入ると、孝一は精魂つきはてたように床に倒れ込んでしまった。

　どのくらい時間が経ったのだろう、孝一は聞こえてくる声で目が覚めた。

「孝一はひとりで来たのか？　いきなりここで眠ってしまったんだな」

　父親の声である。

「そう、喧嘩でもしたのか、フラフラになって玄関先に倒れていたの。育ちが悪いからこんなごろつきみたいな真似をして……殴られても同情はしないわ、自業自得よ」

「本人が喧嘩したといっていたのか。こんなにひどくやられるなんて、相手は誰なんだ」

「まだ、そこまでは聞いていないけど、フラフラになっていたのは事実よ、こんな乱暴な子に育つのは、母親の教育のせいだわ。あなたの亡くなった奥さん、どんなことを孝さんに教えていたのかしら」

「順愛は孝一にとても愛情を注いでいた。いつも抱きしめてやったり、人としてのルールなどをじっくり話してやっていたんだよ」

「そんな優しい母親の気持ちがあれば、喧嘩なんかする子に育たないわ。あなた、順愛さんが孝さんと接しているところを見たことがあるの？　軍隊のときも、事業をやっているときも忙しかったのでしょう」

「順愛は、母親として完璧だった。三人の子供たちに分け隔てなく愛情を注いでいた」

父親は、少しばかりムキになって答えている。強い調子の返答は珍しかった。

　孝一は、横になりながら話を聴き、考えた――曽おばさんは、自分のことしか考えていない。自分を中心にして物事が進んでいく幸福な人なんだ。僕の様子を見れば、今やられたのかどうか、分かるはずなのに。

そこまで考えた孝一は、 父親が帰ってきた安心感と疲労で、再び眠りにおちた。

　死んだように眠って、一夜を昌信洞で過ごした孝一は、翌朝、本当に久しぶりに父親と会話を交わした。

「そうか、二十日も前に怪我をさせられたんだな。栄淑は、お前が殴られてここに来たようなことをいっていたけど、父さんはおかしいと思っていたんだよ。あのデモでは何人もの学生が命を落とした。けがで済んだのは幸運と思わなければいけないのかも知れない」

「機動隊はひどいよ。無抵抗の僕を、何人もで蹴りまくるんだから……」

「お前も信念を持ってデ モに参加していたんだろう。そのくらいの危険は覚悟の上で」

「冗談じゃないですよ。デモに加わるような余裕はありません。ここに来た帰りにデモ隊に間違えられて……とばっちりです」

「そうだったのか。で、医者はどう言っているんだ。どこがどうなって、治療の方は」

「その日にセブランス病院に行ったけど、診て貰えなかった。それ以降、病院にはかかっていません。医者代がないから」

「何だって、病院にかかってないのか。どうして知らせなかったんだ。電話だって出来ただろうし、竜に会社に来させても」

　相変わらず、情勢判断ができていない父親である。何も事情がわかっていないのだ。

「父さん、竜は文山の孤児院に入れられたのですよ。当然、父さんは知らないよね」

「孤児院に？　新聞補給所は父さんの会社の連絡先は知っているんだろう。お前の怪我も、竜のこともひと言も知らされていない」

「父さんの連絡先は、僕がわざと教えなかったのです。だって、僕達の話が聞こえていくのは迷惑でしょう。だから……」

「それで身体の方はどうなんだ。もう日常生活に不自由はないのか」

「まだ自分のことは何もできません。思うように歩けないんですよ。ここにくるんだって地べたを這いずってきたような状態です」

　たしかに、父親が帰宅してから、話している現在まで、孝一は寝床に横になっている状態で、身体状況をうかがうことが出来ないのはやむを得ないところではある。

「そうなのか。わかった、父さんが知っている漢方の医者に来てもらおう。栄淑に電話局から電話してもらうよう頼んでくる」

　この頃は、一般家庭に加入電話など設置されていないのが普通だった。公衆電話もさほど数が多く見られず、不便だったのである。

　部屋を出ていった父親は、栄淑おばさんと一緒に戻ってきた。

「孝さん、そんなにひどい怪我だったら言ってくれればよかったのに。お尻をついてずり歩いていたのは、殴られた直後だから、と思ったのよ。それで、今はどうなの？」

　栄淑おばさんは、孝一の目を覗き込むようにして話しかけて来た。

「………」

　昨夜、夢うつつに聞いた彼女の悪意に満ちた言葉を思い出し、孝一は口を開かずに目をそらした。

「俺は河先生が来るまで、孝一につき添っている。悪いけど、河先生の電話の次に、会社に電話して、午後から出ると伝えてくれ」

　父親は、どうやら医師が来るまで、孝一のそばで待っていてくれるようだ。

　栄淑おばさんは、出勤していった。

Ⅴ

「孝一、機動隊はいきなり乱暴したのか、お前に何も聞かず、言い訳もさせずに……」

　少し、うとうととして、目を開けた孝一に父親が訊いた。

「警棒で、頭を思いっきり殴られました。それで僕は倒れたから、あとは靴で蹴られたので、身体中が傷んだのです。しばらくは呼吸もできなかった。歩くこともね」

「ひどい話だ。真面目に働いている学生を理由もなく痛めつけるとは……河先生に診てもらった結果によっては、警察に抗議する」

　父親は、両手の拳を握りしめて言った。

「それよりも父さん、曽栄淑おばさんが僕たちの新しいお母さんになるのは決まっているの？　僕はおばさんを、好きになれない」

「栄淑は悪い人ではないよ。自分で働いているから少し気が強いだけだ。それよりここでゆっくり休養して、体を治すことが先決だ」

　父親は孝一の頭をやさしくなでながら、低い声で話しかけた。

「今、僕は、こんな状態だから動けないけど歩けるようになったら出ていきます。竜もいないことだし、どこか住み込みで使ってくれるようなところを探して……」

「お前は、まだ学校に通わなければならないだろう。ここにいたくないのなら、無理には止めない。明洞の事務所には、小さな部屋があるから、寝るだけなら何とかなる。そこから学校に通えばいい」

　こんな話をしているうちに、玄関の扉がたたかれる音がした。

「李社長、河です。入りますよ」

　大きな声と共に、廊下に足音が響いた。　父親が部屋を出て行き、中年の白衣を着た男を伴って戻ってきた。

「河先生、無理を言って済まないね。来てくれて安心したよ」

　父親が部屋に入りながら言う。

「社長、どこの骨が折れたの？」

　河医師は、二往復ばかり父親の頭から爪先までを見回していった。

「私ではない。息子の孝一が機動隊に無茶苦茶、痛めつけられたんだよ。その日にセブランス病院に行ったけど、治療してもらえなかったようだ。先生、診てやってください」

　医師はうなずくと、孝一の横に座り込んで瞼を裏返しにして見ている。

「さて、身体を起こせるかい？　手を貸すけど自分でも努力してみて」

　背中に手を回し、かけ声と共に孝一の上体を持ち上げた。

「痛っ！　先生、背中が痛いですよ」

　孝一は悲鳴を上げた。

「ここにはレントゲンがないから、触診や目で見て判断するより方法はない。さ、上半身裸になって」

　河医師は、容赦なく孝一のシャツを脱がせて、上半身をむき出しにし、内出血が残っている部分を選んで触診を始めた。

　場所によって痛みもあったが、全体的にくすぐったさの方が勝った。

「先生、左足に力が入らないのですが」

　孝一の言葉に、医師の指が左の下半身に伸び、太腿をさすりだした。

「怪我は随分前だね。肋骨の何か所かに亀裂骨折があったようだが、若いということは素晴らしい。ほとんどの部位はくっつきかけている。脚も左の大腿骨にひびが入っているみたいだけど、これも患部に荷重をかけなければ、治るのは時間の問題だ。医者にかかる必要はないよ。どうしても痛いときは、小麦粉をお酢で溶いてそれを患部に貼ればいい」

　医師は、洗ってきた手をタオルで拭いながら微笑と共に宣言した。

　快方に向かっているという事実が理解できると、現金なもので、痛みが薄紙をはぐように消えて行き、歩くことにもさほど不自由を感じなくなった。

　朴所長の家で、お手伝いさんをしていた善を呼び戻した。善は昌信洞に戻ってきて、孝一の身の回りや、以前のように一家の世話を見るようになった。

　手慣れた様子で家事をこなす善を見るにつけ、国民学校の高学年になったとはいえ、彼女の苦労が感じられて、孝一の胸が痛んだ。

　父親は仕事が終わると帰宅して、孝一や善との時間を持つようになった。

　久しぶりで父親と話す時間が持てたが、今回は孤児院に入れられている亨竜のことが気になるし、ここに転がり込んできた夜に聴いた、母を誹謗する栄淑おばさんの言葉が思い起こされて、どうしても落ちつかなかった。

　まだ少し、身体に不自由さは残ったが、歩くことにさほど苦労がなくなった五日後、孝一は昌信洞の家を出た。

　まず、朝鮮日報社の補給所に行き、残してあった身の回りのものを持って、明洞の父親の事務所に行く。　補給所では、事務員の成愛が去って行く孝一に涙を流したが、孝一にそんな感傷に浸っている余裕はなかった。

　成愛に強烈に請われて、明洞の事務所の連絡先を伝え補給所をあとにした。

　明洞の事務所には台所があり、電熱器と流しがあって水道も引かれていた。　台所の横に三坪ほどの部屋があり、アンペラが敷かれている。　ほとんど、補給所の仮眠室と変わらない環境ではあるが、居心地の悪い昌信洞の家と比較すると、天国にも勝るスペースだった。

　これでとりあえず、寝るところの心配はなくなった。前の鐘路の事務所には、このような小部屋がなかったので、孝一がまだ国民学校の学童であったせいもあり、昼間事務所に居ることはかなわなかったが、高校生になった現在、電話番などで結構役に立っていた。

　しかしその場にいて、父親の会社が決して順調に回転していないことを肌で感じた孝一は、外に出て働くことにした。

Ⅵ

　働くといっても、以前の水道工事屋の在庫管理の仕事に戻ることはできない。学校は五時からなので、昼間の時間を働くことに振り当てることが可能であった。

　そこで、以前から考えていた、靴磨きをやることにした。

　まず、ソウルの駅前広場に行き、そこで靴を磨いている中年の男に話しかけ、靴磨きを商売にする方法を尋ねた。

　その男の話によると、靴を磨く道具を揃えてここにこれば、仕事はできるという。ただし、客が磨かせてくれればの話だが……

　親切な男に当たったようで、その日一日仕事ぶりを観察することを許してくれた。

　男の仕事は丁寧だった。まず、細いブラシで靴底の泥を落とし、栄養クリームで革全体に栄養を与える。そして固形の靴墨を指に巻き付けたメリヤス布に塗りつけ、少量の水と共に練り込んでゆく。この摩擦を何回も繰り返しているうちに、顔が映るほどの信じられない光沢が現れてくるのだ。

　幸い、父親が中東中学の学費を出してくれたので、朝鮮日報の配達報酬が全額手元にあり、男から聞いた道具の販売店で、靴磨きキット一式を購入し、明洞の事務所に帰った。

　二日間、会社の営業マンや、来る客の靴を磨かせてもらい、すぐに、全員から磨いた靴の光沢に驚きの声が聞こえるようになってすっかり自信がついた孝一は、父親の事務所で使っていない椅子を担いで、ついに駅前広場デビューを果たした。

　数日の間は要領がわからず、拠点を決めないで広場を流して歩き、磨かせてもらっているときはよかったが、客の動きがいい場所を選んで商売した方が効率的と考えて早朝、駅舎の壁を背に椅子を据えた途端、予想もしないアクションが起こされた。

「お前、誰の許しを得てここに店を張っているんだよ」

　ズボンのポケットに手を突っ込んだ屈強な三人の男が、孝一の前に立ちはだかった。

「誰かの許可がいるのですか、韓国は自由な国ではないのかな。靴磨きは特別な資格が必要な仕事ではないのだし……」

　まさに寝耳に水の言い分だった。

「どんな仕事でも、秩序がいるんだ。お前が座っている場所は、もう五年もここで働いている呉光珠がようやく許された仕事場なんだぞ。昨日や今日ここに来たお前には十年も早い。さっさと場所を空けるんだ」

「そんなこと不合理だ。韓国国民なら何の仕事をやっても自由じゃないんですか？」

　孝一としては精一杯の抵抗だった。

「お前、まだ学生だろう。社会のルールがわかっていないようだな。お前が大人なら今すぐにでもたたき出してやるところだが、痛めつけるのは勘弁してやる。道具と椅子を持って、さっさと立ち去れ」

「そんなこと、何か法律ででも決まっているのですか。認められている自由は……」

　殴られないと聞いて、すっかり強気になった孝一が反論した。

「優しく話せばつけあがりやがって。どうやら痛い目にあわなければ、わからないようだな、おい、こいつの身体に教えてやれ」

　正面に立って話していた男の目が、すっと細くなりふたりの男に顎で合図した。

「素直に言うことを聞けば、痛い思いをしなくても済んだのによ。生意気なガキだ」

　大男の方が、孝一の胸ぐらをつかんで自分の顎のところまで吊り上げた。

　そして、触れあわんばかりに顔をすりつけてくる。ひどい口臭が鼻をおそった。

　もうひとりの男が、孝一の大事な道具箱と椅子を持ち上げ、広場の路面に思い切り叩きつけた。

　靴クリームやブラシ、布などが散乱する。

　客を座らせるための椅子の脚が、派手な音をたてて折れた。

　それを視界にとらえた孝一は、胸ぐらをつかまえている男の脛を思い切り蹴った。

「痛っ！」

　声は挙げたが、つかんだ胸ぐらは離さない。そして孝一の額に強烈な頭突きをかましてきた。目から火花が出て視界が真っ赤になり、次に暗くなって、意識が薄れた。

　倒れている孝一に目を止める人は多いが、声をかけたり介護してくれる人はいない。

　このような騒動は、日常茶飯事なのであろう。目をとめた人も足早に立ち去る。

　どのくらい時間がたったのだろうか、孝一の意識が戻った。

　のろのろと身体を起こし、散らばっている靴磨きの道具を眺めた。固形の靴墨は瓶が割れて、泥にまみれている。踏みにじられたのか、チューブ入りの栄養クリームは潰れて路上に流れ出し、無残な姿を見せていた。

　ブラシの柄は折れ、台形をした大型のブラシは半分に割れていた。破損した客の靴を乗せる台の横には脚が一本折れた椅子が、痛々しい姿をさらして横たわっていた。

　孝一は、広場に散乱した残骸を集めて鞄につめ、明洞の事務所に戻った。

　靴磨きの道具をもう一度、買い替える資金は孝一に残っていなかった。

　広場で大男にうけた頭突きは、孝一の両目の周辺を盛大に紫色に染め、痛々しく腫れ上がらせていた。

　道具も使えないけど、この顔で人前に出ることはとてもできなかった。

Ⅶ

　暴行を受けて二日が経過したが、目の周りの紫色のあざはまだ薄れず、水で冷やして横になっていたとき、部屋の扉が叩かれた。

「孝一君、朝鮮日報社から電話だよ」

　扉から顔をのぞかせたのは、父親の会社で営業の責任者をやっている高課長だった。

「朝鮮日報社ですか。何だろう、もう縁はなくなったはずなのに……」

　孝一は、濡らしたタオルを顔にあてたまま、事務室に入っていった。

　黒い電話機のひとつが、受話器を外された状態で回転台上にあった。

「もしもし、李孝一ですが……」

「孝一、金昇快だ、しばらく。元気にしてるかい？　怪我の方はもう、いいみたいだね」

　受話器から流れてきたのは、受験のときに世話になった、優等生の金昇快先輩の明るく弾んだ声だった。

「あ、金先輩、ごぶさたしてます。もう怪我は大丈夫、先輩もお元気そうですね」

「うん、とても元気だ。実は俺、司法試験をパスしたんだよ」

「やった！　おめでとうございます。とうとうやりましたね。凄ェ……」

「どうもありがとう。そこで、君に相談があるんだ。俺が受け持っている中央官公庁や大統領官邸のテリトリーだけど君にそこを譲ろうと思っている。朴所長には了解を得ているけど、君、どうだい？」

「えっ！　先輩のテリトリーを僕に……青瓦台（大統領官邸）なんかもですか」

　孝一は絶句した。まさに天から振ってきたような内容だった。金先輩の担当は、朝鮮日報社でもまったくの特別区域といえる。

　通常、一人の配達員が受け持つ新聞の部数は百五十部が限界であるが、何とこれの三倍以上、五〇〇部にも及ぶ。

　顧客先は、韓国政府の省庁である。ここには全世界から配られる新聞を届ける。それぞれ、省庁の集積所にまとめて配達し、その範囲は旧日本総督府跡のドームを中心に、地域は二キロメートルに集中する。

　配達も楽だが、最大のメリットは新聞代金の回収に、まったく心配がないことである。

　韓国の場合、どのような商売でも共通するのは、代金を受領して初めて収入となる点である。アイスケーキの場合も、売れた金額を四対六に分け、販売員には四割が報酬として支払われたが、新聞も同様集金が完了して四割が収入となる。これがなかなか苦労だ。

　しかし、この地域は決まった日に集金に行くと間違いなく、現金もしくは小切手で百パーセント支払われる。

　配達に手がかからず、集金に苦労がない。しかも扱う部数が多いということは、それだけの実収入が得られるのだ。

　たぶん、通常の勤め人の三倍もの収入が見込まれる。こんな素晴らしい条件は、とても考えられず、夢のような話だった。

「孝一、どうした？　もしもーし」

　受話器の中に金先輩の声が響いた。

「あ、あまり突然のお話だったので……お願いします、ぜひやらせてください」

　孝一は、急き込むように答えた。

「打ち合わせしたいからすぐに来てくれ。朴所長も一緒に待っているから……」

「わかりました。すぐに行きます」

　明洞の事務所から、朝鮮日報社まで、歩いて三十分ほどである。

　このときの孝一は、紫色の内出血や、腫れた顔のことなど考えず、新聞社に向かった。

　久しぶりの朝鮮日報社補給所である。地下に降りて行くと、めざとく事務員の黄成愛が孝一を見つけて、笑顔で駆け寄ってきた。孝一の顔に刻まれた内出血を見て、息を呑む。

　奥のソファーには朴所長と、金昇快先輩がいて、立ち上がって孝一を迎えた。

「孝一、その顔はどうした？」

　朴所長が訊く。

「階段で転んでぶつけたのです。それよりもきょうはありがとうございました」

「金君が孝一のことを強く推したからね。知ってのとおり、あそこは誰でも出来るという地域ではない。経験豊富で身体が丈夫な配達員でなければならないんだよ」

「俺は孝一なら大丈夫と見たんだ。君は真面目だし、身体も頑丈だ。まず休むようなことはないと信じている。君ならな」

　金先輩も、笑いながら言葉をつないだ。

Ⅷ

　孝一は、身の回りのもの一式を持って、再び補給所に戻ってきた。

　配達員全員が温かく、戻ってきた孝一を迎えた。というのは表面上であり、現実には相当やっかみの感情が持たれたようである。

　それはそうだろう。この配達員全員が夢にまで見た、金昇快のテリトリーが、怪我で一度退職した孝一に禅譲されたのだから。

　配達員は面と向かっていう人間はいなかったが、林総務はあからさまだった。

「孝一、お前が昇快の区域を受け持てるようになったのは、俺の推薦があったことを忘れるんじゃないぞ。あそこを担当すれば、俺たちがもらう給料の倍の手数料になる。精算のときでいいから俺の無尽の金、二万ウォンをお前が負担してくれ。昇快もやってくれていたんだから」

　当然の権利のように言う。

　少し抵抗を感じたが、金先輩もやっていたのなら仕方がないと考えた。

「わかりました。先輩から引き継ぐんだから僕も払います。二万ウォンですね」

「そうだ、悪いね。そのかわり孝一の面倒は俺が見てやるからな。朴所長には内緒だぞ」

　右手を差し出してきた。握手が契約のつもりなのだろう。手を握りかえした。

　二万ウォンといえば大金だ。しかし手数料の総額から考えると、無理な数字ではない。

　金先輩は、司法研修所に入るまでの三日間を孝一のために、彼の担当の特殊性について丁寧なレクチャーをしてくれた。

　かといって、特別なことは何もない。各省庁の総務課に行って配達員が交代することを告げ、孝一を紹介するだけである。

　配達の方法は極めて単純で、それぞれの省庁に設けられている集積所に必要部数を届けておくと、自動的に役所側の用務員さんが各部署に配ってくれるのだ。

　この特別な地域を担当する配達員は、代々、手伝ってくれる用務員さんに応分の謝礼を支払うのが慣例となっている。

　これだけの部数を配達するのには、普通の方法では不可能であり、スタートは補助員のリレー方式を使って運搬する。

　旧日本総督府跡の中央庁には、多くの政府省庁が入っており、新聞を各階に配るためにエレベーターの電源を入れるのも、孝一の大切な役割であった。

　中央庁まではリレーだが、配達の最後だけは旧来のスタイルを踏襲、たすきに挟んで駆け足で向かう。

　それは大統領官邸（青瓦台）への配達だ。世界各国の新聞を持ち、通常なら厳しい警備下に置かれている官邸だが、孝一は出入りが自由である。警備に当たっている警務隊員は、孝一には笑顔を見せてゲートを開いてくれるのだ。

　一般人には夢のような青瓦台に自由に出入りできて、運が良いことに大統領と直接、拝顔の栄に浴し、「ごくろうさま」とねぎらいの言葉をかけられたことが何度かあった。

　金先輩は、几帳面な彼らしく、各々の省庁に配達する部数や道順、用務員さんの名前や好みなど、丁寧にメモしてくれたが、引き継いで三日も経ったときには、完璧に孝一の頭に刻み込まれていた。

　用務員のおじさんたちともすっかり仲良くなり、スムースに事は運んでいた。

　八月から始まった新聞配達の仕事は、順調に展開して行き、月末の集金は、考えられないほど簡単に回収が出来た。そして信じられない額の報酬が孝一の手元に入った。

　四月に怪我をして、二カ月以上学校を休んだので少し同級生におくれをとったが、この一カ月、昼間の時間を勉強にすべて振り向けた結果、遅れはすっかり取り戻した。

　朝、新聞の配達をして昼間は予習、少し昼寝の後学校へ。孝一の生活は、これまでにない平和な毎日が過ぎていった。

　物心ついてから初めてと言ってもいい、平穏な日々であった。

　十月一日は韓国国軍の日である。盛大なパレードがソウルの市内を練り歩いた。

　軍楽隊が奏でる勇壮なマーチに乗って、陸軍の歩兵が威風堂々と行進する。その前後を戦車、装甲車の機動部隊が固め、空には空軍のジェット機が轟音を響かせていた。

　孝一は中央庁に走り、勝手知った庁舎内に入った。エレベーターで、頂上のドームまで上がる。そこからパレードを見下ろすと、あたかも、自分が将軍になって閲兵しているような優越感が支配した。

――まるで、天下を取ったような気分だ。僕は軍人になったら必ず空軍のパイロットになってやろう。それには空軍士官学校に入るんだ。必ず人の上に立つ人間になってやろう。

　中央庁ドームの上で、新しい誓いを胸に刻んだ孝一であった。

第十二章・青天の霹靂（変貌）

Ⅰ

　経済的に心配はなくなり、時間に余裕ができて勉強にも、力がはいる状況になった。

　しかし、長い間の耐乏生活になれている孝一は、食生活に変化はつけなかった。

　いずれ、何かの事業を興すときのために資金をプールすることにして、もっぱら蓄えることを心に決めた。

　朝晩、肌寒く感じるようになった十月の中旬である。補給所の事務机で英語のリーダーを開き、声を出して読んでいるとき自分の声をなぞるように発声をする、聞き覚えのある声に気がついた。

――竜の声だ。

　周囲を見回すが、誰もいない。

　出入り口の扉が開いて、黄成愛のいたずらっぽい笑顔が部屋に入ってきた。

「成愛。今、竜の声がしたような気がするんだけど、見なかったか？」

「いいえ、見ません。空耳でしょう」

「僕が英語のリーダーを読んでいたら、いつも竜がやっていたように、発音を真似る声が聞こえたんだ」

「兄ちゃん……」

　成愛の蔭から、三ヶ月ぶりの亨竜が顔を出した。顔は汚れているが、坊主頭の目が輝いており、同年配の男の子と一緒である。

　亨竜の顔が一気に崩れて、両目から涙があふれ出た。そして全速力で駆けてきて孝一の腰に抱きついてきた。

「竜、お前はどうやって逃げてきたんだ」

　着ている洋服は泥だらけで、ズボンなどは二枚重ね着をしている。持っている洋服を全部身につけてきたようだ。手には荷物を持っていないとところを見ると、孤児院から脱走してきたことは容易に想像できた。

「僕が文山に連れて行かれるとき、曲がり角の目印を必死に覚えて、それを必死で思い出しながら二泊三日かけて戻ってきたんだ。掴まったら連れ戻されると思って、裏道を通ったから大変だった。兄ちゃん、一緒にいさせて。孤児院には帰さないで」

　もう一度声を出し、涙の目を上げて、孝一の顔を見つめる。

　文山からは六〇キロほどある。普通に歩いても二日はかかるだろう。

「孤児院でなにかあったのか？　いじめられるとか。それにその子は誰なんだ」

「うん、僕の友達で尹長春。一年上だけどとても仲良しなんだ。孤児院でいじめられたりはしなかったけど、僕、あそこは嫌いだ。規則々々でうるさいし、皆と同じようにしないと怒られる。アメリカの人が来て、連れて行ってくれるなんていってたけど、アメリカ人なんて、施設にはこないし……」

　亨竜はこれまで溜まっていた不満を一気にはき出して、より一層しがみついてきた。

「成愛、竜たちを誰かに見られたか？」

「いいえ、誰にも会っていませんよ」

「きっと施設の職員が探しに来る。まずふたりをどこかに匿わなければならない」

「これから私、家に帰ります。ずーっとは無理だけど、一日か二日なら、お母さんに聞いてみてあげる」

「そうか、そうしてもらえると助かる。僕が部屋を探している間だけでいいから」

　他の配達員の心情を慮かると、孝一が補給所の仮眠室に寝泊まりしているわけにはいかず、どこかに住む必要性を感じ取っていた。

　まして、享竜が増えたので部屋探しは急を要した。

　その意味においては、いいタイミングでもあったのだ。　とりあえず、汚れたふたりを銭湯に連れて行き洗ってやった。風呂はふたりをさっぱりと清潔な子供に戻してくれた。

　部屋を探している間の二日間、黄成愛の家にふたりを預かってもらった。

　まだ高校一年生の孝一に、部屋を借りる契約など、法律行為が出来ないのは、当然のことであり、享竜の世話は見れても、一緒に逃げてきた　尹長春の責任を持った面倒は見ることが出来ない。

　彼は両親を病で亡くし、完全な孤独の身だった。事情を話し、責任を持って預かることが出来ないことを告げると、文山の孤児院でなければどこでもいいというのだ。

　新聞社に隣接する交番で相談した結果、顔見知りのお巡りさんからソウル市役所に福祉課に、児童相談センターがあるからと言われ、そこに依頼することにした。

　尹は福祉課に引き取られ、近くの孤児院に引き取られるようになった。

　数日後、市役所福祉課の職員が来て竜の元気に動き回っている様子を見て、安心したようだった。

「尹君も仁川の孤児院で元気にやっていると連絡があったよ。すっかり気に入ったみたいで、毎日学校に通っているって。享竜くんも通学しなければ」

　竜は国民学校生である。脱走してきてからは通学していない。

「そうだった、竜、学校に行かなければ」

「僕、文山の学校に行ってもつまらなかったよ。だって先生が教えてくれること、全部僕にわかるんだもの」

「そうか、竜の勉強は先に進んでいるんだな。お兄ちゃんと一緒のところがあるんだ」

「全部わかるわけじゃないんだけどね。だけど易しいことに違いはないよ」

「ソウルも同じかも知れない。でも、行かないと学年が遅れてしまう。手続きをしよう」

孝一は市役所福祉課の係員に転入の手続きをしてもらうように依頼した。

　亨竜の国民学校への復学も問題なく済んだ。　これで享竜との生活が再開した。

　部屋探しは麻浦の老舗うなぎ屋の息子、鄭養湖君の世話になることにした。彼の家では、老舗の母屋に使っていない部屋が数え切れないほどあり、ひと間を下宿として提供してくれることになった。

　麻浦のうなぎ屋から、朝鮮日報社まで約五キロほどの道のりである。新聞を配る早朝はまだバスや路面電車は動いておらず、歩くと小一時間はかかる。

　ここでも養湖君の助けの手が伸びた。当時は貴重品であった、自分の自転車を使わせてくれたのである。

　現在のような、軽快なスポーツタイプではなく、実用的なものだったが、往復の時間が半減でき、大いに助かった。

　まず、昌信洞の家から善を呼び寄せた。ここで、またもや養湖君が助け船を出してくれた。善をうなぎ屋の本宅で預かってくれるというのである。国民学校高学年の善は、うなぎ屋の手伝いをして、自分の食い扶持と寝床を確保した。

　これで、すべての問題が解決できた。亨竜の国民学校への復学も問題なく済んだ。

Ⅱ

　冬を越し、春になった。孝一は高校二年生に進級し、すべて順調に推移していた。

　通勤用の自転車と、配達の時に必要なリヤカーを自分の費用で購入した。

　ところが、平穏な日々も、ある出来事によってもろくも崩れ去ってしまった。

　韓日協定が正式に調印された六月末、いつもの配達を終えて使っているリヤカーを格納し、補給所に入っていった孝一は、そこに意外な光景が展開されているのを目にした。

　入り口の扉を正面にみる位置で、事務員の成愛が立ちすくんでおり、その腕を掴んで三人の屈強な男達がとり囲んでいた。

「孝一さん、逃げて！」

　成愛が声を張り上げた。

　男たちの動きは素早かった。瞬時に駆け寄った彼らによって孝一の腕はねじ上げられ、身動きがとれない状態に置かれた。このまま部屋の中央に戻される。

「おい、親父さんはどこにいる？」

　正面に立ちはだかる黒い服にサングラスの男が、抑えの効いた声で質した。

「父さん？　僕は知りません。もう一年近くあっていないのですよ」

「そんなわけはない。高校生のお前や妹や弟の生活費はどうしてるんだ。親父さんから毎月もらっているのだろうが」

「本当に父さんには会っていません。僕は新聞配達をして生活しているんですから」

「何とでも言うがいい。いつまでその強情が続くかな。明洞の会社に連れて行こうぜ」

　黒服、サングラスの男が、孝一を捕まえている男達に命じた。

「はい、わかりました。おい、お前、おとなしくこっちに来い」

　腕を後ろ手にひねったまま、歩き出す。

　このときである。小柄な成愛がサングラスの前に立ちはだかった。

「あんた方、いい大人が何人もで、ひとりの高校生をいじめるの。恥ずかしくないのですか。ここは新聞社です、社には新聞記者が大勢いるし、中には警察に顔が利く人だっているのよ。暴力をふるえば……」

「元気のいい娘さんだ。でも、われわれも遊びでこんなことしているんじゃない。こいつの親父さんは、品物を買った金を払ってくれないんだよ。俺たちだって生きるか死ぬかの切実な問題なんだ。手荒なことなんかやりたくないのが本音さ。さ、いくぞ」

　まるで河の流れに乗せられたように、孝一は三人の男に包囲、拉致される形で、明洞の事務所まで、連行された。無言なのが恐かったが、道中から手荒なことはされなかった。

　しかし、数人の社員が残っている事務所に連れ込まれると、事務室の中に強い力で突き飛ばされた。

「悪いけれど、少しばかり痛い思いをしてもらうぜ。俺たちはヤクザでも暴力団でもない普通に生きてる市民だ。お前の親父は、我々の店から商品を買い、その代金を小切手で払った。でも小切手は期日に落ちなかった。たしかに運が悪く連鎖倒産だったこともわかっている。しかし商売は成功もあれば失敗することだってある、失敗でも、迷惑をかけた人の前で申し開きをするのが事業家だ。しかし、お前の親父は姿をくらました。いなくなって三月になる。被害にあった二千万ウォンを取り返すのには、必死になって一年働いても追いつかないんだ。李社長も親なら、息子が痛めつけられたら、考えるだろうよ」

　サングラスの男が、孝一の耳元で声を抑えて言うと、いきなり拳が孝一の顎にめり込んだ。顔面がねじれて、脳から血が引いていくのを実感する。

　妙なる音楽が聞こえ。得も言われぬよい匂いが鼻腔を満たす。

　美しいお花畑をスローモーションのようにゆっくり落ちてゆく孝一は、どのように着地するのかなどの不安を全然感じなかった。

　要は、顎に加えられたパンチでノックアウト、失神したのである。

　バケツ一杯の水をかけられて、意識が戻った。孝一は床に奇妙な形で倒れていた。

「お前たちも一緒に聞け。確かに不渡り事故は李虎範社長の責任だ。社員には責任がないかも知れない。でも、きちんと利益が出るように努力しなかったのはお前たち社員なんだぜ。直接の責任がない息子のお前は不合理だと思うだろうが、身の不運を嘆くんだな。俺たちだって必死なんだ、きれいごとでは済まない。起きてしまったことは仕方がない。君たちに頼んでおく、李社長から連絡があったら警察に出頭するように伝えてくれ。小切手の不渡り事故は、立派な犯罪だ。法のさばきを受けて償うのが、親父さんに残された最後の道なんだよ。頼んだぞ」

　男は、サングラスを外して言った。素顔は優しい目をしている男だった。

「多分、僕のところに連絡はないと思いますよ。連絡があっても、父さんを売ることは出来ない。血を分けた親だから」

　これは、孝一の本音だった。

「そうだろう、親だもんな。お前の麻浦の下宿もわかっているけど、これ以上追い回したり痛めつけたりはしない。親父さんの今後のこともあるので、連絡があったら必ず伝えてくれ。殴ったりしてごめんな」

　思ったよりもはるかに紳士的な対応は、彼らが善良な実業家であることを裏付けたのである。彼らの言い分もよく理解できた。要は姿を隠している父親への痛烈なメッセージなのだ。孝一も、父親が世間から隠れているのは卑怯だと思うが、この事件そのものを今日、知ったのだから手の打ちようがない。

　債権者たちは、倒れたままの孝一を助け起こすと、着衣の泥を払ってくれ、明洞の事務所から立ち去った。

　孝一は痛む顎をさすりながら、新聞補給所に戻った。途中、商店のガラスに顔を映してみた。左の顎が紫色に内出血し、見事に腫れあがっている。このところ、顔面に傷痕がいつも刻まれているが、今日は何故か爽やかな気分だった。サングラスの男の、商人魂みたいなものに共感したからである。

　補給所に着くと、心配していた黄成愛が飛び出して来た。腫れた顎を見て眉を顰める。

「孝一さん、大丈夫？　内出血しているしひどく腫れているわ。ちょっと待っていて。上で薬を借りてくるから」

「大丈夫だ。このくらい平気さ」

　新聞社から薬を借りてくるという、成愛からの治療申し出があったが、断って自転車に乗り、麻浦に向けて走り出した。

　見送る成愛の目から大粒の涙が溢れだして、頬を伝わり床に落ちた。

Ⅲ

　父親の行方は、杳として知れない。

　孝一は、できるだけ父親のことを考えないようにしていたが、やはり動向はどうしても気になった。忘れようと思うこと自体に無理がある。新聞配達中も、学校で事情を受けているときも脳裏から離れなかった。

　孝一を、明洞の事務所で痛めつけた債権者のグループは、そのあと接触を持ってこなかった。その意味においても、父上が一刻も早く出てきて、償いをしてもらいたかった。

　しかし、債権者は彼らだけではない。何人もの人間が父親を探していた。

　だれしも考えるのは、親子のきずなが、簡単に切れるものではないということだった。

　さすがに、新聞の補給所に現れて、孝一を拉致したりの直接行動はなかったが、どうやって漏れたのか、麻浦の下宿の周辺にいかにもうさんくさい人間が出没しだした。

　最初は、孝一の下宿に虎範が現れる予測で張り込んでいたようだが、姿を見せない虎範にしびれを切らし、孝一に接触してきた。

「おい、兄さん。親父さんはどうしているんだ、どこに隠れている？　素直に教えないと、お前に痛い思いをしてもらうぜ」

　補給所から帰ってきた孝一の前に、いかにも暴力団でございます、と言わんばかりの雰囲気を背負った男が立ち、孝一の肩を掴んで訊いてきた。

「僕は知りません。父さんは何も知らせないで、どこかに行ってしまったのだから」

「そんなわけはないぜ。昌信洞の奥さんにも連絡を取らなければならない。お前を連絡役に使うのは当然だろう。知っているのならさっさと吐いた方が身のためだ」

「知らないものは知りません。僕が聞きたいくらいですよ。探しているのはあなた方だけじゃなく大勢いるのだから」

　孝一が答えた内容は真実だった。不渡りを出して逃げたのも、三ヶ月以上前のことなのである。父親は完全に姿を消して、一度も連絡が取れていないのが現実である。その点について恨みに思っていたのも真実だった。

「さすが、ペテン師の李社長の息子だけのことはあるな。口もうまいけど、なかなかの名演技だ。おれたちでも騙されそうだぜ。強情な奴だ、素直に話せばこんな思いをすることはないのに……」

　正面で主に質問している男が、仲間に顎をしゃくった。

　すかさず二人の男が、両脇から孝一の腕を掴み、そのまま漢江の河川敷まで連行された。

　現在のコンクリートで固められた姿から想像もできないが、当時は河川敷内に立木も多く、鬱蒼とした草木の茂みがあって、いい目隠しとなっていた。

　茂みの蔭に連れ込まれる。この場に及んでは覚悟を決めるより道はなかった。

　いきなり後方から腰を蹴られて、前につんのめり、四つん這いにさせられた。

　そのまま横たわって、次の攻撃に備えていると、声がかかった。

「寝ころんで楽をしようとしてるな。そうはいかないぜ。立てよ、ほら、立つんだ」

　襟首を掴まれて、持ち上げられた。

　ようやく立つと、まず、ボディにパンチがめりこんだ。思わず前かがみになる。

　左右に散った男に、両腕をつかまれて上体を起こされ、身動きがとれなくなった。正面の男が、ゆっくりとした動きで右の回し蹴りを繰り出した。足の甲の部分が胃袋の辺りに巻きつくように食い込む。

　呼吸がつまって、いくら口を大きく開いても、肺に酸素が入ってこないのだ。

　咳き込むように呼吸を繰りかえすと、突然のように空気が流れ込んできた。

　無意識に、笛を吹くような音を立てて呼吸をむさぼる。ふだん何気なく行っている息の吐き吸いが、これほどありがたく感じたことはなかった。

　しかし、それも束の間、蹴りやパンチの攻撃がボディに集中した。

　この連中はヤクザの集団だ。はっきりと傷が残る顔面には触れもしない。

　そして苦しみは与えられるが、青あざになっても露出することが少ない腹部、脇腹太腿などに容赦ない攻めが加えられた。

「そろそろ、親父さんの居所を話してもらおうか。俺たちだってお前が憎くて痛めているんじゃない。さ、どこに隠れているんだ？」

　胸ぐらを掴まれた状態で聞かれる。しかし、父親の隠れてる場所を知らされていないのだから、孝一に話しようがないのだ。

「本当に知らないのだから、話すことができません。信じてください」

「しぶとい奴だな。そのあたりも父親ゆずりだぜ。それじゃ思い出させてやろうか」

　右手が掴まれて、中指一本を持たれた。

　少しずつ力が加わり、手の甲側に弓なりに反らされる。

「痛い！　指が折れる……」

「そうだよ、もう少し力を入れたら、指の骨がバラバラだ。お前の右手は一生使いものにならなくなる。ほら、もう限界だ」

　反った中指がきしみ音を発した。これ以上我慢すると、本当に折れてしまう。

「痛い！ 僕だって、父さんには出てきてもらいたいんだ。居場所を知っていたら話しますよ。本当に知らないんだから」

　孝一の叫びに、真実味を感じ取ったのだろう。そっくり返っていた中指が解放された。

　痛みと安堵で思わず、その場にしゃがみ込んでしまった孝一を残して、襲撃してきた男たちは立ち去った。

　この頃ようやく、殴られたり蹴られたりした胴体のあちこちが痛むのを感じた。

Ⅳ

「孝一、わたしだ」

　下宿の部屋に戻ろうと、立ち上がる努力をしている孝一の耳に、抑えた声が響いた。

「誰？　父さん？」

　草むらの蔭から、父虎範の鋭い目が覗いた。頬は無精髭に覆われているが、青白く、精悍な顔は変わっていない。

「そうだ。かなりひどく、あいつらにやられたようだけど、お前大丈夫か？」

「父さん！　どうしてここに？」

「ああ、お前のことが気になってな。新聞補給所の女の子、黄成愛さんだったっけ、彼女に麻浦の下宿を聞いたんだよ。来てみたら奴らがお前を……何度、お前を助けに出ようかと思ったけど、わたしが顔を見せると、火に油を注ぐように、連中何をするかわからない。辛かったけどこらえたんだ。孝一、お前は強くなったな」

「デモでやられて以来、慣れました。いろんなところで殴られたから。父さん、元気そうですね。よかった……でも、どうして連絡をくれなかったんですか。補給所に行って僕のことを聞いたんでしょう、だったら補給所にこれば、僕には会える」

「わたしの居所を知っていれば、今日みたいなとき、もっとひどい目に遭わされるかも知れない。何といってもあいつらはこんな荒事で人の雰囲気を見るのはプロだからな。今日だってお前が本当に知らないことを察して引き下がったんだろう」

「そうか、知らないことは言えないもんね」

「お前には苦労をかけるな。取り立てに暴力団を使った債権者がいるようだ。孝一、今日は今回の不渡りの説明と、わたしが隠れているところを教えようとしてきたけど、知らない方がいいか、と思うようになった」

「父さん、それはないよ。僕は父さんの子です。父さんに不利なことなんか、するわけないじゃないですか。もし、あいつらや他の奴が来ても、絶対に口は割りません。だから教えてください」

「わかった、今、わたしは仏光洞に住む軍隊時代の部下、辺啓男のところにかくまってもらっている。彼は仕事の上ではまったく無関係だから、どこをたぐってきても、わたしのところにはたどり着けない」

　父親は孝一の肩を抱いて話し出した。

「最近はその家に潜んで、一歩も出ないのだけど、今日は何か胸騒ぎがして、朝鮮日報社補給所に行って聞いたんだよ。成愛さんはお前のことを心配してたぞ。なかなかいい子じゃないか」

「父さん、今度の事件は父さんに責任はないのでしょう？　取引先が倒産したとばっちりで……だったら出てきて身の潔白を主張したらどうなんですか？」

「お前は知っていたのか。よその破産のとばっちりを受けたのは事実だけど、不渡りになったのはわたしの小切手だ。民事上の責任は免れられない。半年間、隠れ通して時効を待ったあと責任を取る」

「あと三ヶ月足らずですか。時効になるとどうなるのです？」

「罪は免責される。少なくとも刑事の上ではな。父さん、迷惑をかけた人には頑張って全額、償うつもりだ」

　父親の苦しい表情は変わらないが、目に活気が宿り、青い顔に赤みがさした。

「わかりました。父さんが仏光洞の辺家にいることはどんな目に遭わされても絶対に口を開きません。父さん、信じて下さい。今日はもう、彼らは来ないでしょう。僕の下宿で食事をしていって下さい。善が世話になっているうなぎ屋から夕食をとりますから」

　孝一は、自分を河原に拉致して、父親の居場所を聞き出そうとした連中が、よもや待ち伏せしているとは思わなかった。

「いや、まだ安心は出来ない。気をつけるに越したことはないんだ。もう三ヶ月間、念には念を入れて」

　父親は、久しぶりに会ったというのに、仏光洞の辺家のアドレスを書いたメモを残してあっさりと帰っていった。

　しかし、下宿に着いたとき、電信柱の陰に孝一の腕を掴んで殴打の手助けをした若い男がたたずんでいるのに気がついた。

　父親がここまで読んでいたことを驚くと同時に、ビジネスの世界の厳しさを痛感させられたのである。

Ⅴ

　父親の居所を追及する連中が出没するのも一カ月ほどで影をひそめた。

　孝一の身辺にも、平穏が訪れたのである。

　最初は神経をとがらせていた孝一も、普通の生活を送るのに何ら不自由はなくなった。

　幸い、新聞配達の実績は潤沢な収入をもたらせてくれたので、ひとり増えた食費も楽に負担できたのであるが……

　夕方、高校に通うまでの昼間の勉強は、より一層密度を増していった。

　とくに英語には興味が強く、リーダーだけではなく、新聞社に頼んで取り寄せたニューヨークタイムス紙を下宿に持ち帰り、隅からすみまで読破していった。

　世界の情勢が、韓国紙の一方的な報道ではなく、グローバルな視野が身についた。

　机に向かって勉強している孝一を見て、亨竜も自習するようになった。

　幸い、一緒に逃げてきた尹長春が持ってきた上級生の教科書がある。わからないところがあると、素直に訊いてきて孝一が教えるが、最近は質問の度合いも減ってきたのである。

　父親の音信は、まったく途絶えて時効までのカウントダウンが始まった。

　たしかに、時効まで頑張ったとしても、民事上の責任をまっとうするのには苦労が残るが、太陽の下で暮らせるのは大きい。

　それが、東大門警察署からの連絡で一瞬にして打ち砕かれたのである。

　何と、時効まであと二日の時点で、東大門を歩いていた父親が逮捕されたのだ。

　せっかくここまで我慢したのだから、あと二日何とかならなかったのか、というのが偽らざる心境だった。

　連絡を受けて東大門警察署に急行し、特別の計らいで父親に接見することが出来た。

　父親は、思ったより憔悴していなかった。逆にある意味では、逮捕されたことに安堵している様子すら、受けたのである。

「父さん、あと二日だったのに……」

　孝一は、接見に立ち会っている警察官に聞こえないよう、声をひそめて話しかけた。

「いや、これでいいんだ。たしかに刑期が済むまでは、債権者に返済はできないけど、責任を取ることによって、わたしの軍人としての矜持が保たれたような気がする」

　父親は、警察官の耳をまったく気にする風もなく、きっちりとした滑舌で話した。

　髭もきちんとあたり、頭髪もさっぱりと刈り上げられていて、犯罪者としてのみすぼらしさはいささかも感じさせなかった。

　それよりも何よりも、父親の目である。連隊長時代のような、自信に満ちた鋭い光に溢れており、この数年間続いていた自信喪失の影は、どこかに消えてしまっていた。

「父さん、すっかり変わりましたね。僕、今の父さんの方が好きです。昔に戻ったみたいで、とても尊敬できます」

「刑事上の責任をとって自由になったら、わたしはもっと変わるよ。これまでは、目先の利益ばかりを追っかけていたのに気がついたんだ。もっと大局的な捉え方をしないと、同じことを繰りかえす結果になる」

　父親の言葉は、孝一の腹に染み込み、体内をかけめぐった。

「父さん、僕や竜、善は大丈夫です。心配しないで十分、償いをして下さい。僕の学校もあと三ヶ月少々で卒業です。いい高校に通ったから、卒業後が楽しみだ」

「わたしは何もしてやれなかった。本当にすまないと思っている。孝一は凄い男になったな。わたしの子というには畏れ多い。お前が社会人になって真露を飲み交わしながら語り合うのが楽しみだな」

　このとき、父親の目から涙が頬を伝ったのを孝一は不思議な気持ちで眺めた。

「父さん、僕にも考えていることがあるんです。いくら勉強してもやはり、自分の力だけで生きていかなければならないのが、今の僕なんだ。あと一年少し後、高校を出たらどうなるかわからないけれど、多分大学にはいかないでしょう」

「どうしてだ。あんないい高校を出て、大学に進むことが夢ではないのか」

「まだ決めたわけではないけど、僕は、商売をやって沢山、お金を儲けたい。でも、自分ひとりでできることには限界がある。だから、僕はいい協力者を集めて、いずれは事業を興すつもりです」

「そうか。わたしに意見など述べる資格はないけれど、事業は人なりと言うことを痛感した。いいブレーンを育てなかった父さんの失敗をよく見ておくんだ。刑を終えた父さんの会社は、大きく変わるぞ」

　父親は、接見室の鉄格子がはまった窓から空を、遠い目で眺めた。

「さて、李さん、そろそろ時間だ」

　同席した警察官が、時計を見ながら言った。

　時効の二日前でも、立派に犯罪は成立、懲役十ヶ月の判決が降りて、父親はそのまま、西大門刑務所に収監された。

　一九六五年十一月末のことだった。

Ⅵ

　父親の逮捕、収監で孝一に平和な日々が戻ってきた。しかし、その平和も、年の暮れになって様子が変わってきた。

　父親が経済犯であっても、犯罪者として収監された事実は、衝撃的ではあったが、孝一の生活にとって、何の変化もなかった。

　この五年間、経済的な面で父親に頼らない生活をしてきたからである。

　亨竜が配達の手伝いをしてくれ、孝一の毎日は、変わらず流れていき、中央官庁から青瓦台への新聞配達は続く。

　亨竜は学校に行く前に配達の基本的なことを手伝ってくれていたのだ。

　亨竜の手伝は助かったが、一人の能力の限界を感じ、二人の補助員を頼んでて中央官庁関係の配達を手伝ってもらうことにした。

　ひとりは社会人、ひとりは学生である。

　新聞配達という、ある意味では単純な労働でも、そこに介在する要素は、多様な種類が認められた。

　たしかに、孝一が最初にとった方法のように、忙しい思いで走り回ればそれなりの利潤を得ることが出来る。

　孝一が受け持っている部数は約五百部にもわたり、普通の配達員の優に四人分になるのだ。そして新聞料金の回収平均が約八十パーセント、その分を相殺されて配達員の手取りになるが、このテリトリーは百パーセントの回収率だ。何と六人分もの収入になる。

　支払日になると、ピン札の現金か、小切手で支払われるのである。要は、経理課を巡回すれば済む問題なのだ。

　補助員、二人分の人件費を払い、林総務の無体な金銭要求を処理しても、十二分の報酬だった。

　しかし、補助員の二人は孝一が父親に話した事業協力者ではない。

　あくまでも、労力の提供者であって、ブレーンというにはほど遠い存在だった。

　事業協力者を強いて挙げれば、うなぎ屋の御曹司、鄭養湖君が大事な協力者といえる。彼には頭脳の協力は求められないが、経済的な面で大いに助けてもらえるだろう。

　少なくとも、これまで善の処遇や、麻浦の宿泊所の手配とか、新聞補給所の往復に貸してくれた自転車の提供など、立派にその存在を際だたせている。

　いろんな意味では現在、籍を置いている名門の中東高校という、ネームヴァリューをフルに利用したといえよう。

　この高校には二種類の生徒が在籍する。片や、良い家庭に育ち、経済的にも恵まれて将来は家業を継ぐという、レールが敷かれているタイプである。

　もう一方は、青雲の志を抱いて、自分の力で将来を切り開こうという、意欲に満ちた学生だ。目の前のことを考えると、前者の方に利用価値が認められるが、将来的な視野からゆくと、後者の方にも重要性を感じていた。

　いずれにしても、どっちも孝一のブレーンとして、必要不可欠のものだった。

　かといって、最初から大事業を興すわけにはいかない。

　孝一のお金を稼いだ経験といえば、全谷の山中で銃弾を拾い、それを売ったことと、アイスケーキの行商しかないのだ。

　それ以外は、新聞配達と水道工事業の在庫部品管理だが、これは商いとはいえず、労力提供によって報酬を得たのである。

　考えてみれば、孝一が頼んだ補助員の二人と同じ位置で働いていたのだ。

　ある程度は、周囲の人の上に立つことも必要である。

　今回頼んだ補助員には、昼間の仕事も見つけることにした。

　まず手始めに、この前に孝一が配達していた区域にある製パン工場に行き、調理パンや菓子パンを出張販売する方向で交渉した。

　孝一の働きぶりを、早朝からパンを焼きながら見ていた主人は、快く承諾してくれた。

　韓国の商売は、特別な契約がない限り売り手が四十パーセント、卸元が六十パーセントが基本となるが、パン屋の主人が、商品を破格の五十パーセントで提供してくれた。

　販路の選定が大事だった。ただ、やみくもに売り歩いても、そうそう売れるものではなく、売れ残る危険をはらむことは、アイスケーキのときに経験済みだ。

　孝一は中央官庁の用務員室に話をつけ、その省庁の注文をまとめてくれれば、彼に十パーセントのマージンを支払った。

　中央官庁のパン販売は二人のうち、社会人の李鐘狭を選んだ。用務員に利益の五分の一を渡すために、売り上げの二〇パーセントと報酬の率は低いが、少ない労力でまとまった量がさばけ、利益が見込めるからである。

　あとの学生、京陽高校一年で頭のいい金昇換には、自分で販路を開拓する方向で仕向け、二十五パーセントのマージンで販売させた。

　コミッションはすべてガラス張りで、孝一の利益分の五十パーセントを報酬として準備し、支払った。

　これでは、苦情が出る道理がない。このあたりは、孝一が本格的に事業を始めるに当たって、人を使う基本となったところである。

　事業が利益を生めば、働いている人に還元される、というのがポリシーなのだ。

Ⅶ

　孝一が扱うパンは、少しずつであるが種類が増えていった。

　パンだけではなく、餅やドーナッツ、ケーキや饅頭なども注文があれば販売するようになった。

　パンの販売も上り調子で、充分な利益を生み出してくるようになった。

　そこで、機動力と販売量拡大のために一台のリヤカーに改造を加え、板金工場でアルミのパネルでリヤカーを囲った。

　これはデザイン的に優れていて、動いていても停まっていて販売していても、もの凄く目立ったのである。

　孝一は、この車の販売員に新聞配達員の学生を選び、ふたり組で当たらせた。

　売り手が若い男の子ということで、話題にもなり、人気もでた。

　このリヤカーの動いているあとを、昼休みの学生たちがついてくる。そして、販売場所に停まると、すぐに注文が入るのだ。

　商品として人気を呼んだのは、中央に設けた練炭の鉄板で焼いたホットサンドである。

　キャベツをそこで炒め、卵を焼いて、マーガリンを塗った食パンに挟むホットサンドイッチの韓国版だった。

　女子高校生には細いドッグパンで作ったホットドッグが要求された。

　このホットドッグは、孝一が全谷の米軍戦車隊に出入りを許されたときに食べた記憶を呼び起こして考えたものだった。

　キャンプでは、赤と黄色の筒に入ったソース状の物が添えられてあった。

　これは、ケチャップとマスタードだ。当時この調味料は韓国で市販されておらず、孝一は南大門市場を歩き回って探し出し、手に入れてきた。

　このケチャップとマスタードが話題を呼んで、このホットドッグ風のサンドは売れに売れたのである。

　これらの状況を掴んで商品を用意し、ソウル市の中心にある進明女子高校の前で販売した。ここには、教会があり日曜日の人出が切れることはなく、必ず完売できたのである。

　女子高校の近くで販売したことにより、特に女子高校生に人気が出た。

　これらの余裕は、思った以上にあった。もう一台、総アルミ張りのリヤカー屋台を作ることにした。完成すると、パン屋との仕入れは倍増する。しかし、販売する場所を間違えなければ、商品は必ず売れるのだ。

　今度の場所は、進明女子高校から少し離れた淑明女子高校のところに出した。

　ここは、孝一が通う中東高校にも近く、ここでも人気を呼び、いつでも完売した。

　屋台の販売員をやってもらっている、新聞の配達員にとって、このバイトは大変に助かる収入を得られた。売り上げの二十五パーセントのマージンは毎日現金でもらえる。

　それで、新聞代の未収分を整理することが出来るのだ。

　竜は、さすがに屋台に絡むことは出来なかった。その代わりといってはおかしいが、販売員が売り残した新聞をもらい、街に出て売って小銭を稼いでいたのである。

　孝一は、父親が収監されている現状から大学に通うことは無理と判断、一年後、高校卒業と同時に空軍の士官学校を受験して通おうと考えていた。

　まだ十八歳である。高校三年の孝一には時間は十分にある。ここで焦って失敗するわけにはゆかない。

　父親が、秋には出所してくるので、人生の先輩として相談に乗ってもらおうと思い、それまでは動かないことに決め、当面、新聞配達とパンの行商は続けることにした。儲けた金は父親の弁済の一部にしてもらうつもりで貯めることにした。

　そうなると、麻浦に住むことは意味がなくなってしまう。孝一と竜だけなら補給所の仮眠室に寝起きするのが時間的にも身体が楽だし、すべてに都合がいい。

　仮眠室に戻り、朝の配達には必ず同行した。大統領官邸である青瓦台の配達だけはどうしても自分でやりたかった。

　特別なバックグラウンドのない孝一に、この青瓦台への出入りがあとあと有意義に働くと感じていたのである。

Ⅷ

　孝一の周辺には、卒業が近くなってから親しくなった友人が集うようになった。

　中東高校には韓国実業界の大御所を親に持つ二代目が多数、在籍する。

　彼らは夜間のクラスのみにとどまらず、人づてに孝一の考えを聞き及んで、昼間のクラスからも接触を求めてきた。

　いつのまにか孝一の意欲に共感した仲間が七人、残り少ない高校生活を有意義に過ごそうと、集まるようになった。

　中東高校の夜間部からは上級公務員の資格を取って外務省から世界に雄飛しようとしている金正孝君、親が韓国特産品の高麗人参や、鹿茸、銀製品など土産物をホテル内に店を持ち手広く扱っている洪徳寿君、うなぎ屋の鄭養湖君の三人だ。

　昼間部からも三人、司法試験合格を目差し、法曹界にターゲットを絞っている呉史明君、韓国財閥系企業の御曹司、崔柄京君、有力な国会議員を父に持つ韓承鶴君である。

　それに、東北高校から中学時代 の友人、孫寅河君も参加し、孝一を交えた八人で夕方の四時ごろから五時半までの間、鐘路のコーヒーショップに、少なくとも週二回は集まって将来の夢などを語り合った。

　そこで話し合われた問題があとをひいたときには、九時過ぎに集まることも再三、全員が時間のたつのも忘れて議論に明け暮れた。

　そして、全員が無事に卒業するとそれぞれ目的の大学を受験する。大学に進学しないのは孝一と養湖君だけで、あとの六人は、目的に合致した大学に進学出来るだろう。

　卒業しても、孝一を中心としたこの八人は、週に一度は集まって夢を話しあうことになっていた。

　大学に行く連中も、決してそれをひけらかすのではなく、新しい発見や、キャンパスであった出来事を情報として発表する。

　大学生活は、やはり孝一にとって羨望の的となったが、父親が出所してきたあと、債権者に弁済する作業を手伝おうと思っていた孝一の内部で割り切り済みの問題だった。

　孝一の毎日は、早朝の新聞配達を終えると街に出ていって、人の流れを観察するのが日課となっていた。

　行き交う人を眺めていると、その流れに一定の法則があるように思われてくる。そこからビジネスのアイデアが浮かんでくるのを片っ端からメモに書きとめた。

　このころになって、明らかに韓国人ではない東洋系の姿が目につくようになってきた。

　脇目もふらずに歩いているのは、ビジネスで来韓しているのだろう。彼らは仲間で話しているとき、日本語と思われる言語で、会話している。昨年夏に、韓日国交が正常化され、日本人の観光客がちらほらと、目につくようになってきたが、まだその数は少なかった。

「孝一さん、お客様ですよ。日本大使館の方だとおっしゃってますが」

　夕方、新聞補給所に戻ってゆくと、黄成愛が孝一の顔を見るなりいった。

　成愛は高校二年になり、孝一から勉強を教えてもらっている関係で、うち解けた言葉遣いになっていたが、このときは固かった。

　そして、奥の椅子から長身の男が立ち上がって、孝一の方に歩いてきた。

「李孝一君ですか？　わたしは日本大使館の藤崎といいます」

　決して上手とは言えない韓国語で、話しかけてきた。

「李孝一ですが、僕に何か用ですか？」

　日本の大使館が、孝一に用事という。それに、まったく心当たりはなかった。

「藤崎さんは韓国語があまり得意ではないから、私が通訳します。少し立て込んだ話になりますが、お時間をいただけますか？」

　藤崎と並んだ韓国人がハングルで話した。

　藤崎と名乗った男は、丁寧な言い回しで話題を切り出した。

「大丈夫です。時間はあります」

　藤崎という男は、ちらりと成愛に目を配った。勘のいい成愛は

「わたし、お茶を沸かしてきます」といって部屋を出て行った。

「李孝一君、これから話すことできっと、驚くでしょうが、聞いて下さい」

　藤崎の日本語を、通訳の韓国人が話す。

「………」

孝一は、少し胸騒ぎを感じながら、聞く態勢をとった。

「実は……」

　通訳は、ここで一息入れた。

「あなたは、李孝一という韓国人ではなく、蓮本健次という名前の日本人なのです」

「何ですって？　そんな馬鹿な！　でたらめをいわないで下さいよ」

「でたらめや冗談ではありません。わたしが嘘をつく必要がどこにあるのですか。きちんと話しますから冷静に聞いて下さい。あなたのお父さんは蓮本良次さんといって、旧、日本陸軍の大佐でした。今は日本の東京都に住んでおられます。あなたにお姉さんふたりと、お兄さんがひとりいます」

「僕が日本人……そんなこと急に言われても、僕、どうしたらいいかわからないですよ」

　思ってもいなかった通訳の言葉だった。

　まさに青天の霹靂、孝一の頭の中が真っ白になり、思考力や判断力が一気に、どこかに吹き飛んでしまった。

　通訳は順を追って話し出した。孝一が生まれたときの事情を冷静に。産みの母親に母乳が出ず、これまで実に母親と信じて生きてきた順愛母さんが丁度流産して、母乳が豊富に出たのでそのまま育ての親となったことなどを……。

「そのあと、二〇年近く経っています。親御さん同士は連絡が取れていたようですが」

「だって亡くなった母さんは勿論、父さんだって、妹や弟と差をつけないで育ててくれたんですよ」

｛それは、李さんが偉い。血が繋がってない他人の子を、自分の子と区別しないで育てることはなかなか出来ないものです」

「………」

　孝一の脳裏は、藤崎と通訳が帰るまで混乱したままで、まとまらなかったのである。

**第十三章・日本人宣告（悲嘆）**

Ⅰ

――おれが日本人だって？　そんなこと信じられない。何が根拠でそんなことを……

　孝一は、頭を抱えてしまった。

――これまで、周りに日本人の影さえ見えなかったではないか。

　この話を持ってこられたあと、しばらくは考えることにも支障が感じられるような状態に陥った。

　かと言って、誰にでも相談できる内容の話ではない。虚ろになって目を伏せている孝一を、少しだけこの話を耳にはさんだらしい成愛が、心配げな顔で見つめていた。

　いくら考えても、自分が日本人として生まれてきたことに、思い当たることはなかったのである。

　日本語なども聴いたことはなく、どこにも日本人の知り合いなど記憶になかった。

　父親も完全に韓国々民として扱ってくれたし、亡くなった母親も善と竜と区別して育てられたことはなかった。逆に、長男として大切に育てられたような気がする。

　少なくとも母親は、孝一に溢れんばかりの愛情を持ってくれていた。

　この事実を知るのは、父親と母親しかいない。父親は実刑をくって西大門刑務所に服役中であり、母親はこの世にいないのだ。

　父親に関しては、母親の死後、子供たちに対する接触に問題があったが、これは孝一にだけ与えられた試練ではなく、三人の子供たちに平等に与えられた経済的な負担だった。

　父親に会って話を聴くことが出来ないのは受刑中と言うこともあるが、刑務所で面談しても、プラスの解決とならないと考えざるを得なかった。

　父親の親戚は、北の羅南にしかいない。解放後のことは知らないだろうし、現在も北朝鮮に気楽に渡ることは出来なかった。

　そうなると、一番正確な情報を持っているのは、この話を持って孝一を訪ねてきた、日本大使館の藤崎係官である。

　孝一は、半島ホテルにある日本大使館に出向き、藤崎氏から話を聞き出そうとした。

　韓国語しか話せない孝一のために、通訳が用意された。

「僕が日本人だと言うことは、誰がそういってるんですか？」

「これは日本に住んでいる、あなたの両親からの通知です。あなたが生まれたとき、生んだ日本人のお母さんは全然、お乳が出なかったそうです」

　通訳が、孝一の質問を藤崎に伝えて、藤崎が話す言葉をハングルにして孝一に通告するのだ。

「その日本人は、ここに来たのですか？」

「いいえ、手紙です。見つからなかったら探しに来ると書かれていました」

「そんなのおかしいよ。まず探しに来るのが順序じゃないのかな」

「あなたの行き先はわかってました。新聞社の配給所はともかく、李虎範さんの長男であることは……」

「父さんは今、刑務所ですよ。じゃ、父さんに会って聞いたのですか？」

「服役中ということは知ってます。でも、会っていません。昌信洞の曽栄淑さんから聴いたのです。孝一さんが朝鮮日報本社の配達をやっているって。わたし達のご用は孝一さんに会うこと、それで訪ねていったのですよ」

　これらの会話は、ハングルから日本語に訳され、もう一度ハングルに直されて話されるために、どうしても時間が必要だった。

「じゃ、父さんはこのことを、まだ知らないのですね」

「日本から手紙が来たことは知らないでしょうね。でも、お父さんもお母さんも、あなたが日本人の子だと言うことは最初から知っていたはずです」

　亡くなった母親の順愛はともかく、その後父親は、孝一が日本人だということを知っていながら、それを告げずにこれまで十八年間も過ごしてきたことになる。

Ⅱ

　孝一の煮え切らない気持ちは続き、冬を迎えた。学校には惰性のように通学した。

　自分が抱えた悩みを、誰にも相談できないことは辛い話である。

　悶々とした毎日が過ぎていった。

　孝一は無口となり、新聞の配達員や級友たちからも、心配の声がかけられたが、孝一はその理由は話さなかった。

　この情勢を変えられるのは日本大使館の職員で、電話連絡が入ってくる通訳から聴くより方法はないのだ。

「十八日に、あなたのお父さんとお母さんがあなたに会いにソウルに来ます。あなたは、この夫婦と会うことが必要です」

　十日ほど経って、通訳から電話が入った。

「えっ！　日本の両親が来るのですか？」

「そうです。こちらからこの間、藤崎さんがあなたから聴いたことを文書にして送ったところ、昨日返事の手紙が来たのです。それによると十八日に飛行機の切符と、ビザがとれたので、早速来るそうです」

「それが十八日なのですか。あと二日しかないじゃないですか」

　孝一は、これ以上の会話を続けることが出来ないほど混乱してしまった。

「細かい時間などがわかったら、又お電話します。十八日の午後は開けておいて下さい」

　電話は切れた。孝一は事務所の机に向けて座り込み。頭を抱え込んでしまった。

「孝一さん、あなたは日本人なの？」

　電話の横で、孝一の回答を聴いていた成愛が、低い声で質問してきた。

「どうやら、そのようだ。生まれたときに僕を産んだ日本人のお母さんからお乳が全然出なくて、お乳が沢山出る死んだお母さんからお乳をもらって育てられたんだって。あ、これは韓国のお母さんだよ」

「こっちのお母さんから母乳が出たの？　そのとき、孝一さんと同い年の子供が産まれたのじゃない？　同い年の兄弟はいないの？」

「いないよ。そうか、母乳というのは子供を産むときにしか出ないもんなんだよな。じゃ母さんのお乳を吸って育ったおれは、母さんの子じゃないか」

「わからないけど、何かの理由がありそう。例えばお母さんの子供が死産だったとか」

「おれは赤ん坊だったんだぜ。そんなことわかるわけないし、これまで実の子供として育ててくれた親が話すわけないよ」

「日本大使館では、孝一さんが日本人だという証拠を掴んでいるのかしら。どうやっても動かない証拠を」

「わからないよ。ただ、君は日本人だ、というだけだ。でも十八日に日本から来る両親に会えば、ある程度はっきりすると思う。それまでみんなには言わないでおいてくれ。竜にもだぞ。頼む……」

「わかりました。でもわたしは、孝一さんが韓国人のままいてくれれば嬉しいのだけど」

　成愛は、孝一の目を見ず伏し目がちに話した。それは、彼女の現在の気持ちを表現しているのだ。

　今までそんなに強く感じたことがなかったのだけど、成愛が孝一に持つ感情が、鮮やかにわかるような気がした。

　これまでの彼女の行動を見ると、デモ隊に傷つけられたときの看病や、三度の食事の支度、孤児院を脱走してきた享竜とその友達を、彼女のお母さんに頼んでかくまってくれたことなど、この一年の孝一に対する彼女の動向を見ると、好意は明らかだった。

　しかし、それらのことも、孝一にとって国籍が異なるという事柄の前には、小さな出来事としかならなかった。

　大使館から翌日の朝、飛行機の関係で両親は明後日午後の一時半に金浦空港に着くという連絡が入った。

　孝一は、日本の両親が韓国に来るという二日間を、まとまらない考えのまま何をするともなく、ひたすら待った。

Ⅲ

　実父母とは言っても、初対面である。

　大使館では空港まで車で迎えに行くが、一緒にゆくかと聴いてきた。顔も知らない人間を、空港まで迎えに行くこと自体が不自然と考えて断った。

　大使館に着くのが三時頃となる。その時間に合わせることにした。

　どんな両親か、期待と不安が相半ばする孝一は、結局、二時には半島ホテルにある日本大使館に着いてしまったのである。

　落ち着かない時間を、通訳との会話などで潰しているうち、三時少し前に乗用車が帰ってきた。

　運転しているのは藤崎係官で、後部座席には中年の男女が乗っている。

　男性はオーバーコートにマフラーを締め、女性もコートの襟を立てていた。

　このふたりが孝一の両親なのだろう。

　まだ一歳にならない孝一を残して、日本に帰国したこの夫婦は、十七年間もソウルの厳しい寒さに触れていないのだ。

　日本で寒い場所か暖かい場所か、どちらに住んでいるか知らないが、久しぶりのソウルの寒さに驚いているのだろう。

　まず、藤崎係官が大使館の入口から入ってくる。続いて男性、女性が後をつける。

　孝一は、入ってくるふたりから目を離すことが出来なかった。ふたりから自分との共通点を見つけ出そうとしたが、無理だった。

「李孝一君、君のお父さんとお母さんだよ」

　藤崎係官が孝一を見つけて駆け寄り、日本語で話しかけた。この日本語は確実に意味が通じたのである。

「健次か……立派に育ったな」

　男性が、孝一に近づいて来て日本語のみで話しかけた。

　孝一は、彼の言葉が何となく理解できたような気がしたが、無言を通した。

「蓮本さん、彼、健次君は日本語を全く理解しません。私の方でハングルに通訳します」

　藤崎係官が父親に日本語で言った。そして通訳に何ごとか話した。

「この方は、あなたのお父さんです。健次、大きくなったな、とおっしゃってます」

　通訳がハングルに訳してくれた。

「……」

　この言葉に対しても無言を通した。

　父親は、通訳に話をしている。

「李大佐は刑務所に入っているらしいな。そのために君は働いているのだろう。大変な苦労をかけているね」

　翻訳された父親の言葉である。

「……」

　この人には、置かれている状態が理解できていない。孝一が働いているのはもう五年になる。最近働きだしたのではないのだ。

　無言の孝一の前に、母親と思われる女性が歩み出た。

「健次、久しぶりね」

　彼女は、ハングルで話しかけてきた。

　決して上手な発音ではないけれど、一生懸命に話しているので意味は通じた。

　彼女の目から涙が激しく流れ出す。我慢していたのだろうが、日本語で何かうめきながら滂沱と落涙した。

　両腕が伸びてきて肩に触れると同時に、引き寄せられ、胸に抱きしめられた。

　この段階で泣き声は激しくなった。但し言葉が日本語なので、孝一には理解が出来なかったが、何か心が繋がるような気がした。

　ここでストロボが炊かれた。一瞬、明るくなってシャッターの音が響いた。

　カメラマンだった。このほかにふたりの男がいて、名刺を渡してきた。

「フリーライターの中田さんと、毎日新聞社の武田さんです。今日のことは毎日新聞と週刊誌、サンデー毎日の記事になります」

　通訳が紹介した。

「この場面が記事になるのですか？」

　孝一が訊いた。

「多分なるでしょう。十八年間も異国で育った少年と言うことで……彼は日本人なのにそのことをひとつも知らないで大きくなった」

「これは誰の責任なんですか？　僕は、今でも自分が日本人だと思っていませんよ」

「でも、こちらの蓮本さんは、李虎範さんに預けたと言っているし、君のお父さんに聴けばすぐにわかることだよ」

　藤崎係官が述べた。

　この間も、母親は孝一の掌を握ったまますすり泣いている。

　何故か握られた掌から、暖かいものが伝わってきて、気持ちが安まった。

　しかし、孝一にやらなければならないことが残っていた。

「このお二人が、僕の両親だという証拠は何かあるのですか？」

「今、医者を呼んでいる。血液型から調べれば証拠になるだろう」

　当時は今のＤＮＡはなく、血液型で産まれてくる可能性を調べることだった。

　医師が到着した。

　耳から血液を採って、三人の血液型を調べる。親子としての問題は起きなかった。

　大使館側では、産まれるときに医師か助産婦の所属や名前を聞いたが、時間が経っているために両親の記憶にもなく、確認は出来ないものとなった。

　日本から来た両親は、これまでの無沙汰を通訳を通じて孝一に謝るだけだった。

　当日は孝一のパスポート交付の基礎的な手配を行い、李虎範が出所した段階で孝一が事情を聴いて、最終的な結論とすることで日本の父母は翌日、帰国していった。

Ⅳ

　血液型での親子が立証されても、まだ事実とは認められないのが現実だった。

　今回、話題となった事実関係を知る韓国側の人間は、孝一の育ての親となる両親と、母親の弟、韓秀益くらいしかいないのだ。

　しかし、母親は死亡し、弟の韓秀益はどこに住んでいるかわからない。

　一番、確実に知っているのは父親の李虎範となるが現在、服役中である。

　となれば、やはり父親に会うことが、現在の状況を解明する唯一の手段となる。

　孝一は西大門の刑務所に行って父親と会うことにした。

　新聞の配達を終え、その足で刑務所を訪問した。受付で父親との面会を申し入れる。

　面会は何も問題なく受け付けられた。

　面会室に入ってきた父親を見て、孝一は驚いた。見違えるほど痩せていたのである。

　彼は百七十センチの身長に対し、七十キロの体重で、どちらかといえばガッシリとした体躯をしていた。

　それがふた回りほど小さくなったように見えたのである。多分、五十キロ台の後半の体重にまでなったのではないだろうか。

　最初の質問が、痩せたことが病によるものかということだった。これに対する答えは病気ではなく、整体の体操と規則正しい食事療法で、極めて健康と聞いて安心した。

「孝一、元気そうで安心したよ。善も竜も元気かい？　どちらかが病気している、という相談じゃないだろうな」

　ガラス戸越しに向かいに座っている父親の張りのある声が、穴を通して伝わってくる。

「ふたりとも元気で学校に通っています。僕も三月になれば卒業ですよ」

「そうか、もう卒業か。次の大学はどうするんだ。決めてるのか？」

「現状では無理です。空軍の士官学校と思ってましたが、とりあえず社会に出て、仕事に就こうと思ってます」

　これは事実である。今度の話がなかったら空軍士官学校の受験は、最優先で考えていたのだが、日本人であれば無理となるのだ。

「普通の大学への進学は、全然、考えていなかったのか」

「学費のことなんかを考えて、空軍士官学校を狙っていたんですが、でもあそこは寮生活です。お父さんが出所するまで、竜と善の面倒が見られなくなってしまいます」

　話しに来た現実と異なる返事となった。

「そうだよな、退所してもすぐに豊かにはならない。一年くらい必死になって働けば、お前の学費くらいは何とかなると思うけどな」

　こうやってみると、父親はまだ、今度の蓮本夫妻の訪韓は知らないことが明らかだ。

「大学の、入学金や授業料を一度に払い切れません。仕事について余裕が出来たら考えてみます。一年後くらいでも入学できますよ」

「そうか、済まないな。父さんがこんな状態じゃなければ……でも今の商売をやっていたら、あまり変わりばえはしない。父さんはいろいろ考えてみた。これまで、軍隊の部下だった会社をやっている人から、役員になって会社に入ってくれないかと言われ

ていた。これは一考の価値があると思うんだ」

「父さんはいい部下が一杯いるんですね。仕事で成功している人が大勢いるんだ」

「ああ、いるよ。父さんのキャリアと顔が必要なところが何か所かある」

　こんな話をしている父親の目は輝き、弁舌は鮮やかに口をついて出てくる。

　あと一年弱で刑期が終え、退所することになるが、この雰囲気ならこれまでの生活が大きく変わることが見られた。

　何回も、今日の訪問の目的、自分が日本人であることの確認を果たそうとしたが、結局は出来そうにもなかった。

　もう少しで、刑期が終わる楽しみに燃えている父親には、少し冷たすぎる話である。

　刑期が終わるまでに日本引き揚げが決まれば、訪ねてきて事実を告げればいい。

　今日は、父親の雰囲気から孝一の気持ちの上では肝心の話をする状態ではなかった。

　結局、訪ねてきた本来の目的を果たすことは出来ず、刑務所を後にしたのである。

Ⅴ

　正月が過ぎて、高校卒業のときが近づいた。孝一は頻繁に日本大使館を訪れ、藤崎係官と毎日新聞の石川記者とに会うようになった。

　石川記者は、通訳と共に昼食をご馳走してくれた。その代償としてこれまでの半生を話した。しかし、石川記者が聞きたがっている内容と少し差があるようだった。

　パスポートの書類も揃い、大使館に申請されていた。

　これが日本国から交付され、帰国の許可が降りると引き揚げることになるが、すぐに問題となるのは享竜の処遇である。

　まだ、国民学校低学年の彼には、自身で生活を維持していくことは出来ない。

　父親が社会生活を営んでおれば、問題はないが、秋までは刑務所だ。どうやっても享竜の生活は見ることが出来ないのだ。

　このことを大使館に相談すると、孤児院に面倒を見てもらうより他はないという。

　孝一にとっても同感だった。そこで大使館を通じ、ソウル市役所の福祉課に、ソウル市内の孤児院に収容してもらえるよう、手配を依頼した。

　了解の返事をもらって、享竜に話した。

「お兄ちゃんは、高校を卒業したら日本の大学に入ることになっている。そうしたら、竜の面倒は見ることは出来なくなるんだ」

　少し事実を曲げて話し出した。

「日本の大学に行くの？　どうして？」

「学校で勧められたんだよ。奨学金ももらえる。とてもいい条件なんだ。どうだ、竜は昌信洞の曽栄淑お母さんのところに行くか？」

「いやだ、あの昌信洞の家は、僕に全然関係がないんだ。お母さんじゃない、僕にはよそのおばさんなんだよ」

　この答えは、ある程度予測されたものである。となれば、手配した孤児院しかない。

「そうか、竜はそう思っているのか」

「お兄ちゃん、僕、もう一度孤児院に行ってもいいよ。お兄ちゃんが日本に行って、勉強するのなら」

　享竜が、澄んだ目で孝一を見つめ、言った。

「留学の関係で日本大使館を通じて、孤児院の手配を頼んだ市役所では、ソウル市内の孤児院に入れるように考えてくれた。大変だけど秋にはお父さんがお前を迎えに行ってくれる。そしたら一緒に暮らせば……」

「うん、僕なら大丈夫だよ。孤児院にはいつ行けばいいの？」

「入所の手続きが済んでるからいつでもだ」

　手続きが済んだことは、大使館から公式な回答として通知されていた。

「じゃ明日行こうよ。学校が正月休みの内がいい。新学期から学校を変えられるから」

　その夜は、ふたりしっかりと抱き合って寝たが、結局は充分な睡眠はとれなかった。

　翌日は晴天だった。しかし気温は低く、寒さは厳しい状態だった。

　ふたりは、着替えを入れたバッグをひとつずつ持ち、ソウル蚕室の孤児院に向かった。

　距離にすると、三〇キロほど離れているが、交通機関が少ないこともあり歩くことにした。

　ソウルの駅前を通り漢江へ出た。河は凍り付いていて、子供たちが川面で遊んでいた。

「竜、漢江の上を歩こうか」

「うん、いいよ」

「朴さんの天幕に住まわせてもらったとき、よく河に出たよな。あのときは氷が割れたら死ねると思った」

「僕も小さかったけど、死んでもいいと思っていたよ。あの食事や匂いには……」

「今日も割れるかも知れないぞ」

「お兄ちゃんと一緒なら、割れて落ちてもいい。死ぬのなんか怖くないよ」

「お兄ちゃんだって同じだ。竜と一緒なら死ぬのは平気だ」

「お兄ちゃん、日本の大学で勉強するのでしょう？　死んだら行けないよ」

「日本に行っても、楽しいとは限らないさ」

　孝一の心理状態は複雑だった。急に日本人といわれ、善や享竜と血がつながっていないことになる。兄弟ではないのだ。

　刑務所に入っている父親と、血縁がないことにはあまりショックは受けないが、死んだ母親との関係には、とても思いが残った。

　生前の母が孝一に与えてくれた愛は、全く実子に対するものとしか思えなかった。

　たしかに日本の産みの母も、孝一の手を握りっぱなしで涙にくれていたが、韓国の母とのような人間関係が出来るわけがなかった。

　いつの間にか、川面を歩いていた。氷はしっかりと張っていたが、そこここに割れ目があり、そこから水の流れる音が聞こえていた。

　そのきしみ音を聞きながら、河の中央をふたり、手をつなぎながら上流に歩き続けた。

　四時間歩いて、蚕室に来た。左の河川敷に一軒の家が見えた。これが孤児院である。

　現在はソウルオリンピックのメーンスタジアムがあるが、当時はこの一軒だけが建造物だった。

「………」

　入り口の扉の前に立つと、孝一から言葉が出なくなった。享竜も無言のままである。

　享竜の眼が、孝一の顔を見つめる。孝一も享竜の顔から目を離せなくなった。

　同じタイミングでふたりが抱き合った。孝一が抱き上げる形で頬を合わせた。自然に涙が流れ出た。

　孝一は忍び泣いたが享竜は声を出して泣いた。ふたりの涙が頬で混ざった。

　中から職員が出てきて、声をかける。市役所から連絡があったのだろう。

「李享竜くんだね。待っていたよ。さ、中に入ろう。友達も大勢いるよ」

　享竜だけの手を引いて、入り口の扉から中に入ろうとした。

　この一瞬、享竜は孝一の顔を見たが、前を向くと振り返らずに施設の扉を越えた。

　享竜を呑みこんだ鉄扉が閉まった。ロックが締まる重い接触音が響き、孝一を現実に引き戻した。

Ⅵ

　享竜の世話を見なくてもよくなった孝一は、寂しさをまぎらわすために大使館に出入りする回数が増えた。

　通訳から日本語の基本を教わり、挨拶程度は出来るようになった。

　当時、韓国人の男性と、日本人の女性が結婚する内鮮一体という制度があり、これは日本が植民地として統治していた三十六年間続いていたが、韓国が独立した一九四五年後に問題となった。

　特に夫が病死したり、北朝鮮との戦争で戦死した家族に仮題が残されたのである。

　これらの寡母となった女性が集まって、日本人婦人会という組織が結成され、母子家庭の引き揚げが検討されていた。

　日本大使館では、約二十世帯ほどの家族を帰国させるべく、準備していたのである。

　この引き揚げのため、いつも何家族かが大使館に来て打ち合わせをしていた。

　その中に、水本さんという母子家庭があった。いつもお母さんに付き添ってくる香織という娘さんによく会った。

　彼女は孝一より二歳若い十六歳で、高校の二年生だった。家族構成は、娘が三人で父親は北朝鮮の戦争のときに戦死したという。

　一番上の姉は二十五歳で、すでに韓国人と結婚して別居、真ん中の姉は仕事で街に働きにでていた。

　学生の香織は母に連れ添って、大使館に来ていて、母親との会話を日本語で交わしており、かなり日本語の会話が出来た。

　母親は足を痛めており、車椅子が必要な状況だった。いつも大使館に来るときは香織が付き添って来ていたのである。

　香織の話では、一番上の姉には韓国人の夫の間に韓国籍の子供がおり、引き揚げはしないとのことである。

　母親は、一九三八年、韓国に渡ってきて知り合った父と結婚し、早い時期に長女を設けた。二年後に次女が産まれ。香織は解放後に産まれた。

　そして、香織が学校に入る前に父親は、朝鮮戦争で戦死し、母が未亡人になったので今回の引き揚げが可能となったものである。

　香織は、日本に帰国してそのまま、高校に入学するつもりのようだが、これは日本語が出来るという前提があるからだ。

「孝一さんは、高校を卒業した後に帰国するのだから、そのままどこの大学にも入学できるのね。どんな大学に行くつもり？」

　何の苦労がない状態で、訊いてきた。

「まず、僕は日本語が全然出来ないから、大学は無理だ。下の学校からやり直さなければならないんだよ」

「となると、高校？」

「わからない。勉強よりも会話とか、日常生活を覚えなければ……文字なんかも」

「私も一緒よ。言葉は何とかなっても、文字と、勉強の内容は全然わからないわ」

「だけど、話すことができるのはいい。僕なんか、日本語を全く理解することが出来ないし、単語だって口に出せない」

「どうして？　お父さんかお母さんが教えてくれなかったの？」

「教えてくれるわけがないよ。これまでずーっと、韓国人として育てられたんだから」

「日本人との混血ではないの？」

「純粋な日本人なんだって。日本人の両親が僕を置いて日本に帰ったらしいんだ」

「ひどいわ。どうして孝一さんを連れて帰らなかったの？　兄弟はいるのでしょう」

　香織は眉をひそめて話している。

「ああ、日本に姉さんが二人と兄貴がいる」

「………」

　孝一の目を見て黙り込んだ香織に、この間聴いた事情を説明する必要が生じた。

「僕が産まれたとき、日本のお母さんからはお乳がでなかったらしい。韓国の育ててくれたお母さんは流産して、お乳が沢山でたそうだ。そのお乳がなければ、僕は生きていけなかっただろう」

「そうだったの。でも、その後は幸福に暮らせたの？」

「うん。母さんは僕をとても大事に育ててくれたし、父さんも妹や弟と区別しなかった」

「よかったわね。今でもご両親は、そのように扱ってくれているの？」

「母さんは、僕が国民学校五年のときに死んだ。父さんは仕事が忙しくて別居している」

　今は刑務所だが、そこまで話す必要はないと思って、事実を隠した。

「大変ね、自分で生活するなんて。お父さんは再婚したの？」

「結婚して別に住んでいる。だけど僕はその相手とは合わないんだ」

「いろいろあるわね。うちの母さんは、父さんが亡くなってから、足を痛めて車椅子の生活になったの。だから結婚なんて話もなかったので、日本に帰れることになったんだ。幸運だったのね」

　香織は、こう話すと視線を遠くにそらして口を閉じた。

Ⅶ

　香織から、大使館で会うたびに日本語の会話をならった。

　まずは、日常生活の挨拶を完全にマスターすることからである。

　お早ようから始まって、今日は、今晩わ、ご機嫌いかがですか、今日はいいお天気ですね、寒いですねなどなど……

　今、振りかえるとどうということのない会話だが、当時はかなりの難度で孝一を苦しめたのである。

　最も弱ったのは、香織と二人きりになったときにハングルの使用を原則として禁じられたことである。新しいセンテンスの内容に関しては一度だけ、ハングルでの質問が許されたがそのときだけ孝一に安心が与えられた。

　このやりとりを香織の母親が聴いていたが、ときどき香織の間違いを直したりした。

　そのニュアンスから、香織の日本語はまだ修行中で、完璧とはいえないようだった。

　香織の父親は、日本の大学で建築学を学んで、建築会社に入社し、設計部門の責任者として活躍していた。朝鮮戦争までは平和な家庭生活を送っていたが、戦争が始まって徴兵され、早い段階で釜山の戦いで戦死したとのことである。

　日本人である母と三人の娘を愛し、大変にいい夫であり父親だったそうだ。

　彼の戦士で収入が途絶えた一家は、母親と長女が働きにでて、毎日の糧を得たという。

　今は、長女の連れ合いが一家の生活を見てくれているが、母としては青春時代まで育った故郷に帰りたいと、引き揚げを希望し、日本人婦人会に入って帰国の順を待っている。

「いつ頃日本に帰れそうなの？」

　孝一が訊いた。

「まだ、いつとは決まっていない。でもこれまでの状態から後三ヶ月以内くらいで帰れるでしょう。今度の便で発つ家族の待ち時間は半年は経ってないから」

「君たちのパスポートはもうでてるの？」

「まだでてないわ。でも大使館の人が、あと一週間くらいででると言っていた」

「僕も申請は出してある。でもいつ出るかわからないんだ。ただ、僕はひとりだからきっと、早く交付されるのではないかな」

「一緒の船で帰国できればいいわね。わたし、日本は初めてなの。孝一さんは？」

「勿論、初めてだよ。一ヶ月前まで韓国人だったんだから」

「そうか、日本とは全く無関係だったのね」

　香織は、この一連の会話をハングルで話した。日常会話以外は、日本語では正確に表現できない。

　どちらかといえば、母親にそっくりな顔をしている彼女は、日本人としての顔相が強かった。きれいな活きいきとした眼で見つめられると、胸がときめいた。

　彼女に会えると思うと、大使館にいくことがとても楽しくなる。大使館の人間には、彼女から日本語を教えてもらう、という言い訳が通った。

　パスポートはまだ、出来上がらない。これがないと、仮に香織の家が引き揚げるときに一緒の船で帰国が出来ないのだ。

　孝一は、大使館に来るなり、日本語を使っていきなり訊いた。

「パスポートはまだ？」

「順を追ってやっているから、もう少しかかると思うよ。待ってくれ」

　この言葉は聞いた大使館員から日本語で返ってきた。意味がわからないので首を振ると通訳が訳してくれた。

　このころになると、昼間は大使館に行って時間を潰し、パンの販売などもバイトにまかせて売りに出ない孝一に、疑問の眼が集中するようになった。

「孝一、このごろ元気がないけど、どうしたんだ？　どこか身体の調子でも悪いのか？」

　配給所長も、同じ疑問を感じたのか、孝一に訊いてきた。

「大丈夫です、あと一ヶ月で高校を卒業します。その後のことが決まらなくて……」

「君ならどこの大学だって大丈夫だろう。それにここでの高収入があるんだから」

「それもこれも所長と金先輩のおかげだと感謝しています。就職は慎重に決めなければならないから、もう少しここで新聞配達の仕事をさせて下さい」

　いつ帰国が具体的になるかわからない。そんな状態で、たしかな回答が出来るわけがないだろう。

　それまでは、生活の手段として、新聞配達で比較的楽な収入を得ることが一番だ。

　とりあえずは、三月初旬の高校卒業式を待つことにする。

Ⅷ

　一日の過ぎるのが、極端に早く感じられるようになり、二月も中旬になった。

　孝一にとって予想もしていない出来事が発生した。まだ、孝一のパスポートが発行されないのに、水本家の日本への引き揚げが決まったのである。

　香織から引き揚げが決まったことを聞かされたとき、凄いショックを受けた。

　正直なところ、自分では解決できないような悩みが与えられた。

　仮に孝一が、パスポートが手元にあって同じ船で帰国することが時間的に出来ても、それは不可能だった。

　何故かと言えば、まだ中東高校の卒業式が終わってないからなのだ。

　どのような形となるにしても、中東高校卒業の資格だけは取っておきたかった。

　一瞬、日本行きの船が出る釜山まで、水本家を送ってゆこうかと真剣に思ったが、自分が置かれている立場を考えて諦めた。

発つ前の日の夜、孝一は水本家に招待された。一番上の姉夫婦と子供も来ていて、楽しい集いである反面、一抹の寂しさがパーティを支配していた。この姉夫婦とは永遠の別れになるのだから……

　香織は、引き揚げてゆく日本の住所を漢字で書いたメモを手渡した。

――山口県松江市……

　ここまでは読めたが、あとの漢字は読めなかった。

「日本に帰ったら会えないでしょうね。でもいつか、ここを通ることがあったら、きっと寄ってね。必ず待っているから」

　香織は眼の光を強めて言った。涙が光ったわけではなかったようだ。

「うん、約束する。いつになるかわからないけど必ず行くよ。その前に僕の住所が決まったら手紙を出す」

　もう会えなくなる寂しさを押し込んで、孝一は答えた。

「孝一さんのパスポートが出ていれば、一緒に帰れたかも知れないのに、残念だわ」

「僕も残念だ。さっきも大使館に聞いてみたけど、まだ出ていないんだって。未発行は事実なんだ」

「孝一さん、身体に気をつけてね」

　香織は、孝一の目をじっと見つめたまま歩み寄ってきた。そして、右手が伸びて孝一の手を探った。

　握り合った掌から、お互いの意志が伝わってくるような気がした。

　翌日朝、水本家の家族はソウル駅から釜山に向けて発った。

　ホームまで見送りに行った孝一を見つめた香織の眼に光るものを見た。

　列車が発車する。開かれた窓から香織の手が伸びてきた。孝一はその手を握った。しっかりと握られた手は、列車のスピードがかなり速くなるまで離されなかった。

　手が離され、列車のテールランプが見えなくなるまで、孝一はホームの端に立ちすくんで消えた列車の方を見ていた。

　この日を境に大使館に行っても、香織には会えない。自然に足は遠のいた。

　配給所で鬱々としている孝一に、林総務から声がかかった。

「孝一、少し話があるんだけど……」

「何ですか？」

「君、高校を卒業したら進路はどうするの」

「はっきりと決めてません。大学か、軍隊の学校に行くか、就職するか……」

「学校に行くのなら無理だけど、就職するのなら話があるんだ。実は俺、新しくできる中央日報新聞という新聞社に行くことになっている。夕刊だけの新聞で、三星グループが運営してゆくんだ。勿論、本社の配給所長としてだけどな」

　全く意外な話だった。新しい新聞社という話には魅力を感じたが、いつ日本に帰らなければならないのか知れなかった。

「いつから移るのですか？」

「四月に創刊なんだ。三月始めには入社する。俺が受け持つ補給員は一五〇人で、その内の五〇人くらいの面倒を見てもらいたい」

「時期的にも学校に行かなくなったら、考えてみます。四月まで待って下さい」

「スタートが四月だから、もしお前が遅れても俺が頑張ればいいことだ。但し、ここで稼ぐ収入金額から、大きく減るぞ。だけど、配給員とは違う立場になるんだ」

「すみません。三月中旬頃までにはお返事します。父とも相談しなければならないので」

「ああ、いいよ。出来るだけ就職するように期待しているから。返事を待っている」

　林総務は立ち去っていった。

　大学進学も、空軍の士官学校も昨年夏までの希望だった。

　ところが現在は、日本に引き揚げるのがいつになるかということである。

　大使館の話では、パスポートが交付されると比較的早く帰国できると言っているが、それを眼にすることは二月一杯にはなかった。

　確認したところ、まだ、発行されて送られてきていないとのことである。

　三月の初旬、高校の卒業式が行われた。門を出るまで、プラスバンド部がベサメ・ムーチョで送ってくれた。

　校舎を振り仰ぐ。四年間の思い出が走馬燈のように脳裏に浮かんでは消えた。

**第十四章・父親の告白（真実**）

Ⅰ

　卒業式が終わっても、孝一の生活に大きな変化はなかった。

　日本の言葉を教えてくれた水本香織が、日本に帰国してから日本語を使う機会は、かなり少なくなってしまった。

　それでも、日本大使館に行き、ほんの片言を通訳や、日本人の職員と話す程度のことでこれから使う言葉と触れあっていた。

　とりあえずは、新聞配達の仕事を続けて生活費を稼ぐしか手段はなかった。

　帰国の日が決まるまでは、現状で食べることをやめるわけには行かない。

　卒業までの三ヶ月間くらいは、孝一にとって悩みが多い毎日だった。日本の両親が来てからは、自分が日本人であるということにある程度の確信を持ったが、何故かこれを公表すると友人を裏切るような気がして、誰にも明かさなかったのである。

　やはり、父親からその事実関係を確認しなくては、納得が出来ない感が強い。

　学校に行かなくなっても、善が世話になっている関係もあって、麻浦のうなぎ屋の若旦那、鄭養湖君には比較的よく会った。彼には遠慮を感じず、夕方行くと、よく晩ご飯をご馳走になったのである。

　しかし、彼にも自分が日本人であるということを告白していなかった。

　新聞社の近所に、張作文日本語学校という日本の言葉を教えている教室があった。

　新聞の配達を終えてその前を通るとき、まだ開講しておらず扉は閉まっていた。

　一応、学校の形を取っているので、九時には開くだろうと思って九時少し前に再び行ってみたが、まだ扉は開いていなかった。

「お早うございます。先生、今日はお休みなのですか？」

　孝一は、扉を叩いて声をかける。

　しばらくの間があって、中から鍵が開き扉が開かれた。

　今まで眠っていたことが明らかな、寝ぼけ顔の中年男が顔を出した。

「お早う。君は初めて見る顔だね。日本語を勉強したいのかい？」

　寝乱れた頭を掻きながらいう。

「そうですけど、学校は何時に始まるのですか？　先生は何人？」

「大体十時頃からだよ。教師はわたしひとりだ。あとは誰もいない」

　この人が張作文先生なのだろう。背は低くて、べんべんたる太鼓腹がベルトを引っぱっている。見事なお腹だ。

「生徒さんは何人くらいですか？」

「十人くらいかな。うちは会話だけではなく文字も教えるから、ここを卒業すると日本で生活するのに支障はない」

「十時の開講時間は遅いですね。学校なんですから、九時からだと、午前中、一時間余分に教えられる」

「私の目は、いつもこのくらいの時間に醒めるのだけど、顔を洗ったり、朝食を作って食べてるとどうしても十時になってしまう」

「先生、奥さんは？」

「いない、独身者なんだ」

　孝一に考えがひらめいた。

「先生、僕が朝来てご飯を用意してあげましょうか。八時過ぎに来て食事を作り、先生はそれを食べて授業にかかるんです」

「朝食は即席ラーメンだから、お湯があればいい。それで顔も洗えるから」

「じゃ、明日からそのスタイルで出発しましょう。僕が八時過ぎに来ますから、鍵を開けて下さい。学校が開講したら、僕は生徒になって日本語を習います」

「やはり、日本語を習いたいんだ。日本には留学するの？」

「いいえ、僕は日本人なんです。それがこの三ヶ月くらい前にわかって……」

　孝一はかいつまんで、現在の状況を説明した。出来るだけ感情を交えないように。

「そうか、それは大変だね。で、高校は卒業したの？」

「卒業式は済ませました。朝、新聞配達を終えると、時間はいくらでもとれるのです」

「そうか、君が勉強する時間は沢山あるということだ。どうだい、朝おれを起こしてくれて、食事を作ってくれる。そのお礼として一時間分の受講料で無制限に講義が受けられるというのは」

「先生、最高です。では費用をお支払いしますから……おいくらですか？」

「一時間だけの受講料は、百ウオンだ」

「それは、受講料だけでしょう。入会金や教材なんかの費用は？」

「いらないよ。百ウオンだけでいい」

　翌日から、新聞配達を終えて一休みし、八時頃学校に行った。張先生は起きていてすぐに鍵を開けてくれた。

　練炭コンロで火をおこし、お湯を沸かすと先生の洗顔を待って、即席ラーメンを作る。

　三日後に入り口の鍵を預けられ、この作業をやるようになった。張先生は、ぎりぎりまで眠ることが出来たが、午前中に一時間授業が出来ることは、受講生にとって大変にプラスとなったのである。

　香織に基本を教わった孝一の発音は、仲間を驚かせ、張先生をも感心させたのである。

Ⅱ

　必要に迫られている孝一の、出席率はよかった。特別なことがなければ、午後の時間まで学校にいて学んだ。

　このところの毎日は、孝一にとって楽しいものだった。高校と違ってビジネスを目的とする大人がいたり、同年配では留学を目論んでいる人間も在籍する。

　全員の目的は、日本語のマスターであって香織に細かい意味や、正しい発音を習った孝一は、同時期に入校した生徒と比較するとはるかに優秀な位置にいた。

　張先生は、孝一を自分の助手的な役割で使うことだってあったのである。

　毎日のほとんどの時間、日本語に接しているので、日常の会話につい、まぎれ込んでしまうことが多くなった。

　これは、鄭養湖君のところに行ったときも癖になって会話に交ざってしまう。

「孝一君、このところ君の会話に日本語が交ざるね。どうしたの？」

「そうかな、気がつかなかった。実は、日本に行くことを考えて、日本語を教えている学校に通っているんだ」

「日本の大学に留学するの？」

「それも少しはある。でも、商売をするにしても日本相手にやった方が、いろんな意味でいい仕事が出来ると思うんだ」

「そうか、君は自由でいいな。僕なんかこの店をつぐより方法はないんだ。ある意味ではつまんない人生だよ」

　養湖は、心から羨ましそうに言った。

「まだ一ヶ月にならないけど、日本のことを理解できるようになった。言葉も簡単なものは大丈夫だよ」

「君は学ぶことが上手だからな……そうだ、日本語でアルバイトをしないか？」

　養湖は、まったく予想ができない言葉を発言した。

「アルバイト？　してもいいけど、まだ完全にマスターしたわけではないんだ。アルバイトは無理だと思うな」

「大丈夫だよ、君が習ってきたことをそのまま教えてやればいいんだ。実は……」

　ここの店に毎週食べに来る家族がいる。高家といってかなりの金持ちらしい。そこには高校三年の男の子がいるのだ。

　この子が成績は悪いし、煙草を吸って停学になったりするし、飲み屋の女と問題を起こしたりしているらしい。

　両親は高校卒業と同時に、日本にいる親戚に預けて、商売のやり方を叩き込んでもらおうと考えているらしいのだ。

　学校へは何か所か行ったらしいが、共同生活が苦手な彼は、すぐに中で問題を起こしてやめさせられるようなのである。

「勉強するのは本人なんだ。教えることは出来ても、本人が日本に行く理由をきちんと受け止めていないと、どうにもならない。そこまでは責任が持てないよ」

「そんなこと気にすることはない。要は日本語を教えてくれる先生が家まで来てくれないことが高さんの悩みなんだよ」

「家はどこにあるの？」

「東大門の近くだ」

　養湖の話によると、水曜日の夜に、高一家が車で食事に来るという。明日が水曜日だ。

　明日の晩、来店したときに話を具体的にすることになった。

「こんな話は、一気に決めた方がいい。明日の夜七時頃、店に来てくれ。紹介するから」

　養湖は、自分中心に考えをまとめる面があった。しかし、帰国がいつになるのかわからない孝一にとって、ありがたい話であった。

　翌日、夕方七時に麻浦の店を訪れた。店内の隅に席が設けられ、孝一用にうなぎの定食が用意されていた。

「高さんの家の夕食が済んだら、この話を進める。僕に日本語の先生を紹介して、といっていたくらいだから、君は気に入られると思うよ。ある程度の根回しが済んだら呼びに来させるから、あっちの席に来てくれ」

　ボーイが呼びに来るまで、一時間以上かかった。高さんの個室にはいると、養湖は満面に笑みを浮かべながらこちらに歩いてくる。

「基本的な話は了解を得た。本人も、家に来てくれるのなら大歓迎だと言っている。

ちゃんと日本語は勉強したいのだそうだ」

「ありがとう。僕は家に行く時間と費用の話をすればいいの？」

「時間は、君が学校に行く都合を考えて午後六時頃。夕食は高さんのお母さんが用意してくれる。交通費は実費、報酬は一日五百ウオンでどうだい？」

「まったくいうことはない。じゃ、挨拶だけに行ってくるか」

　養湖と一緒に連れ立って、一番年長者の男性のところに行った。

「養湖君からお聞きになったと思いますが、李孝一と申します。よろしくお願いします」

　主らしい男性が席を立った。続いて母親と学生らしい若い男も、席を立つ。

「李孝一先生ですか。高博文と申します。こちらは家内の金順起、息子の斎敦です。先生はこちらの息子さんも高校時代、ご指導していただいたそうで」

「彼とは同級生です。私は高校を卒業したばかりで、今現在も勉強中の身です。先生と呼ぶのはやめて、孝一と声をかけてください」

　養湖がどんな話をしたかわからないが、アルバイトとしては割のいい仕事のようだ。

　その場で翌日からの訪問が決定した。

Ⅲ

「李先生、ようこそ。場所はすぐにわかりました？　この辺は入り組んでいて」

「すぐにわかりました。斎敦君はお戻りですか？　どこかの塾へでも行ってるの」

「大学入試の勉強は特別にしていません。先生、息子の定期試験のときも、勉強を見ていただけませんでしょうか」

「僕で出来ることはお手伝いします。息子さんはどちらにいらっしゃるのですか？」

「こちらです。本人が汚しっぱなしにしてますんで、驚かないで下さいね。斎敦、先生がお見えですよ。部屋を開けて」

　母親は、ひとつの部屋の前まで孝一を案内し、声をかけた。どうやらいつも、鍵がかかっているようである。

「開いてるよ。今日は李先生がくるから、部屋を綺麗にして鍵はかけていない」

　中から返事があった。

　母親が扉を開いた。

「あらまあ、こんなに綺麗になって。何年振りでしょうね」

「先生が来てくれるんだ。いつものように散らばっていたら失礼じゃないか」

　息子の斎敦は孝一の顔を見て、破顔一笑して中に誘った。いい笑顔だった。

　日本語の授業は、最初三日間、基本的なことを教えた。そして次に、その日孝一が教わったことをノートにとって来て、そのまま息子に教える方法を採った。

　休憩の時間に斎敦から聴いたところによると、親戚が東京でかなり手広く商売をやっていて、かなりの利益を上げているという。

「おれは、学校の授業なんかやる気はないんだ。日本に行って大儲けするのが夢なんですよ。日本語だけは真面目に勉強するから、先生お願いしますね」

　息子の意気が伝わってくる。しかし、生きてゆく方法に問題が生じた。

　孝一の、日本語に関する講義は真剣に、よく聞いている。しかし、合間には焼酎の瓶が出てきた。

「先生、飲もうよ。先生は飲めそうな顔している。さ、どうぞ……」

　斎敦は、机の引き出しからグラスを出して孝一に手渡そうとした。

「僕は飲まないよ。今は勉強しているんだからね。君に飲むなとは言わない。もう少しで終わるからその後に飲んでくれ」

「そんな固いこと言わないでよ。酔っぱらうほど飲むわけじゃないんだから」

「飲むんだったら、講義は終わりだ。今日は帰るよ。お母さんには言わないでおいてやるから、安心しな」

「母さんは、おれが焼酎を飲むこと、知っているんだ。わかった、講義が終わるまで我慢する、飲まないよ」

　結局、孝一の前では飲まなかった。

　帰りがけに、外まで送ってきて言う。

「先生は、高校を卒業したんだよね。近いうちに講義が終わったら、鐘路まで飲みに行こう。おれの女が働いている店があるんだ。そこには女が一杯いるから、先生が好きな娘を選べばいい」

「僕は君に日本語を教えに来てるけど、女遊びに来てるわけじゃない。そんなことには付き合わないぞ」

「先生はまだ、女を抱いたことはないな。大人の女を知ると、やめられないぜ」

　どうやら斎敦は、女にかなりの経験を持っているようだ。

　残念だが、孝一に女を抱いた経験はない。

　補給所の事務員、黄成愛と日本に帰国してしまった水本香織しか、知り合った女性はいないのだ。お互いに好意を持ち合ったことは理解できるが、セックスに繋がるような出来事はなかった。

　毎日のように高家を訪れ、夕食をご馳走になった。斎敦の日本語は、本人の意欲の成果も出て、かなりの進歩を見せた。

　しかし、講義が終わると酒を引っかけ、孝一と一緒にバスに乗って、鐘路の盛り場に行く。飲み屋に行くのだ。

　一度、斎敦の女にあったが、化粧の濃い肉付きのよい女性だった。

　斎敦の腕にすがりつき、胸を強く彼に押しつける姿は、性的な興奮を孝一に伝えた。

　彼女と一緒にいた女が、孝一にしなだれかかってきた。

「お兄さん、遊んでいって。とーっても気持ちのいいことしてあげるから」

　孝一の腰に手を回して、耳許で囁く。

「僕は帰る。今日は用事があるんだ」

　孝一は、強烈な化粧品の匂いと押しつけられた胸の魅惑的な柔らかさを感じながら、慌ててその場を立ち去った。

Ⅳ

　大使館で確認しても、パスポートはまだ届いていないという。

　これが交付されなければ、今後のことが何ごとも始まらないので、落ち着かないことはなはだしい。

　卒業式から一ヶ月を過ぎ、四月の中旬になった。すっかり緑がまぶしくなり、周辺はケナリの黄色が見事な春になった。

　孝一の生活パターンは、早朝の新聞配達を終え、配給所に戻ってきて休憩室で一休みして張作文日本語学校に行き、張先生の食事を用意してから、日本語の授業に参加する。

　そして午後まで授業に出て、皆の三倍も学ぶのだ。当然進歩も三倍の速度となる。

　そして、東大門の高家で夜まで、家庭教師の形で日本語を教えていた。現在では、その日に教わったことをそのまま、教材にしていたのである。これは、孝一にとっても予習の形となり、正確な日本語の習得となった。

　七時半を過ぎると、孝一はバスに乗って帰宅する。それに併せて、斎敦が鐘路まで一緒に来ることが多かった。

　その後の行動については、どのようなものであるかは、孝一が妄想として想像するより他になかったのである。

　毎日が、平凡に過ぎてゆく。日本語に関しては、かなりの確度で習得していった。

　それにしても、パスポートが発行されないことが、孝一の動きに制限を加えていた。

　孝一にとって気がかりなのは、この配給所で一番、効率的な区域を受け持っていることである。この特別なテリトリーは、誰にでも出来る場所ではない。

　日本に帰国する日が決まる前、出来るだけ早い時期に事情を話して、交替する旨を所長に伝えなければならない。

　後継者を選ぶことは孝一の中に、ある程度固まった考えがあった。

　数年前のデモで、兄の鐘一を不慮の事故で亡くした安鐘権に譲るつもりである。

　今なら、今月中に要領を教えたら、来月からテリトリーを渡すことが可能である。

　自分の身に降りかかった、日本人であるという事実関係を隠さずに、すべて所長に話して驚かれたが、了解を得たあと所長にも同席してもらい、鐘権に伝えた。

「うちでも、一番大事な客先の配達だ。これまでの李孝一君のように、一日も休まず、必ず毎日の配達をまっとうして欲しい、というよりも、死んでも配達することが必要だ」

　所長の、厳しい言葉だった。

「所長、明日からふたりで配達します。鐘権の担当しているところに、新しい配達員をおいてください」

「孝一君、本当にいいのかい？　この新聞社で最高のお客さんを……」

「ああ、デモで亡くなった君の鐘一兄さんの分も頑張ってくれたまえ。大丈夫だよ、君ならわけなく出来る」

「本当にありがとう。まるで夢を見ているみたいだ。この凄い官庁関係や、青瓦台の区域を担当できるなんて」

「鐘権、頑張ってくれよ。孝一やその前の金昇快に負けないようにやるんだぞ」

　所長の言葉で、この話は結末を得た。

　鐘権は孝一の一年下、おとなしく真面目な好青年だ。実の兄を勘違いだとはいえ、デモを鎮圧しようとした機動隊に暴行を受け、死亡させられた男である。

　これで、地下の仮眠室を出なければならなくなった。またもや、麻浦のうなぎ屋の息子鄭養湖を頼ることになる。

　彼は本当に快く、自分が寝ている部屋の隣室を孝一のために提供してくれた。

　朝鮮日報の配給所を退職してから、少しの間、仕事に就かずにいた。これは、いつパスポートが交付されて、日本帰国が決まるかわからないからだった。

　それにつけても、まだ自分が日本人だという実感が湧かないのだ。やはりそのことを確認するのは、西大門の刑務所に服役中の父親に聴くより方法はない。

　彼の出所まではあと半年ほどある。今のペースで日本語を学んでゆく必要はないほど孝一の日本語は上達していた。そろそろ張作文学校は卒業する時期であると考えた。

　孝一は朝、いつものように教室に行った。

　鍵を開けて、お湯を沸かす。そして即席ラーメンを作り、洗顔をしている張作文先生に話しかけた。

「先生、今日は大事なお話があります。実は事情があって、新聞社を辞めることとなりました。慣れた仕事を辞めなければならないのは、いつ日本に発たなければならないかわからないのです」

「そうか、そんな時期になったか。勿論構わないよ。正直言って、君が教室にいないと授業がやりにくくなることはあるが、仕方がない。随分君には助けてもらったね」

「教室をやめるのはとても辛いのですが、逆にご迷惑をかけることになったら、いけないと思います。本当によく教えていただきまして、ありがとうございました」

「なあに、正直言って、君の日本語は卒業生並みだ。いつやめてもいいくらいだよ」

「ありがとうございます、それも、先生のおかげです。帰国するときには来ますから」

「ああ、待っているよ。明日から朝食を私が作るようだな」

「申し訳ありません」

　先生に深々と頭を下げて、教室をあとにした。振り向いてみると、張先生がラーメンを食べながら手を大きく振ってくれた。

　これで、日本語の勉強も終わった。斎敦に対する日本語家庭教師の方も、気力がなくなって必然的に断った。

Ⅴ

　新聞社も辞めたし、パスポートが発行されたら帰国は早いと思い、パンの購入権利や屋台や自転車を売却した。買ったのはバイトで孝一が使った人たちだった。

　この人たちでも買えるような作ったときの半値以下の値段で処分したのである。

　六月くらいまで、昼間は日本語の勉強もやめてぶらぶらしていたが、日本大使館がある半島ホテルの、毎日新聞社特派員事務所に行き、孝一が載ったサンデー毎日をもらって持って歩いた。

　すぐに帰れると思っていたのが、こんな状況である。泊まるところは麻浦のうなぎ屋で面倒見てもらっているが、最低限の生活費は稼がなければならない。

　自転車一台を買い戻し、出版会社の訪問販売の仕事を行った。名作の全集ものを売るのだが、人に好かれる孝一の販売成績は上がる反面、料金の回収がなかなか思うように上手く行かない。

　これも四割のマージンが約束されているのだが、月末になると、売り上げの六割を会社に納金しなければならないのだ。

　少しずつ、貯めておいた預金が減っていくのが気になった。

　それでも、懸命に働いた。しかし、全集というのは単価が高く、なかなか簡単に売れるような品物ではなかった。

　雨の日に約束していた集金に失敗して、風に吹かれながら淋しい気持ちで自転車で橋を渡っているときに軍人に止められ、着ていた軍隊の雨合羽を脱がされ、没収された。

　これだって、南大門の市場にある、軍隊の中古服を専門に売っている有名な店で買ったものなのだ。

　特に気に入っていた、レインコートを没収されてすっかり意欲がなくなった。

　こんなことだったら、朝鮮日報を退職するのを待った方がよかったのである。

　全集の販売を整理し、出版社をやめて新しい仕事に就くことにした。はり仕事としては、経験のあるものの方が間違いない。

　だいぶ前に辞めていった林総務が就職した中央日報のことを思い出した。彼が出て行くとき、配達管理の職を勧めてくれたが、そのときは、変わるような状態ではなかった。

　林総務は所長の職に就いており、孝一の参加を歓迎して、第二班の四〇人ばかりの部下を持たされる。

　これは慣れた仕事なので、そんなに抵抗なく仕事を進めることが出来た。

　いつごろ、日本に帰ることになるかわからないが、これは伏せて仕事を始めた。

　一班、三班では管理者が配達員を殴り倒して管理する方法がとられていたが、孝一は問題が起きたときに、あくまでも話し合いで解決する方法を採用した。

　夕刊紙なので、配達の時間が夕方に限られる。昼間と夜に空き時間が出来た。

　まだ若くて体力がある孝一に、中央日報がスポンサーになっているボクサーの練習相手をさせられた。

　スパーリングをする場合、こちらから攻撃は出来ず、どんな場合も殴りかかることは禁じられている。殴られる一方なのだ。これは、孝一が運動神経がいいという偏見も加味されていたのである。

　孝一は林所長にも、自分が日本籍という事実を述べてなかった。しかし繰り出されるパンチにはこれを知っているような、民族的な悪意が込められているようだった。

　しかし、スパーリングの練習をしているときに、素人の孝一にだって、簡単にパンチが当たるように思えるような、隙が見られる選手だった。

　したがって強いボクサーではなく、試合では負けることの方が多かった。

　そのときには、彼はうさ晴らしのためにいつも、ソウル駅前の女郎屋に出かける。

　言葉としてはおかしいが、ボクサーのボデーガードの役目を仰せつかった。

　そんな孝一を、プロボクサーの一味と思ったヤクザは手を出してこなかった。

Ⅵ

　相変わらず、大使館からパスポートの交付通知が来ない。孝一は暇がとれたときに大使館に行って、確認の作業を行った。

　その返事は――日本政府にパスポートの交付申請を出しているのだけど、まだパスポートが降りてこないんだ。これまでこんなに時間がかかることはないんだけど。という内容のものだった。

　家族で帰国する人たちが、孝一のあとから申請して、日本への途につく。

　日本大使館から、はっきりとした返事がないまま、時間が経過していった。

　気分がすっきりしないある日、鐘路の街を歩いていたときに、三人の見るからに、チンピラと思われる男に呼び止められた。

　ひとりの男が、後から肩を叩いてねちっこくいきなりいう。

「おい、兄さん。煙草をくれないか？　なければ買ってくれてもいい。おれたちは貧乏なんだ。煙草を恵んでくれよ」

　たしかに、景気がいい状態とは思えない服装だが、煙草銭にまで困っているようには見えなかった。

「煙草？　おれは吸わないし、あんた方に煙草を買ってやるほどおれの懐は、豊かではないんだ。どこか他で当たってくれ」

　このところ、日本に帰ることが決まらないこともあって、気分が優れず、つい言葉が荒くなってしまった。

「何だと、こちらがおとなしく出てりゃ、調子に乗りやがって、おとなしく金を出せば痛い目には遭わないで済んだのに。おい、ちょっと可愛がってやれよ」

　中のひとりが、孝一を指さして言った。

　身体の大きい男が、いきなり右足で蹴ってきた。この蹴りは、スピードがなかったので足を使ってよけることが出来た。

「この野郎、粋なことをするじゃないか。畜生、これでも食らってみろ」

　闇雲に放ってくる右のパンチである。これもまるでスローモーションのようによく見えたので、上体をひねってかわした。

　これまでに、孝一が経験したパンチや暴力とは全く質が違う。

　少しむきになって、やたら殴りかかってくるが、行動はよく見えた。パンチを空振りした顎に、拳を入れる。鈍い音がしてその男が倒れた。口から血を出して、膝を道路につき、恐怖の目で孝一を見ている。

　もうひとりが、蹴りを入れてきた。これもスエーバックでかわしてその足を掴んで引く。仰向けに倒れて頭を打ったらしく、気を失ったようだ。

「お前も、痛めつけてやろうか。さ、どこからでもかかってこいよ」

　ひとりで残って立っている男の方に、一歩足を運ぶ。

「いや、おれたちが悪かった。もうしないから許して下さい」

　男は首を振って、謝った。

　正直なところ、これまで喧嘩などしたことはない。たしかに殴られたことは数知れないくらいあるが、こちらから行動を起こしたことはなかったのだ。

　自然に防御は身に付いていた。そこでスパーリングで出そうになるこちらの手を、このとき出してみたのだ。弱いとはいえ、プロのボクサーである。練習中に感じた、打ち込めば絶対に当たる、という感覚がそのまま通用したのだ。

　この事件以来、孝一に腕力でも自信がついた。かといって積極的に暴力を使ってゆくことはしない。もし、何かで暴力をふるわれたらそれに返すまでだ。

　それにしても、いつまで待ってもパスポートが交付されない。

　毎日に大きな変化がなく、一日一日が無為に過ぎていく。いつの間にか、夏が過ぎて秋が盛りになっていた。

Ⅶ

「孝一さん、いらっしゃいますか？」

　その日、スパーリングを頼まれてそろそろ出かけようとしているときに、扉から女性の声が聞こえた。

　どこかでよく聞いた声ではあるが、店の女性の声ではなかった。

　扉を開けた。朝鮮日報集配所の事務員、黄成愛が立っていた。

「成愛、どうしたんだ」

　彼女とは、もう半年も会っていない。

「今日、お父様が退所なさるんですって。さっき集配所に電話がありました」

「えっ、今日、出所なのか。おれ、知らなかった。何時頃になるんだ」

「午後になったら出られるんですって。出るときにもう一度電話をくれるそうです。

あと二時間くらいで出て、夕方には市内に来られるのではないでしょうか」

　まさか今日、出所だとは思わなかった。今日の予定は、午後にボクシングのジムに行って、スパーリングの手伝いをし、夕方、通常の配達手配の仕事をするだけである。

「じゃ、おれは市内まで行って少しだけ、仕事の手配をしてくる。親父とは、朝鮮日報で会うことにしよう。今十一時半だから三時半にはそこに行けるよ」

　忙しくなった。スパーリングは中止してもらい、夕刊の配達は林所長に今日だけ頼むことにしよう。

　孝一は自転車に乗り、成愛を乗せて市内に向かった。

　朝鮮日報で成愛を降ろし、中央日報の地下にあるボクシングジムに行って、事情を話してスパークリングを休ませてもらった。

　そして中央日報に上がり、父親の退所で今日だけ、休ませてもらうことを話した。

　了解を得て、朝鮮日報に向かう。やはり、三時を少し回っていた。

　半年ぶりの朝鮮日報である。懐かしさや思い出が気を塞ぐかと思ったが、それよりも久しぶりに父親と会える興奮の方が勝り、意外に冷静を保っていた。

「親父はまだか」

　扉を開けて見回すと、中には成愛ひとりが待っていた。孝一が訊く。

「十分ほど前、ソウル駅前から電話があったわ。もうすぐお着きになると思います」

「じゃ、もう着くころだな。成愛は親父に会ったことがあるんだよな」

「一度だけあります。麻浦の下宿を教えてあげたときに……」

「あれから変わったぞ、まず、体重が減ったし、煙草もやめたはずだ」

「とても、がっしりとした身体の方と記憶しているわ。背はあまり高くなかった。痩せたということは、病気でもなさったの？」

「いや、受刑中に鍛えたんだって。とてもシャープになったぜ」

「そうなの。あまり刑務所で鍛えるという話は聞かないけど、頑張ったのね」

「ああ、出所後に頑張って働くためだそうだ。これは期待できる」

　こんな話で時間を潰しているときに、出入り口の扉がノックされた。

「きっとお父様よ。孝一さん出られたら」

「いや、君が出てくれ。親父でなかったら恥ずかしい思いになるから」

　成愛が、扉の方に向かっていった。

「さっき電話した李虎範です。孝一は来ていますか？」

　父親の声だ。

「お見えになってます。孝一さん、お待ちになっていたお父様ですよ」

　扉を開け成愛が応対して、こちらに声をかけてきた。

「孝一、帰ってきたぞ」

　成愛を押しのけるように、入り口から入ってきた父親が、立ちすくんでいる孝一を見て大きな声をかけてきた。

「父さん……」

　孝一は胸が熱くなって、ようやくこれだけが口をついて出た。

「孝一、お前にいろいろ苦労をかけたな」

　父親はそのまま歩き寄ってきて、両腕をひろげ、孝一を抱きしめた。

　ふたりはそのまま抱き合っていたが、その内に身体を離して顔を見合った。

　成愛には聞かせられない話もある。孝一は成愛に断って、ふたりはそのまま、隣にある喫茶店に席を移した。

「父さん、お帰りなさい。長い間ご苦労さまでした」

「秋までの服役は、仕方がないと思っていたけど、出所の日が近づくと時間のたつのがかなり遅かったよ」

「鐘路の事務所はもうないのでしょう？」

「事務所も会社もなくなった。だけど、仕事については心配することはない。前に話しただろう。軍隊時代の部下がやっている会社の役員になるということを」

「聞きました」

「退所が決まったときに、刑務所に訪ねてきてくれたおれの部下がいる。彼は大川で土木会社を手広くやっているんだ。金昌国という男なんだが、今後、国土建設という会社を大きくするためにわたしの力が必要で、手伝って欲しいというんだ」

「会社、ソウルではないんですか」

「勿論、ソウルにも支店はある。でも、本社は大川なんだ。父さんも大川にいって住むようになる。金社長はそこの専務取締役の地位を用意してくれた」

「専務取締役か……凄いですね」

「おまけに、今度の事件で作った負債を弁済してくれるそうだ。勿論、父さんは毎月の給料からそれを返すつもりだけどな」

　そのときの話を聞いていたわけではないので、その内容はわからないが、父親にとって大変に恵まれた話のようだ。眼が活きいきとして輝いている。

　しかし、どうしても孝一には解決しなければならない問題が残っていた。今、直面している自分の国籍についてである。

「父さん、僕は父さんに大変辛いことを訊かなければならないんだ。実は前に、刑務所に行ったときにどうしても訊けなかった」

「何だい、今なら訊けるのか？」

「うん……これは、どうしても訊かなければならないことなんです。父さん、僕は日本人なのですか？」

「えっ、日本人……どうしてそんな……」

「実は、日本大使館の人からそのように通告されたんだ。僕の名前は蓮本健次というんだそうです。産まれたときに日本人のお母さんにお乳が出なくて、李家に預けて親たちは日本に帰っていったんだって」

「………」

　父親の目が虚ろになり、急に焦点が合わなくなってしまった。

Ⅷ

「孝一、お前今日は時間があるか？」

　少しの時間、眼を宙に飛ばしていた父親はようやく、孝一の目を見ると言った。

「今日は、いくらでもあります」

「じゃ、場所を変えよう。仏光洞に行ってゆっくりと話そう」

　ふたりはバスに乗って仏光洞に向かった。

　バスに乗っても会話はない。ふたりとも無言でお互いの顔も見ない状態だ。

　道路が混んでいて小一時間かかった。降りるまで言葉が交わされなかった。

　バスを降りる。父親は大きめのボストンを持っているが、それが妙に重そうに見えた。

「孝一、もう高校は卒業したんだよな。酒は飲めるのか？」

　父親がいきなり訊く。

　斎敦が、日本語の勉強のあと焼酎を飲ませることがあったが、一、二杯飲んでも特に酔うようなことはなかった。

「あまり飲んだことはないけど、多分大丈夫だと思います」

「じゃあ、飲みながら話そう。父さんが前よくいっていた飲み屋があるんだ」

　父親はどんどん歩いてゆく。前方に焼酎と書かれた提灯が見えた。

　扉を開けて中に入る。まだ時間が早いせいか、客は一人もいなかった。

「おやおや、李虎範じゃないかよ。しばらくだな、すっかり痩せてしまって……身体をこわしたのか？」

　店の主人らしい男が声をかけた。

「しばらく。体は快調だ。つとめを終えて出てきたんだよ。おやじは変わらないな」

「それはおめでとう。ご苦労だったな。おれなんか毎日同じ暮らしさ。どうにも変わりようがない」

「今日は奥の部屋を使わせてくれ。こいつはおれの息子だ。孝一という」

「立派な息子じゃないか。いいとも。今日の勘定は虎範の出所祝いでうちが持つ。気にしないで飲んでくれ」

　ここの店でも、父親はとても好かれている様子が窺えた。

　奥の部屋に入ると台机が置いてあり、座布団が並んでいる。父親は孝一に座布団をすすめ、自分も座った。

　おばさんがメモを持って、注文を取りに来る。父親が慣れた様子で注文を出した。

「父さん、僕は日本……」

「その話は注文が来てからにしよう。急ぐことはない、時間はたっぷりとあるんだ」

　各種のおつまみが、出された。野菜や小魚、煮物などが次々と出てくる。

　ビールが二本添えられている。ここで父親は予想もしない行動を取った。

　座布団を外し、床に正座した。そして手をつくと頭を深々と下げて言ったのである。

「孝一、これまでは済まなかった。お前の勉強の手伝いもせず、善と享竜の面倒を見てもらって、本当にありがとう。心から申し訳ないと思っている」

「………」

　孝一は、予想もしない父親の行動にどう反応していいかわからなかった。

「お前がいなかったら、善も享竜も育てていけなかったかも知れない」

「そんなことはないですよ。僕がいなければ父さんはふたりをきちんと育てています」

「これは、刑務所で考えたんだ。お前がしっかりしているから、ふたりの教育もまかせたし、生活もお前にたよってしまった」

「そんなのは当然ですよ。今、わかっていることは、僕は父さんの子じゃなくて、日本人の蓮本の子供なのです。それを育ててゆくのは普通では出来ません。自分の子供と同じように、愛しんでくれたのだから」

　この言葉は孝一の口から、自然に流れ出た。

「いや、オレの気持ちに、孝一は蓮本大佐の子供だという意識が潜在的にあったのは、間違いない。刑務所でお勤めしているとき、それに気がついたんだ」

　父親はこれだけの話をする間、ついた手を一度も挙げなかった。

「さ、父さん、料理も来ているので、とりあえず出所の乾杯をしましょう」

　孝一がビールの瓶を持って、差し出す。ようやく父親が上体を起こした。

　お互いにビールをつぎ合った。

「父さん、出所おめでとう」

「お前の、これまでの苦労に感謝して」

　グラスが触れた。

　一気にビールが空いた。そして、両方のグラスに二杯目が注がれる。

「僕、蓮本さんのご夫妻には、ソウルで会ってるんです。僕が産まれたときのことはおふたりから聴いている。日本のお母さんからはお乳が出なかったんですってね」

「蓮本大佐のご家族に会ったのか。そうなんだ、お前は蓮本さんの子だ。奥様がストレスや何かで母乳が出なかったとき、順愛が最初の子供を流産してお乳が有り余るほど出たんだよ。お前は順愛の生のお乳をどんどん飲んで育った。順愛もお前を本当の子供のように愛し、育てたんだ」

　父親はそのときのことを話し出した。産まれた孝一は、日本人の母親の乳房に吸い付き出ない乳に大きな声で泣いたという。そのとき順愛が、変わって授乳した。

　よく出る母乳に孝一は吸い付き、充分にそれを飲んで、満足して眠ってしまった。

　蓮本家の帰国が決まった。問題は孝一の処遇である。相変わらず蓮本夫人からは乳が出なかった。李家との話し合いの末、孝一は李家の養子として育てられることに決まったのである。そして蓮本家が帰国し、連絡が付かないままに十八年が経過した。

「僕は、死んだ母さんを本当の母だと思ってこれまで生きてきました。十八年ですよ、

今になって日本人の産みの母がいるなんて、信じろという方が無理です」

　これは、偽りのない孝一の気持ちだった。

　一瞬、沈黙した父親が口を開いた。

「お前の気持ちはよくわかる。でも現実はちゃんとあるんだ。蓮本夫人は立派な人だっただろう。上品な……」

「会っている間中、泣いていました。僕は死んだ母さんの方が素敵だったと思います」

　孝一の思い出に生きる母、順愛の方が数倍も素敵であることに違いはなかった。

「おれはすっかり、この一年で変わったと思う。善も享竜も呼んでとりあえず、一緒に暮らそうと思っているのだが、お前の帰国の予定はいつなんだ？」

「まだパスポートが発行されないので、決まってません。パスポートが降りたら、すぐに帰国となると思います」

「まだ決まってないのか。いずれは大川に曽栄淑も呼んでみんなで生活を始めようと思っているんだが、今はこれまでの生活を改めるため、栄淑と息子とは別にソウルで、善と享竜のおれの家族で一緒に暮らそうと思っている。帰国まで一緒に生活しないか」

「いえ、それはお断りします。別れなければならない善と享竜と一緒に暮らすのは僕にとってとても辛いですよ」

　これも孝一の、偽らざる気持ちだった。

　父親の今後は、新しい仕事に張りを見つけて頑張れば、これまでのキャリアを生かして成功するだろう。

　生きるために苦労した善や享竜も、今度は李家の子として、幸福な毎日を送ることが出来る確信を得た。

　父親は、これまでの苦しみが一度にほどけたのか、焼酎を飲み出してから一気に酔いが回って、眠ってしまった。

　飲み屋の親父が、近くに住む友人を呼び出し、友人宅への帰宅の手はずを整えてくれた。

　酔いつぶれた父親に最後の別れを、と思い手を握ったら、このときだけははっきりと目を見開いて何も語らず、しっかりと手を握り返し、大粒の涙をこぼした。

　刑務所から出たばかりの父親が、子供たちと住むには条件が悪い。住むところは、やはり鄭養湖に頼むしかなかった。

　翌日の昼間、鄭養湖は孝一の頼みを快く聞いてくれ、家作の一軒を父親と善、享竜のために貸してくれた。

　父親は養湖の親と気が合い、特別な契約をしたわけではないが、ソウルにいる間の二ヶ月くらいには、鄭家の不動産の管理と、何件かのトラブル解決に手を貸して、大変に重宝されたのである。

　鄭家の主人は、このまま残って不動産の管理と、店の支配人的な仕事をしてもらいたい意向を示したが、善と享竜との生活に慣れて年が明けたら、大川に行く決意にわりはなく、その依頼は断ったのである。

　この二ヶ月間は、近くに住んでいても父親とは会ったが、善と享竜とを遠くで見ることがあっても、まったく会わなかった。

　第十五章・別離と帰国（希望）

Ⅰ

　一九六七年一月になってすぐ、待ちに待ったパスポートが交付された。

　父親と連絡を取り待ち合わせて、日本大使館にてそれを受け取った。

　一応、大使館としては帰国の申請の下話として韓国政府と話はしていたが、今後、帰国日に関しては、孝一がすべてを取り仕切ることになるようだ。

　交付されたばかりの紺色のパスポートを持って、不思議な感覚で街を歩いた。

　大使館がある半島ホテルと、入国管理局との間に、松鶴という日本料理屋がある。

　そこが今日の、待ち合わせ場所だった。

　扉を押すと白木のカウンターに父親が座って待っていた。

「父さん、やっとパスポートが交付されました。これで帰国の申請を出せば、自然に帰れる日にちが決まります」

　孝一は父親のところに飛んで行き、紺色のパスポートを手渡した。

「これが、お前が日本人だという身分を証明するものなんだな。この薄っぺらな書類一冊が。何ともいえない不思議な気分だ」

「たしかにこの一冊が、父さんと僕の立場を表しています。韓国人と日本人という国籍の違いを……」

「おれたちふたりは全然変わらないのに、おれには説明が出来ないよ」

「僕だって同じです」

「さ、そのパスポートをしまいなさい。なくしたり汚したりしたら大変だ」

「いいえ、ここにいる間は父さんと僕の間に置いておきます。今日の記念のために」

「そうか、それもいいだろう。じゃ、今日はお前のために日本のお酒を、作法に従って飲むことにしよう」

　父親はカウンターの中の日本人女性に、何ごとか注文を出した。

　女性は聞き終わると、頭を深々と下げて調理場の方にいってしまった。

「正式な日本のお酒の飲み方は、韓国と違うのですか？」

「日本酒という酒を、器に入れてお湯で温めて飲むことが多い。夏は冷やして飲むこともあるけどな。温めた酒を燗酒というんだ」

　一呼吸あって、小鉢に入った緑色の野菜と陶器製の酒瓶のようなものが並べられた。

「さ、おひとついかが？」

　女性が、酒が入ってると思われる瓶を持って、小首をかしげた。

「前にある入れ物で受けるんだ。それを杯というんだよ」

　父親が小声で説明してくれた。

　小さな入れ物である。孝一はそれを手にして差しだした。

　女性がそれに液体を注ぐ。容器が暖かくなり、何ともいえない香りが周辺に漂った。

　父親にも同じ動作で酒を注いだ。

「これが日本のお酒ですか。香りがとてもいい。お酒が暖かいのも珍しいですね」

　孝一が、杯という容器を手に持って眺めながら言った。

「これから日本に行けば、このお酒が多いだろう。さ、孝一の出発とおれの大川への出発を祝って、乾杯！」

「乾杯！　お父さん、いよいよ大川に出発ですか。曽のおばさんの家族と一緒？」

「うん、今度はきちんと、おれの家庭を築いてみせる。栄淑は家事専門で、もう仕事はさせないということに話はついている。すっかり喜んでいるよ」

「いつ発つの？」

「早いんだけど明後日の午後だ。もう転校の手続きはすんでいる。栄淑の息子の考え方も変わった。善とも上手くやって行くし、享竜も可愛がるそうだ」

「あの息子がね……本当だろうか」

「昨年の暮れに、家族全員が集まって話をしたんだ。そのときに栄淑が自分の息子に申し渡した。これからの主人はおれで、わたしたちは、仕事をなさるお父さんに迷惑をかけちゃいけない。とはっきり宣言し、息子と全員が承認した」

　そのとき、栄淑の息子が、父親に謝ったという。そして兄弟仲良くやっていくことを誓ったのだそうだ。

　その日になった。孝一は列車が発つ時間を父親から聞いていたが、表だって見送ることはせずに、敢えてプラットフォームの柱の蔭から旅立つ李家の家族を眺めていた。息子と享竜とは、親しげに触れあっている、善だけは改札からホームに入ってくる人に、注意を払っていた。

　列車が発車するまで視線は孝一を求めてホームをさまよっていたが、とうとう発車時刻になり列車の中に入ってしまった。

　そして、一瞬ではあるが、窓越しに善と視線を交わしたような気になったのは錯覚であろうか。

Ⅱ

　これで、気にかかることはなくなって、孝一は出入国管理局に行き、帰国の申請を提出した。書類は即時に受理された。

　これで、韓国側として所定の手続きが済むと、出国と言うことになるだろう。

　このころ、ベトナム戦争が激しくなって軍隊に入隊し、軍人として戦場に行く仲間が多く見られた。

　その出征の日が決まると、激励の送別会が開かれる。これが週に一回は開かれた。

　この会に参加した孝一は、自分の立場を明らかにして、自分は日本人であること、近いうちに日本に帰国することになっていることを告げた。

　皆は驚いたが、現在置かれている状態を説明し、出生時の母乳のために韓国に残ったこと、それが昨年の暮れになって、日本の親からその事実の連絡が入り、現在、帰国の申請を出していることなどを発表した。

　そして宴の最後に、『上を向いて歩こう』と『蛍の光』を日本語で唄った。

　周囲の他の客から、日本語の歌にクレームがつけられたが、全く気にしなかった。

　孝一自身も、近い時期に韓国を去り、日本に帰国することは既成の事実だ。このことは七人の仲間は知っている。

　この七人が会うたびに、この話題が湧き上がった。夜、酒が入る会のときは送別会の様相を呈した。

　この会の終わりには『上を向いて歩こう』と『蛍の光』が必ず唄われた。

　海外のペンパル募集の広告が新聞に掲載され、孝一は大阪在住の高校生、山田明子と便りの交換を始めた。こちらの名前は、李孝一で、文体は英文だった。

　韓国での住所は、勤めている中央日報にしておいた。二通の郵便が交換されたあと、孝一は現在置かれている立場の実際を記載して日本語で手紙を出した。

　すぐに日本語で書かれた返事が、速達で届いた。その内容は率直に、驚きの連続でつづられていた。

　孝一の手紙の内容から日本人であることを理解し、日本語が普通に使えるものと勘違いして蓮本さんが日本に帰国したら、同じ大学に行きたいものだと書かれていた。

　それから週に一度は必ず、山田明子からの日本語の手紙が届いた。

　この手紙は、昼の内に配達され、孝一の机の上に置いてある。日本語で書かれた宛先はとても違和感を放っていた。

「孝一、お前、日本語の手紙がよく届くようだが、日本の文字が読めるのかよ」

　林所長から聞かれた。

「少し勉強したので、読めます」

「何で日本語なんか、勉強するんだよ。あんな最低の国民、日本人になりたいのか」

　林所長の言葉には刺があった。たしかに戦争に負けた日本という国の印象は、韓国ではよくなかったのである。

　急に、孝一の気持ちの中に日本人としての誇りが燃え上がった。

「おれは、あんた方ハングルと違って、日本人なんだ。全身を純粋な日本人の血が流れている。今、遣っている言葉は仮のものだ」

「何だって？　日本人だと。いつからだ」

「産まれたときから。ただ知らされていなかったので、韓国人として生活しただけだよ」

「日本人か……どこかへんだと思っていたんだが、これでわかったぞ」

「仕事の上では関係ないだろう」

「関係ある。ここの新聞は韓国の新聞だ。その新聞に他国の日本人が手を出し、面倒を見ることは絶対に許されない」

　林所長は、かさにかかって話しだした。

　周囲にいる、孝一の部下たちもいつもとは顔つきが違う。

「おれが日本人だとすれば、くびか？」

　孝一は、皆の顔を見回して言った。

「くびだけではすまないぞ。みんな、これまでの恨みをはらせ。誰でもいい、好きなように痛めていいぞ」

　林所長はいう。しかし、これまで他の班のように暴力で支配していない孝一には、恨みを持つ男がいないようだ。

　誰もが顔を見回して、手を出してくるものはいない。

「どうした、誰も手を出せないのか。じゃあ仕方がない、おれが最初をやってやるから皆ついてくるんだ」

　林所長が、孝一の胸ぐらを掴まえて握り拳で殴りかかってきた。

　本能的な動きで、首をすくめ、パンチをかわす。所長は胸ぐらの手を離して横殴りにスィングをふるってきた。

　何といっても、プロのパンチをかわしてきている孝一である。そのスィングをスエイバックでかわしたとき、本能的に左のジャブが林所長の顔に炸裂した。

　これまで、無尽の金を請求したり、話し合いで班の管理をしてきた孝一のやり方に、苦情をつけてきた林所長のやり方が、脳裏にはっきりと浮かんだ。

「どうせ馘首になるのなら、これまでの恨みを全部晴らしてやる。覚悟しろよ」

　孝一が気がつくと、林所長はぼろくずが床に投げ捨てられているように、くずおれて血まみれになっていた。

「誰でもいい、おれに文句がある奴はかかってこいよ、相手になってやるぞ」

　孝一の第二班の連中は、皆、首を振って後ずさりするのみだった。

Ⅲ

　これで仕事はなくなった。少しでも早く日本に帰りたくなって、久しぶりに出入国管理局に顔を出してみた。

「李孝一、蓮本健次と呼ぶ方がいいか。君の帰国は問題があってすぐには出来ない。外国人登録違反などで、出国は禁止されている」

　日本人担当官が話した。

「外国人登録違反？　どういう意味ですか」

「韓国政府も困っているようだ。何でも前例がないケースらしい。韓国でも慌てて法律の整備をすすめているらしいんだ」

「僕は何も悪いことをしていないし、韓国人として生きてきたのも、僕の意志ではないんですよ。血が繋がってない妹と弟を、育ててきて、お父さんが刑務所から出てくる。ようやく僕が日本に帰れるというところで、どうしてこんなことになるのですか？」

「それは、いろんなことがあるんだ。朝鮮戦争のときに、韓国政府の役所が戦災にあって書類が焼けてなくなってしまった。そのときに北からの移民も大勢入国した。国民としての登録が雑然となったんだ。そのときにお父さんが、君を日本人だと登録すれば、外国人登録法には触れなかったんだろうけどね」

「僕はどうすればいいのですか？」

「今のところ、君にすることはない。法律が改訂された後にお父さんが韓国政府の役所に来て、必要な手続きをとらないと」

「じゃぁ、僕はいつ頃帰れるのですか？」

「さぁ、法律が改正されるのがいつか、来年か再来年になるか……」

　少なくとも、法律改正が必要な大事のようだ。これで帰国がいつになるか、見当もつかなくなってしまった。

　とりあえず、生活のために仕事をしなければならない。

　書籍の販売も考えたが、百パーセントの代金回収が見込めない以上、決して率がよいとはいえなかった。

　となれば、やはり新聞の配達に関わる仕事が確実だ。中央日報は絶対に無理である。かといって、朝鮮日報も無理と判断された。

　麻浦に韓国日報の集配所があった。駄目で元々と思いそこに入ってゆくと、幸運なことに世話役のひとりが引退するところだった。

　中学時代にここの韓国日報を配達した経験と朝鮮日報の官公庁の担当から、中央日報の班長の経験が買われ、すぐに採用されたのである。中央日報の事件は問われなかった。

　麻浦地区と龍山地区を担当する二十人の配達員が部下となり、孝一の入社と同時に、活動が開始された。

　新聞配達の仕事は慣れたものである。全く問題がなく毎日が過ぎていった　韓国日報の仕事は朝刊だけである。午前九時には仕事が終わってしまうのだ。

　孝一は、仕事のあとの時間を、日本語の勉強にあてることにした。

　探した結果、西大門にある日本語学校のレベルが高いと知り、そこに正式に入学した。

　最初は、初級からしか受講できないのであるが、正直なところ、初級の講義は全くつまらないものであった。

　正直言って、初級からの受講には、内容と共に別な抵抗があったのである。

　それは、この学校を受講する目的の最たるものに、生徒の中に孝一を惹きつける素敵な女性が在籍したことにあった。

　何も知らずに入学した結果、彼女は上級の生徒であり、初級で学ぶと全く接点がなくなってしまうのである。

　実力の上でも、充分に上級の力を持つ孝一は、すぐに昇格試験を受けて上級に編入した。

　その魅力的な女性は、李栄子という名前のふたつ年上で、姉がアメリカの軍人と結婚してボストンに移住している女性である。彼女もボストンに移住する予定だが、日本語も学んでおいて何かのときに、役に立てようとしている、とのことだった。

　色が白く、背が高くて、とても素敵なプロポーションをしていたのである。

　孝一は積極的に触れあい、自分の置かれている状況をありのまま話した。

　自分は日本人の子で、産みの母に母乳が出ないため帰国のときに母乳が出ていた育ての母に預けられたこと。そのまま韓国人として育ったのに、突然、一昨年の暮れに日本から産みの両親が来韓し、事実がわかったこと。帰国するためには、外国人登録法に違反していて、すぐには帰国できないことなど……

　栄子姉さんは、孝一の立場を理解してくれた。育ての母親、順愛が死んだときの話には、一緒に涙してくれたのである。

　孝一は最初に栄子姉さんを見たとき、強烈に異性として意識した。

　しかし、孝一の朝食を学校に行く前、新聞の仕事が終わる時間に、毎朝用意してくれたり、孝一を実の弟のように扱ってくれる彼女から、少しずつ、異性という感覚はなくなっていったのである。

　栄子さんの母親は、早朝、離れた場所にある仕事場に向かう。彼女は孝一が顔を出すまで食事を待ち、必ず一緒に食べてくれた。

　孝一には兄や姉がいない。食事を一緒にしてくれ、学校まで同道してくれる栄子姉さんの優しさが、実姉に思えるほど惹かれた。

　この生活は九月まで続いた。

Ⅳ

　この生活に変化が出来たのは、九月になる少し前だった。

　この頃は又、麻浦の鄭養湖の家に居候していた孝一のところに夜遅くなって訪ねてきた男がいた。中央日報の配達員で孝一が可愛がってやった、高校生である。

　彼は手紙の束を持って訪ねてきたのだ。

　これは、ペンパルの山田明子からの手紙であった。

「李班長、手紙が届いたら皆、所長がゴミ箱に捨てたのです。いくつかは拾えませんでしたが、ほとんどは僕が保管して持ってきました。読んであげて下さい」

　彼は五通ばかりの手紙を、孝一に手渡した。

「ありがとう。君に迷惑はかからないか？」

「大丈夫です。誰にもこのことを知られていませんから。読んで返事を書いてあげて下さい。きっと喜んでくれますよ」

　配達員は帰っていった。孝一は手紙の束を取り、日を追って読み進んでいった。

　最初のうちのは、ありきたりのものだったが、返事がなくなったあとの二通は、孝一のことを心配する気持ちが、痛いほど伝わってくるものだった。

　最後のものには、日本に帰国することに成功して、すでに日本にいるのではないか、などと書かれていた。

　読み終わった孝一は、すぐに机に向かって近況を知らせる手紙を書き、翌日投函した。

　宛先を、韓国日報社にしておいたので、六日して返事が配達された。

　孝一は、韓国日報社の事務室でこれを受け取った。

　彼女には、日本語の宛先がどのような意味を持つかわからないのだから、当然の如く日本語で書かれている。

　印象としては、中央日報社の場合とは違うとは思ったが、一応所長に、自分が日本人だという事実関係を説明した。

「君が日本人？　完璧なハングルからも、それは信じられないところだが、もしそれが事実としたら、部下がこれまでのように言うことを聞くだろうか」

　所長は、大変に困った顔をして言った。

「僕もそれを知ったのは一昨年の暮れなんです。それまでは日本人だなんて思ったこともなかった。それが急に、実は日本人だと言われたんです。どうにも出来ませんでした」

「それはわかるけど、日韓の国民性に深い溝が出来ている。やはり感情的なことでトラブルになると困るな」

「皆に知られる前に、僕からやめた方がいいですかね」

「ああ、君の仕事ぶりには感服していたんだけど、それがベストかも知れないな」

　孝一には、半年くらい生活できる蓄えを持っていた。多分その内に日本に帰国することも許可されるだろう、と思って韓国日報をやめる決心をした。

「わかりました、明日からこちらに来るのをよします。皆には僕が病気を療養するんだと言って下さい。所長、いろいろお世話になりましてありがとうございました」

「残念だけど仕方がない。健康には十分注意して、日本に一日も早く帰ることが出来ることを祈っている」

　所長は手を出してきた。孝一はその手を強く握りかえした。

　これで、またも仕事を失った。だけど、前の中央日報のときとは異なり、山田明子に返事を出したときに、ある程度このことを予測しており、結果的には、安らかな気分に満ちていたのである。

　うなぎ屋の部屋に戻り、彼女からの手紙を読んだ。半年近く連絡が途絶えて突然、便りが来た驚き、その間に気を揉んだこと、そして、新しい職場に移って張り切って仕事をしていることが窺えたと書いてあった。

　勿論、彼女からの手紙で、前の勤め先を追い出される結果となったことなど、知る由もなかった。今日、現在の仕事も辞めることになったことなど、予想もしていなかったのである。その後に全く、予想外の文章が書きこまれていた。

『前にうかがったけど、孝一さんのお仕事は十時頃には終わってしまうのでしたよね。その後でいいのですが、日本から行く、ベースボールチームのお世話をしていただきたいのです。九月の始めに開かれる韓国の国民体育祭に、在日韓国人のチームが、今年から初めて参加することになりました。その方たちの面倒を見ていただきたいのです。監督の人が知り合いなのですが、ハングルがとても下手なので、通訳もお願いしたいんです』

　仕事がなくなって、時間に余裕が出来た孝一にとって、造作のないことだった。

　しかし、仕事を辞めてしまったと便りをすれば、それなりに心配するだろう。

　孝一は、彼なりに考えた設定を、手紙に書いて送った。

『ここに勤めて半年、一度も休まずに仕事をしてきました。所長と話し合った結果、十日間の休暇をもらえることになりました。その方たちがいらっしゃるときは、案内と応援はまかせて下さい。明子さんも満足してもらえるように、お世話します』

　在日韓国人のノンプロチームは、韓国の野球チームから見ても技術的に優れており、来韓が期待されていたのである。

Ⅴ

　野球チームの、韓国到着の日が来た。孝一は日本語で『歓迎！　在日韓国人野球チームご一行様』と書かれた看板を手に仁川空港まで迎えに出た。

　大韓航空の定期便が、定時に到着したのだが、なかなか選手団が降りてこない。

　最後に近くなって、大きなボストンバッグやバットケースなどを手に持った、身体が大きく色の黒い一団が出てきた。

　これが、在日韓国人野球チームの、メンバーである。まず年配の男が、孝一のプラカードに気がつき、こちらに歩いてきた。

「ミスター・リー・ヒョウイル？　私は野球団の団長、金順守です。山田明子さんから紹介いただきました」

　これは日本語である。

「イー・ヒョウイルです。日本名は蓮本健次といいます。この度は、皆様のお世話をさせていただくことになりました」

　挨拶を返し、チームの一群を眺めた。顔や雰囲気はその場に合っているが、話す言葉だけはハングルではなく日本語だった。

　まず、宿舎とされているソーリン・ホテルに案内する作業から、孝一の仕事は始まった。

　ホテルに着くと、部屋の割り振りは決まっているが、中の設備に対する説明、従業員への応対などを皆に教えた。

　ホテル側でも、日本語が理解できる従業員を揃えてくれていたのである。

　夕食を外でと考えたが、他に神経を使わないように、ホテルのディナーで済ませた。

　翌日は、野球場で公式の練習を行い、翌々日から国民体育祭の試合が始まった。

　実力に差がある在日のチームは、国体の試合に五勝して優勝した。

　孝一は試合場では、応援のない在日のチームに声をからして声援を送り、試合後は全員の食事の世話から、洗濯の手配、健康の維持までに必死で心を配った。

　チームの団長、金氏は孝一の働きに、いたく感動した。そして、孝一を自分の部屋に呼び寄せ、話し出した。

「孝一君、君の気配りで、無事に我々の実績を挙げることが出来たよ。君、いつ頃、日本に帰国するんだい？」

　孝一は、在日チームが来韓する前日、出入国管理局に行って、様子を聞いたところ、まだ正式な決定は降りていないと言われた。

「僕の場合、外国人登録法に触れるところがあって、すぐには帰国できないのです。今年中は勿論、来年もどうかと……」

「そうなの。ところで、国体中ずーっと付き合ってくれたけど、今、お仕事は？」

「あなた方が来るまで、新聞の配給所で総務係をしていました。各戸に配給する係の面倒を見る仕事なのです」

「それを、やめてしまったの？」

「山田さんから聞いていると思いますが、僕は純粋の日本人なのです。韓国人が日本人に指示されて仕事をするということは、いろいろな問題が起きるのですよ。それが山田さんからの日本語の手紙で、バレてしまって辞めざるを得なくなりました」

　自分から辞めたのだが、これは前の中央日報のときと混同してしまった。

「そうだったの。それは気の毒なことをしてしまったな。そんなことも知らずに、全面的に世話になってしまって、ご免なさい」

「いいえ、そんな時期に来てたのですよ。いずれはわかってしまうことなんです」

「それにしても、ハングルは完璧に使っているね。どこでならったの？」

「赤ん坊のときから韓国人として育てられたものですから。日本語の方はまだ二年弱しか勉強していません」

「それにしても日本語も見事なものだ。君が日本人であっても、仕事をしてもらいたいという企業があったら、働く気があるかい？」

「勿論です。身体を使う仕事だって、何でもかまいません。働きたいのです」

「実は、僕の親戚で、日本からパイプを輸入している会社の経営者がいるんだ。そこで人を探している。日本のセキスイ化学という企業から、ポリエチレンパイプを輸入して、どんどん、実績を挙げているんだ」

「パイプですか。今、水道工事はどこでもやっているし、ポリエチレンのパイプを使うんでしょう、材料として凄い人気でしょうね」

「仕事が急に増えて、人手がいくらいても足りないそうだ。今、そこの会社は材料として現場にパイプを納めているのだけども、それだけでも、相当な利益が見込めるらしい」

「工事はやってないのですか？」

「やってないのではないかな。ここなら、君が日本人だからといって、特別な問題は起きないし、逆にメリットも考えられる」

「セキスイ化学という日本の企業、大きな会社なんですか？」

「ああ、日本でも超一流の会社だよ」

　金団長は、微笑みながら、孝一の顔を見ている。そこには暖かい信頼関係があった。

「団長さん、ぜひ、僕をそこに紹介して下さい。働くことは人に負けませんから」

「勿論ＯＫだ。じゃ、明日の午前中、そこに行こう。その社長の会社は……」

　団長は、メモを取り出して眺めている、孝一が覗くと、その会社は建豊商事という名前で、市街の中心部にあった。周囲はビジネス街である。

　早速、翌日の十時に団長同道の上、建豊商事を訪問した。団長はハングルが話せず、孝一が通訳することになる。

　建豊商事の社長は団長の推薦以上に、孝一を気に入ったみたいである。

この就職は、その場で決まり、週が明けてからの勤務となったことからも明白だ。

　野球団はその日の夕方、大韓航空の飛行機で日本に帰っていった。　孝一は、機影が見えなくなってもロビーで手を振っていた。

　ある意味では、とても充実した八日間だったのである。

Ⅵ

　週が明けて、パイプ屋の建豊商事に出勤した。社長が従業員に孝一を紹介した。

　これまでと違い、昼間の時間をすべて、パイプ屋の仕事に使わないとならなくなって必然的に、日本語学校には通うことが出来なくなった。栄子姉さんともお別れである。

　最初は、仕事の流れを知るために、古手の社員について動きを知り、彼の命ずるままに仕事をしていたが、あまりの、無駄の多さに絶えられなくなってしまった。

　一ヶ月は我慢していたが、自分なりに考えたことを社長に直訴した。

　これは、パイプの現場への運搬方法についてである。

　どのような話し合いになっているのか知らないが、十三ミリのパイプ百本でも、出入りの運送屋にトラックを配車させ、現場に配送させる。荷台はすかすかだ。

　これでも、一台分の配送料がかかる。

　残念ながら、自動車の運転免許を持っていない孝一は、自転車とリヤカーを使って、市内のほとんどに配送した。

　材料屋が現場に行くことのメリットは、数え切れないほどある。

　納品された材料としてのＰＶＣパイプ（ポリエステル・ビニール・クロライト）は時代の先端を行く新製品だった。

　従って、非常に新しい技術の製品を、どのようにして改良し、使うかが確立されていなかったのだ。それらの疑問点を整理し、日本の本社技術部に質問状を送る。

　その全てが役に立つわけではないが、回答を現場に教えて喜ばれることも多かった。

　孝一は、最初の給料で国産の腕時計を購入した。但し、その時計は南大門市場の入り口で、――米軍の時計が火災にあったのを手に入れた、こんな高級な舶来時計を、あなた方が持っている国産の腕時計と取り替えてあげる。と言葉巧みに道ばたで商売している詐欺師の腕に引っかかって失ってしまった。

　この時計は、翌日になると動かなくなってしまったのだ。

　加工上の問題は、パイプを接続するジョイントの製作だった。ポリの材質から、溶接機やバーナーを使って温めると柔軟になり、パイプの上にかぶせて接続できる。そして冷めると収縮し、作った曲線が密着して曲線のジョイントとなるのだ。

　これは、作業の手段上、工事をしている現場で工作しなければならない。

　この作業をわけなく仕上げる孝一は、現場で作業員から尊敬の視線で見つめられ、仕事が終わると酒をすすめられた。

　毎回付き合うこともあって、こんなことで必然的な酒の飲み方を覚え、酒にはめっぽう強くなったのである。

　孝一が持つ作業員としての腕の良さを、認めた社長は、孝一に、独立して仕事を取ってくるフリーランスの資格を与え、自由に仕事をやらせてくれるようになった。

　そして、西大門にある社長宅には、よく遊びに行くことになった。ひとつ下の息子と仲良くなり、将来のことを話し合ったりした。

　社長はハンチングに凝っていて、キジ撃ちによく孝一を連れて行ってくれた。

　そのお礼というわけではないが、犬の訓練にすっかり没頭した。この犬は、猟犬として素晴らしい能力を発揮した。

　孝一は、現場で仕事を受注し、それの配管工事を請け負うようになった。

　仕事は、水道工事ばかりではない。一度は八階建てのビルに張られた、雨樋の交換の仕事を受けた。まず、現在取りつけられているトタン葺きの雨樋を取り除かなければならない。屋上から簡易なリフトを設けてロープを室内に入れた。

　このあとが、現場の体験不足である。足場の両側を止めているロープを、何と、このビルに働いている若い女性のお手伝いさんに小遣いを上げ、保持を頼んだのだ。

　これは失敗だった。基本的に力不足で、五〇センチくらい降ろしてもらいたいのに片側が一メートル以上降りてしまう。

　反対側も同じことで、足場が水平を保つことはなかった。結局、人足を頼んできて、作業を行わなければならなかったのである。

　この仕事をやっていて、お金が儲かったのは、パイプの切れ端を利用した、靴べら販売の成功だった。切れ端をＳ字型に削り、ヤスリをかけて、スムースに加工したものが人気を呼んで、市場から注文が来たのである。

　忙しくなると、事務所の隣の部屋で寝ることが多くなった。

　一九六八年の冬になった。この時期の暖房も、練炭のコンロを燃やして暖をとっていたのである。コンロを置いてある部屋は、換気に気を遣わなければならなかったのだが、書類作りに夢中になっていた孝一は、ついそのまま隣の部屋のベッドに潜り込んで、眠ってしまったのだ。

　朝になって凄い力でゆり起こされ、頬を張られた。目を開くと、仕事で使っている助手の顔が、すぐ近くに見えた。

「李さん、どうしたのですか、危なく死ぬところだったのですよ。この匂いを嗅いでみて下さい。ガスが溜まって危なかった」

　見回すと、窓は開かれ冷たい空気がどんどん部屋の暖気と換わっている。

　危ないところだった。この頃韓国では、暖をとるための練炭中毒で、年間に数知れない人が亡くなっていたのだ。

　春が来て夏になる。セキスイのパイプは公共工事に使われ、ソウル市の水道工事が、どんどん利用していったのである。

　孝一の仕事も順調だった。良心的な価格を設定し、パイプの納品から加工、ジョイントの製作、その内に掘削工事の下請けまで持って、土木工事までも行っていた。

　利益は十分に上がり、かなりの資金がプールされた。

Ⅶ

　どんなに忙しくても、毎月一度は出入管理局に顔を出して、帰国の可否を尋ねた。

　十月までの返事は、法律がまだ、整備されておらず、帰国は無理であると答えられた。

　山田明子からの手紙は、帰国の予定ばかりを問うてくるようになった。

　仕事も順調に動いており、建豊商事からは法人化して、この仕事に本腰を入れるように言ってくるが、日本に帰国することが、ほとんど決定している孝一には、とても出来ないことだった。

　一九六八年十二月末になって、仕事のついでに出入管理局へ問い合わせのため顔を出した孝一に、とんでもない申し出がなされた。

「あなたは、帰国のため、これまで犯してきた外国人登録法違反に対する罰金を払うことはできますか」

「罰金？　なんでそんなものを払わないとならないのですか。僕は法を犯していたつもりはないし、冗談ではないですよ」

「今のところは、解決するために罰金処理が一番いいんだけどな。そうか、水道工事の人夫だから、高い罰金などは払えないか」

担当者、は孝一が着ている作業着を上から下まで眺めて言った。

「罰金は高いのですか？」

「違反の期間が二十年だから、相当の額になるだろう。これは、裁判官が決定する金額だから、いくらと具体的にはいえないが」

「裁判なんかになるのですか……だったら日本に帰国することなんかない。このまま韓国で生活しますよ」

「それも無理だと思うな。日本人としてパスポートが出ているんだから」

「じゃあ、どうすればいいのですか。今年中に決めて、ここに電話して下さい」

　孝一は、連絡先に使っている電話番号を書いて管理局に置いてきた。

　罰金は相当な額になっても、支払うだけの資金は貯まっている。

　しかし、法を犯しているという意識は、どうしても涌いてこなかった。

　年が明けてもう一度、管理局で交渉した結果、同じような答えしか返ってこなければ自分で命を絶つつもりで、心を決めた。

　建豊商事の社長には、年が明けたら日本に帰国することが決まったので、商売の方は今年いっぱいで終わりにすると告げた。

　連絡を取り、正月休みに、大田の父親のところに行くことにした。ここで父と妹弟に会って、最後の会合とするつもりだった。

　夕方、太田駅に着くと驚かされた。駅長がプラットホームに迎えに来ていたのである。

　そして改札を出ると、ひとかたまりの人たちが、大きな声を挙げて迎えてくれた。

　その中ですぐに見つかったのは、善と享竜である。ふたりは一群の人から離れて孝一に向け走ってきた。

「お兄ちゃん。元気そうだね」

　享竜が、愛敬のある顔を崩して足にまとわりつき、声をかけてきた。

「竜も元気そうだな。学校には慣れたか」

「うん、すっかり慣れたよ。今。漢字を習ってるんだけど、お兄ちゃんと河原で勉強したから、簡単なものさ」

「そうか……善も中学だよな。いい友達は出来たか？」

　享竜の肩に手をかけて微笑んでいる、善の顔を見て声をかけた。

「こっちの人は皆親切よ。社長の息子さんと同級生なの。とても良くしてくれるわ」

「それは良かった。何といっても友達が一番大事だからな」

「孝一、ご無沙汰している。お前もすっかり大人っぽくなったな。頼もしく見える」

　人の群れから、父親が一歩歩み出て、声をかけてきた。すっかり落ち着いて、軍隊時代の風格すら窺えた。

　来ていた人たちは、父親が世話になっている建築会社の社長夫妻と家族、警察署長、銀行の支店長、商工会議所の所長等、太田市の経済人がほとんど全員集まっているような状態だった。これは、父親の勤めている会社の実力と、父親が一年間で築いた、これまでののキャリアを生かした実力を象徴するものと判断した。

　孝一は父親と妹弟とに会えれば、その日の内にソウルに帰ろうと思っていたが、父親とそんな話をする間もなく、世話役のような人が、乗用車に孝一を乗せて駅から出た。

　着いたところは、構えの立派な料理屋だった。門の横にしつらえてあるプレートに『李専務ご令息孝一氏歓迎会式場』という文字が書かれていた。

「ご子息様、どうぞこちらでございます。足許にお気をつけ下さい」

　世話役のような人が前に立って、孝一をどんどんと案内する。その後から、大勢の大人が着いてくるのだ。

　案内された部屋にはいると、すでに十人ほどの人が待っていた。孝一の顔を見て全員で拍手する。駅に迎えに来ていた人たちも、部屋に入って席に着いた。

　三十人ほどの席がある宴が始まった。臨席している人の顔ぶれを見ても、父親がこの街のかなりの位置にいることが窺えた。

　父親の扱われかたを見てると、大事にされていて、それなりの実績を挙げていることが見られた。これでは、日帰りなど出来る雰囲気ではない。

　その日の宴は、なり行きにまかせて終わりを待った。家族の参加もあり、思ったより早くに終わったのは幸運だった。

Ⅷ

　宴会のときにも感じたのだが、新しい母親の雰囲気が変わったことには驚いた。

　自分の息子よりも、善と享竜に対する接し方に違いが見られた。

　家族で家に帰ってきてからも、この空気は変わらない。何しろ、父親に注がれる目つきが違うのだ。信頼感に満ちており、愛情深いものに変わっていた。

　父親と応接室で話した。

「新しいお母さんは変わりましたね。これまでとは違う人みたいです」

「そうかな、私には感じないが……」

「善や享竜に優しくなりました。自分の子が可哀相な気がします」

「平等に扱えといったからな。ところで、帰国はまだ決まらないのか」

「前の手紙に書いた通り、外国人登録法違反があって、その法律を整理しなければならないんだそうです。でも今月中にはどうやら決まりそうです」

　決まっていないが、孝一の気持ちに、ひとつの割り切りが出来ていた。どうなってもこれで会うことはないと……

「そうか、ついにお別れのときがくるか。どうだい、正月休みの間、ここの家にいてのんびりしていけばいい」

「そうはしておられません。いつ帰国の通知がくるかわからないのです。連絡が取れるところにいなければ……お父さんと善、竜に会えたら、そのまま帰るつもりでした。明日一番の汽車で、ソウルに戻ります」

「決まったら、こっちに連絡してもらえばいいじゃないか。役所が始まったら、父さんが連絡してあげるよ」

「それでは僕の気が済みません。やはり連絡があったら、すぐに動けるところにいないとまずいのです」

「もう、私には孝一にどうこう、意見することが出来ない。君にはどうしても返せない借りがあるんだからな」

「それともうひとつ、お願いがあります。このお金、決して悪いことをして得たものではありません。新聞配達と、パイプ屋の仕事で稼いだものです。僕は日本に行ったら、ゼロからスタートするつもりなんです。このお金を、小切手事件弁済の一部に遣って下さい」

　孝一は、銀行で発行した二百万ウォンの小切手を差し出した。

「こんな、もの凄い金額を貯めたのか。お前の気持ちはよくわかるし、とても嬉しい。しかし、これはもらうわけにはいかない。私と債権者の間には、きちんと話し合いが着いていて、弁済の方も順調に実行されている。そろそろ見通しも着くころだよ」

「お父さんは、そうおっしゃると思ってました。でもウォン貨をこんなに持って出国できないのです。これだけの預金があれば、これに近い金額の罰金を取られるのですよ。お父さんに遣い途をお任せします。善や享竜の学費の足しにでも遣って下さい」

「孝一……お前って奴は、凄い能力を持っている。日本に行っても仕事で成功すると思うよ。韓国から持ってでられないのなら、私が預かろう。仕事の資金で必要になったら、いつでも言ってこい」

　父親は、小切手を受け取った。そして、孝一が主張する、翌日の帰ソウルを了承せざるを得なかった。

　翌日は激しい雪だった。駅に来てもらうのは父親と善、享竜のみにしてもらった。

　駅では、あまり話すことはなく、無言でお互いの眼を見つめ合った。

　列車の発車時間が来た。ゆっくりと動き出した列車に導かれるように、三人の家族が歩き出し、途中から走り出した。

　すぐに子供たちは、新雪に足を取られ着いて来られなくなった。父親だけは力強い足取りで手を振り、ホームを走った。

　何か叫んでいるようだが、降る雪と、汽笛と風を切る音にかき消されて、孝一には聞こえなかったが『孝一、ありがとう。いつまでも元気でな』と言っているように思えた。

　ホームの端で手を振っていた父親は、激しい雪ですぐに見えなくなったが、孝一の網膜にはいつまでもその姿が写っていた。

　ソウルに帰ってきてすぐに、出入国管理局に出頭した。新年の役所は、まだ機能していなかった。日本人担当の答えは、前回と一緒で、法律が、改正されない以上、帰国許可は出来ないとのものだった。

　パイプの仕事は、もう辞めている。泊まる世話を見てもらっている、鄭養湖と一緒の時間が多くなった。

　養湖は、時間に余裕がある友人を積極的に誘って、孝一と会う機会を作ってくれた。

　久しぶりに、高校時代の友人と会い、いろんな話をすることが出来た。皆、大学に通っていたり、軍隊に入って兵役を過ごしたりそれぞれの生活を持っているが、孝一にはそれが特にプレッシャーとならなかった。

　この集いでは、孝一の国籍問題はタブーになっており、強いて触れる人間はおらず、皆が自分の現状についての話が多かった。

　一月ももうすぐ末日になる。孝一は最後の望みを携えて、管理局に行った。

　担当の対応は同じだったが、これは予測済みだった。

「あなたの場合は、意識して国籍を偽り、滞在していたわけではないので、実刑というわけにないかないんだ。だったら、罰金刑で済まさなければならない。一回の裁判で終わるケースだ。裁判を受けてみないか？」

　担当官は、腕組みをしながら言った。

「罰金といってもかなりの額になるのでしょう？　水道工事の職人ではとても払えないような。そんなの無理ですよ、じゃ、出した書類は返して下さい。日本に帰るのは諦めました。僕はこのまま、韓国人として……」

「それは出来ないよ。日本国が認めた国籍なんだから。パスポートがあるんだ」

「だったら僕にどうしろというのですか、韓国に住むことは出来ないし、日本にも帰れない。わかりました、このいきさつを遺書に書いて、漢江に飛び込んで死んであげます」

「待ってくれ、局側の姿勢を今月中に決めるから。慌てて早まるんじゃないぞ」

　孝一の真剣な態度から、ハッタリや冗談でないことを感じたのだろう。担当官は、初めて真剣な対応に変わった。

　このときに、孝一は帰国が近く決定されることの確信を得た。

　翌日は一月三〇日、昼間は何の連絡もなかった。養湖も孝一から話を聞いて、気にしていたようだが、夕方五時を過ぎたときに、孝一の部屋に入ってきて口を切った。

「役所の終わりの時間が過ぎたな。今日はもう連絡はないだろう。実は仲間の七人に連絡を取って、七時にＸＸＸに集まるよう手配したんだよ。だからその時間に行こう」

「うん、昨日の様子だと、今日は連絡があると思ったんだが。五時を過ぎたら、今日の連絡はないな。いつも気を遣ってくれてありがとう。さあて、今夜は飲むか」

　その気になったときに、ドア越しに声がかかった。

「あのー、管理局の宗さんという方から、孝一さんにお電話です」

　店の客室係の女子から連絡であった。宗という名前は、出入国管理局の、日本人担当者のものである。

　すぐに客室まで行き、受話器を取る。

「李孝一ですが……」

「蓮本健次君か。書類が揃った。もういつでも日本に帰国出来る」

　孝一は腕時計を見た、もうすぐ五時半である。役所の終業時間はとうに過ぎている。

「これから、急いでそちらに受取りに行っても、六時半近くになってしまいます」

「構わないよ、来るまで待っているから」

　宗係官の言葉だった。

Ⅸ

　書類が揃って、いつでも帰国出来る許可も降りたというのだ。しかも定時を終えた宗係官は二時間近くも、孝一のために待ってくれるという。よくわからないが、昨日の――漢江に飛び込んで死んであげる。という言い分が効果を発したとしか思えない状況だ。

　どうせ、養湖の手配で友人と会うのも、このソウル市役所近くの飲み屋だった。

　孝一は、身の回りのものを入れたボストンバッグを手に、養湖と連れ立って路面電車に乗ると、出入国管理事務所に行った。

　宗係官は、待っていてくれて、すぐに帰国に必要な書類を手渡した。

「まず、日本国の旅券だ。出国勧告の命令書はこれだ。最後に大韓民国法務長官が発行した出国許可証がこれで、この三つで明日にでも君は日本に向けて出国できる」

　これまで、決して好ましい面持ちではなかった宗係官の顔が、何とも素敵な、いい感じの顔つきに思えたのである。

「宋さん、ありがとうございます。早速、明日、釜山に行って船で日本に渡ります」

「そうか、この書類は全部、君が日本に着くまで必要なものだから、大事にするんだよ」

「勿論です。本当に有難うございました」

　孝一は書類を手に、管理局の外に飛び出した。養湖が走り寄ってくる。

　いつの間にか、もの凄い大雪が降ってきていた。しかし、この雪も、積もった雪も、明るく街を照らしているように思えた。

　孝一は、昼間の街のように感じながら、皆が待つ居酒屋まで走った。

　店には苦楽を共にした七名の友人が、雪をものともせずに集まっていた。

　店で調べてもらい、釜山行きの夜行列車があることを知った。定期船の時間がわからないので、この夜行列車で釜山まで行くことにした。その列車に乗るには十時頃に、この店を出なければならない。

　それまで三時間、全員の飲み干すアルコール量は、極めて多かった。しかし、いつもの宴と違い、雰囲気は重苦しく、言葉の数も少なかった。別れのつらさは、伏せられた神露の瓶に表された。

　結局、全員が金を出し合い、この七人の代表として鄭養湖が釜山まで孝一に同行することになった。

　時間となり、全員でソウル駅まで歩いた。

「君たちが失うのは僕ひとりだけど、僕は全員、八人を失うことになる」

　叫ぶように発する、孝一の声に皆は、答える術を持たなかった。

　手に持った神露を雪で割り、がぶがぶと飲みながら肩を組んで歩いた。

　夜行列車は、定刻に発車した。孝一は、あれほど飲んだのに、ほとんど酔いを感じていなかった。

　さすがに養湖は、すぐに眠ってしまった。

　孝一は窓から、景色を眺めて記憶に止めようとしたが、激しい降雪で視界は閉ざされてしまった。それでも窓の外を眺め続けた。

　朝、釜山はみぞれ交じりの雪だった。

　下関行き韓水丸、関釜定期船は夕方の出航でまずは切符を買ってから、日本に着いたらお金がいるからと思い、光腹洞の金銀房にて純金の指輪をふたつ買った。

　残ったウォンは、全額、養湖に渡した。

　これから、東京まで二泊の旅になるが、食べる物がなくても、これまでの経験から、そのくらいなら何とかなる。

　出発までまだ時間があるので、竜頭山にのぼり、養湖と又、別れの酒を飲んだ。

「いつか、生きて又会えるときは、ソウルで一番の朝鮮ホテルで酒を飲もうよ。昨夜の連中みんなとな」

「絶対だぞ。いつその日が来るかな。孝一のことだから、五年ぐらいたったら、そうなるかも知れない」

「五年は無理だろう。そのころは、学校で勉強しているかも知れない」

　ふたりは、顔を見合わせることなく、海を見ながら話していたが、お互いの心の中は深い悲しみに充たされていた。

　港に行く。二十一年間、生まれ育ったこの国とさよならのときが近づいた。

　韓水丸という船は、三百トンくらいと小さい。この船に養湖と乗ったり降りたり、別れがたい心境を交換した。

　いよいよ船が出る、その直前にタラップのところで、強く抱き合い別れを告げた。

　出航の笛が鳴る。岸にいる人に見えないように煙突の陰に隠れた。笛の音がまるで、ハンマーで頭を殴るような痛さをもたらす。

　頬を濡らす水は降りしきる雨か、涙か。その両方だろう。

　客室に降りた。泣き疲れたのか、いつの間にか眠ってしまった。覚えられないような夢を沢山見た。家族、友人、日本大使館のスタッフ、出入国管理局の宗さん、これらの人たちが、無定見に現れては消える。

　夜の玄界灘、悪天候で船が大きな波にもまれ、転覆しそうだ。

　一夜明けたら、昨夜の悪天候は夢のように上がり、静かに波を切って走っている。

　孝一はデッキに上がってみた。

　左舷に陸地が見える。砂地に緑の植物が綺麗だ。あれは松だろう。

　いよいよ日本に到着だ。

　孝一は、この時間から、蓮本健次という名前に変わったのである。

　　　　　　　　第一部、韓国編完了

朝鮮戦争　年表

　朝鮮半島、南北のほぼ中央に北緯三十八度線がある。六十年前、その場に立つと別に境界線のようなもので区切られていたわけではなく、変哲もない景色が展開していた。

　しかし、この見えないラインは、大きな政治的意義を持つ。

　すなわち、一九四五年八月十五日、第二次世界大戦が終焉を迎え、この朝鮮半島も日本の支配から解放されたのだが、日本軍の武装解除のため米ソの担当区域を決めたのが三十八度線なのである。

　少なくとも、この時点ではこのラインは国境ではなかった。　北と南に分断されていても同じ外貌で、共通の言語、食物、衣服、習慣を持ち、民族としての誇りも同じように持っているのが、この半島の住民なのである。

　イデオロギーの違いから、この三十八度線をめぐって小競り合いはあったが、戦にまで発展するようなものではない。

　一九四八年八月十五日、南が大韓民国として独立した年末まで、国境の警備は米ソの軍隊が受け持っており、この両大国の軍勢が戦闘することはあり得なかった。

　もし、両国が激突すると冷戦が熱い戦いとなり、第三次世界大戦に発展するからだ。

　ところが、残留していた米軍の第七師団が一九四九年六月までの撤退を発表すると、国境付近で北の挑発が顕著になってきた。

　思想の違いだけではなく、三十八度線は北と南の経済に大きな格差を設けてしまったのである。北は険しい山岳地帯が多く、農作物などもさほど豊富には収穫できない。

　産業も、鉱業以外は特筆すべきものはなく、慢性的な食糧不足は北朝鮮の人民を飢えさせ、貧困に追い込んだ。

　一九四九年は、国境付近で小規模な争いが見られたが、これとて、とても戦というようなものではなく、夜盗に毛が生えたような食料の掠奪が主体だった。

　しかし、こんな小さな争いでも、少しずつ不穏な空気が境界線の付近を充たしていたのである。

　そんな一触即発の状態が一九五〇年になると一変し、何故か平穏な日々が過ぎていた。

　ところが、雨天の一九五〇年六月二五日午前四時、一斉に轟く重砲の砲撃によって、朝鮮戦争が勃発したのである。

　ソ連から提供された、戦車二百五十台や航空機までをも備え、圧倒的有利な機動力を駆使し、豊富な砲弾を一気に放って三十八度線を突破してきた北の軍勢、十三萬五千人に対して、米軍が残していった装甲車と、射程の短いバズーカ砲程度の軍備しかない、九萬八千人の南の軍勢で対抗するのだから、優劣は火を見るより明らかだった。

　韓国軍の上層部は前夜、米軍の将校たちと宴会があり、大半は就寝中だったといわれる。

　手始めに、当時、韓国領だった開城市が四時間後に、北の軍勢によって制圧される。

　春川市を護る韓国軍最強の第六師団も、北の攻撃を受けて後退を余儀なくされた。

　東部海岸の臨川、浦項には船による北の軍勢が上陸、韓国軍と戦闘態勢に入った。

　午前十一時、北朝鮮が「韓国側の挑発に対抗する措置」と公式な開戦宣言。

　午後十九時に、朝鮮人民共和国々務省が第一回目の戦況発表。「南鮮軍が、三十八度線全域にわたって奇襲攻撃を行ってきた。北朝鮮治安部隊および警備隊がこれを撃退し反攻、戦闘継続中」と現況を告げた。ここでも事実と異なる内容が発表された。

　翌、二十六日朝、金日成が「李承晩軍による全面的な侵攻で我が国に重大な危機が迫っている」と全国民に決起、総動員を訴えた。

　午前中に、ソウルの防壁となるべき議政府が北の軍勢によって占領され、韓国第二師団が全滅した。韓国政府はソウル南方の水原に遷都を決め、李承晩大統領は移動した。

　夜、北朝鮮の航空機が、ソウルに小規模な爆撃を行う。

　二十七日午前九時三十分。北朝鮮軍はソウル市内に進攻開始、しかし、防衛に当たるはずの韓国軍第一師団の反撃はほとんどなかった。水道・電気は止まり、政府機構などはすべて閉鎖されていた。

　六月二十八日午前二時十五分、漢江人道橋と鉄道橋を爆破して、韓国軍はソウルを撤退し、市民の多くや、軍隊の三個師団、韓国軍本部、米軍軍事顧問団なども取り残された。　橋を爆破したとき、その上にいた市民や将兵など多くが犠牲になったという。

　午前十一時三十分、北朝鮮の第三師団がソウル市内中心部に突入、ソウル市のすべてを掌中に納めたと発表されたが、現実にはその日の夜遅く、散発的な市街戦の末、大韓民国の首都が陥落し、市内には赤旗が林立した。

　北の軍勢は怒濤の勢いで南下、次々に拠点を占拠していく。

　七月に入り国際連合軍が韓国軍を支援して参戦してきたが、北の軍勢の侵攻を阻止できず、七月四日、韓国軍、水原から撤退、臨時政府を大田に設ける。

　七月十四日、韓国政府は大田を撤退、十六日に大邸に臨時政府を置く。

　七月二十日には大田が陥落した。

　八月に入ると戦線は更に南下し、晋州から馬山にかけての攻防戦と、中旬には北鮮軍が洛東江を渡河して、倭館南方から大邸をうかがう位置まで攻め込んできた。

　八月十八日、韓国政府は大邸から釜山に撤退、臨時政府を設立する。

　大邸、浦項、晋州、馬山などで激しい戦闘が続き少しずつではあるが、連合軍は南に押し込まれていった。

　とうとう、九月には釜山で円陣を敷き、最後の砦とせざるを得ない状態となった。

　九月十五日早朝、連合軍は七カ国、五万人の兵員と二百三十隻の艦船による仁川上陸作戦を開始して成功、反撃に転じた。

　その日のうち、仁川の橋頭陣地を確立した連合軍海兵師団は、午後、仁川・ソウル間の国道を封鎖し、午後六時、米軍地上部隊は金浦飛行場の奪回を目差して侵攻する。

　時を同じくして、米海兵隊が東海岸の盈徳に極秘で接近、世界最大の戦艦ミズーリ号が放つ十六インチ巨砲の援護を受け、特殊訓練を受けた韓国軍コマンド部隊が浦項の北、北朝鮮軍の背後に奇襲上陸し戦果を挙げる。

　西海岸の群山にも、国連軍が上陸した。

　九月十六日深夜、第五海兵連隊、金浦飛行場を奪回占領、三度の北の反撃も撃退した。

　九月十七日午前七時三十分、米空軍の偵察機が金浦飛行場に着陸、午後からは米軍部隊の輸送機が次々に着陸した。

　九月十八日、大邸を奪回すべく米軍歩兵師団は洛東江西岸に橋頭陣地を作り、倭館に迫った。翌日には倭館を制圧する。

　九月二十二日、大邸戦線の力山が韓国軍第一師団によって制圧される。北鮮兵士は、夜間脱出を目論むが、大半が洛東江を渡河中に掃討され、死亡するか捕らえられた。

　九月二十三日、北朝鮮軍、全軍に戦線からの退却を指令。

　九月二十四日、漢江南岸を制圧、ソウル駅から二キロの高地を占領。

　九月二十五日、午後五時の連合軍は竜山停留場を見下ろす山の頂上に、星条旗をひるがえした。マッカーサーはこの時点で「連合軍がソウルを奪回」と発表したが、このあと三日間に亘って、激しい市街戦があったのだ。

　九月二十七日、ソウル市内をほぼ手中に収めた連合軍は、形成は一気に逆転し、九月二十八日にはソウルを完全制圧、奪回する。

　ソウルと釜山の連合軍に挟み撃ちされた北朝鮮軍は敗走し、三十八度線を越えて一気に押し戻され、十月二十日には勝ち進む連合軍が平壌を制圧した。

　その勢いはとどまることを知らず、中国との国境近くまで、追いつめたのである。

　ところが、北朝鮮は密かに中国に応援を申し入れていた。周恩来は十月二日に中国の参戦の可能性を示唆していたし、十月十日には毛沢東が「抗美援朝（北朝鮮の戦いを応援する）」の方針を打ち出していたのである。

　十月十九日には、中国人民義勇軍三十万人が鴨緑江を越えて狼林の山地に展開した。

　十月二十六日、中国人民義勇軍が本格的に参戦、雲山に集中的な攻撃を仕掛け戦果を挙げた。翌日、毛沢東により「義勇軍が北を支援する」と公式宣言された。

　十一月一日には、中国軍の第一次攻勢が始まる。まず、雲山西方の第八騎兵連隊に奇襲をかけて全滅させた。

　そして白兵戦の末、雲山の包囲に成功する。

　激しい戦闘の末、韓国第一師団は清川江南方まで撤退を余儀なくされた。

　十一月七日、中国軍は第一次攻勢終了。

　一進一退の戦闘は続く。十一月二十日に国連軍は満鮮国境の鴨緑江岸、楚山に到達するが中国軍の戦略的撤退で、包囲網にかかる。

　国連軍司令部は、中国軍がこれ以上の戦闘を望んでいないと判断して攻勢を開始した。

　十一月二十六日深夜、中国軍の第二次攻撃が始まる。清川江北側で二十万人の攻撃、清川江を渡河して猛攻を加えた。

　国連軍全部隊が、清川江の南に撤退、氷点下二十五度の、厳しい戦闘が続く。

　十一月二十八日「中国正規軍二十万人の参戦によって、新しい戦争に直面した」と

マッカーサー最高司令官が声明を出した。

　十一月三十日、トルーマン・アメリカ大統領の、原子爆弾使用発言もあった。

　十二月三日、国連軍、平壌放棄を決定。東海岸でも三十八度線の南に撤退を検討。

　撤退する国連軍と、行を共にした北の避難民が多数、南を目差したのも事実だった。

　十二月五日、北朝鮮のゲリラ部隊が平壌を占拠、その後中国軍が入った。

　十二月十五日には、国連軍の大半が三十八度線の南に撤退完了。翌十六日にはトルーマン米大統領が国家非常事態宣言に署名。

　十二月十九日、中国軍二十五万人と、北朝鮮軍十五万人が三十八度線地帯に集まり、春川北方で再び激しい戦闘が始まる。

　一九五一年一月一日、中国・北朝鮮合同軍は五〇万人の軍勢で三八度線を越え、第三次攻撃を始める。右翼の韓国軍が総崩れ。

　中国軍は人海戦術で国連軍を押し返し、一月四日、ソウルから撤退させ、一月十五日にソウル完全制覇を果たした。

　一月二十九日、国連軍が水原飛行場を奪還し、制空権が復活した。圧倒的な空軍勢力を背景に東海岸で勝利をおさめる。

　二月十三日、原州、北西三十キロの地点で砥平里の戦闘が三日に亘って交わされた。

　五個師団、一万八千人の中国義勇軍の包囲は、国連軍の機甲部隊によって阻まれた。

　この決戦が、後々の戦況に大きな影響を与える。制空権に加え、火力にも圧倒的な差を持つ国連軍は、中部戦線の主導権を奪回した。

　二月末、中国軍の漢江南の拠点を陥落させた国連軍は、ついに、三月七日には漢江の北側にまで進出した。

　中国・北鮮軍は追いつめられた。

　三月十四日に、激しい戦闘の末、中国軍がソウルを放棄し北に撤退、韓国軍が入城、十五日朝、国連軍の支配下に置かれる。

　三月十九日には春川が陥落し、中国・北鮮軍は三十八度線を越えて北に撤退する。

　三月二十二日には、連合軍が議政府を制圧し、更に北の軍勢を押し戻した。

　戦争というものは、人間の神経を狂気にさせたり異常なまでにたかぶらせ、あらぬ疑心暗鬼の種を植えつける。敵に追いつめられると、どこかに北側に内通している者がいるとの考えが脳裏を離れなくなるのだ。

　リーダーがこの考えにとりつかれると、対象とされた南の村落全員が虐殺される。

　殺戮を行う兵士も、異常な状況下に置かれて、その行為自体に罪悪感を感じない。

　これは韓国兵、国連兵を問わず共通の感情であり、行動だった。

　四月十一日、ダグラス・マッカーサー元帥が、国連軍最高司令官、およびＧＨＱ最高司令官を解任され、後任に第八軍司令官のリッジウェイ中将が任命される。

　四月十五日、北朝鮮が朝鮮問題の平和的解決を国連に要望した。

　しかし、戦闘は一向に冷却せず、金化・平康・鉄原の三つを結ぶ鉄のトライアングル地帯での戦闘、ソウルをはさんで小競り合いや、にらみ合いが続いた。

　六月になると、休戦の雰囲気が濃厚に漂ってきた。

　六月二十二日にソ連国連代表、ヤコブ・マリクが国連安保理で朝鮮戦争の停戦交渉を提案、三十八度線での停戦を呼びかけた。アメリカ側も同調。

　七月十日、朝鮮軍事会談第一回本会議が開城で開かれる。軍事境界線の設定、監視機関の構成、捕虜交換の方法等が討議された。しかし、停戦会談中も戦闘は続く。

　八月十七日、北朝鮮は国連軍が中立地帯を侵害したということで開城の軍事会議席上にて謝罪を要求。

　八月二十三日、中国・北朝鮮軍、国連軍の開城上空侵犯を理由に交渉中断、軍事会議は無期限の休会となる。アメリカ側も開城の中立性が保障されていないと言うことで、会談を続けることを拒否した。

　十月十日、国連軍最高司令官リッジウェイは、板門店での会談再開を提案、中国・北朝鮮もこれに応じる。

　十月二十五日、朝鮮休戦会談、板門店に会場を移して再開。

　十月三十一日、板門店の休戦会談で軍事境界線で合意、スェーデン、スイス、ポーランド、チェコスロバキアからなる中立国監視委員会が設けられた。しかし、このあと、捕虜交換問題で交渉難航した。北の捕虜約十三万人のうち、八万人が北への送還を望まなかったからだ。

　この間も激しい戦闘は続いていた。

　十一月二十七日、軍事境界線についての協定が成立した。三十八度線ではなく現実の接触線を休戦ラインとすることで双方合意。しかし、国連軍の板門店誤爆により休戦会談が中断、戦闘が再び激化した。

　十二月十八日、板門店で国連軍と北朝鮮軍が捕虜名簿を交換。

　この捕虜の交換問題が、休戦交渉を暗礁に乗り上げさせ引き延ばすことになった。

　一九五二年初頭、国連軍が捕虜の自由意志送還を主張したのに対して、北朝鮮側は無条件送還を要求し、双方の意見が食い合わなかったからである。

　五月七日、板門店での停戦交渉がこの問題で行き詰まり、両者の意見は平行線となる。

　五月八日、巨済島の捕虜収容所で北朝鮮捕虜による暴動が発生、所長のドッド准将を人質にして立てこもる。要求は「捕虜虐待の停止・自由意志送還の撤廃」だった。

　五月二十五日、七月の任期切れが近づいた李承晩大統領は、憲法改正、直接選挙による再選を目論み、釜山地区にゲリラ部隊が出現した、というデマを流して戒厳令を公布。

　六月二十三日、米空軍は鴨緑江の水豊ダムを爆撃、水力発電所も破壊して北朝鮮全土が停電、中国北東部も影響を受けた。

　七月四日、大統領直接選挙制を採用するための「抜粋憲法」が韓国議会を通過。

　八月七日、こんな状況下の大統領選挙で李承晩が再選を果たす。

　八月二十九日、米空軍が平壌を大空襲、延べ千四百機を超える空爆は、韓国事変で最大規模のものであった。

　十月六日、ソ連は大量のミグ戦闘機を投入してＢ２９の日中爆撃が不可能となった。

　十月八日、空転が続く板門店軍事会談は無期限の休会に入った。

　アメリカ大統領にアイゼンハウアー元帥が当選した。就任前の十二月二日、韓国を訪問し、三日間滞在、軍事協力と多額の経済援助を約束する。

　一九五三年一月二十日、アイゼンハウアーが大統領に就任した。

　三月五日、スターリンが死去、マレンコフが後継首相に就任した。

　三月末から四月中旬にかけて、各地で戦闘が繰りかえされた。

　四月二十六日、朝鮮休戦会談が板門店で再開される。

　五月十三日には、中国・北朝鮮軍が最終攻勢をかけてきたが、増強された韓国軍に跳ね返される。米空軍が空爆でトクサンダムや道路・鉄道を破壊する。

　五月二十五日、国連軍は停戦に関して最終提案を行った。

　六月四日、北朝鮮側は、国連軍提案の大部分を受け入れ、六月八日、南北交渉上、最大のネックとなっていた捕虜交換問題で「自発的な帰国が原則」で合意に達した。

　六月九日、韓国議会は「韓国提案を含まない休戦協定は認められない」と決議した。

　六月十日、これを受けてか中国・北朝鮮軍は鉄の三角地帯とすり鉢山の中間点、金城方面に大攻勢をかけた。十キロほど南に進出。

　六月十七日、南北交渉、最終的な休戦ラインが確定、捕虜送還協定が署名された。

　六月十八日、休戦協定を是とせず、戦闘継続を目論む李承晩は、共産主義に反対と声明したという名目で北朝鮮捕虜二万五千人を一方的に解放してしまう。

　六月二十日、中国軍は最後の攻撃を仕掛ける。金城付近の一週間にわたる漢江河畔の戦闘で、韓国軍が七四〇〇人、中国軍も六六〇〇人の犠牲を出した。アメリカは李承晩の説得を条件に、北側との交渉を進めた。

　七月十三日、停戦協定を目前にして中国軍六個師団が参加する中国・北朝鮮軍が最大規模の最終攻勢に出た。金化付近では韓国首都師団が総崩れ、その東方でも第二軍団が撤退を余儀なくされた。

　七月十六日、国連軍が反撃を開始クムソン川を境ににらみ合いとなる。中国側の大攻勢はこれが最後となった。

　七月十九日、板門店で双方の交渉担当者が休戦の細目について、最終的な合意に達した。

　七月二十七日、とうとう韓国と北朝鮮の休戦協定が、板門店で国連軍代表、ウィリアム・ハリソン将軍、北朝鮮軍代表は南日将軍によって調印された。

　こうして、四〇〇万人もの死者という、同一民族の血が流される悲惨な戦争が、ようやく終焉を迎えたのである。

　しかし、現在に至っても北と南の融合は進まず、それぞれの主張は平行線を辿り、半島統一を平和裡に行われる可能性が見られないのは哀しい両国の事情なのだ。